

宮城県文化財調査報告書第 76 集

東北地建バイパス関係遺跡調査報告書

昭和 56 年 3 月

宮城県教育委員会
東北地建仙台工事事務所

序

宮城県内には、私達の祖先がのこした数多い遺跡があります。これらの文化遺産は豊かな自然環境と長い歴史の中で創造し、育ぐくんできたものであり、これを愛護し活用するとともに後世に伝えていくことが現代の私達に課せられた重要な責任であると考えます。近年、地域の開発事業が進展するに伴い、埋蔵文化財の保護が県政のなかで重要視されてきているものもその線に沿ったものであります。

今日、建設省東北地方鉄道局によって国道4号線の栗原郡高清水町内、同じく4号線の柴田郡村田町内、さらに国道45号線の本吉郡津山村内および気仙沼市内での交通渋滞解消を目的として、バイパスの建設が進められております。

本報告書は、これらバイパスの計画路線内に最終的に係り合いを有し、同建設局仙台工事事務所の委託を受けて、宮城県教育委員会が実施した事前の発掘調査の成果をとりまとめたもので、その内容は次のとおりであります。

〈上野山古墳群—山の上古墳一〉 柴田バイパス関連遺跡として、昭和55年度に発掘調査を実施しました。なお、同バイパスの建設に関連した遺跡はこの山の上古墳以外に柴田町土平遺跡がありますが、これらについては、宮城県文化財調査報告書第39集『土平遺跡発掘調査概報』(昭和50年)を刊行しております。

〈平形遺跡(館山館跡B地区)〉 柳津バイパス関連遺跡として、昭和55年度に発掘調査を実施しました。

〈松ノ木沢田遺跡・向野A遺跡〉 高清水バイパス関連遺跡として、昭和54年度に発掘調査を実施しました。なお、高清水バイパスの建設に関連した遺跡はこれら2遺跡のほかに、高清水町五輪C遺跡があり、これについては、宮城県文化財調査報告書第61集『五輪C遺跡』(昭和54年)を刊行しております。

〈赤岩館経塚〉 気仙沼バイパス関連遺跡として、昭和55年度に発掘調査を実施しました。ここに、本書を建設省東北地方建設局によるバイパス建設関連遺跡報告書の第3冊目として刊行するにあたり、関係された方々の御協力を感謝いたしますとともに、遺跡に対する御理解をいただき、さらに学術上も大きく役立つことを切に願ってやまない次第であります。

昭和 56 年 3 月

宮城県教育委員会 教育長 北村 潮

目 次

1.	上野山古墳群 一山の上古墳一	1
2.	平形遺跡（館山館跡B地区）	41
3・4.	松ノ木沢田遺跡・向野A遺跡	75
5.	赤松館経塚	119

例 言

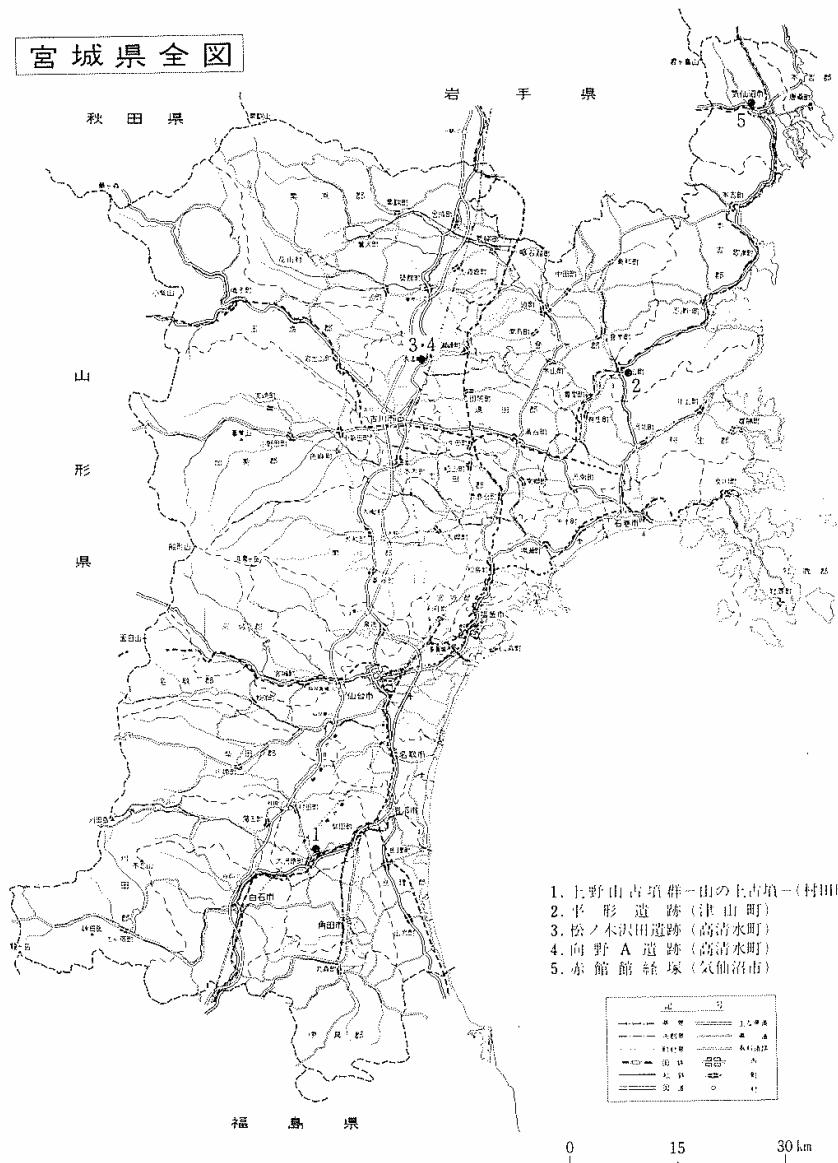
1. 本書は村田・柳津・高清水・気仙沼バイパス工事に伴う遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の記載は県内の南から北に向かって順に行った。
3. 発掘調査は宮城県教育庁文化財保護課が担当し、それぞれ市町教育委員会に協力をいただいた。
4. 石材鑑定については東北大学教養部教授蟹沢聰史氏にお願いした。
5. 平形遺跡第2地点で発見された板碑については尚絅女学院短期大学勤務の佐藤正人氏から教示を得た。
6. 経石文字の判読にあたっては、東北歴史資料館企画長平川南氏、技術吉沢幹夫氏の指導を得た。
7. 経典の典拠の考察にあたっては、東北大学文学部教授加藤正信氏（国語学）、同助教授村上真完氏（印度学）の指導を得た。特に国語学教室で現宮城県飯野川高等学校教諭谷川正明氏からは、文字の画数別分類、写経經典の照合と検討にあたり多大の協力と懇篤なる教示を得た。
8. 多字経石の写真撮影および写経石の筆跡鑑定については、宮城県警察本部科学捜査研究所主任研究印佐々木信一氏の協力を得た。
9. 経塚についての宗教的な背景を書くにあたり、気仙沼市の金仙山圓光寶鏡寺三十二世住職菊地秀道師、白華山補陀寺二十一世住職千葉龍道師、および気仙沼市音文化財保護課小山正平氏の教授を得た。
10. 本書に使用した写真の中、妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五をはじめ赤岩館遠景写真、寶鏡寺楼門および補陀寺六角堂の各写真は、関係機関の承認を得て転載した、なお、赤岩沢大岩の磨崖仏写真は気仙沼市教育委員会の提供を受けた。
11. 土色は「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を、土性区分は国際土壤学会法の基準を参照

したものである。

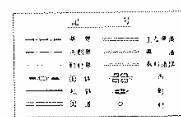
12. 地図は建設省国土地理院の地図形を複製したものである。縮尺・地図は図中に註記した。
13. 整理、報告書の作成は文化財保護課調査係が行った。各遺跡の整理、執筆分担は次のとおりである。

上野山古墳群一山の上古墳.....	千葉宗久
平形遺跡（館山館跡B地区）.....	//
松ノ木沢田遺跡.....	//
向野A遺跡.....	//
赤松館経塚	佐々木耕

宮城県全図



1. 上野山古墳群 - 山の土古墳 (村田町)
2. 平形遺跡 (津山町)
3. 松ノ木沢遺跡 (高清水町)
4. 向野A遺跡 (高清水町)
5. 赤館館跡塚 (氣仙沼市)



0 15 30 km

1. 上野山古墳群

—山の上古墳—

調査要項

遺跡記号：GE(宮城県遺跡地名表登載番号：07103)

遺跡所在地：柴田郡村田町沼辺字山の上

調査面積：約5,000 m²(発掘面積約360 m²)

調査期間：昭和55年4月9日～5月24日

調査員：宮城県教育庁文化財保護課

斎藤吉弘、千葉宗久

調査に協力された地元の方々は以下の通りである。(順不同、敬称略)

村上文子、村上くによ、村上ふみ子、渡辺とくい、渡辺つる子、鈴木きよ子
桜井しん、村上さつき、村上ふみ子、桜井とき子、太田みよ子、平間春子、
太田みつ子、太田富子、高橋由美子、佐藤正隆、岡崎貞次郎、太田はつい、
大沼もと子、太田ふみ子、太田つよ子、村上英子、渡辺なほ子、桜井なみ子
林ふみ子、岩間きみ子、桜井泰次郎、村上くに子、桜井しん子、村上さつき

目 次

. 調査に至る経過	3
. 遺跡の位置と環境	
1. 位置と自然環境	4
2. 周辺の遺跡	5
. 調査の方法と経過	9
. 調査の成果	
1. 遺跡の基本層位	12
2. 古 墳	12
(1) 墳 丘	12
(2) 内部主体	14
(3) 構築方法	16
(4) 出土遺物	19
a. 表土からの出土遺物	19
b. 崩壊土からの出土遺物	19
c. 積土からの出土遺物	19
d. 石室内堆積土からの出土遺物	19
e. 石室床面からの出土遺物	20
f. 旧表土からの出土遺物	20
3. 土 壤	24
4. M-17 区堆積土からの出土遺物	24
. 考 察	
1. 古 墳	26
(1) 出土遺物について	26
(2) 構築について	26
(3) 古墳の年代	28
2. 土 壤	29
3. M-17 区出土遺物	29
. ま と め	
引用・参考文献	30

I. 調査に至る経過（写真1）

上野山古墳群は宮城県柴田郡村田町および柴田町の上野山地内にあり、柴田バイパスと係り合いをもつた。

柴田バイパスは、大河原町の金が瀬字広表から村田町を経由して、柴田町大字櫻木字白幡に至る11.9kmの路線で、建設東北地方建設局仙台工事事務所が国道4号線の交通渋滞解消を目的に建設を計画したものである。

宮城県教育委員会は、東北地建の依頼によって計画路線に係る遺跡の実施し、それにもとづく協議と調整を行ったところ、最終的に工事と係り合いをもつのが柴田町土平遺跡と上野山古墳群の2遺跡となった。上野古墳群については、その中の一基のみが路線敷内にかかっており、この古墳の所在する小字名「山の上」から山の上古墳と名づけた。

こうして、この2遺跡は事業施行前に発掘調査を行うことになった。昭和49年度に土平遺跡を調査したのに続き、本年4月9日から5月24日まで宮城県教育庁文化財保護課が担当して、山の上古墳の発掘調査を実施した。



写真1 山の上古墳全景（南より撮影）

II. 遺跡の位置と環境

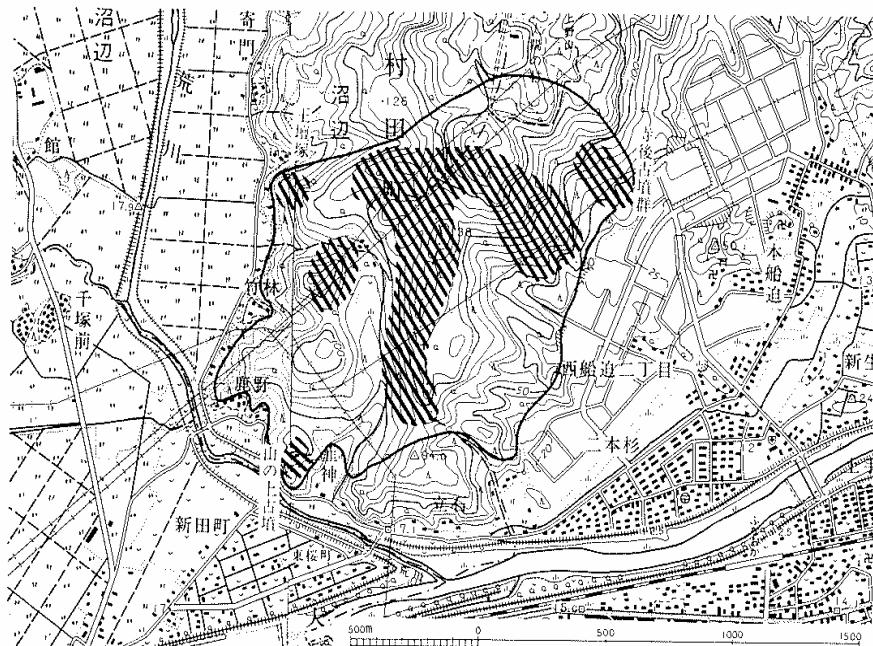
1. 位置と自然環境(第1図(1)・(2))

上野山古墳群は上野山頂部(標高約200m)から南側の山麓にかけて広範囲に分布する古墳群である。今回調査を実施したのは上野山古墳群の一支群であり、上野山の南西部山麓に位置する山の上古墳である。この山の上古墳は国鉄東北本線大河原駅の北北東約1.5kmの地点、柴田群村田町沼辺字山の上に所在している。

村田町の地形をみると、町の北部・東部・西部の三方は標高150~250m程の高館丘陵によって囲まれ、中央部には沖積平野が南に向かって広がっている。この沖積平野は通称村田盆地と呼ばれており、盆地内を荒川と新川が南流している。二河川は村田町沼辺で合流し、上野山の南端において東流する白石川に注いでいる。

上野山古墳群は村田盆地の東部を南に向かってのびる高館丘陵の南端部に立地し、村田町と柴田町にまたがって分布している。また、上野山古墳群は村田町沼辺字の上・岩崎・鹿野・上の山・長窪山、柴田町船字寺後、日当山・鹿野などの支群に便宜上大別できる。その範囲は約15haに及ぶ推定され、古墳の総数は150基を越すと考えられる(註1)。

(註1) 古墳の範囲、総数については「寺後古墳群」(志間:1976)から引用している。



第1図(1)上野山古墳群の範囲と分布
(国土地理院発行1/25,000「大河原」・「岩沼」を複製)

山の上古墳は上野山古墳群の中でも最南端部にあり、上野山を背にし、眼下に白石川の流れる沖積平野を見わたせる位置にある。今回調査した古墳は標高約39mの緩斜面に立地しており、現状が畠地で削平が著しく進んでいる。調査区域内においては古墳が1基発見されただけであるか、開墾や宅地などにより古墳が何基か破壊された可能性は強い。なお、調査区域外になるか、今回調査した古墳の北約120m、村上龍亮氏宅裏の山林内に2ヶ所の高まりが発見されている。この高まりは標高約50mの丘陵上に立地し、形態は円形で、形態は円形で、径約4~5m・高さ1~2mの規模で表面には石塊が露出している。

2.周辺の遺跡(第1図(2))

山の上古墳の周辺には数多くの遺跡が確認されているが、ここでは村田町を中心として時代ごとに概観してみたい。

村田町内で最も古い時代の遺跡は、縄文時代早期末「素山Ⅱ式」の土器が発見されている北沢遺跡と川村開拓遺跡であり、ともに丘陵麓に立地している。その他にも縄文時代の遺跡は数多くあり、鹿野山遺跡・竹の内遺跡・盛田遺跡・二斗内A遺跡などが村田盆地をとり囲む丘陵斜面や丘陵麓に広く分布し、数は少ないが丘陵頂にも上野山遺跡や岡A遺跡が立地している。

弥生時代になると、遺跡数は前時代に比べて増加する傾向が認められる。なお、村田町は西に隣接する蔵王町とともに県内では弥生時代の遺跡が数多く発見されていることで知られている。弥生時代の遺跡としては鹿野山遺跡・竹の内遺跡・盛田遺跡・北沢遺跡などがあり、丘陵斜面や丘陵麓に立地し、縄文時代と複合する遺跡も多い。北沢遺跡(斎藤・真山：1977)では弥生時代の遺構と考えられる土壙が検出されている。また、丘陵頂に立地する遺跡もあり、上野山遺跡・岡A遺跡・岡B遺跡が知られている。

古墳時代の遺跡には古墳と包含地があり、古墳は中期の古墳と後期から終末期の古墳が確認されている。中期の造営と考えられる古墳には愛宕山古墳・千塚山古墳・方領権現古墳・小塚古塚^{(註)2}などの前方後円墳があり、村田盆地西部の見はらしのよい丘陵頂に立地するものが多い。特に、愛宕山古墳は主軸が82mあり県内でも有数の規模を誇る古墳で、県史跡に指定されている。

後期から終末期の古墳としては、高塚古墳と横穴古墳がある。高塚古墳は村田盆地の西部丘陵斜面と南東部丘陵斜面に立地するものがあり、前者に属する古墳には千塚山A古墳・千塚(千人塚)古墳群・元窪古墳(以上円墳)と法領権現古墳(方墳)が知られ、後者に属する古墳は上野山古墳群である。この上野山古墳群の一支群である柴田町の寺後古墳群(志間：1976)は3基の古墳が調査され、横穴式石室をもつ円墳と箱式石棺をもつ古墳であることが判明した。また、王塚古墳は上野山古墳群中において最大規模の方墳で墳形も類例がないことから、他の円墳との関係や時代的位置づけなどは今後の調査成果に期待するところである。なお、村田町の東に隣接

(註2) 小塚古墳は沖積平野に立地する古墳であり、中期の前方後円墳と思われているが、詳細は不明である。



第1図(2)周辺の遺跡
(国土地理院発行1/50,000「白石・岩沼」を複製)

する柴田町の石塚古墳(芳賀：1979)は沖積平野に立地する古墳として知られており、山の上古古墳の南方1.3kmの地点に位置している。横穴古墳は村田盆地の東部丘陵斜面に古館横穴古墳群・分離丘陵の斜面に中山畠横穴古墳群・西部丘陵斜面に寄井・元窪・下清水・竜泉院横穴古墳群が立地しており、村田町南西部の丘陵斜面に比較的多く分布している。また、大河原町では町の北西方に位置する舌状小丘陵斜面に13群の横穴古墳群が連なり、柴田町では上野山頂部から南東方約1kmの丘陵斜面に総数100基を越すといわれる県南一の横穴古墳群・森合横穴古墳群あり、横穴古墳は、村田町の南西部とその南にのびる丘陵斜面(大河原町)、上野山の南東部丘陵斜面に集中分布する傾向がみられる。

遺物包含地は古墳に隣接した丘陵麓や丘陵斜面に立地しており、日ノ崎遺跡・盛田遺跡・見世前遺跡・峰崎遺跡・宮ノ下遺跡・山ノ入遺跡がある。大河原町台の山遺跡(阿部・千葉1980)では古墳時代(南小泉式期)の堅穴住居跡が2軒検出されている。

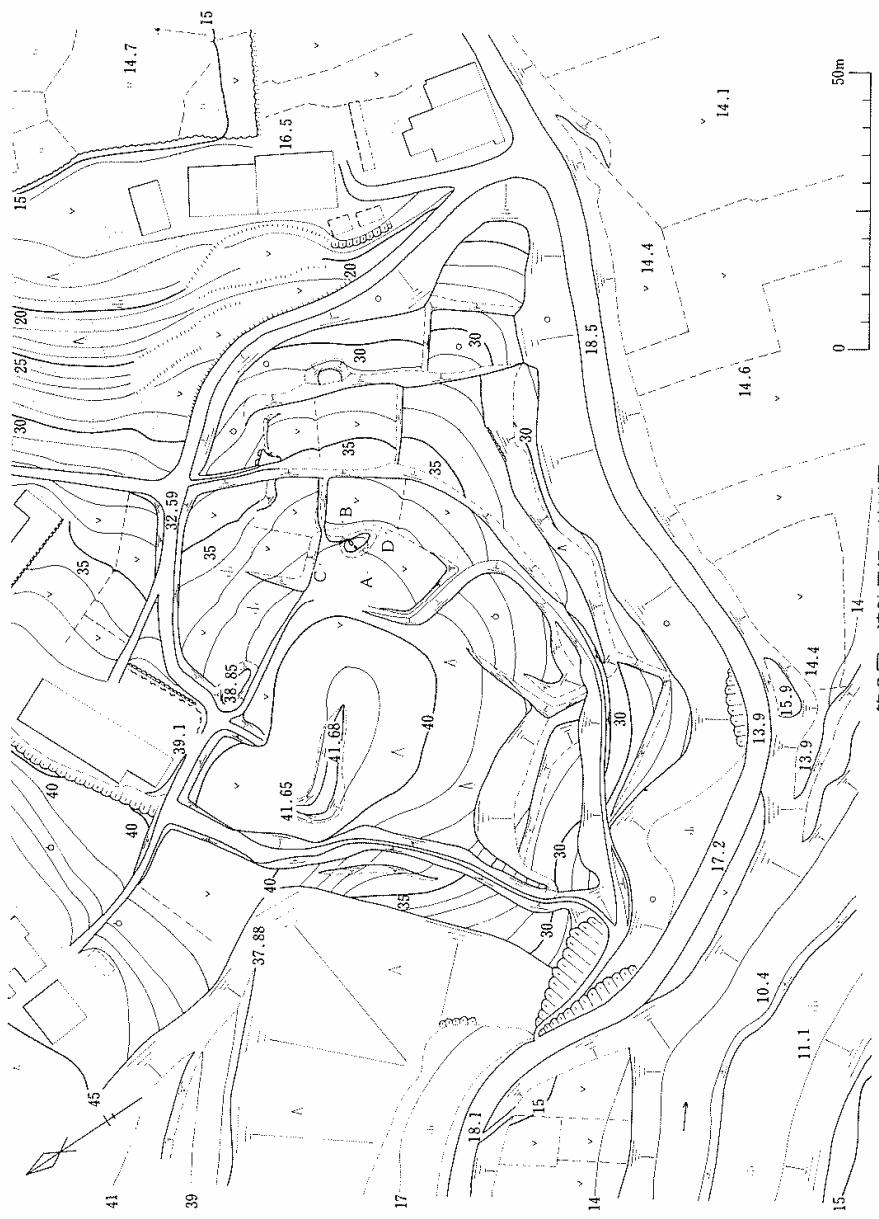
奈良・平安時代の遺跡としては、山の上遺跡・日ノ崎遺跡・千菅遺跡・方の作遺跡・北沢遺跡・西原遺跡などのように丘陵麓や丘陵斜面に立地する遺跡や上野山遺跡・岡A遺跡・岡B遺跡のように丘陵頂に立地する検出されている。なお、柴田町と大河原町では沖積平野への進出も目立ち川原遺跡(柴田町)や天神堂遺跡・中屋敷遺跡(以上大河原町)が知られている。

中世の遺跡としは、女軍館跡・玄蕃館跡・薄木城跡・村田城跡などの城館跡が知られており、村田盆地に突き出た丘陵上に立地している。また、白石川をはさんで上野山古墳群の対岸丘陵に柴田町・四保館跡(船丘城跡)が立地している。

III. 調査の方法と経過(第2.3図)

調査は柴田バイパスにかかる約5000m²を対象として4月9日に開始し、約360m²を発掘した。路線敷内には塚状の高まりの他に、付近からは土師器破片も表採されており、調査区全体にグリッドを組むことにした。仮原点AとBを結ぶ直線を東西の基準線とし、これに直交する南北の基準線(CD)を設け3m方眼のグリッドを組んだ。東西方向については基準線の交点西側を9区、東側を8区としたアラビア数字で、南北方向については基準線の交点北側をJ区、南側をK区とした。グリッド名はこの両者を組み合わせて付した。

調査区内には、塚状の高まりが5ヶ所確認された。1ヶ所は立石が墳丘頂部から約60cm露出しており、これを中心にして径約5m、高さ約1.5mの高まりが認められた。立石の元には奉賽物があげられ、高まりには梅の木が数本植えられ、信仰の場となっていた。他の4ヶ所は塚状の高まりの中に大小さまざまの石が露出していた。



第2図 遺跡周辺の地形図

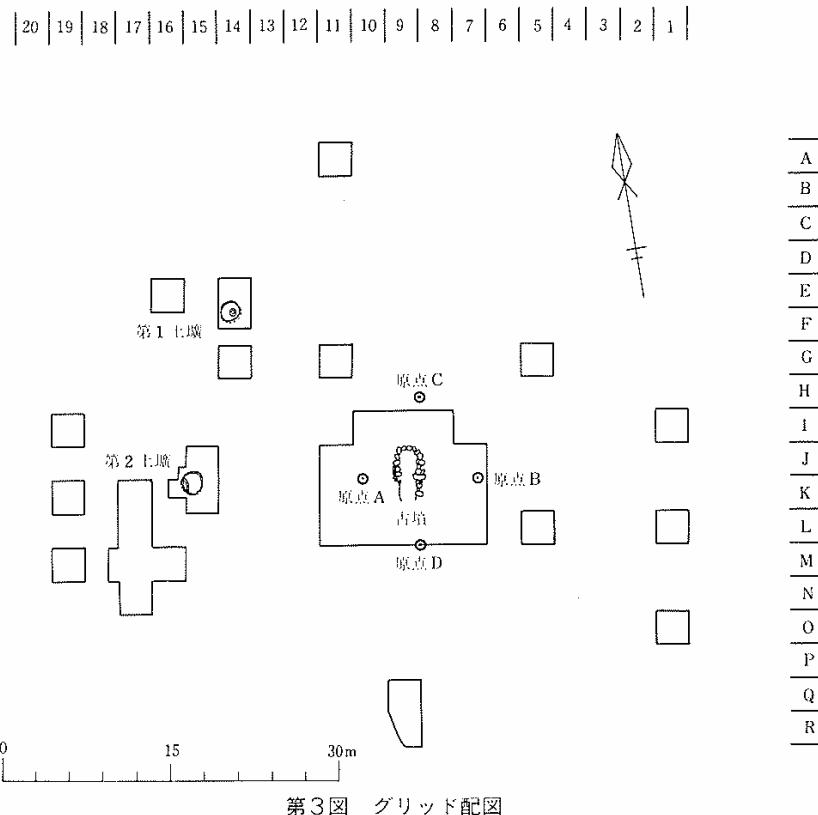
調査はまず、塚状の高まりと丘陵頂部や斜面の平坦部の表土を除去し、遺構の検出に努めた。

その結果、5ヶ所の高まりについて、1ヶ所が古墳で、他の4ヶ所は畠から出た石の集積場や地山にくいこんでいる大きな岩石であることが判明した。なお、立石については奥壁石と想像していたが玄門柱石であることが明らかになった。その他の遺構としては、土壙が2基検出された。また、M-17区の第2層からほぼ完形に近い須恵器の高坏を発見したが、これに伴う遺構は検出されなかった。

その後、古墳と土壙の精査をした。古墳については、石室の規模・形態・構築方法、周溝の有無等の把握を目的とし、石室の中軸線とそれに直交する直線に沿ってあぜを残して精査した。

古墳、土壙の平面図・断面図は20分の1、遺跡の地形図は500分の1で作成した。

調査終了は5月24日であった。



第3図 グリッド配図

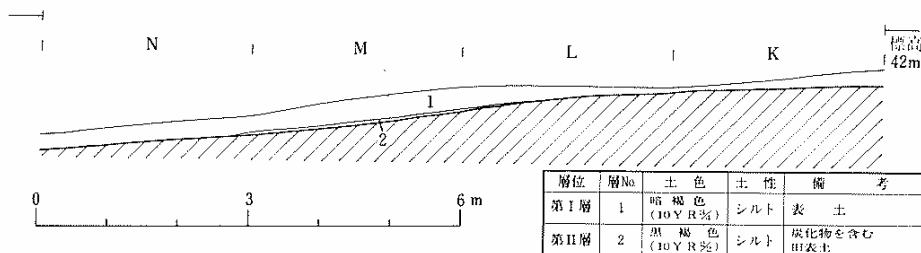
IV. 調査の成果

1. 遺跡の基本層位 (第4・8図)

地山の上に2枚の層が確認されたが、遺跡は全体的にみると畑地耕作による地山面まで削平されている傾向がある。

第I層：厚さ約10cm～30cmの「暗褐色シルト層」で、表土である。

第II層：厚さ5cm～30cmの「黒褐色シルト」である。この層はJ・K-8・9においては、旧表土であり、石室の掘り込み面となっている。また、M-17区においては厚さ約5cmであり、J・K-8・9の層と同色同質であることが旧表土と考えられる。



第4図 17区西壁断面図

2. 古 墳

(1) 墓丘 (第5・6・8図)

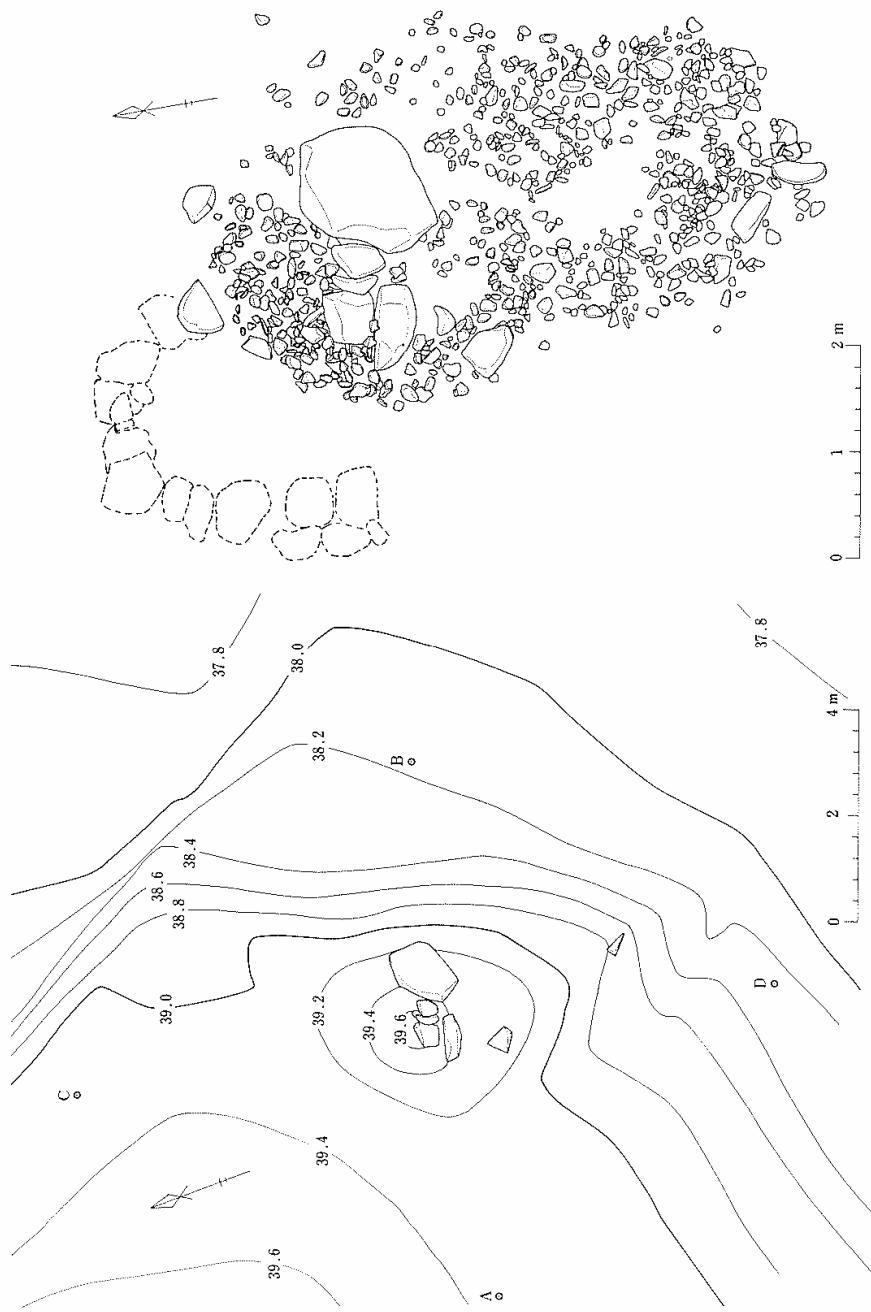
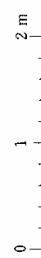
表土と崩壊土を除去した段階で、石室の東側に積土と旧表土（基本層位第II層）が検出された。古墳は旧表土の上に構築され、積土にお行われていることが判明した。

積土は2層認められ、旧表土の上に水平に積まれている。第1層は厚さ約20cmの黒褐色シルト層で地山細粒を多量に含んでいる。第2層は厚さ12～30cmの暗褐色シルト層で地山細粒を少し含んでいる。

積土と旧表土は、石室の東側に不整の三日月形で検出された。検出された範囲については、積土が最大長（南北）約5m、最大幅（東西）約1.2m、旧表土が最大長（南北）約6.4m、最大幅（東西）約3mである。

本古墳の形態と規模については、石室の西側が大きく削平され、東側についても削られている部分があり、周溝も検出されていない等から、正確なところは不明である。

第6図 表土を除去した状況



第5図 発掘前の状況

(2) 内部主体（第7図）

内部主体は玄室、玄門、羨道から成る横穴式石室である。石室の中軸線の方位はN-7°-Eで、南に向けて開口している。

(玄室) 玄室の平面形は、側壁部が直線的で、奥壁部が強く弯曲しており、玄室内に中央付近に最大幅を有していることから、胴張り状の不整な楕円形^{(注)3}と考えられる。玄室の長さは、奥壁から樋^{しきみいし}石中央まで約2.4mある。玄室の幅は、奥壁（奥壁と側壁の接合部分）で1.2m、玄室中央で1.4m、玄門部で1.2mある。

玄室の側壁・奥壁：側壁と奥壁には、径50～60cm・厚さ4～15cmで、角のとれている板状の石が基底部の石の上に用いられている。奥壁と左側壁では基底部の石を残すのみであるが、右側壁では基底部の石の上にさらに2段残し、その間には最大長15～30cmの石がつめられている。残存する高さは、床面から30cmである。なお、用いられている石材は安山岩である。

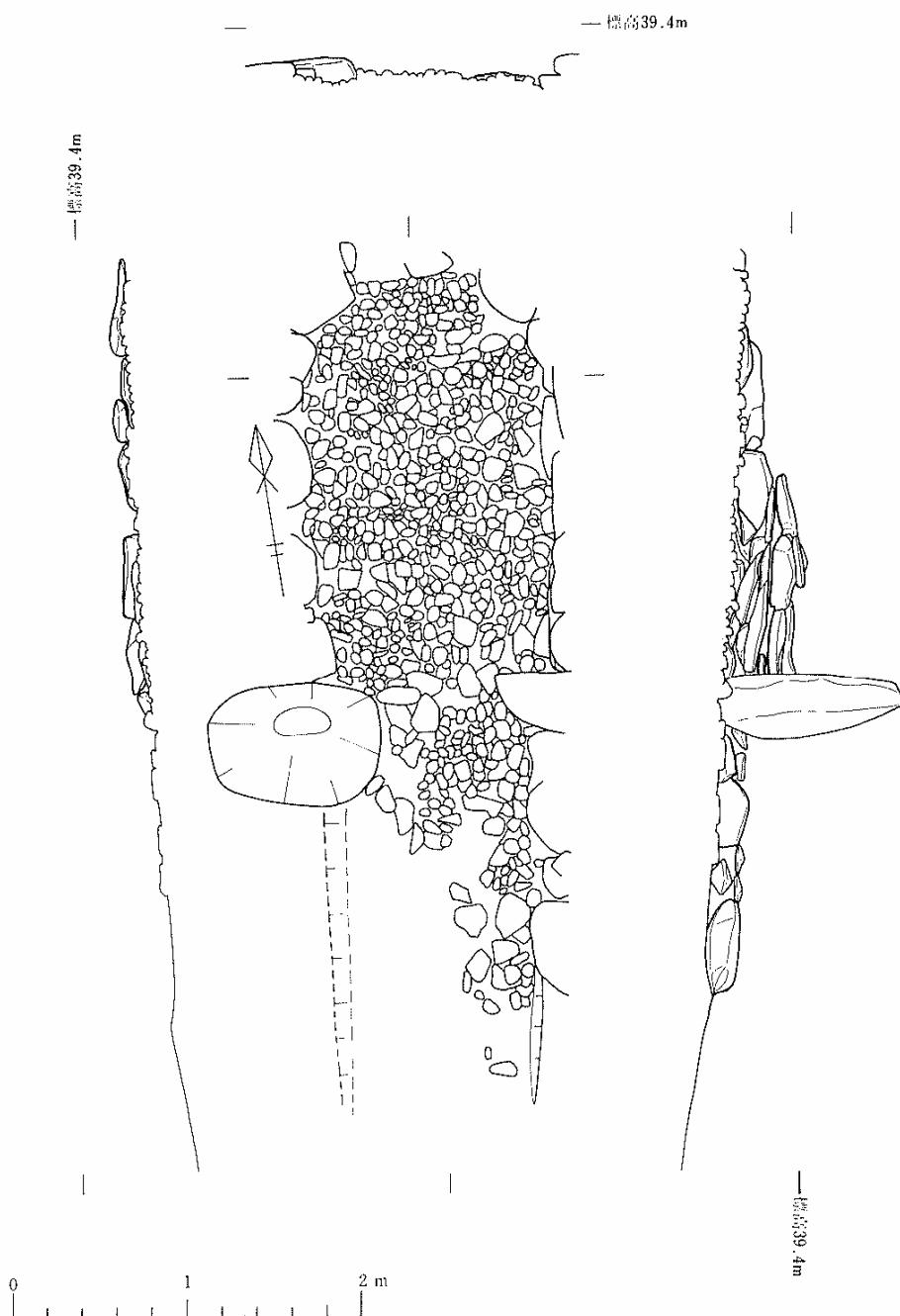
玄室の床面・径5～10cmの円礫を厚さ約10cmの掘り方埋土の上に、敷きつめて床面としている。しかし、玄室の奥壁から中央部付近までは掘り方埋土の上に手のひら大の板状角礫が敷かれ、その上に円礫が敷きつめられている。円礫の石材は花崗岩、花崗斑岩、石英安山岩、安山岩、石英斑岩と各種であるが、角礫は側壁石と安山岩である。

(玄門) 右玄門柱は残存しているが、左玄門柱取られている。右玄門柱石は直立しており、床面から門柱石頂部までの高さは1.1mある。また、門柱石は床面において、玄室側で約30cm、羨道側で約15cm内側に張り出している。なお、右玄門柱石の大きさは高さ約1.6m、幅約1m、厚さ約0.4mで、石材は側壁石と同じ安山岩である。

(樋石) 左右の玄門柱を結ぶ直線状に並べられ、玄室と羨道を区画している。樋石は4個残存しており、左玄門抜き取り痕跡に落ち込んでいる1～2個の石も樋石と思われる。これらの樋石礫は柱状の円礫で、大きさは長さ15～25cm、径4～10cmある。石材は床面の円礫と同質の花崗斑岩や石英安山岩である。

(羨道) 羨道は、樋石中央から長さ2.4m、幅約1m残存している。床面が残存しているのは右半分であり、玄室床面の円礫や角礫と同じ大きさのものが敷かれている。左半分は削平のためか円礫や角礫は検出されなかった。側壁については右側の基底部の石とその上に小角礫が残存しているだけで、左側壁は不明である。基底部の石の大きさや形は玄室のものと同じである。羨道床面の円礫・角礫・側壁石は石室掘り方埋土の上にのっている。石材は玄室の石と同質で、床面の礫は花崗斑岩や石英安山岩であり、側壁石は安山岩である。

(註3) 本古墳の玄室平面形に類似するものとしては、上郷古墳群があり、伊東氏(伊東:1952)は105号墳、109号墳を「シャベル状」、135号墳を「胴張りをもつた正方形、あるいは不整楕円形」と言い表わしている。



第7図 横穴式石室の構造

(3) 構築方法 (第8・9図)

発掘調査による成果と断面観察から構築方法を述べてみたい。

石室の掘り方：石室よりやや大きめの相似形に掘り込まれており、残存長は約5.3m、残存幅は約3.3m、残存する深さは約15～50cmで玄門柱の部分が特に深い。掘り込み面は、保存の良好な東側では旧表土となっている。

玄門柱の掘り方：右玄門柱の掘り方は旧表土を切って掘り込んでいる。平面形が橢円形で、規模は長軸が1.4m、短軸が0.7mある。石室掘り方上面からの深さは約50cmある。壁は緩やかで、底面は丸底状である。この中心に門柱石を直立させてすえている。掘り方埋土は4層に細分されており、しまっている。特に、上層の埋土には径5～8cmの円礫が、門柱を支えるような形でつめ込まれている。この玄門柱の掘り方埋土の上に石室の掘り方埋土がかぶっている。

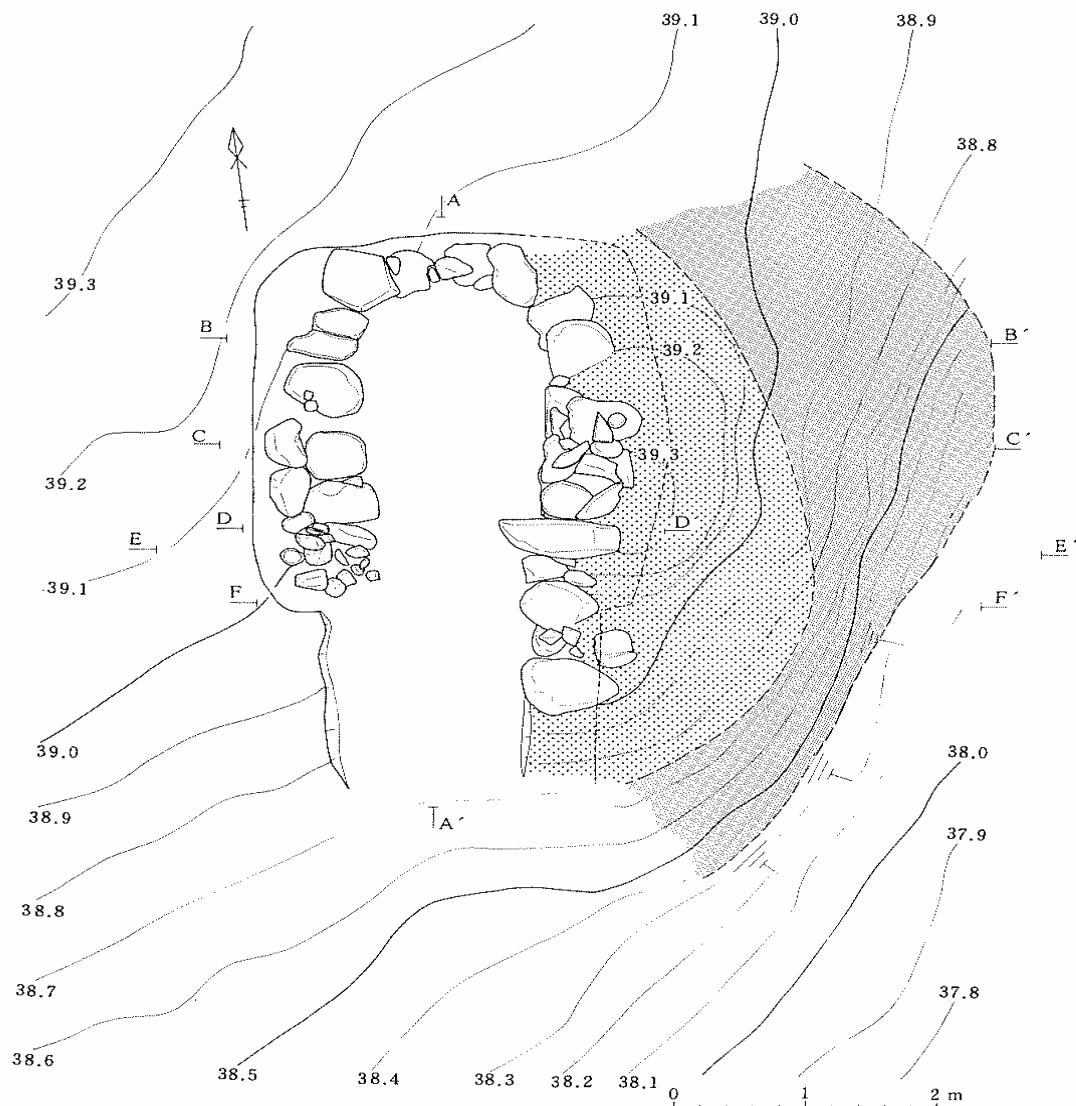
左玄門柱の掘り方平面形は不整の橢円形で、規模は長軸1.2m、短軸0.8m、石室掘り方上面からの深さは約50cmある。左玄門柱の抜き取り痕跡の平面形は橢円形で、規模は長軸1m、短軸0.7m、深さは堀り方と同じである。また、左玄門柱の掘り方に残留している埋土は右玄門柱の掘り方埋土に類似している。

以上のことから、左右の玄門柱には同じ位の大きさの石が用いられていたと推定される。

石室の床面：石室掘り方底面は東にやや傾斜しており、これに埋土をして水平に整地し、次に円礫を全面に敷きつめて床面としている。この円礫は、玄室の奥壁から中央部付近にかけて、板状角礫の上に2段重ねて敷きつめられている。なお、床面はわずかに傾斜しており、北から南にかけて低くなっている。

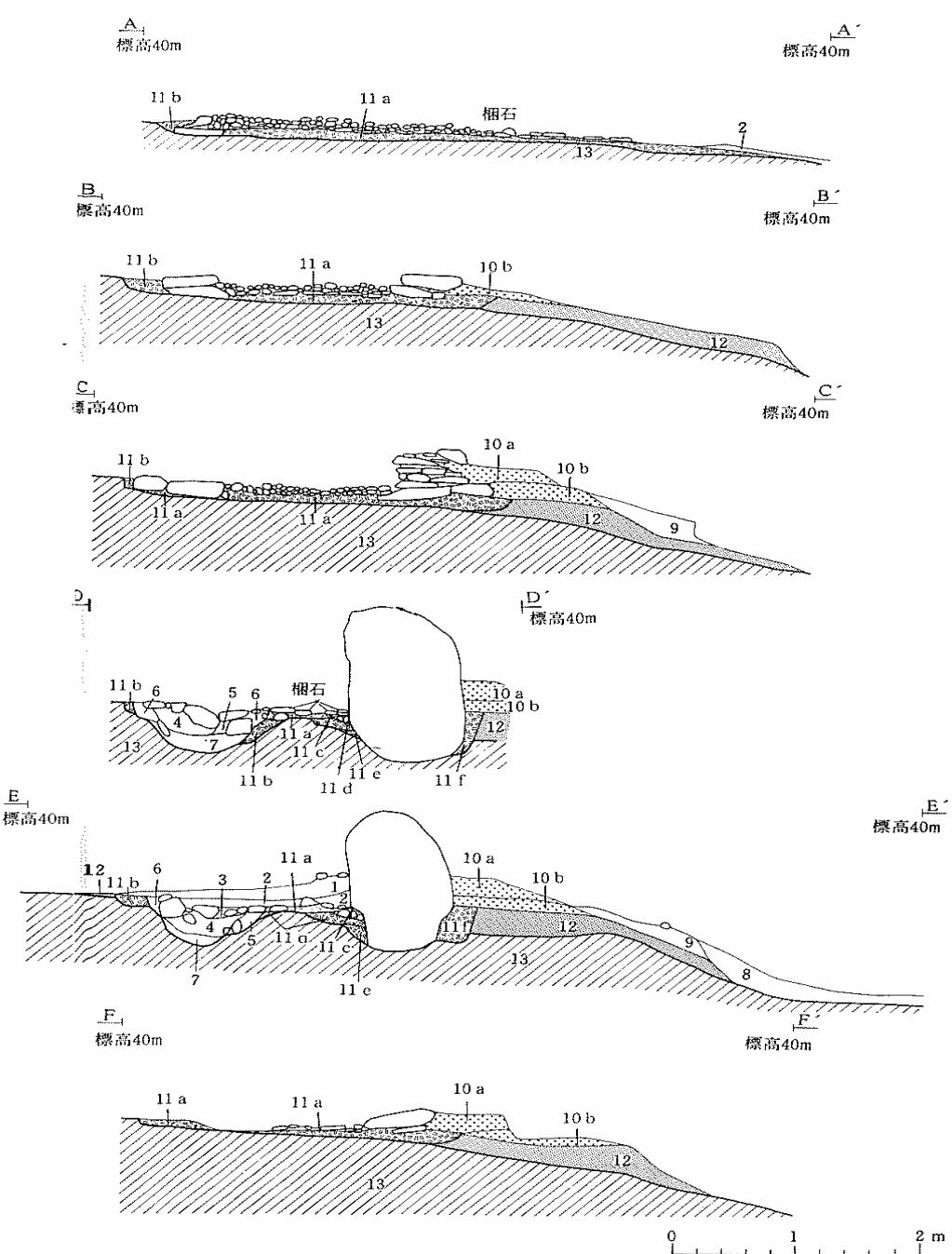
側壁：左側壁と奥壁の基底部の石は、石室掘り方底面に直接すえられている。これに対し、右側壁は石室掘り方埋土の上面に基底部の石がすえられ、その上に2段残存しており、右玄門柱を支えるような形で積まれ、間にも円礫などがつめ込まれている。

積土：積土は石室掘り方の上面を覆っており、水平に積まれている。積土は2層確認されており、断面(B～E)観察によると、第2層は側壁の基底部の石と同じ位の高さまで積まれており、第1層は第2層と側壁面に接して積まれている。



層位	土色	土性	備考	石室	地山	積土
1	褐色 (10YR 4/2)	シルト		石室内 堆積土	シルト 地山細粒を多量に混入	石室
2	褐色 (10YR 4/2)	シルト			地山細粒を少量混入	
3	褐色 (10YR 4/2)	シルト	バサバサしている。礫が多い。	a 褐色 (10YR 4/2)	地山灰、骨粉等を多量 炭化物を若干含む	石室の掘 り方埋土
4	褐色 (10YR 4/2)	シルト	バサバサしている。	b 褐色 (10YR 4/2)	礫を多量に混入	女門柱の 掘り方 埋土
5	褐色 (10YR 4/2)	シルト	湿度が多い。	c 褐色 (10YR 4/2)	シルト しまっている。	
6	褐色 (10YR 4/2)	シルト	湿度が多い。	d 褐色 (10YR 4/2)	シルト 湿度が多い。	
7	褐色 (7.5YR 3/2)	シルト	湿度が多い。	e 褐色 (10YR 4/2)	シルト 炭化物を若干混入	田表土
8	褐色 (10YR 4/2)	シルト	バサバサしている。	f 褐色 (10YR 4/2)	骨粉土	地山
9	褐色 (10YR 4/2)	シルト	草木の根を混入。			

第8図 表土・崩壊土を除去した状況



第9図 古墳の断面図

(4) 出土遺物

出土遺物には、土師器・須恵器・直刀・切子玉等があり、これらを出土状況に応じて、分けて述べてみたい。

a . 表土からの出土遺物(第11図1・第13図8)

須恵器甕：墳丘南部から1点出土している。第11図1は体部破片であり外面にナデ、内面に青海波文が認められる。

石匙：玄門柱北側から1点出土いる。第13図8は縦形の石匙であり、つまみ部と刃部からなるもので、刃部は三つの縁辺から構成され、刃部先端は平坦である。腹面の一側辺を除いて、両面から入念な調整剥離が加えられている。石匙の最大長は68.5mm、最大幅は25.1mm、最大厚は12.4mm、重さは19.3gで石材は珪質頁岩である。

b . 崩壊土からの出土遺物(第10図、第11図2~13、第12、第13図5)

土師器坏：墳丘南東部から口緑部破片が1点出土している。これは細片で外面も磨滅しており、器形や器面調面も明らかでないため図示できない。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

須恵器甕：墳丘南部から口緑部破片1点、体部破片20点出土している。第11図2は口緑部が外反し、口緑端部近くに段がめぐり、内外面にロクロ調整痕が認められる。第11図3・7~13、第12図1~7、第10図1・2は外面に平行タタキ目・回転刷毛目、内面に青海波文が認められる。第11図4・5・6は自然釉がかかっているもので、外面に平行タタキ目、内面にナデが認められる。

切子玉：須恵器甕にまじって、墳丘南部から1点出土している。第13図5は六角形をしており、穿孔は1方向から行われている。稜部はかなり磨滅している。切子玉の長さは2.2cm、腹径は1.5cm、重さは5.8gあり、石材は石英(比重測定により決定、S.G=2.66)である。

c . 積土からの出土遺物(第13図6)

須恵器甕：第1層から1点出土している。第13図6は体部破片であり、外面に平行タタキ目、内面に青海波文が認められる。

d . 石室内堆積土からの出土遺物(第13図1)

直刀：1口出土している。1は右玄門北側の玄室内堆積上から、「く」の字に折れ曲った状態で出土した。直刀は平棟平造りで明瞭な段をもつ両区が認められる。銹化のため、切先・刀身・茎部は部分的に欠損しているが、現存長は約60cmある。刀身は現存長が約54cm、幅が約3cmで、断面形は三角形である。茎部は折損しているが、現存長が6cm、幅が2.5cmで、断面形は長方形である。

e . 石室床面からの出土遺物(第13図2・4・7)

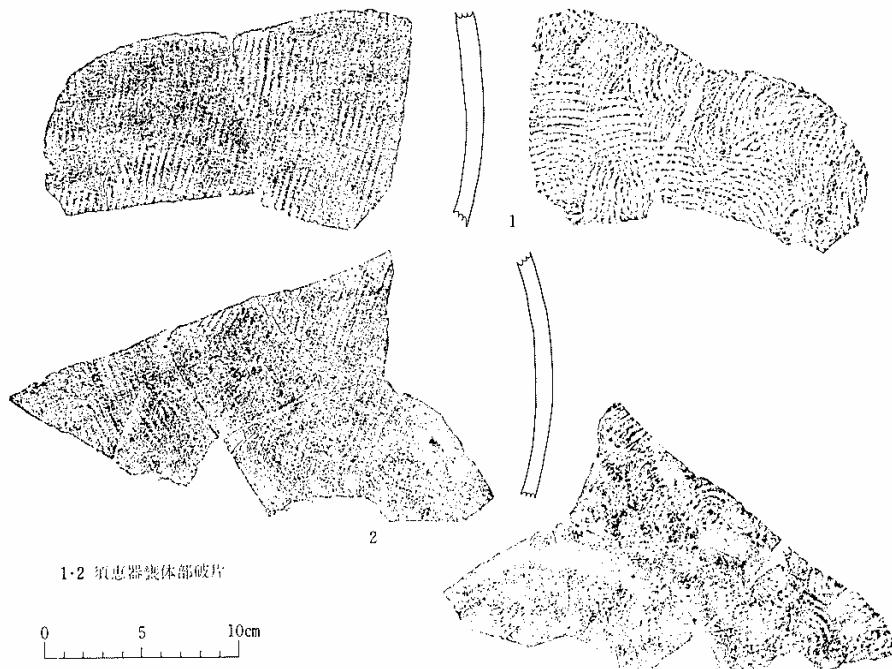
須恵器壺：羨道床面から1点出土している。第13図7は休部破片で、内外面にロクロ調整痕が認められる。

直刀：1口出土している。2は玄門寄りの玄室床面から出土した鉄製品である。刀身の一部分が残存しているが、現存長は16cm、幅は2.6cmで、断面形は三角形である。

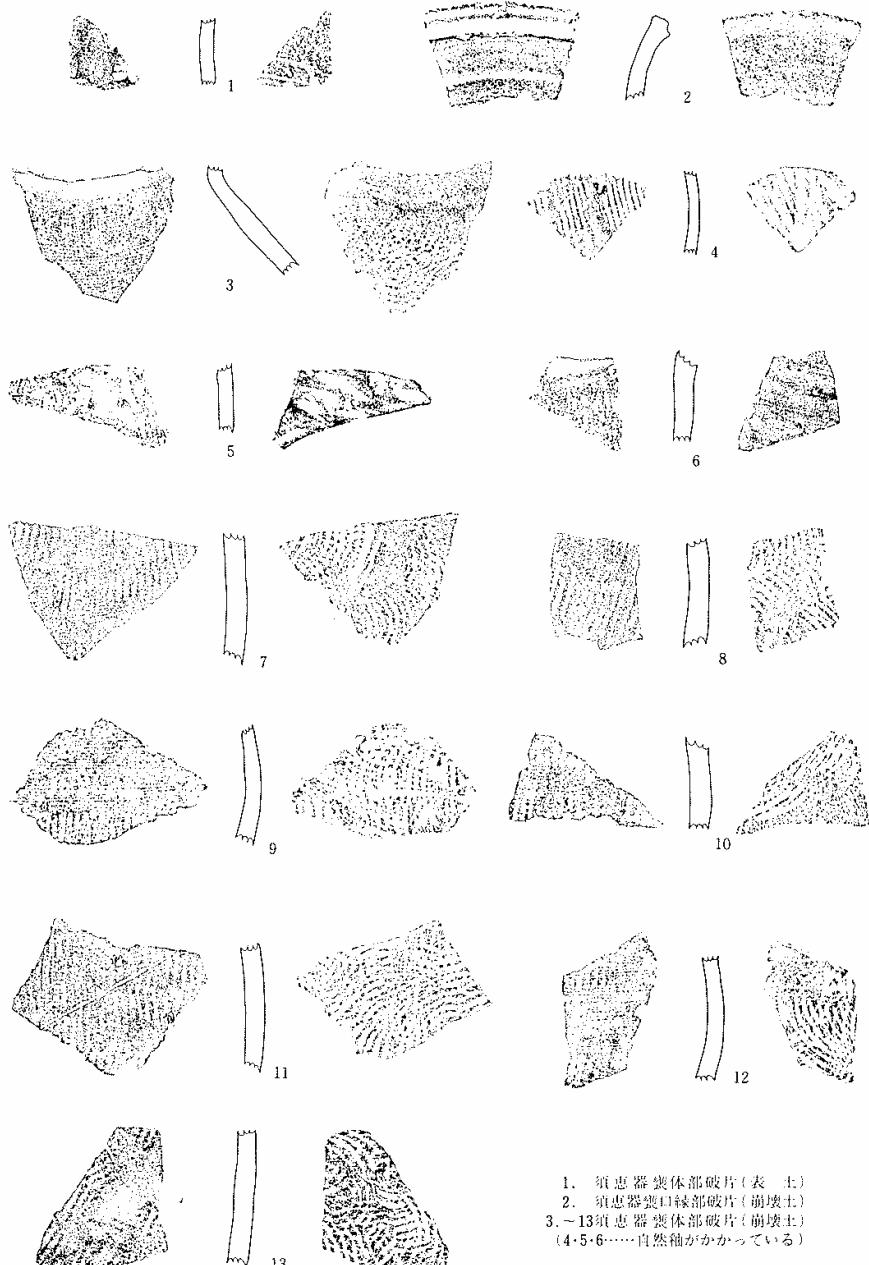
切子玉：羨道部床面から1点出土している。4は5と同じく六角形をしており、穿孔は一方向から行われている。稜部はかなり磨滅している。切子玉の長さは2.15cm、腹径は1.5cm、重さは5.7gあり、石材は石英である。

f . 旧表土からの出土遺物(第13図3)

縄文土器：体部破片が1点、積土下の旧表土から出土している。3は地文が縄文(不明)で、内面にナデで施されている。また、胎土には植物纖維が混入している。



第10図 崩壊土からの出土遺物

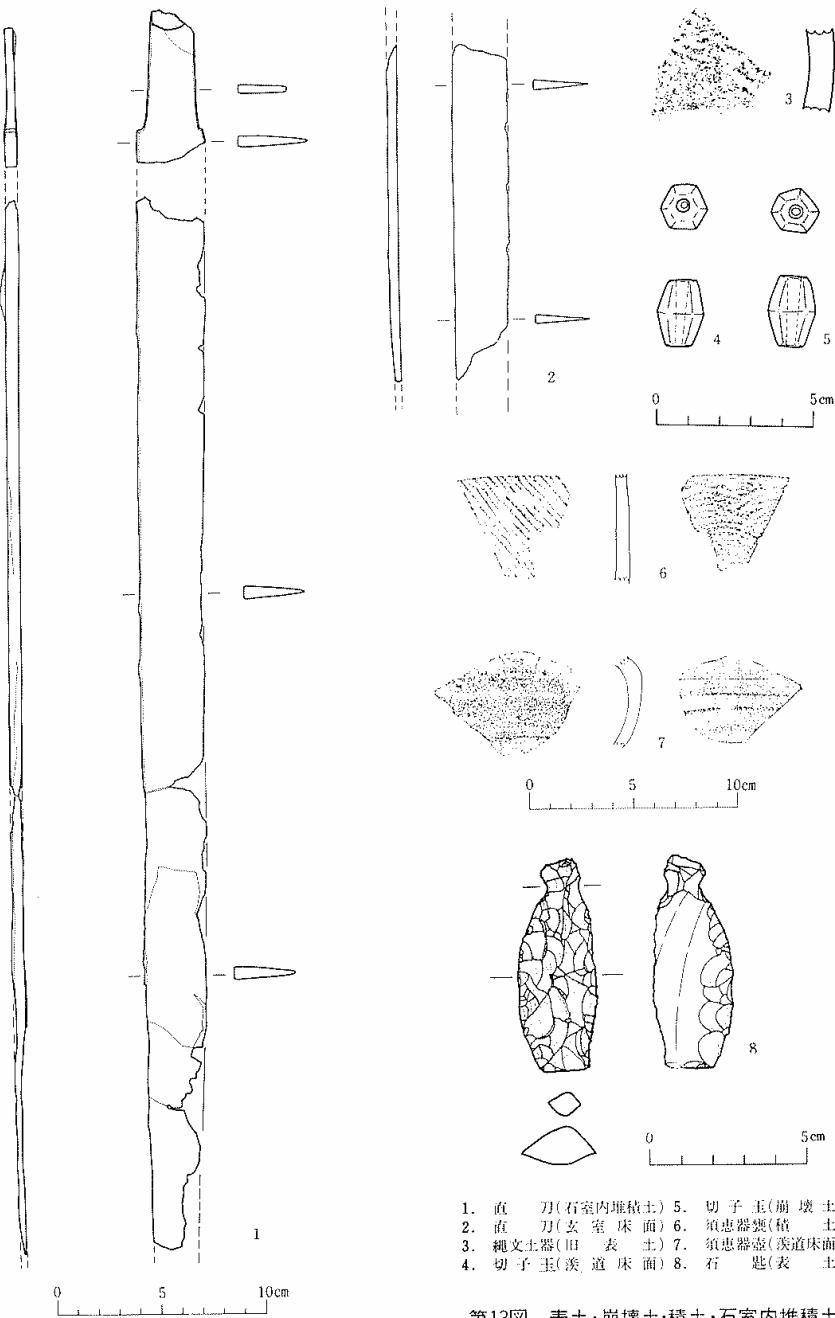


1. 須恵器表体部破片(表土)
 2. 須恵器表白緑部破片(崩壊土)
 3. ~13須恵器表体部破片(崩壊土)
 (4・5・6……自然釉がかかっている)

第11図 表土・崩壊土からの出土遺物



第12図 崩壊土からの出土遺物



第13図 表土・崩壊土・積土・石室内堆積土・
石室床面・旧表土からの出土遺物

3. 土 墳

土壙は古墳の西側で2基検出されており、ともに地山面で確認されている。

第1土壙(第14図1)

E・F-14区で検出された。平面形は円形で、規模は径約は1.5m、深さは確認面から約0.8mである。底面は平坦であるが、底面中央東寄りで丸底状にくぼんでいる。堆積土は3層確認されており、地山ブロックを含み、たたきしめられたように固い。出土遺物はない。

第2土壙(第14図2)

J・K-15区で検出された。平面形は円形で、規模は径約2m、深さは確認面から約1.7mである。底面は平坦であるが、底面西側で尖底状にくぼんでいる。堆積土は5層確認されたが、第1土壙と同じく地山ブロックを含み、たたきしめられたように固い。出土遺物はない。

4. M-17区堆積土からの出土遺物(第15図)

M-17区の基本層位第II(旧表土)から、土師器壺、須恵器壺、鉄斧、刀子が出土している。ここでは図示遺物だけを取り上げ、その他については第2表にまとめている。

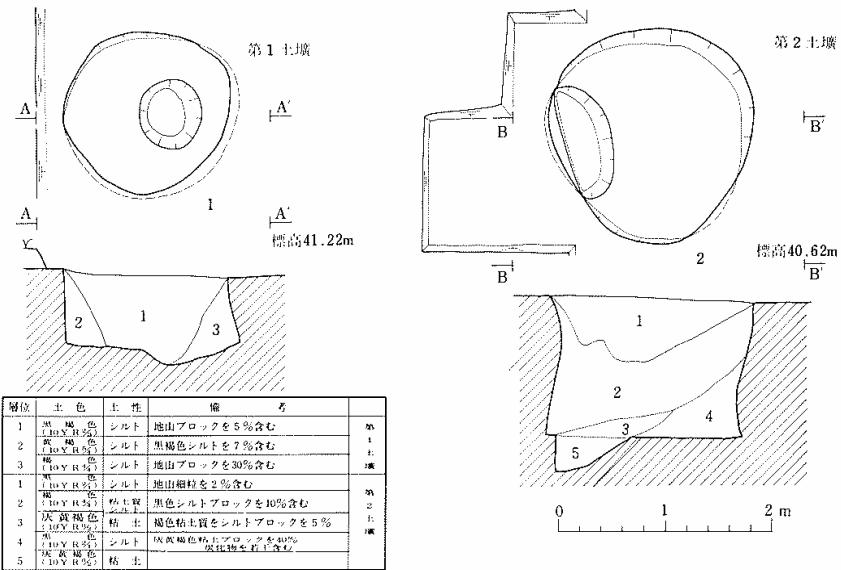
土師器壺：1は口縁部から体部にかけて残存する破片である。器形は、体部が丸味をもって立ち上がり、口縁部で外反しており、外面の体部と内面の口縁部近くに稜がつく。器面調整は外面の口縁部近くは磨滅が著しく不明であるが、体部にケズリが認められ、内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。

須恵器高壺：2はほぼ完形に近く、蓋を有すると、思われる高壺であり、脚部は短く、一段の透しが認められる。壺部口縁径は10cm、器高は8cm(壺部5cm、脚部3cm)脚部底径は8cmである。口縁部は受部から内反し、口縁端部近くで直立する。口縁端部の内面には段が認められる。口縁部から受部までの高さは約1.5cmある。受部は水平にのび、その先端は鋭い。受部には、蓋をかぶせて焼成したと思われる痕跡が認められる。受部以下の体部は丸味をもっており、口縁部に比べて厚く仕上げられている。脚部は短く、「ハ」の字に外方に踏んぱり、三方に円径の透し(径約1.4cm)をもっている。透しは壺部と脚部との接合部分に接してあけられている。透しの周縁には粘土のはみ出しが付着しており、粘土のはみ出しあは外面より内面の方が大きい。

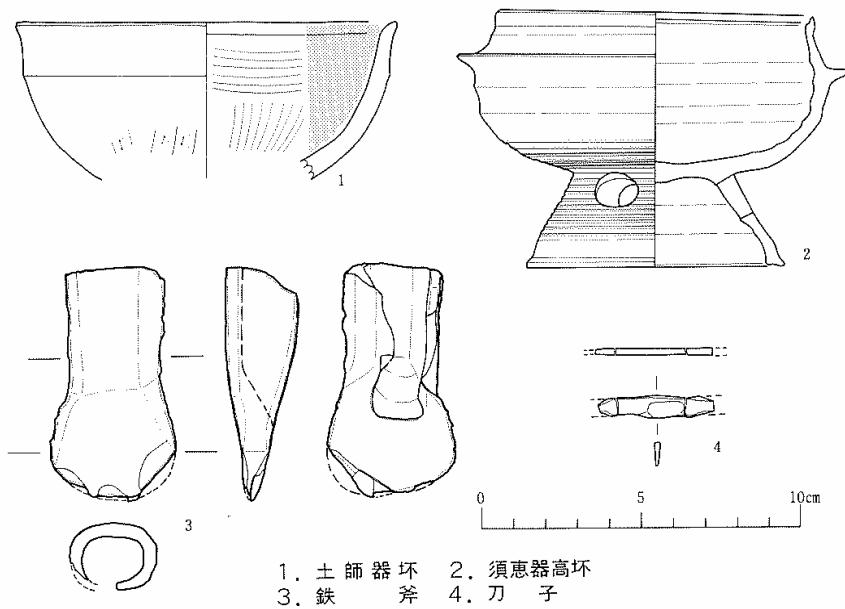
なお、壺部と脚部の外面に部分的であるが自然釉が認められる。器面調整は、外面の口縁部～体部上半および内面にはロクロ調整痕、外面の体部下半～脚部には回転の刷毛目毛が認められる。

鉄斧：1点出土している。3は銎部と刃部からなるものである。銎部は鉄板を両側から折り曲げて断面楕円形の袋状にしており、刃部は平面形が円形で、断面が長方形である。長さは7.5cm、刃部幅4cm、肩部3cmである。

刀子：4は刀子茎部の一部分と思われるもので、鉄製である。現存長い3.6cm、幅は0.7cmで断面形は三角形である。



第14図 土壤



第15図 M-17区（基本層位第II層）出土遺物

V. 考 察

1. 古 墳

(1) 出土遺物について

今回の調査で、古墳から出土した遺物には、土師器、須恵器、直刀、切子玉等がある。

土師器坏は口縁部破片で、外面の器面調整は磨滅のため不明である。しかし、内面の器面調整はヘラミガキ、黒色処理が施されており、このことだけから土師器坏の所属時期を考えてみると、古墳時代後期(住社式)～平安時代(表杉ノ入式)と年代幅が広く、時期は限定できない。

須恵器については甕の口縁部破片1点、甕の体部破片21点、壺の体部破片1点が出土している。これらは小破片であるために、器形はわからないが、器面調整は次のようにになっている。甕の口と口縁部破片と壺の体部破片は内外面にロクロ語調整痕が認められる。甕の体部破片については、①外面に平行タタキ目・回転刷毛目、内面に青海波紋が認めらるるもの、②外面に平行タタキ目、内面に青海波文が認められるもの、③外面に平行タタキ目、内面にナデが認められるもの、④外面にナデ、内面に青海波文が認められるものの4種類あり、そのうち①がほとんどである。内面にのこる青海波文については、陶邑古窯址群 I (平安学園古学クラブ：1971)によると「I期のTK23型式以前に属する須恵器はほとんど同心円文を意識的に消している。TK47でも50%以上の甕は内面の同心円文を消している。しかし、II期以後は原則として同心円文をそのままのこしている。」という報告がある。これを採用すれば本古墳出土の青海波文(同心円文)をもつ須恵器甕は、II期(6C前半～7C前半)以後のものと考えてよいであろう。

直刀は2口出土している。折損しており、詳細は不明であるが平棟・平造りの直刀である。これは古代に一般的なものであり、それ以上の年代の限定はできない。

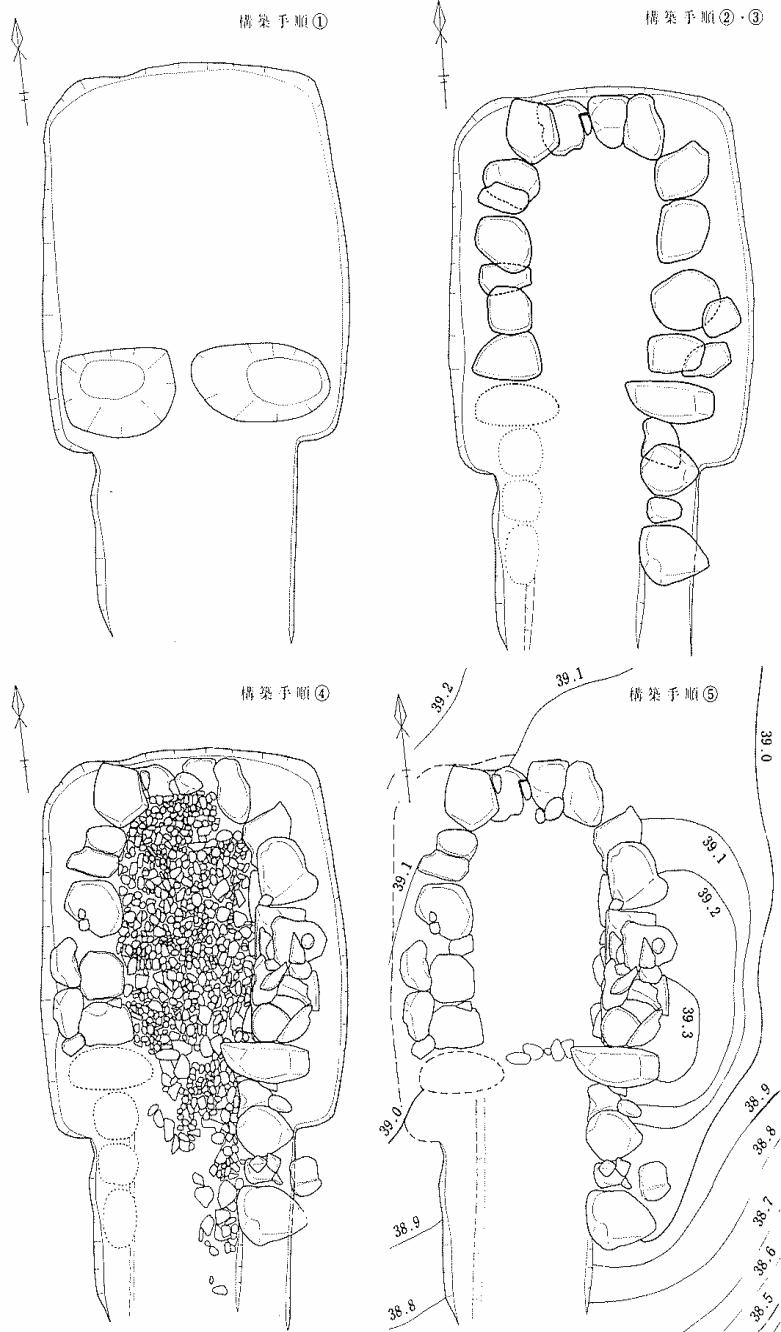
切子玉は2点出土している。2点とも稜部がかなり磨滅していることから、長い間使用されたものと推定される。切子玉は後期古墳・終末期の古墳に一般的なものであり、所属時期の眼定はできない。

(2) 構築について

古墳の構築方法についてはIV章-2-(3)で述べているので、ここでは構築手順と石材について考えてみたい。

古墳は次のような手順で構築されたものと考えられる。

- ① 古墳の位置を斜面に設定し、石室の掘り方を掘る。特に、玄門柱にあたる部分は深く掘る。
- ② 玄門柱を立て、石室内の掘り方に土を入れて整地する。
- ③ 側壁・奥壁の基底部の石を並べる。
- ④ 石室の床面に小円礫を敷きつめる。また樋石も並べる。



側壁・奥壁の石を積み上げる。側壁石は玄門柱石を支えるように積み、間隙には小さな石をつめ込む。

⑤石の上に積土をする。

なお、④の二つの作業については順序を明らかにすることは出来なかった。

石材については、側壁石、奥壁石、玄門柱石は安山岩のみを用いている。これに対して、床面に敷きつめた円礫や樋石は花崗岩、花崗斑岩、石英安山岩、安山岩、石英斑岩と多種である。これらの岩石は奥羽山脈でも阿武隈山地でも産出することから、特に遠くから搬入したものでないと考えられる。しかし、岩石の形状をみると、二地区から運ばれたことが推定される。一つは角のとれた板状の大きな石で、側壁石・奥壁石、玄門柱石に用いられているものである。これは上野山一帯に露出する岩石であることから、適当な大きさに割って周辺部を丸く整形したものと思われる。他方は円礫であり、床面の石や樋石に用いられているものである。これは白石川に同様の礫があることから、眼下の白石川の河原から運び上げられたものと思われる。

(3) 古墳の年代

本古墳の年代を考察する遺物としては、石室床面および積土から出土した須恵器甕・壺、直刀、切子玉がある。また、崩壊土から出土した土師器壺、須恵器甕・切子玉等は、古墳が破壊された時に、石室からかき出されたものと考えられる。これらの遺物から古墳の年代を考えてみると、土師器が住社式～表杉ノ入式であり、須恵器もほぼこの時期に包括される特徴をもつものである。この点で大まかに古墳時代後期から平安時代のものとすることができる。また、直刀は古代に一般的な平棟・平造りのものであるが、環頭・方頭などの金属製の把頭がないことなどから、古墳時代後期～終末期の古墳するものと共通している。なお、切子玉も厳密な年代推定は出来ないが、直刀と同様に古墳時代～終末期の古墳から一般的に出土するるものである。以上のように、今回は出土遺物はいずれも決定的な証拠となり得るものはないが、古墳時代後期から終末期のものとする上で矛盾しない。従って、この古墳もほぼこの時期のものと考えてよいであろう。

次に、石室構造からさらに検討を加えてみたい。本古墳の特徴をあげてみると、①丘陵暖斜面に構築されている。②横穴式石室であり、玄室・玄門・羨道の区別がある。③玄室の平面形は不整の楕円形で、玄室の側壁部は直線的で奥壁部は強く弯曲している。④奥壁は側壁と同じ方法で割石を積んで構築している。⑤玄門柱石は掘り込んだ中に立てられている。等があげられる。

このような特徴をもつ古墳は上野山古墳群の一支群である寺後古墳群においてもみられる。寺後1号墳については丘陵暖斜面に構築されていること、横穴式石室で玄室・玄門・羨道の区別があること、側壁基底部の石は比較的大きな石を用いて積んでいること等が本古墳と類似し

ている。しかし、相違点として奥壁に一枚の巨石を立てていること、玄門柱は掘り込んで立てたものでなく、石室基底部の石の上にただけの形式的なものであることがあげられる。また、寺後2号墳についても本古墳と比較すると、1号墳と同じ類似点、相違点をもっている。

仙台平野の横穴式石室をもつ古墳について、氏家氏(氏家：1977)は「巨石使用古墳」、「竪穴系横穴式石室」、「胴張り型横穴式石室」、「末期変形石室」の4グループに分けて編年をたてている。この中で寺後古墳群は日光山古墳群(古川市)、塙原古墳群(古川市)、安久東古墳群(仙台市)、和泉沢古墳群(桃生郡河北町)とともに「末期変形石室」をもつグループに分類されている。また氏家氏は、「末期変形石室」について、「玄室自体、すべて天井石の架構を疑えるものや、遺骸の埋葬には困難な空間をしかもたないものなどが含まれる。」と述べている。なお、県内において上野山古墳群と同じく大群集墳である鷹巣古墳群(白石市)や台町古墳群(伊具郡丸森町)については、「竪穴系横穴式石室」のグループに分類し、年代的にはこれらの古墳群を寺後古墳群の前に位置づけている。

以上のことから、山の上古墳は寺後古墳群と石室構造に類似性が認められ、「末期変形石室」のグループに属すると考えられる。また寺後1・2号墳の年代について、氏家氏は石室構造や副葬品などから奈良時代に位置づけている^(註4)。よって寺後古墳群と同じ上野山丘陵暖斜面に立地する本古墳は、寺後古墳群とほぼ同じ時期に築造されたものと考えられる。

2. 土 墓

2基の土壙は、隣接しており平面形や堆積土にも類似性が認められる。これらの土壙は堆積土に地山ブロックを含み、たたきしめられたように固いことから、人為的に埋め戻された可能性がある。所属時期については、出土遺物もないため不明である。

3. M - 17 区出土遺物

堆積土からは土師器坏、須恵器高坏、鉄斧、刀子が出土している。ここでは、土師器と須恵器についてのみ考察を加え、鉄斧と刀子については所属時期が不明なことから、IV章-4のみにとどめておきたい。

土師器坏は、器形が丸味をもって立ち上がり、口縁部で外反し、外面の体部と内面の口縁部近くに稜のつくものである。器面調整は、外面の口縁部近くは磨滅が著しく不明であるが、体部にケズリが認められ、内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。この坏は底部が欠損しているが、器形と器面調整からみて柱社(志間：1958)出土の土器に類似している。しかし、稜のつく位置などに少々相違点があり、正確な所属時期は不明である。

須恵器高坏の特徴は次のとおりである。坏部については、口縁部は受部から内反し、口縁端部近くで直立に近くたちあがる。また口縁部と受部の端部は鋭角的である。脚部については、短脚1段透してあり、透しは円形で三法に等感覚であけられている。器面調整については、外

(註4)志間氏(志間：1976)によると、寺後古墳群の築造年代は7世紀後半から8世紀初に位置づけている。

面の休部下半～脚部には回転の刷毛目が施されている。

この短脚1段透し高坏は、陶邑古窯址群 I (平安学園考古学クラブ: 1971)によると、窯跡の時期区分の指標となっており、「I期(5C代～6C前半)」にあてられている。県内において I 期の窯跡としては大蓮寺窯跡があるが、器台や甕を主体としており、高坏の類例はない。

なお、この高坏は遺構に伴って出土したものではないが、今回調査した古墳とは約24mしか離れていないことや古墳周辺は削平が著しく進んだ状況にある。これらのことを考え合わせると、この高坏は、削平により消滅した古墳の副葬品または古墳時代の住居跡などの遺構に伴うものであったかも知れない。

VI. ま と め

今回の調査の成果をまとめると次のようになる。

1. 山の上古墳は上野山古墳群の一支群であり、標高約200mの上野山から南西方向にのびる丘陵の緩斜面に立地している。今回調査したのは丘陵最南端に位置する古墳で、標高は39mである。丘陵は削平が進み、本古墳の周辺では遺構が検出されなかつたが、本古墳から北約120mの山林内に積石塚を思わせる高まりが2ヶ所認められる。
2. 墳丘は削平が著しく、その形態、規模については不明である。内部主体は玄室・玄門・羨道からなる横穴式石室である。玄室の平面形は不整の楕円形で、玄室の側壁部が直線的で奥壁部が強く弯曲している。また奥壁は側壁は同様に割石を積んで構築している。
3. 古墳からの出土遺物としては、土師器・須恵器・直刀・切子玉があり、所属時期は古墳時代後期から終末期のものと考えられる。
4. 本古墳の横穴式石室は「末期変形石室」であり、寺後古墳群に類似していることから、奈良時代に築造されたものと考えられる。
5. M-17区の堆積土から出土した須恵器の高坏は古墳時代(5世紀～6世紀前半)に所属するものであり、県内における出土例は少ない。

引用・参考文献

- 穴沢眞光(1972)：「東北南部における胴張りプランの横穴式石室とその問題」『福島考古』第13号
- 阿部博志・千葉宗久(1980)：「台の山遺跡」宮城県文化財調査報告書第62集
- 伊東信雄(1952)：「宮城県加美郡上郷古墳」『日本考古学年報』4(昭和26年度)
- 〃(1956)：「岩手県西磐井郡杉山古墳群」『日本考古学年報』8(昭和30年度)
- 岩手県江釣子村教育委員会(1977)：「猫谷地・五条丸古墳群」(増補再刊)
- 氏家和典(1975)：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会
- 〃(1977)：「仙台平野における横穴式石室古墳について」『研究紀要』IV 宮城県多賀城跡調査研究所
- 草間俊一・玉川一郎(1974)：「岩手県和賀町長沼古墳」和賀町教育委員会
- 国見町教育委員会(1974)：「森山古墳群・大木戸古墳群・大木戸窯跡群発掘調査」国見町文化財調査報告書第3集
- 古窯跡研究会(1976)：「陸奥国官窯跡群II」研究報告第4冊
- 斎藤吉弘・真山悟(1977)：「北沢遺跡発掘I調査概報」宮城県文化財調査報告56集
- 佐々木茂楨(1972)：「和泉沢古墳群」宮城県桃生郡河北地区文化財調査報告第1集
- 柴田俊彰(1975)：「胴張り型横穴式石室の形態について—福島県の後期古墳の横穴石室の様相—」『福島学古学』 第16号
- 志間泰治(1954)：「宮城県伊具郡金山町臺町古墳群調査概報」『歴史』第七輯 東北史学会
- 〃(1955)：「宮城県伊具郡丸森町金山字台町古墳調査概報」第二輯
- 〃(1958)：「宮城県角田町住社発見の竪穴住居趾とその考察」『考古学雑誌』43-4
- 〃(1976)：「寺後古墳群」『船迫ニュータウン地内遺跡調査報告』柴田町文化財報告書第8集
- 白石市教育委員会(1972)：「鷹巣古墳群発掘調査概報」白石市文化財調査報告書第12号
- 仙台市教育委員会(1976)：「安久東遺跡発掘調査概報」仙台市文化財調査報告書第10集
- 仙台市中田第一土地区画整理組合(1975)：「安久遺跡発掘調査略報」
- 高橋守克(1978)：「川袋古墳群」利府町文化財調査報告書第1集
- 東北歴史資料館(1977)：「東北の古墳」
- 芳賀寿幸(1979)：「石塚古墳」柴田町文化財報告書
- 古川市教育委員会(1970)：「古川市塚原古墳群」古川市文化財調査報告第1集
- 〃(1972)：「日光山古墳群」古川市文化財調査報告第2集
- 平安学園考古学クラブ(1966)：「陶邑古窯址群I」研究論集第10集
- 宮城県教育委員会・東北地方建設局仙台工事事務所(1975)：「土平遺跡発掘調査概報」宮城県文化財調査報告書 第39集
- 宮城県教育委員会(1979)：「宮城県遺跡地名表」宮城県文化財調査報告書第46集(修正版)
- 〃(1979)：「宮城県遺跡地図」宮城県文化財調査報告書第47集(修正版)
- 盛岡市教育委員会(1969)：「盛岡市上太田暇夷森古墳」
- 弥生時代研究会(1979)：「糲」創刊号
- 渡辺泰伸(1980)：「東北古墳時代須恵器の様相と編年」『考古学雑誌』65-4

種別	器種	部位	器面調査	古				墳		M-17区 2層	小計
				外面	内面	表土	崩壊土	溝道部底面	積土	旧表土	
土師器	壺	口縁部	横ナデミガキ(黒)								1
		体部	不明-ミガキ(黒)			1					2
		底部	不明-ミガキ(黒)								2
		全体	ケズリ-ミガキ(黒)								1
須恵器	壺	口縁部	ロコロコロコロ		1						1
		体部	平行タタキ目・同板 横目・直目・青海波文			16					16
		底部	平行タタキ目 (自然釉)ニナテ		3						3
		全体	平行タタキ目 二青海波文					1			1
		全体	ナデミガキ(黒) 青海波文	1							1
		全体	ロコロコロコロ			1					1
		全体	(地文)ナデミガキ(黒)						1	(織程混入)	1
磁文土器	球形土器	全体	小衝突文						1		7
		小計		1	21	1	1	1	1		32

図 版

発掘前の状況
(西側から。)



発掘前の状況
(北側から。)



発掘前の状況
(北側から。)



図版 1
山の上古墳



表土を除去した状況
(南東側から)



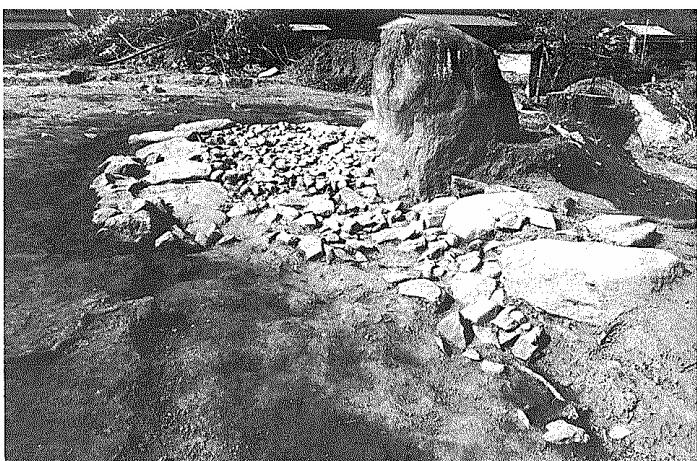
表土を除去した状況
(北西側から)



玄室右側壁の状況
(西側から)

図版 2
山の上古墳

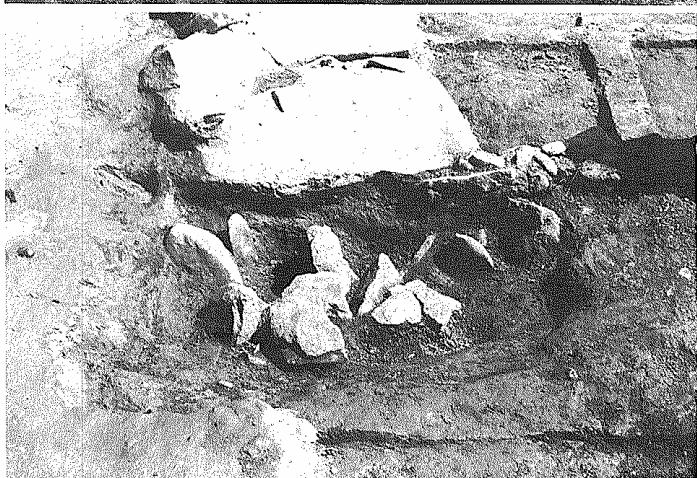
石室の状況
(南側から)



石室の状況
(北側から)



左玄門柱の抜き取り痕



図版 3
山の上古墳

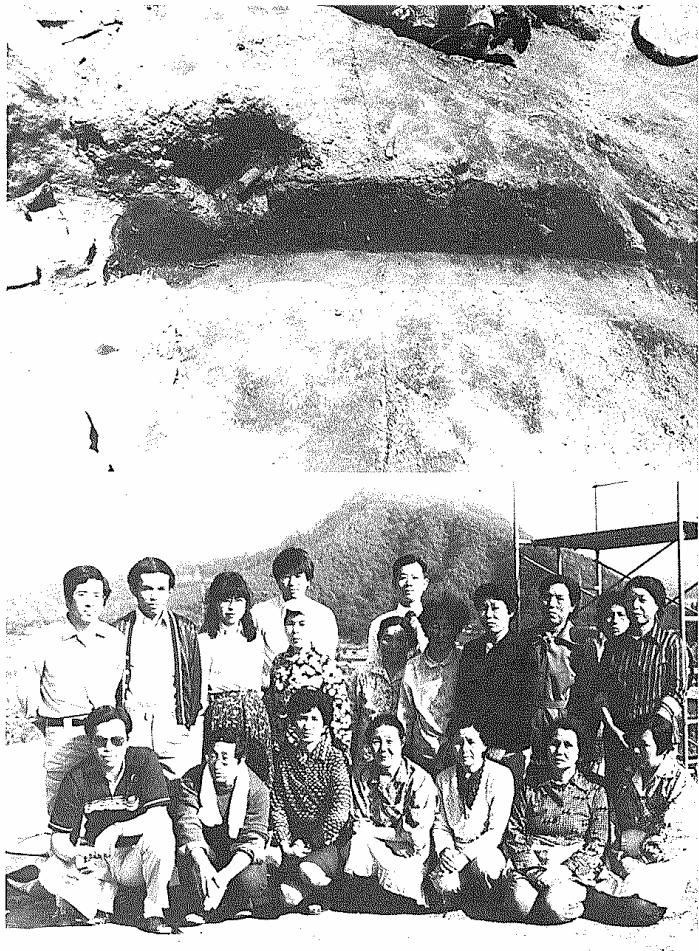


石室の床面の円礫を
除去した状況
(南側から)



石室掘り方埋土上面
を露出した状況
(南側から)

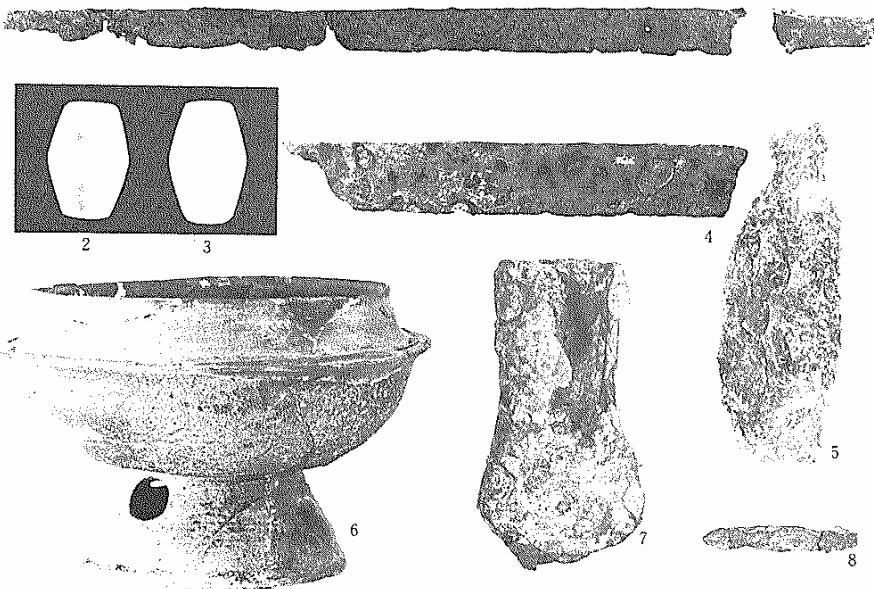
図版4
山の上古墳



積土、旧表土の状況

発掘調査参加者

図版 5
山の上古墳



図版 6
(縮尺不同)
出土 遺 物

1.第13図1 5.第13図8
2.第13図4 6.第15図2
3.第13図5 7.第15図3
4.第13図2 8.第15図4
(縮尺不同)

2. 平形遺跡

(館山館跡B地区)

調査要項

遺跡記号：G F (宮城県遺跡地名表登載(61002)

遺跡所在地：本吉郡津山町平形

調査面積：約1,500m² (発掘面積約1,000m²)

調査期間：昭和55年6月2日～7月5日

調査員：宮城県教育庁文化財保護課

斎藤吉弘、千葉宗久、太田昭夫

調査に協力された地元の方々は以下のとおりである。(順不同、敬称略)

山形力夫、三浦松雄、小野寺福治、佐藤喜代治、林二雄、佐々水善松、
亀井太治雄、佐々木嘉久二、浅野義信、佐々木義昭、阿部久雄、
浅野あゑ子、菊池たつ子、亀井みね子、西条ゆきの、高橋はる子、
亀井ふみ、西館すゑ子、林けさ子、亀井はづ子、福田よし子、
大森とよの、鈴木あさ子、尾張かつ子、前田勝子、阿部きぬ子、
伊藤とめ子、千葉きよえ、千葉みよ子、小野寺さち子、阿部栄子、
高橋恵美子、及川文子、古川テル子、佐々木徳、五島静枝、
高橋えみ子、佐藤久子、阿部みやの

目 次

. 調査に至る経過	43
. 遺跡の位置と環境	43
. 調査の方法と経過	46
. 調査の成果	
1. 基本層位	50
2. 発見された遺構と遺物	50
〈第1地点〉	
(1) 堅穴住居跡	52
(2) 土 壤	56
(3) 遺構以外の出土遺物	56
〈第2地点〉	
1. 板碑について	61
. 考 察	
(1) 遺物について	61
(2) 遺構について	62
. ま と め	62
引用・参考文献	63

I. 調査に至る経過

館山館跡は宮城県本吉郡津山町柳津地内にあり、柳津バイパスの建設と係り合いをもった。柳津バイパスは、起点の津山町柳津字宮下から終点の津山町柳津字幣崎に至る1.8kmの路線で、建設省東北地方建設局仙台工事事務所が、当該地域での交通渋滞解消を目的に建設を計画したものである。

宮城県教育委員会は、東北地建の依頼によって計画路線に係る遺跡の分布調査を実施し、それにもとづく協議と調整を行なったところ、最終的に工事と係り合いをもつのが館山館跡のAおよびB地区の遺跡となった。

かくして、上記の地区は事業施工前に発掘調査を行うことになり、まずB地区の発掘調査を昭和55年6月2日から7月5日まで宮城県教育庁文化財保護課が担当して実施した。なお、A地区は昭和56年度に調査を行う予定である。

II. 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と自然環境

平形遺跡は、本吉郡津山町平形に所在し、津山町役場から南方約1kmの地点に位置している。

宮城県北東部の地形をみると、岩手県からのびできた北上山地は、気仙沼から牡鹿半島にかけて南北にのびており、北上山地の東側は屈曲のはげしいリアス式海岸となっている。北上山地の西麓には北上川が南流し、津山町柳津付近で西方の旧北上川と南方の新北上川の二方向に流路をとっている。旧北上川は河南町和淵付近で迫川や江合川と、鹿又付近で新北上川の支流と合流し、石巻湾へと注ぎ込んでいる。

本遺跡のある津山町は北上川の左岸に位置しており、地形的には北上山地が大部分を占め、南東部に標高532mの翁倉山や標高419mの大峰山がそびえている。本町南西部には、南沢川や石貝川など小河川や谷川が北上山地を開折して土砂などを堆積し、形成した低地が東方に細長くのびている。この低地の西端部に現在の柳津の立地している。

本遺跡は、南沢川が北上川に注ぐ左岸の丘陵頂部および斜面にあり、間を大沢川が流れている。遺跡の現状は山林で、西斜面にやや広い平坦部といいくつかの段が認められる。標高は20～35mである。山林となっているために遺物の散布はみられない。

2.周辺の遺跡(第1図)

津山町内では、現在15ヶ所の遺跡が知られているが、今後遺跡が新しく発見される可能性は大きい。町内の遺跡や周辺の町で発掘調査の実施された遺跡などをあわせて、歴史的環境をみてみたい。

津山遺跡で最古の遺跡は、縄文時代早期の十所貝塚(早期・中期)であり唯一の貝塚でもある。他には柳津中学校敷地内遺跡(後期・晚期)、館石遺跡(後期・晚期)、大畠遺跡(後期・晚期)、柳津天神山遺跡(時期不明)などが知られている。ほとんどの遺跡は丘陵頂や丘陵斜面に立地しているのに対し、柳津中学敷地内遺跡は低地に立地している。

弥生時代の遺跡は、山梨子坂遺跡(中期)と柳津中学校敷地遺跡(時期不明)があり、前者は丘陵端に立地している。

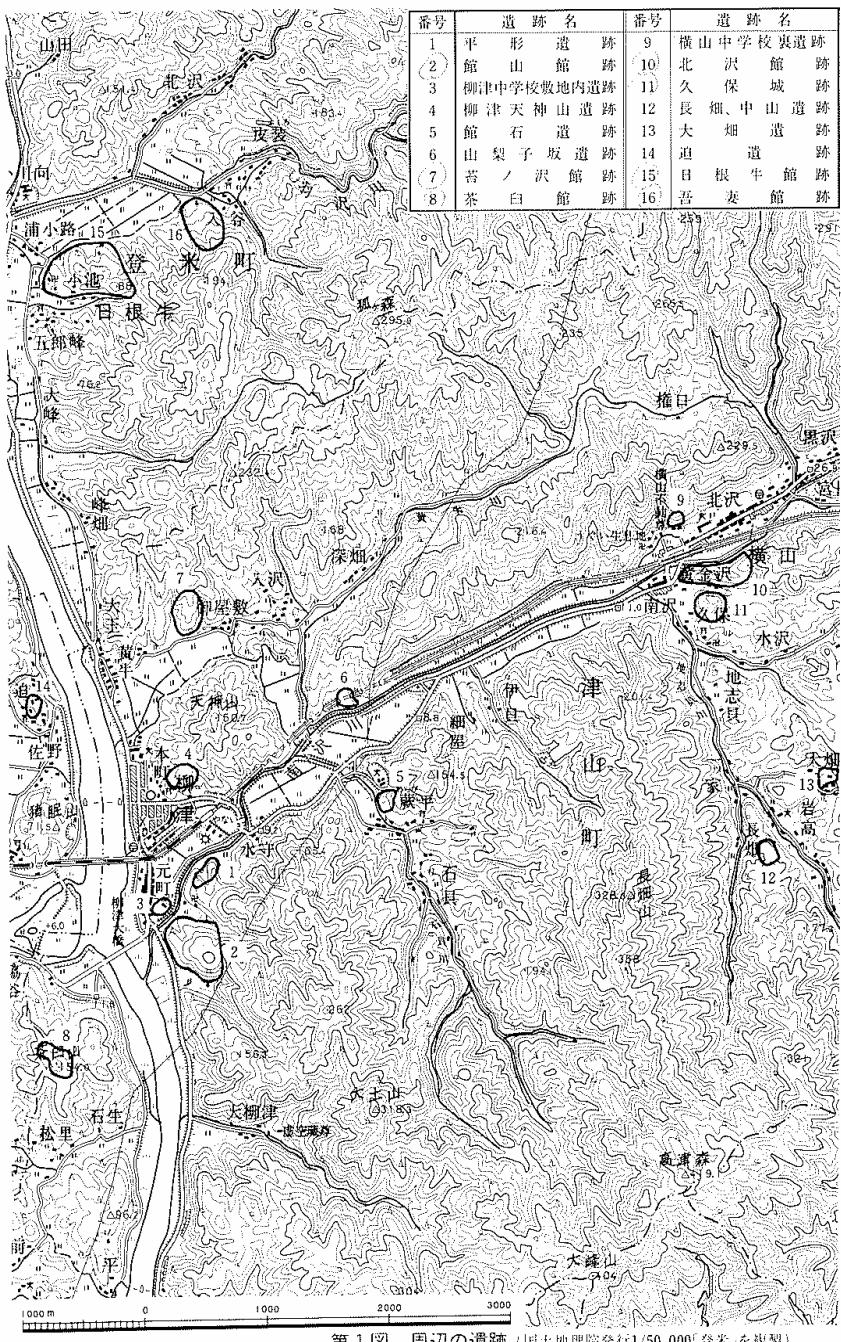
古墳時代の遺跡は、町内では、今のところ発見されていないので不明である。

奈良・平安時代の遺跡は、町内では発見例が少なく、茶臼館跡、十所貝塚で土師器、須恵器が出土しているだけである。しかし、周辺で豊里町の長根浦貝塚(平・志間他:1974)や沼崎山遺跡(遊佐:1980)で発掘調査が実施され、平安時代の住居跡が発見されている。また、河北町では桃生城跡(宮城県多賀城跡調査研究所:1974、1975)や和泉沢古墳群(佐々木:1972)の発掘調査が行なわれている。桃生城跡については、8世紀後半の城柵遺跡であることが明らかとなり、和泉沢古墳群については丘陵斜面に約50基の積石古墳が確認され、墳丘や内部構造、出土品などから築造は9世紀にはいると考えられている。

中世の城館としては、現在の新北上川をはさんで本遺跡の真向いに茶臼館跡があり、他には苔ノ沢館跡(以上津山町柳津)、北沢館跡・久保城跡(以上津山町横山)などがある。本遺跡の南にある館山館跡は黒木紀伊守が居城し、その後に城主は葛西の臣千葉太郎左衛門に変わった。

藩政時代にはいってからは、丘陵の西側にあたる平地に移り、布施氏が屋敷を構え柳津要害として知られた。また、北上川が交通運輸の大動脈となり、柳津は宿駅場としても繁栄した。

しかし、この旧柳津町は大正時代の北正時代の北上川改修工事により、現在はほとんど河床となっている。

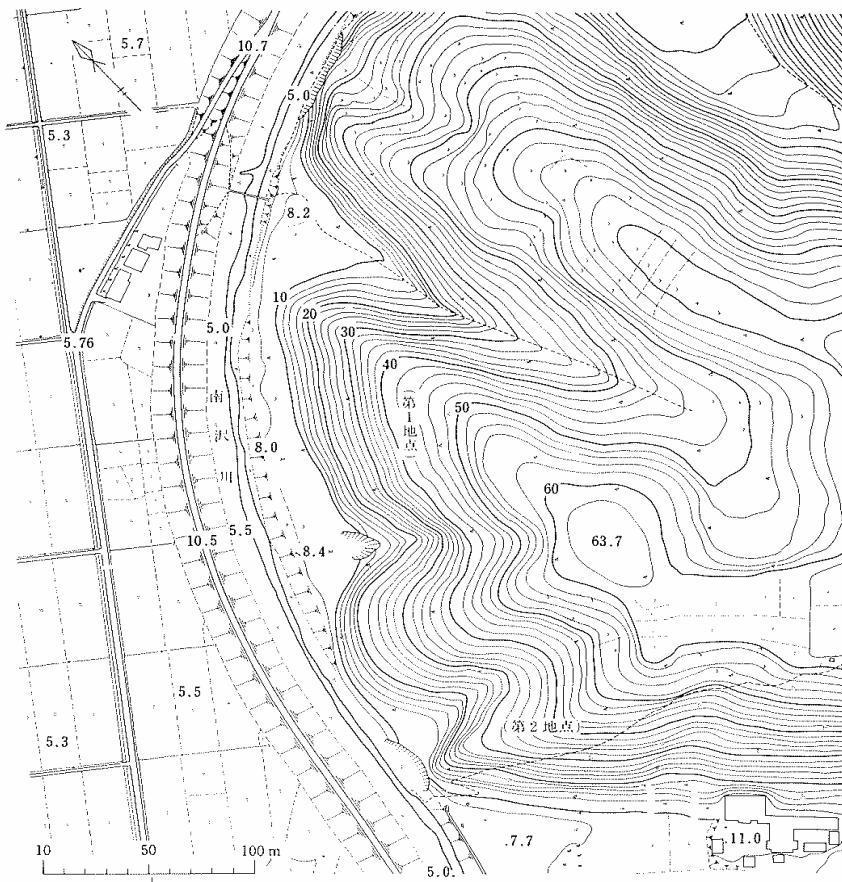


第1図 周辺の遺跡 (国土地理院発行1/50,000「登米」を複製)

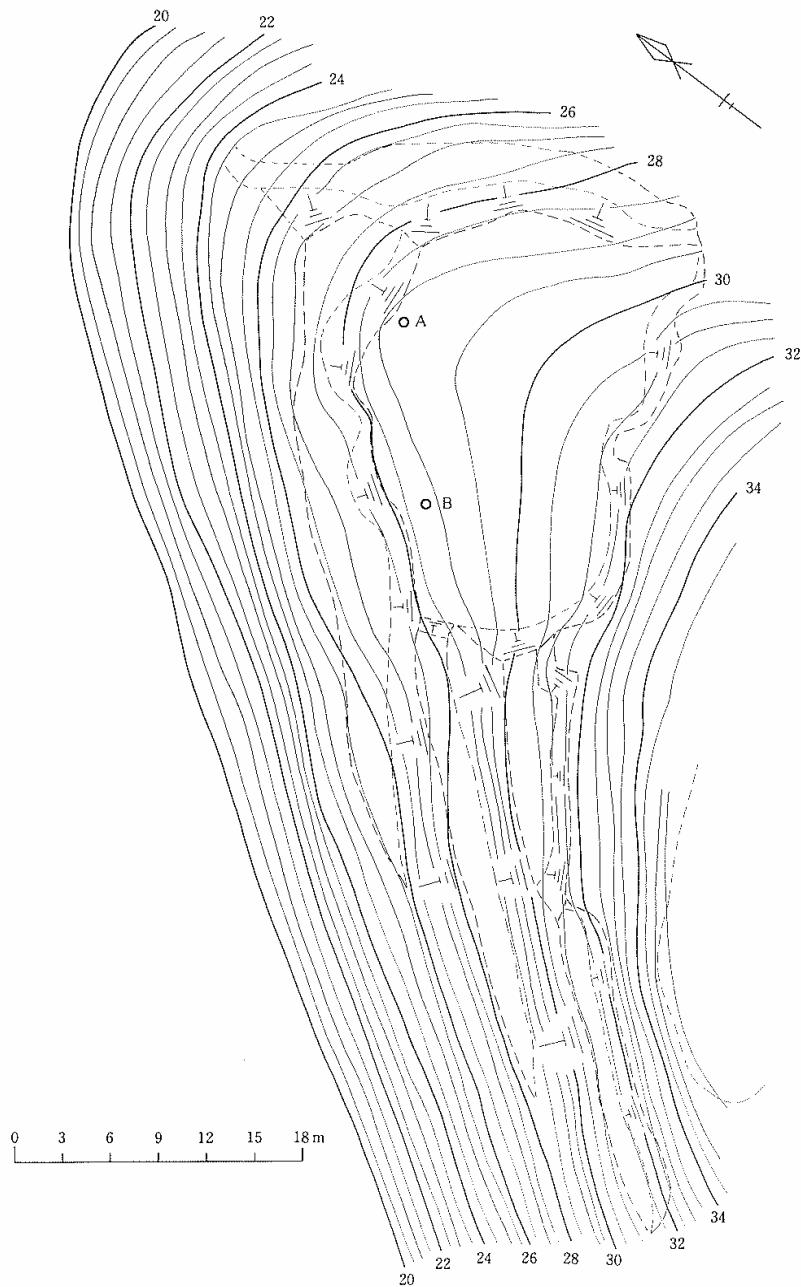
III. 調査の方法と経過(第2~7図)

調査は柳津バイパスにかかる約1,500m²を対象に6月2日に開始し、約1,000m²を発掘した。

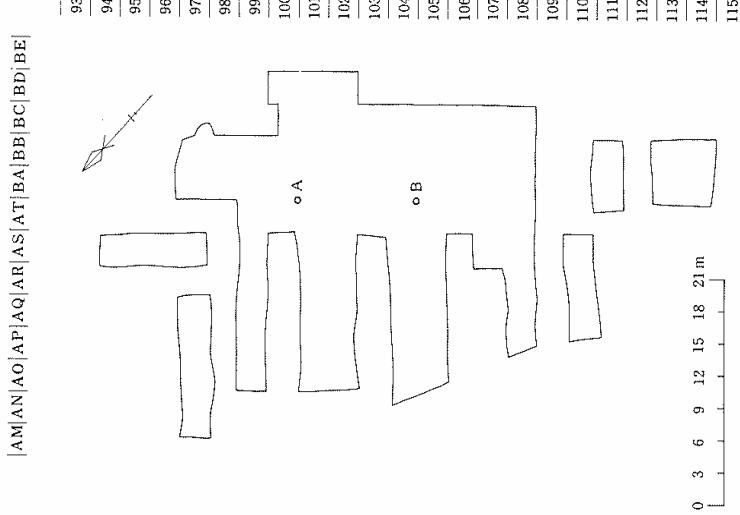
平形遺跡は平坦部と段のある第1地点、そこから南に約300mはなれた丘陵上に平坦のある第2地点の2ヶ所に分けられる。第1地点の調査は、原点AとBを結ぶ直線を南北の基準線(N-45°-E)とし、それに直交する東西の基準線を設け、それをもとにして3m方眼のグリッドを組んだ。南北方向については、原点Aの北側を100区、南側を101区としてアラビア数字で、



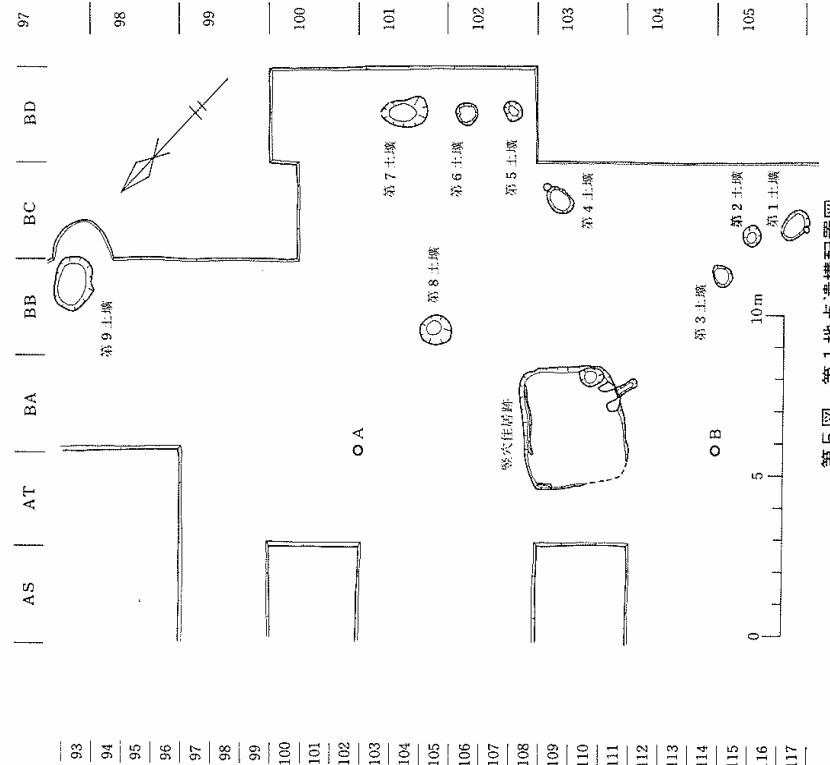
第2図 周辺の地形



第3図 第1地点の地形



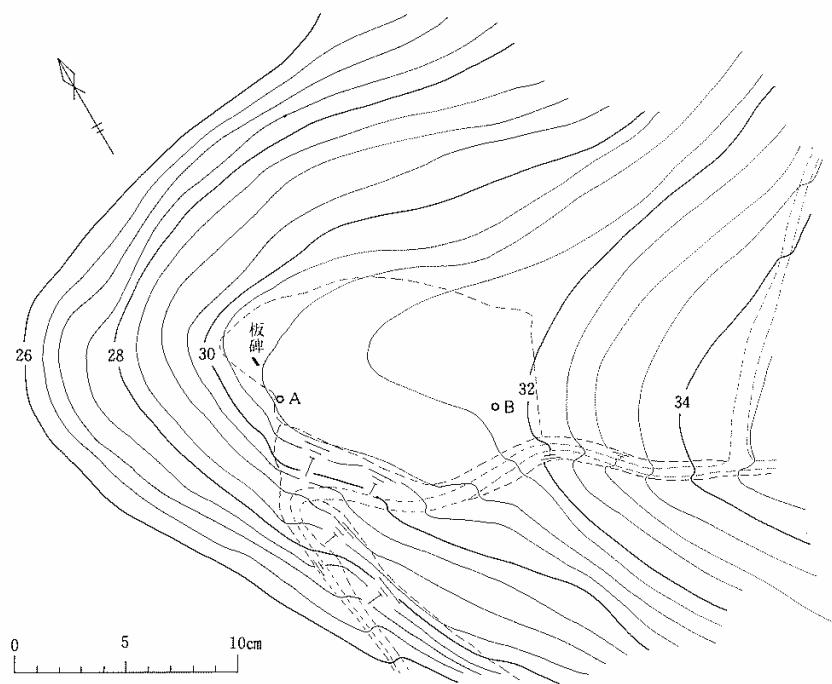
第4図 第1地点グリッド配図



第5図 第1地点遺構配置図

東西方向については原点Aの西側をAT区、東側をBA区としてアルファベットで表わし、この両者を組み合わせてグリッド名を付した。第1地点の調査は、館跡と考えて平坦部と段の表土を除去することから始まった。その結果、縄文時代・弥生時代・平安時代の遺物が発見され、地山面で竪穴住居跡1軒、土壙9基が確認された。しかし、館跡に伴なう遺構や遺物は全く発見されなかった。その後拡張を行って遺構の精査をした。検出された遺構の平面図は20分の1で作成し、レベルを記入した。遺構の断面図、調査区の基本層位については20分の1で、遺構配図は100分の1で作成した。なお、平板測量により200分の1の地形も作成している。

第2地点は、第1地点と同様に原点AとBを設定し、これを結ぶ直線を東西の基準線(N-57°-W)とし、それに直交する直線を南北の基準線として、これらをもとにして3m方眼のグリッドを組んだ。南北方向については、原点Bの北側をAT区、南側をBA区としてアルファベットで表わし、東面方向については、原点Bの西側を11区、東側を10区としてアラビア数字で表わし、この両者を組み合わせてグリッド名を付した。調査の結果、表土は厚さ10~30cmで、その下は地山となっており、遺構・遺物は発見されなかった。調査区の基本層位については20分の1、地形図は100分の1で作成した。また、板碑については拓本をとり、平面図、側面図を10分の1で作成した。



第6図 第2地点地形図

6月27日には、津山町民を対象にして現地報告会を開催した。なお、現地報告会の前日まで3日間にわたり、柳津小学校5・6年約80名、津山中学校1・2・3年約220名が社会見学のため来跡している。調査終了は7月5日であった。

IV. 調査の成果

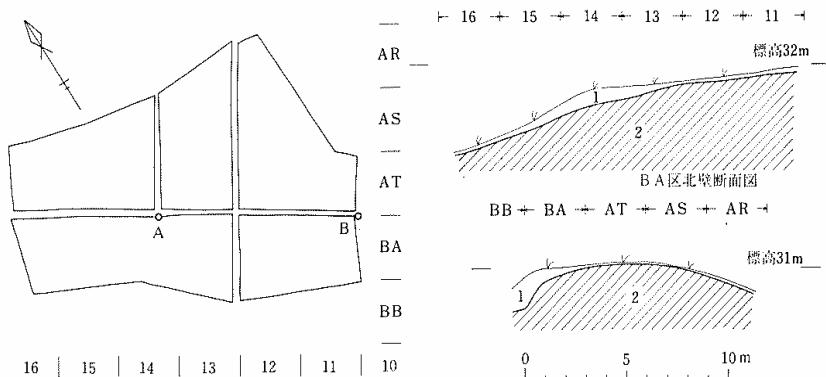
1. 基本層位(第7・8図)

第1地点においては、基本的に2枚の層が確認された。

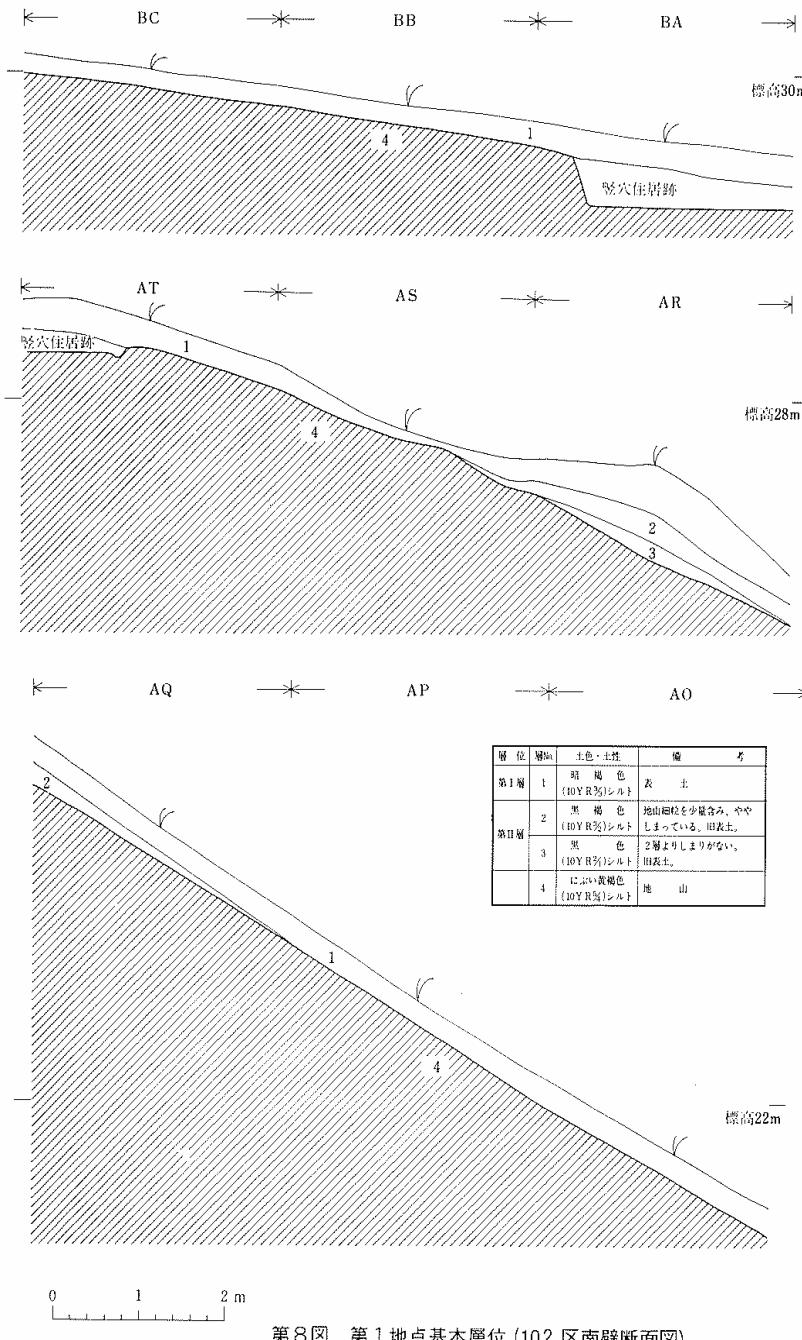
第Ⅰ層：厚さ約20cmの「暗褐色シルト層」で表土である。この層から、縄文土器や土師器が出土している。

第Ⅱ層：「黒褐色・黒色シルト層」で旧表土である。平坦部ではほとんど認められず、斜面の上方部で確認された。地区によっては2層に細別される。2層とも地山細粒を少量含んでいるが、上層はややしまりがみられるのに対し、下層はしまりがない。この層から、縄文土器、土師器、石鏃、凹石など出土している。

第2地点においては、第1地点の第Ⅰ層と同様の表土のみ確認されただけで、その下は地山である。



第7図 第2地点グリッド配図・基本層位



第8図 第1地点基本層位(102区南壁断面図)

2. 発見された遺構と遺物

第1地点

(1) 壁穴住居跡(第9図)

確認面：A T・B A-103区付近の地山面で確認した。

平面形・規模：平面形は長方形で、南北が約3.5m、東西が約3.2mである。住居内の面積は約11.2m²である。

壁穴層位：基本的に6層認められた。第1層は中央より西半分に分布している。第2層は東壁からほぼ中央部にかけて分布している。第3層は火山灰と思われるもので、ほぼ中央部に分布し、特にその南側が厚く堆積している。第4層は全域に厚く分布している。第5層は全域に分布しているが、特に壁沿いに厚く堆積している。第6層は全域の床面を覆っており、特に壁沿いは厚く焼土ブロックが多量に含まれている。

壁：北、東、南壁の残存状況は良好で、床面から急角度で立ち上がっている。なお、残存壁高は、最も保存の良好な東壁で約50cmある。

床面：地山を床としており、全面的にはほぼ平坦で固くしまっている。床面には炭化物や焼土が貼り付いている。なお、地山は床の東半と西半で土質が異なっており、東半がシルト質で、あるのに対し、西半は岩質である。

柱穴：住居内からは、ピットが全く発見されていない。

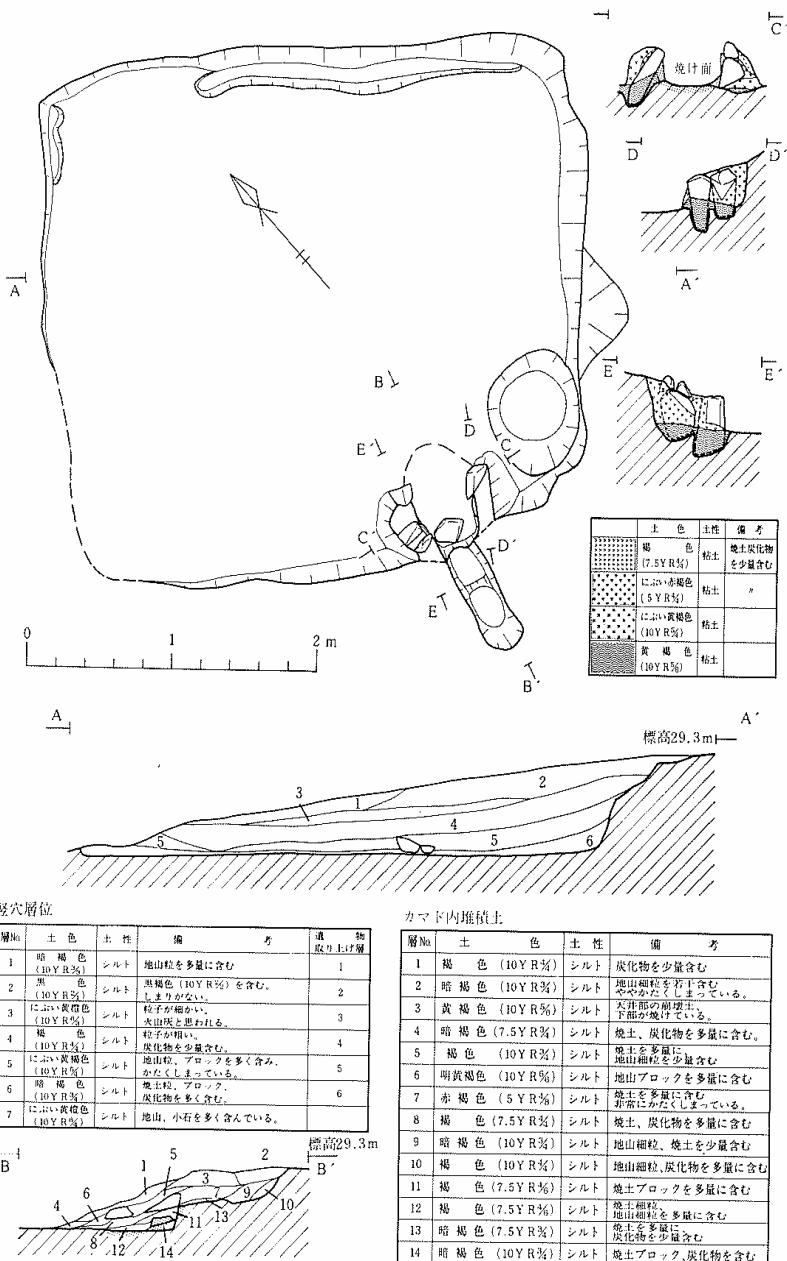
周溝：北壁沿いに約1.2m、西壁沿いに約0.5m残存している。底面幅は前者が約10cm、後者が4~6cmであり、床面からの深さ2~4cmとほぼ一定している。

カマド：南壁の中央から東寄りに設置されており、燃焼部と煙道部とから成る。燃焼部側壁は角礫と粘土で構築されている。角礫の大きさは、長さ30~40cm、幅15~20cm、厚さ10~15cmの板状のものである。これは両側壁に2個ずつ、床面を掘り込んでその中に立てられている。燃焼部底面の奥壁近くに支脚として用いられたと考えられる板状の角礫が検出された。燃焼部底面は皿状にくぼんでおり、ややしまっている。燃焼部底面、奥壁、側壁の内側、角礫は火熱を受けて赤変している。奥壁は垂直に近い角度で立ち上がり、煙道へ移行している。煙道底面の傾斜は煙出しに向かってやや上がっており、煙道部は約0.7m残存している。軸方向はS-15°-Wである。

貯蔵穴状ピット：住居の南東隅、カマドの左脇に検出された。平面形は80×60cmの楕円形で床面からの深さは約15cmで丸底状を呈している。堆積土には焼土や炭化物が多量に含まれている。

出土遺物(第10図1~7・10)

ここでは、図示した遺物だけを取り上げ、その他は第3表に一括している。



第9図 積穴住居跡

〔住居に伴う遺物〕第10図1・3・5・10は床面から出土している。

土師器

壺: 1の体部は外傾し、平底である。外面は、体部から底部全面にかけて手持ちヘラケズリが加えられている。内面は刷毛目のちミガキが加えられ、黒色処理が施されている。

甕: 3は、口縁部から体部にかけて残存する破片である。口縁部は外傾し、口縁端部はややすくほんでおり、上端はややつまみ上げられている。体部は内弯している。内外面ともにロクロ調整痕が認められる。内面は部分的に赤変しており、非常にもろくなっているのに対し、外面は内面ほど赤変しておらず、表面もしっかりしている。

須恵器

甕: 5は、体部下半から底部にかけて残存する破片である。外面は平行タタキ目、内面の底部には刷毛目が施されている。

鉄鎗(10)

1点出土している。大きさは直径が約2.4cmの球形で、上端に鈎を付けており、下部に一文字の透し穴がある。鈎は縦3mm、横5mm、厚さ2mmの直方体で、真中に径約1mmの孔があいている。体内に鉄製の丸が1個封じ込められている。

〔堆積土内出土遺物〕

土師器

壺: 2は堆積土の第1層から出土しており、体部から底部にかけて残存する破片である。体部は丸味をもって立ち上がる。外面はロクロ調整、内面はヘラミガミ、黒色処理が施されている。

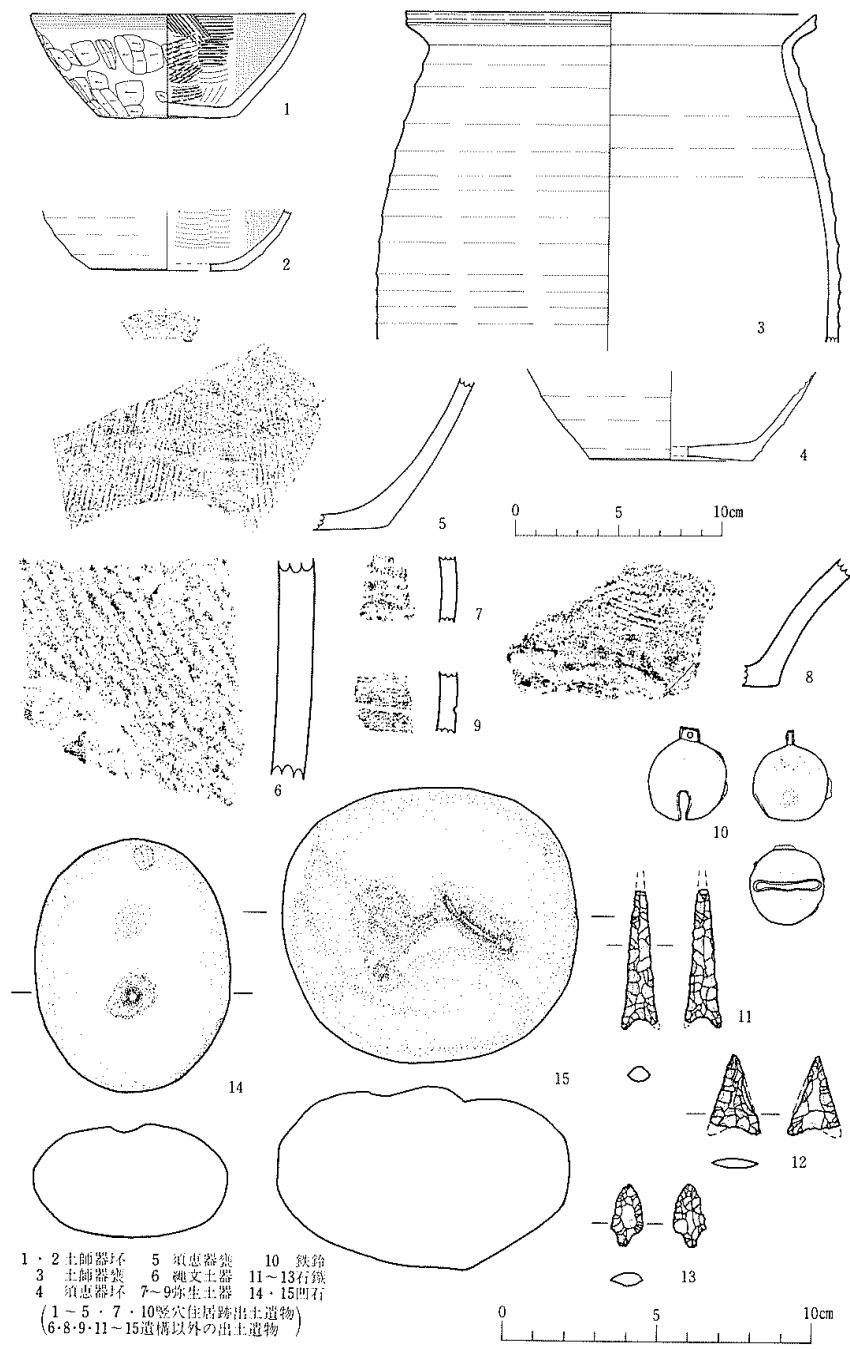
須恵器

甕: 4は堆積土の第5から出土しており、体部から底部にかけて残存する破片である。底部切り離しは回転糸切り技法による。内外面とも磨滅が著しい。

その他の遺物としては、堆積土から縄文土器体部破片4点や弥生土器破片1点(7)が出土している。縄文土器は地文として縄文が施されているが、磨滅が著しく図示できない。7は外面に沈線と磨消縄文による変形工字文と思われる文様が描かれ、内面はミガキが施されている。

図版番号	出土地点	種別	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質
第10図11	B B - 104-2層	石 鐵	(4.3)	1.2	0.45	(1.7)	珪質頁岩
12	B A - 107-2層	石 鐵	2.4	1.7	0.36	(0.9)	珪質頁岩
13	B B - 98-2層	石 鐵	1.9 6	1.08	0.4	0.7	珪質頁岩
14	A R - 101-2層	凹 石	7.9	6.46	3.5	240	石英安山岩
15	A R - 101-2層	凹 石	9.78	8.55	5.8	680	砂 岩

第1表 石 器 計 測 表



第10図 竪穴住居跡・造構以外の出土遺物

(2) 土壙(第11図・第2表)

土壙は9基がすべて地山面で確認されており、他の遺構との重複はない。平面形、規模などは第2表にまとめたとおりである。

出土遺物

第9土壙の堆積土第1層から土師器壺の体部破片が3点出土している。細片のため図示できないが、外面はロクロ調整、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

(3) 遺構以外の出土遺物(第10図6・8・9・11~15)

遺構以外には調査区の表土と旧表土内から縄文土器、弥生土器、土師器、石器などが出土している。縄文土器と弥生土器については器形のわかる破片は少ないので、文様表現を中心に述べることにする。

縄文土器：9点出土している。纖維の混入している破片は9点4点ある。6は縄文を地文とする体部破片であり、胎土中に纖維の混入が認められる。

弥生土器：3点出土している。8は体部下端から底部にかけての破片であり地文として縄文(LR)、内面にはミガキが施されている。なお、底面には木葉痕が認められる。9は体部破片であり、細かい縄文を地文として、鋭い沈線による区画文が描かれている。

土師器：壺の口縁部破片1点、体部破片11点、甕の体部破片10点出土している。壺については12点中9点が外面にロクロ調整、内面にミガキ・黒色処理が施されている。甕についてはすべて細片であり、外面一内面にミガキーミガキ、ロクローミガキ、ミガキーナデが認められる。

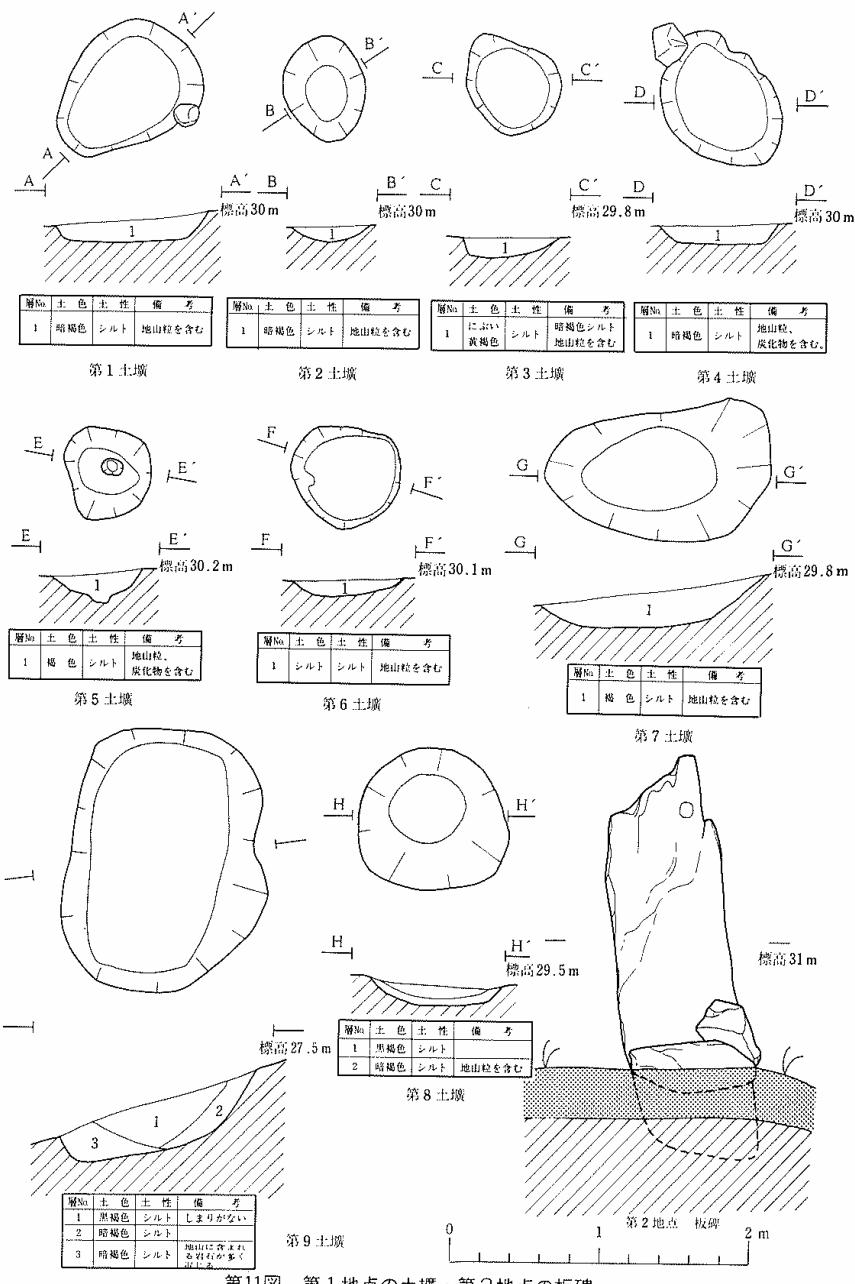
石器：石鏃3点、凹石2点出土している。すべて旧表土から出土している。

11と12は無茎石鏃であり、13は有茎石鏃であり、3点とも両面から入念な調整剥離が加えられている。13は両面に自然面を残している。欠損状況は11が先端部と基部の片側、12が側縁部と基部の片側にみられる。なお、石材は3点とも珪質頁岩である。

14と15は凹石である。14は片面に凹痕が1個あり、もう一方の面と側縁に打痕が認められる。15は片面に凹痕が2個あり、側縁の磨滅が著しい。石材は14が石英安山岩で15が砂岩である。

遺構名	地区	平面形	規模(m)	深さ(cm)	壁の立ち上がり	底面の形態	堆積土	出土遺物
第1土壙	B C - 105区	不整の楕円形	1 × 0.8	10~20	やや急角度	平 坦	1 層	なし
2	B C - 105区	楕円形	0.7×0.5	10	緩やか	丸 底 状	1 層	なし
3	B B - 105区	楕円形	0.7×0.6	13	南側は緩やかで 北側は急角度	やや平坦	1 层	なし
4	B C - 103区	楕円形	1 × 0.7	12	やや急角度	平 坦	1 層	なし
5	B D - 102区	不整の楕円形	径約 0.6	16~22	やや急角度	尖 底 状	1 層	なし
6	B D - 102区	円形	径約 0.7	10	緩やか	丸 底 状	1 層	なし
7	B D - 101区	不整の楕円形	1.5×0.8	14~36	緩やか	やや平坦	1 層	なし
8	B B - 101区	円形	径 1.0	20	緩やか	丸 底 状	2 層	なし
9	B B - 97区	楕円形	1.8×1.2	30	南側は緩やかで 北側は急角度	やや丸底状	3 層	土師器

第2表 土壙一覧表



第11図 第1地点の土壤・第2地点の板碑



添左源平園御加善普
□右一卷九學
圓奉待匱申處高峯都婆
我此名号一經其耳 依之為大小擅施等數ヶ年
一月明以底者大口如米三形也 一本供養仲施僧檀波羅
衆病悉除心身安樂 密勸德莫大善根也加之
現世後生安樂無疑也 乃至法界平等利益
乃至法界平等利益 敬白
天和三年九月廿二日 施主 敬白
作八七門門匾郎院

第12図 第2地点の板碑

第2地點（第7・12図）

板碑は北西方向に張り出した丘陵上の端部でられたもので、AT-14区にあたっている。

これは天和三年(1690)に建てられたもので、高さ約2.2m、幅約40cm、厚さ約10cmある。板碑は伝統的な記刻形式を整えており、記刻内容には民間信仰を深く表現しつつ密教を取り入れている。造立主旨及び内容を略読すると、逆修供養の為に名前のあがっている人々が数ヶ年にわたり庚申の時ごとに僧に施し、卒都婆(当板碑)を建てたことが刻まれている。

V. 考察

(1) 遺物について

出土遺物には、縄文土器、弥生土器、土師器、鉄鈴などがある。

[縄文土器]

体部破片が13点出土しており、すべて小破片である。表面が摩滅している破片が多い。13点中4点は、胎土に食物纖維を混入しているもで、縄文時代早期末～前期初頭ごろのものと思われる。その他の破片については、時期は不明である。

[弥生土器]

体部破片が4点出戸している。文様から時期の推定できるものは1点である。外面に細かい縄文を地文として、鋭い沈線による区画文が描かれている。この類例は仙台市南小泉遺跡の土器にあり、弥生時代中期(柵形囲式期)のものと思われる。

[土師器]

器種は壺と甕がある。壺(第10図1)は体部が外傾しているもので、器面調整は外面の体部から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ、内面に印毛目のちミガキ・黒色処理が施されている。器形的には平安時代(表杉の入式)のものに類似しているがロクロを使っているかどうかは不明なため、壺の所属時期は決定できない。しかし、この壺と共に出土した土師器甕(第10図3)はロクロを使用していることから、平安時代(表杉ノ入式)のものと考えられる。このことから、量的には少ないのでつきりしないが、壺についても平安時代に属する可能性はある。

[須恵器]

壺2点、甕3点が出土しているが、小破片であるため器形や器面調整は不明である。よって須恵器の年代についてはわからない。

[鉄鈴]

住居に共伴しており、鉄鈴とともにロクロ使用の土師器甕が出土している。この土師器は平

安時代のものであることから、鉄鈴も同時代に属するものと考えられる。

県内における鈴の出土例は数少ない。鉄鈴の出土例は蔵王町特長地遺跡(黒川:1980)、松山町亀井横穴古墳22号横穴(氏家:1980)があり、土鈴については色麻町上新田遺跡(小井川:1981)、金成町佐野遺跡(平沢・手塚:1980)などで出土している。この中で、亀井囲横穴古墳群22号横穴と上新田遺跡出土の鈴は、本遺跡出土の鉄鈴と同じ平安時代のものである。特長地遺跡出土の鈴は中世のものと思われる。

〔板碑〕

逆修供養の為の板碑であり、天和三年(1690年)の銘が入っている。

その他の遺物としては石鏸、凹石があり、縄文時代のものと思われる。

(2) 遺構について

〔堅穴住居跡〕

住居跡の年代については、住居に共伴する土師器甕がロクロを使用していることから、平安時代と考えられる。本遺跡周辺で平安時代の住居跡が調査されているのは、豊里町長根浦貝塚(平・志間・白鳥・太田:1974)、豊里町沼崎山遺跡(遊佐:1980)である。これらの住居跡の平面形は方形を基調とすることや規模などは本遺跡のものと類似している。しかし、長根浦貝塚は沼崎山遺跡ではカマドの燃焼部が粘土により構築されているのに対し、本遺跡のは角礫と粘土によって構築されていることが相違点である。

〔土壙〕

9基の土壙が検出されている。第9土壙の堆積土内から土師器壺の体部破片が出土しているが、他の土壙では検出が出土していない。土壙の所属時期は不明である。

VI. まとめ

今回の調査の成果をまとめると次のようになる。

1. 平形遺跡は大峰山から樹枝状にのびる丘陵先端している。
2. 発見された遺構は、平安時代に所属すると考えられる堅穴住居跡1軒と所属時期の不明の土壙9基である。
3. 遺物としては、縄文土器、石器(石鏸・凹石)、弥生土器、土師器、須恵器、鉄鈴(平安時代)、板碑(天和三年)などがある。
4. 遺跡の範囲は、今回調査した丘陵西斜面の平坦部のみならず、上方の緩斜面まで広がる可能性がある。

引用・参考文献

- 氏家和典(1957)：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会
- 氏家和典(1980)：「原始古代の松山」『松山町史』
- 黒川利司(1980)：「持長地遺跡」宮城県文化財調査報告書第71集
- 小井川和夫(1981)：「上新田遺跡」宮城県文化財調査報告書第78集
- 平重道・志間泰治・白鳥良一・太田昭夫(1974)：「豊里町長根浦貝塚発掘調査報告」『豊里町史・下』
- 津山町教育委員会(1979)：「郷土誌資料(第二集) 復刊柳津町誌資料」
- 平沢英二郎・手塚均(1980)：「佐野遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』II 宮城県文化財調査報告書 第63集
- 遊佐五郎(1980)：「沼崎山遺跡」豊里町文化財調査報告書第2集
- 宮城県教育委員会(1979)：「宮城県遺跡地名表」宮城県文化財調査報告書第46集(修正版)
- 〃(1979)：「宮城県遺跡地図」宮城県文化財調査報告書第47集(修正版)
- 宮城県多賀城調査研究所(1975・76)：「桃生城跡 I・II 一昭和49・50年度発掘調査報告」『多賀城関連遺跡発掘調査報告書』1・2冊

*図示遺物は除く

種別	器種	部位	器面調整		縫穴住居跡							小計			
			外 面	内 面	埋1	埋2	埋3	埋4	埋5	埋6	床面	貯藏穴			
土師器	環	口縁部	口クロ	ミガキ					1						1
			口クロ	ミガキ(黒)	2										2
			不明	ミガキ(黒)				1							1
			不明	ミガキ				1							1
		体部	ミガキ(黒)	ミガキ(黒)	7										7
			不明	ミガキ(黒)											1
			不明	ミガキ				1	1						2
			不明	不 明							1				1
		底部	同蛇ヘラケズリ	ミガキ(黒)	1										1
			回転ヘラ切り					1							1
			ミガキ	ミガキ			1								1
		縫	口クロ	ナデ		1									1
			口クロ	不 明					1						1
			ケズリ	ミガキ			1								1
			口クロ	ナデ		1									1
			ケズリ	不 明									2		2
			口クロ	不 明	1					1					1
			不明	ミガキ				3	2						3
			不明	不 明	2								1		6
須恵器	環	口縁部	口クロ	クロ	1										1
		体部	口クロ	クロ	1										1
	縫	体部	ケズリ	クロ					1						1
織文土器	鉢形土器	口縁部	(地文)	(内面)					1		1				2
			L	R	ミガキ					1					1
			刺突文	L R	不 明		1								1
		底部	不明	縄文	ミガキ		1								1
			不明	縄文	ミガキ										1
			小計		14	3	2	10	6	3	1	3			42

種別	器種	部位	器面調整		土APBBBCARBCARBBBASBBARBCBCBB														小計		
			外 面	内 面	壤9	AP97	AR99	BB99	BC100	AR101	BC101	AR102	BB102	BB103	BA103	AS104	BB104	AR105	BC105	BC106	BB107
土師器	環	口縁部	口クロ	ミガキ(黒)												1					1
			口クロ	ミガキ(黒)	3	3				1	1										8
			ミガキ	ミガキ(黒)			1														1
			不明	不 明							2			1	1						4
		体部	ミガキ	ミガキ						1	1				1						4
			ミガキ	ナデ		1															1
			口クロ	ミガキ			1														1
			不明	縄文	ミガキ													2		2	
		底部	不明	縄文	不 明										1	1					2
			L	R	ミガキ				1		1										3
			不明	縄文	ミガキ			1				1									2
	織文土器	不明	不明	縄文	ミガキ									1							1
弥生土器	不明	体部	不明	縄文	ミガキ										1						1
			小計		3	3	1	1	1	2	1	3	2	3	1	1	2	2	1	2	30

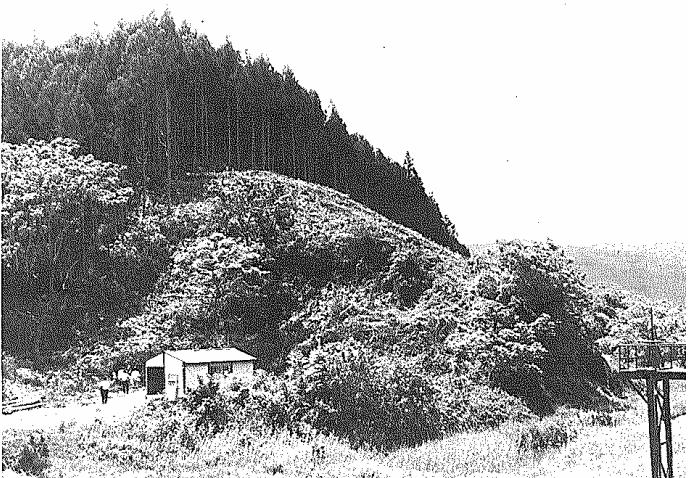
第3表 土器破片集計表

図 版

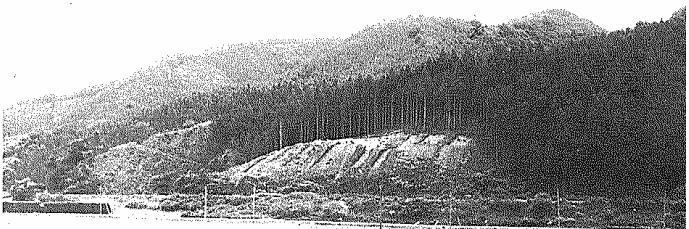
発掘前の遠景
(西側から)



近 景
(北側から)

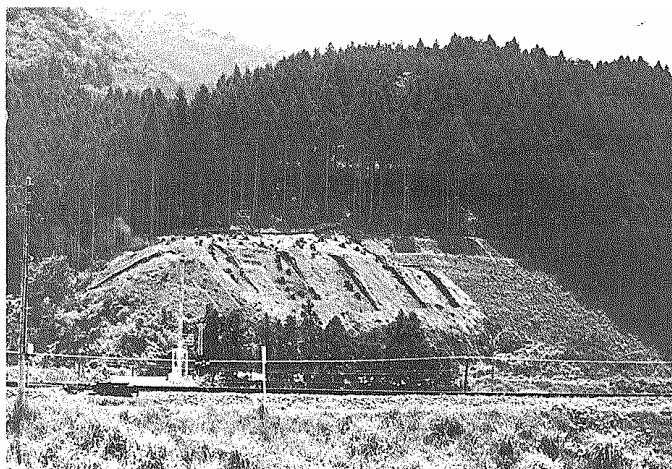


発掘の遠景
(南西側から)



図版 1
平形遺跡第1地点





発掘中の遠景
(北西側から)



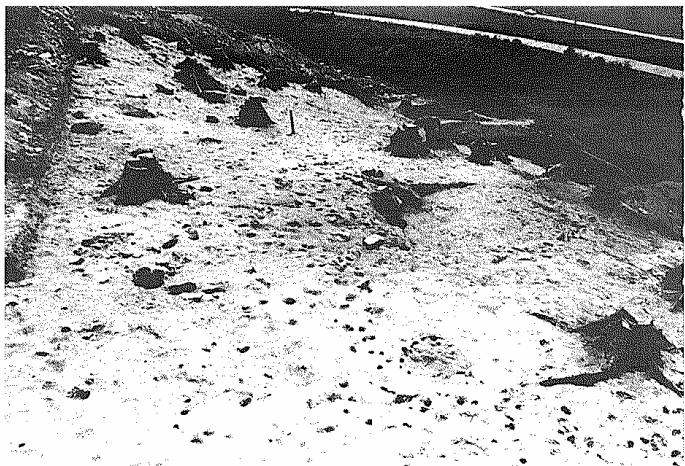
発掘中の遠景
(北西側から)



近 景
(南西側から)

図版 2
平形遺跡第1地点

平 坦 部
(北側から)



平 坦 部
(南側から)



豎穴住居跡
(北側から)

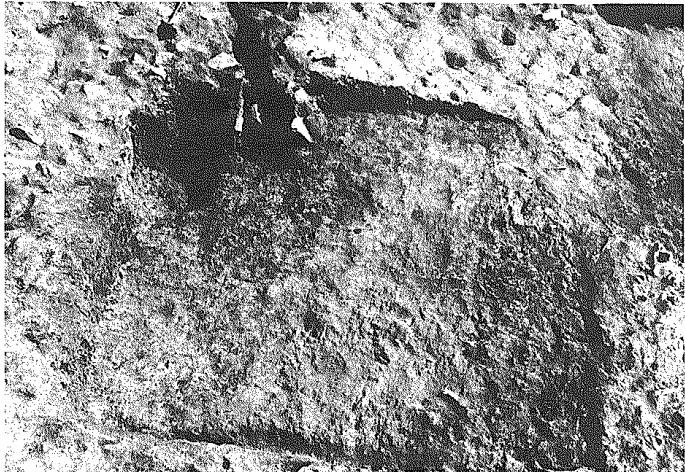
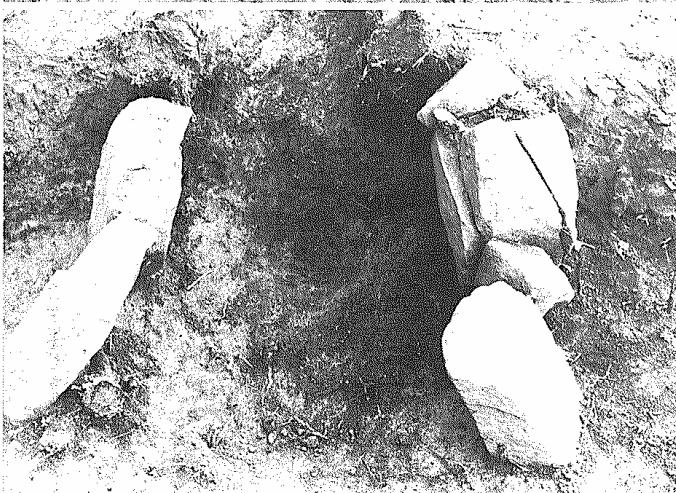


図 版 3
平形遺跡第1地点



豊穴住居跡
カマド



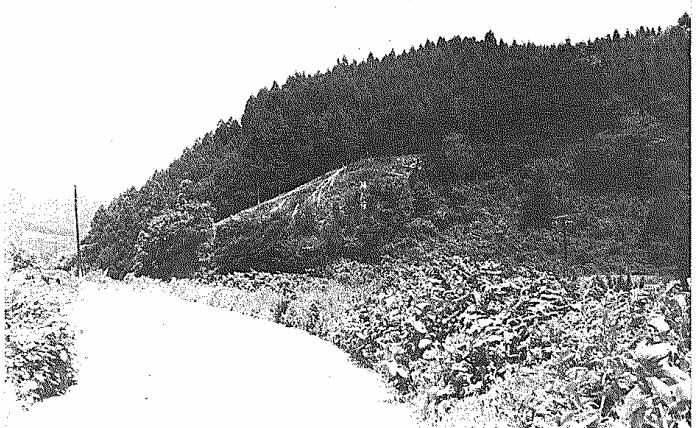
豊穴住居跡
燃焼部側壁の
石組の状況



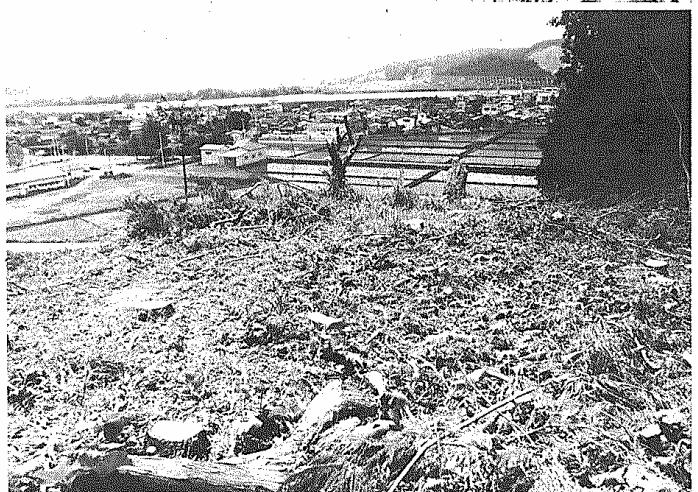
第9土壙
(北東側から)

図版4
平形遺跡第1地点

発掘前の遠景
(南側から)



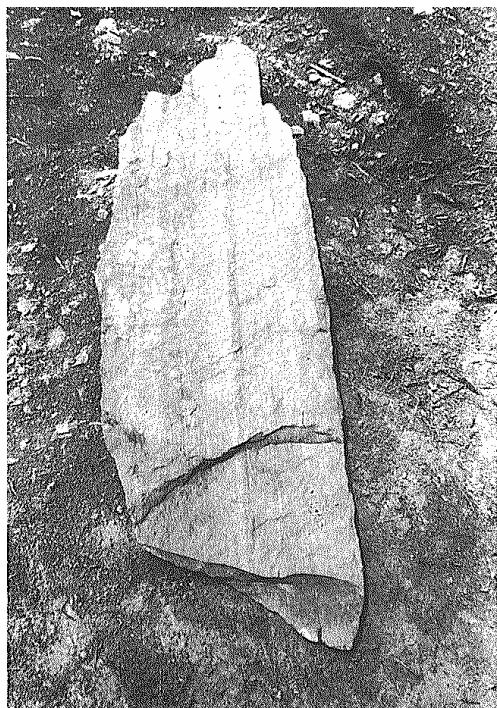
発掘前の平坦部
(東側から)



板 碑
(西側から)



図版 5
平形遺跡第2地点

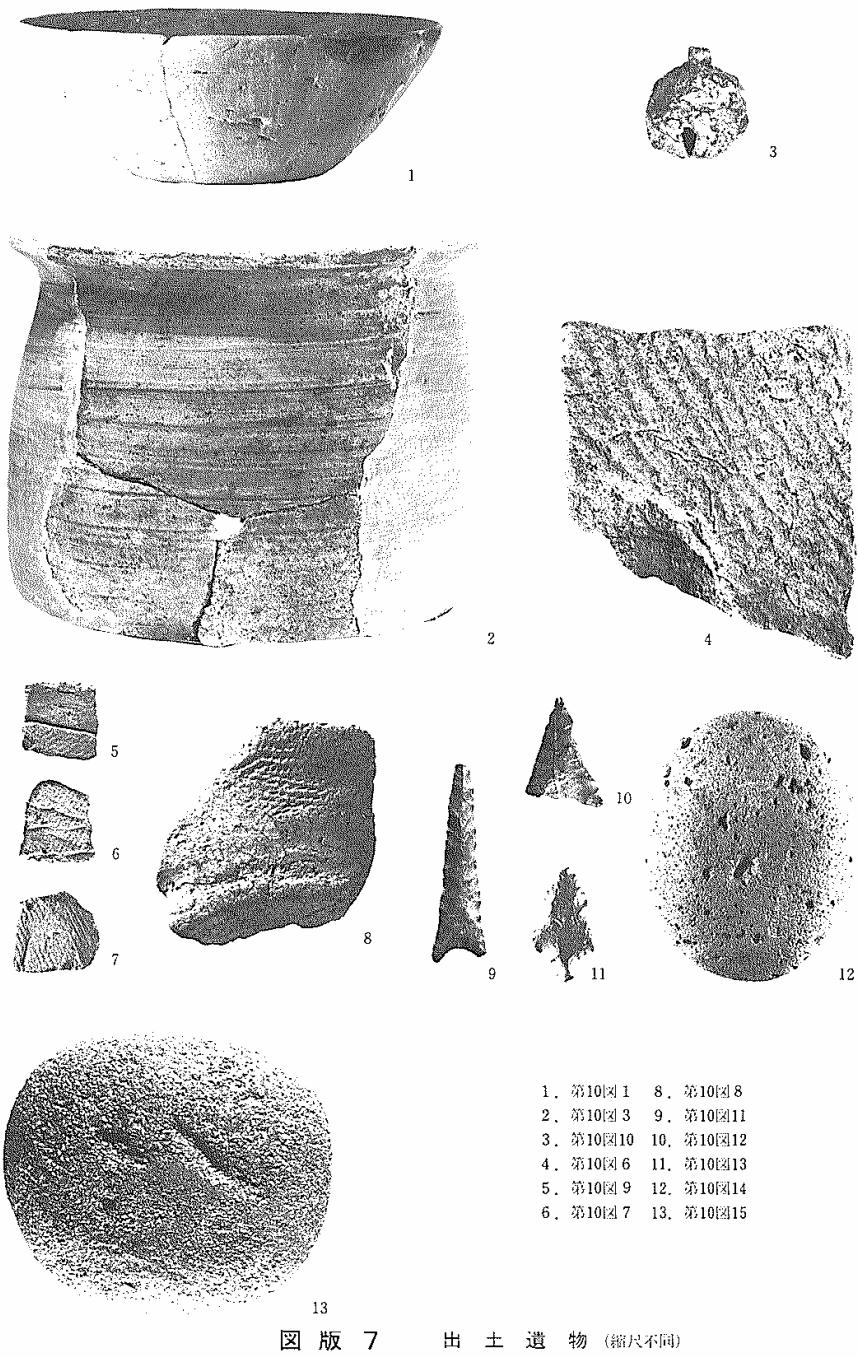


第2地点の板碑



発掘調査参加者

図版 6
平形遺跡



図版 7 出土遺物 (縮尺不同)

- 1. 第10図 1 8. 第10図 8
- 2. 第10図 3 9. 第10図 11
- 3. 第10図 10 10. 第10図 12
- 4. 第10図 6 11. 第10図 13
- 5. 第10図 9 12. 第10図 14
- 6. 第10図 7 13. 第10図 15

3. 松ノ木沢田遺跡

4. 向野 A 遺跡

調査要項

松ノ木沢田遺跡

遺跡番号：F U (宮城県遺跡地名登載番号：:44027)

遺跡所在地：栗原郡高清水町松ノ木沢田

調査面積：約13,000m²(発掘面積約8,500m²)

調査期間：昭和54年10月11日～11月6日

調査員：宮城県教育庁文化財保護課

高橋多吉、佐々木安彦、黒川利司、小川淳一

向野 A 遺跡

遺跡番号：G C (宮城県遺跡地名表登載番号：44029)

遺跡所在地：栗原郡高清水町向野

調査面積：約13,000m²(発掘面積約9,500m²)

調査期間：昭和54年10月30日～11月30日

調査員：松ノ木沢田遺跡に同じ

松ノ木沢田遺跡および向野A遺跡の発掘調査に協力された地元の方々は以下のとおりである。

(順不同、敬称略)

武川悦二、今井長人、今野賢治、鈴木四郎、加藤藏次、梅崎喜吾、操文吾、
操臣六、佐藤栄、佐藤定男、佐々木輝雄、門田信子、森屋キヨノ、千葉とりみ、
山崎しも子、佐々木たみよ、佐々木定子、高橋静子、操しづえ、高橋さだよ、
加藤とよき、鈴木はしめ、千葉さつき、今井喜美子、長浦まつ代、佐藤まき子

目 次

. 調査に至る経過	77
. 遺跡の位置と環境	77
. 松ノ木沢田遺跡	82
1. 調査の方法と経過	82
2. 調査の成果	87
(1) 基本層位	87
(2) 発見された遺構と遺物	88
a. 堅穴住居跡	88
b. 土 壙	90
c. 大 溝	90
d. 遺構以外の出土遺物	92
3. 考 察	92
(1) 遺物について	92
(2) 遺構について	92
4. ま と め	93
. 向野A遺跡	
1. 調査の方法と経過	94
2. 調査の成果	94
(1) 基本層位	94
(2) 発見された遺構と遺物	94
a. 溝	94
b. 土 壙	100
c. 井戸跡	102
d. 焼土遺跡	102
e. 墓 壙	102
f. 遺構以外の出土遺物	102
3. 考 察	104
(1) 遺物について	104
(2) 遺構について	104
4. ま と め	105
引用・参考文献	106

I. 調査に至る経過(第1図)

松ノ木沢田及び向野A遺跡は、宮城県栗原郡高清水町内にあり、高清水バイパスの建設と係り合いをもった。

高清水バイパスは、高清水町字中の茎及び松ノ木沢田から同町字小山田西欠屋敷に至る4.1kmの路線で、建設省東北地方建設局仙台工事事務所が、国道4号線の交通渋滞解消を目的に建設を計画したものである。計画路線は昭和46年1月に決定し、昭和52年度に用地買収が完了した。

宮城県教育委員会では、東北地建の依頼によって計画路線に係る遺跡の分布調査を実施し、その取り扱いで再三の協議と調整を行ったが、三遺跡がどうしても建設工事と係り合うことが判明した。三遺跡とは南から北へ順に松ノ木沢田遺跡、向野A遺跡、五輪C遺跡で、事業施行前に発掘調査が必要となった。

こうして、工事の工程で五輪C遺跡の調査を昭和53年度に実施したのに引き続き、昭和54年の10月から11月にわたって、松ノ木沢田遺跡・向野A遺跡の発掘調査を宮城県教育庁文化財保護課が担当して実施した。

II. 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と自然環境

松ノ木沢田遺跡は栗原郡高清水町松ノ木沢田に所在し、高清水町役場から南南西約1.8kmの地点に位置している。また向野A遺跡は高清水町向野に所在し、松ノ木沢田遺跡の北約300mの地点にある。

高清水町は栗原郡の最南端にあり、奥羽山脈から派生して南東方向にのびる築館丘陵が暖やかな起状となった末端部に位置している。高清水町を地形的にみると、標高90m以下の丘陵地と沖積低地とに大別される。丘陵地は迫川の支流である小山田川、透川によって北部、西部、南部の三丘陵地帯に分けられる。小山田川、透川、善光寺川などは、これらの丘陵を開析して東流しており、町の東には低地が広がっている。

松ノ木沢田遺跡は南部の丘陵から高清水町台町のある北東方へ舌状にのびる小丘陵北側暖斜面に立地しており、標高は35~45mである。なお、本遺跡の東部は沢が北東から南西にかけて入り込んでおり、現状は水田と畑である。

向野A遺跡は松ノ木沢田遺跡と同様に高清水町南部の丘陵に立地し、標高は23~31mである。本遺跡は松ノ木沢田遺跡と谷をはさんだ北側に位置し、約300m離れている。なお、今回の

調査区は向野A遺跡の西縁辺部にあたっており、沢か北から南に向かって入り込む暖斜面になっている。現状は水田である。

2.周辺の遺跡(第2図)

松ノ木沢田遺跡、向野A遺跡の所在する高清水町に限って、歴史的環境を概観してみたい。

高清水町内で発見されている遺跡の中で最も古いものは、縄文時代早期の大寺遺跡である。この遺跡は昭和29年に調査され、沈線文・貝殻腹線文をもつ尖底土器が出土している。これは、標式となっており、「大寺式」が設定されている。縄文時代の遺跡は他に、西手取遺跡(早~前・晚期)、萩田遺跡(晚期)などがある。

弥生時代の遺跡は数が少なく、萩田遺跡(中期)や東館遺跡がある。萩田遺跡からは蛤刃石斧が出土している。

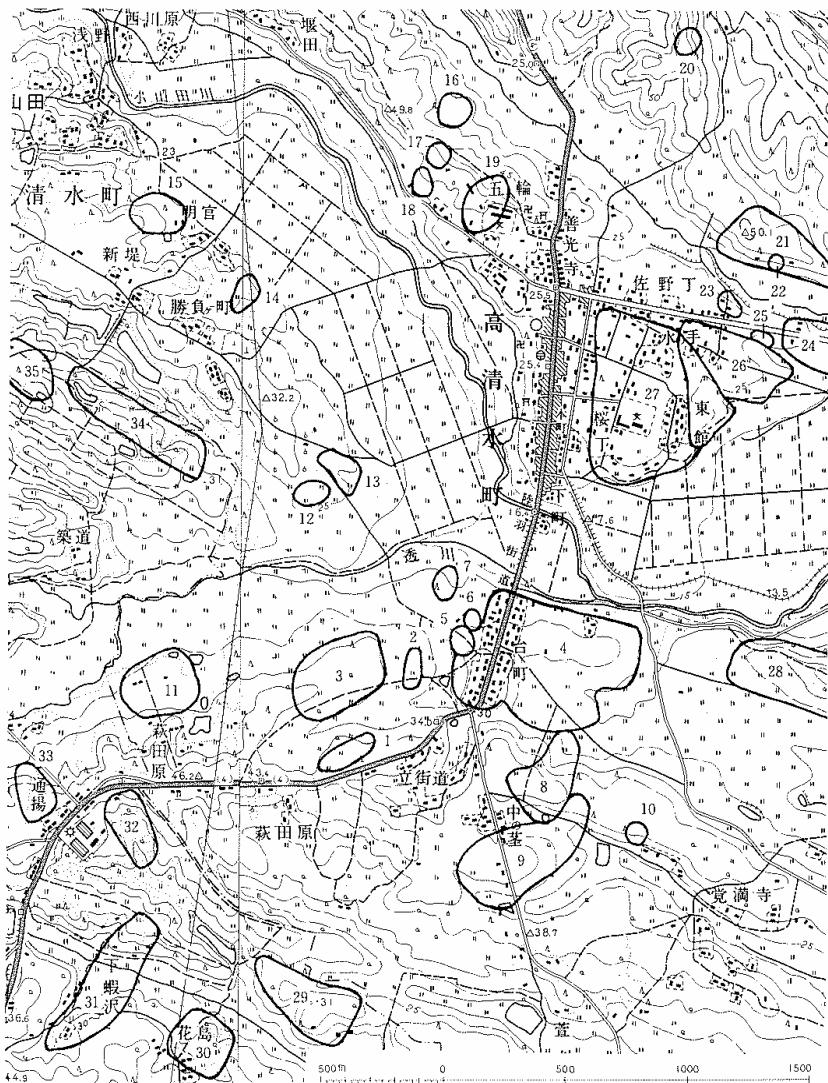
古墳時代の遺跡としては、東館遺跡、大寺遺跡、経ヶ崎遺跡、堂の池遺跡などがある。東館遺跡は昭和51年の発掘調査により遺跡の内容が明らかになり、古墳時代前期の方形周溝墓1基と中期の竪穴住居跡が1軒検出された。また他の遺跡は包含地である。古墳については、高清水町内では発見されておらず、周辺では古川市に北山団古墳群や小野横穴古墳群などがある。

奈良・平安時代になると、遺跡数はさらに増加する。発掘調査が実施された遺跡としては、觀音沢遺跡、西手取、手取遺跡、下折木遺跡、下田遺跡などがあり、竪穴住居跡や土壙などが発見され集落跡と考えられている。なお、遺跡の立地をみると、ほとんどが丘陵に立地しているが、下田遺跡は扇状地性低地に立地し注目されるところである。

中世の遺跡としては、新庄館跡、高清水城館、陣館館跡などの城館跡や觀音沢遺跡がある。觀音沢遺跡は集落跡と考えられ、発掘調査の結果、土壙群・掘立柱建物跡・井戸跡などの遺構や中世陶器・青磁・曲物・漆器腕などの遺物が発見されている。また、宮ノ脇遺跡では塚が5基発見されており、墳墓と考えられている。



第1図 遺跡周辺の地形



番号	道跡名	9	中ノ差道跡	18	五輪B道跡	27	清水城跡
1	松ノ木沢田道跡	10	寛満寺道跡	19	五輪道跡(A)	28	外沢田道跡
2	向野A道跡	11	萩田道跡	20	折木山寺道跡	29	大窪道跡
3	吉町西道跡	12	上経ヶ崎道跡	21	新庄館道跡	30	花島道跡
4	越音沢道跡	13	経ヶ崎道跡	22	下折木道跡	31	下蝦沢道跡
5	松ノ木沢田C道跡	14	勝負ヶ町道跡	23	下佐野道跡	32	一ノ坪道跡
6	向野B道跡	15	明宮道跡	24	大寺道跡	33	下沢田道跡
7	透川道跡	16	袖山道跡	25	堂の池道跡	34	生瀬町道跡
8	仰返り地蔵前道跡	17	五輪C道跡	26	東館道跡	35	外沢窓跡

第2図 周辺の遺跡
(国土地理院発行1/25,000『高清水』を複製)

III. 松ノ木沢田遺跡

1. 調査の方法と経過(第3・4図)

本遺跡は、従来松ノ木沢A・B旧遺跡と分けて考えていたが、その立地からみると同一丘陵上にあり、両者を一つの遺跡としてまとめて松ノ木沢田遺跡として調査に入った。

調査は高清水バイパスにかかる約13,000m²を対象に昭和54年10月11日 начиная с, 約8,500m²を発掘した。

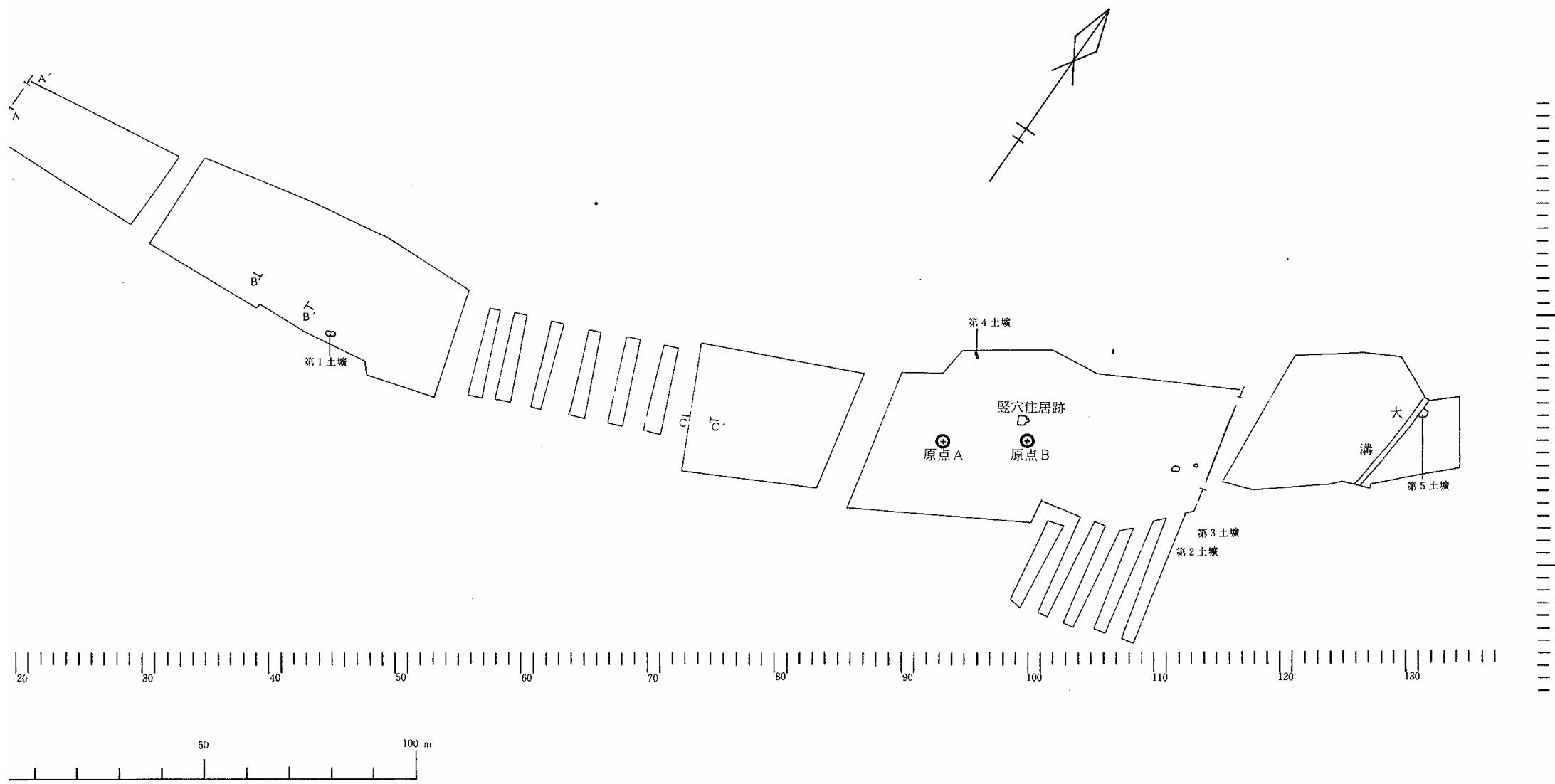
調査区は、高清水バイパス予定路線敷の中心杭No.24(原点A)とNo.25(原点B)を基準として、グリッドを組んだ。原点AとBを結ぶ直線を東西の基準線(N-55° - E)とし、それに直交する南北の基準線を設け、3m方眼のグリッドを設定した。東西方向については、原点Bの西側を99区、東側を100区とアラビア数字で、南北方向については、原点Bの南側をB J区、北側をB K区としてアルファベットで表わし、この両者を組み合わせてグリッド名を付した。

調査区内の地山面において、発見された遺構は、竪穴住居跡1軒、大溝1条、土壙5基である。その後、これらの遺構の精査を行なった。検出された遺構の平面図・断面図、調査区の基本層位については20分の1で、遺構配図は200分の1で作成した。

調査終了は11月6日であった。



第3図 周辺の地形



第4図 グリッド・遺構配置図

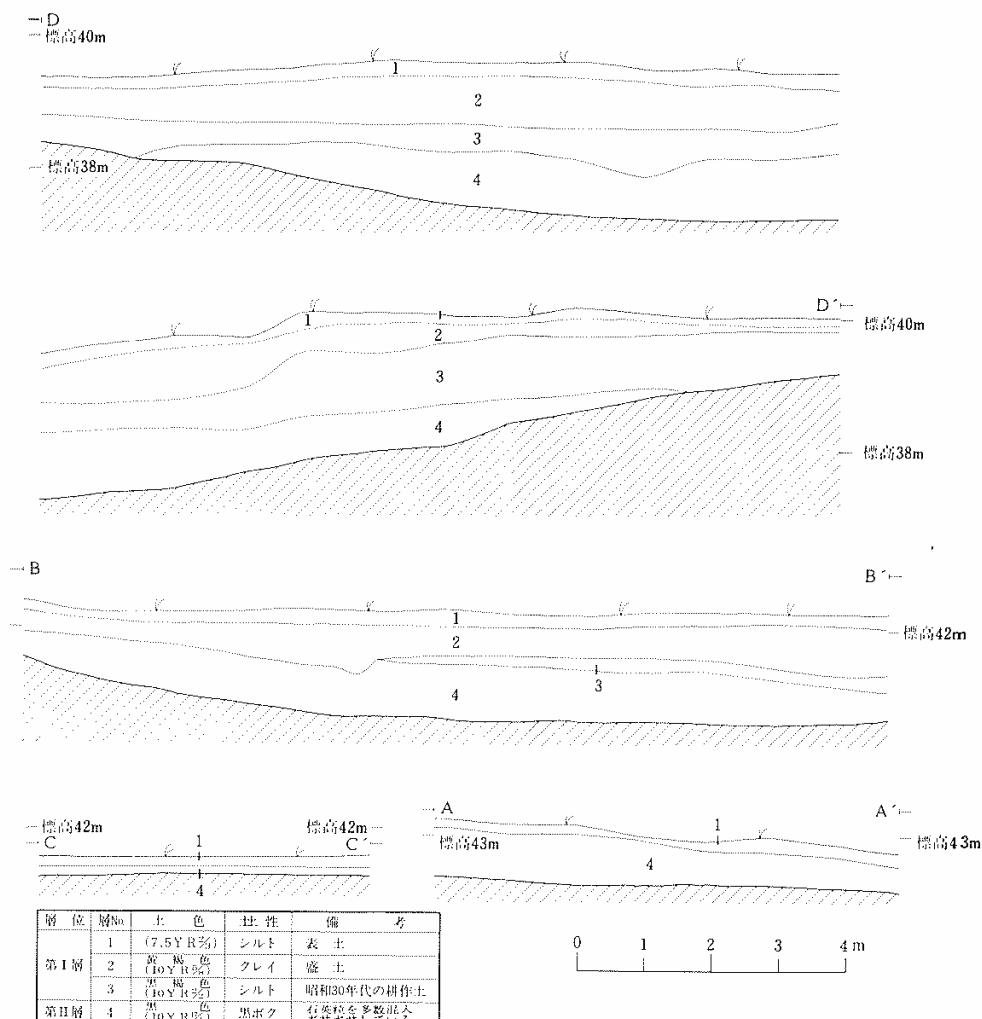
2. 調査の成果

(1) 基本層位(第5図)

基本的に2枚の層が確認された。

第Ⅰ層：表土であり、識別すると、1層：耕作土、2層：盛土、3層：旧耕作土に分けられる。特に、中央西半では水田耕作による削平が著しく、20~30cmの地山面に達する。

第Ⅱ層：「黒ボク」で、火山灰の層である。石英粒を多数混入し、ボサボサした土性である。調査区全体に認められ、特に沢の部分に厚く堆積している。



第5図 基本層位

(2) 発見された遺構と遺物

a . 壁穴住居跡(第6図)

確認面：B L-99区付近の地山面で確認した。

平面形、規模：平面形は長方形で、南北が約4.5m、東西が約3.5mである。住居内面積は約15.8m²である。

壁穴層位：基本的に6層認められた。第1層は中央に堆積している。第2層は北西部から中央部にかけて堆積している。第3層は全域に厚く堆積している。第4層は床面全体を覇つており、炭化物、焼土粒、地山粒が混入している。第5層は壁沿いに堆積しており、第4層と同様に炭化物、焼土粒、地山粒が混入している。第6層は同溝は堆積しており、炭化物と地山村が多量に混入している。

壁：4壁が残存しており、床面から急角度で立ち上がっている。残存壁高は20～30cmで保存は4壁とも良好である。

床面：住居中央部は地山、周辺部は掘り方埋土を床としている。全体的にはほぼ平坦で、固くしまっている。

柱穴：ピットが1個検出されているが、柱痕跡は認められない。

周溝：カマドの部分を除いて、壁沿いにめぐっている。底面幅は4～20cm、床面からの深さは1～13cmであり、北側は深く、南側は浅い。

カマド：東壁の中央部からやや南寄りに設置されており、燃焼部と煙道部から成る。燃焼部は地山を削り込んで構築しており、粘土構築による側壁などはみられない。燃焼部の規模は底面で奥行き約0.7m、幅約0.5mである。燃焼部底面は中央部がやや盛り上がっており、焼土・炭・灰が堆積している。奥壁はやや急角度で立ち上がり、煙道へ移行している。煙出しピットは認められない。煙道部は底面幅が約15cmで、残存長は約0.5mである。軸方向はN-60°-Eである。

貯蔵穴状ピット：検されない。

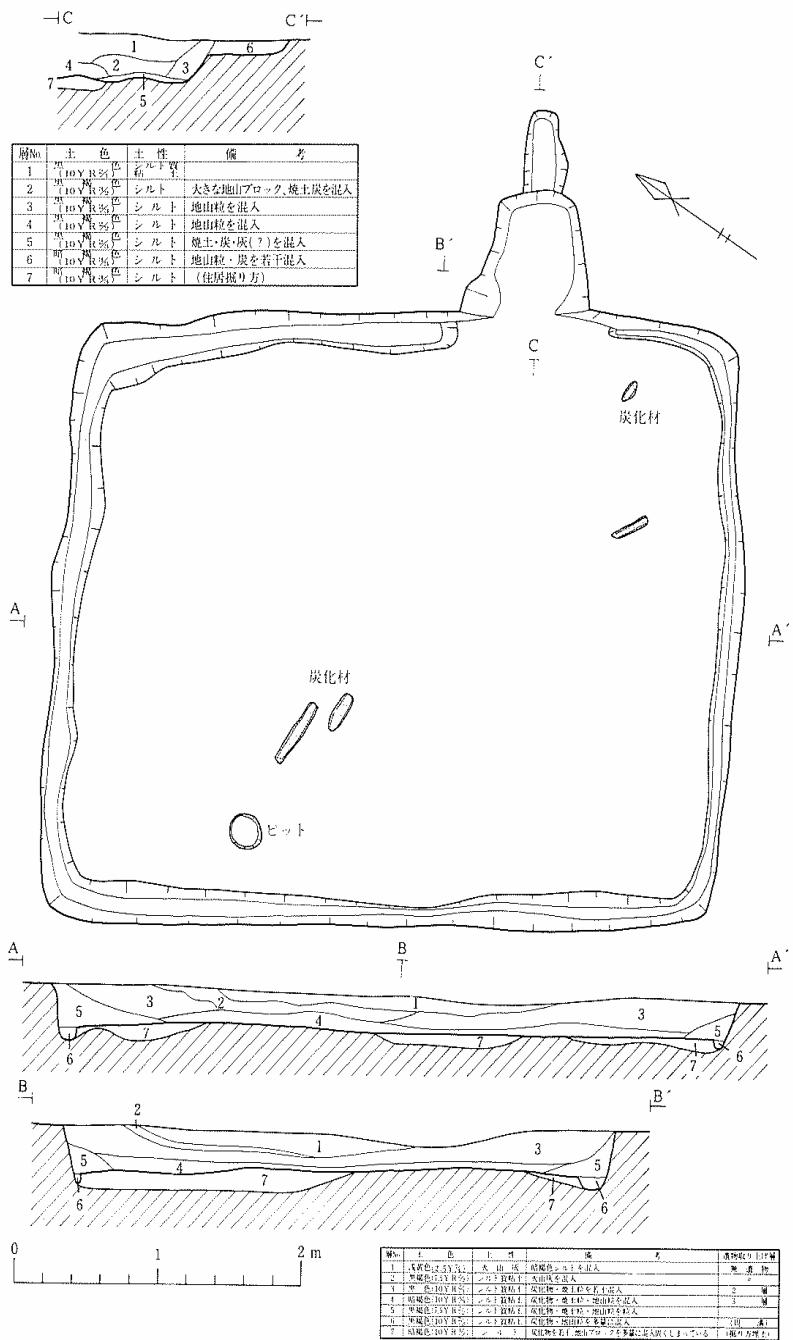
[住居に伴う遺物]

須恵器

壺(第7図1)：床面から出土している。器形は体部から口縁部にかけてやや外反ぎみであり、底部と体部の境界は、丸味をおび、はっきりしない。底部の切り離しは体部下端から床部全面において回転ヘラケズリによる再調整のため不明である。

[堆積土出土遺物]

土師器甕の体部破片が2点出土しており、ロクロ使用かどうか不明である。小破片であり磨滅が著しいため、図示はできない。



第6図 壁穴住跡

b. 土 壤(第8図・第1表)

土壌は5基すべてが地山面で確認されており、出土遺物は全くない。平面形、規模などは第1表にまとめたとおりである。

第1表 土壌一覧表

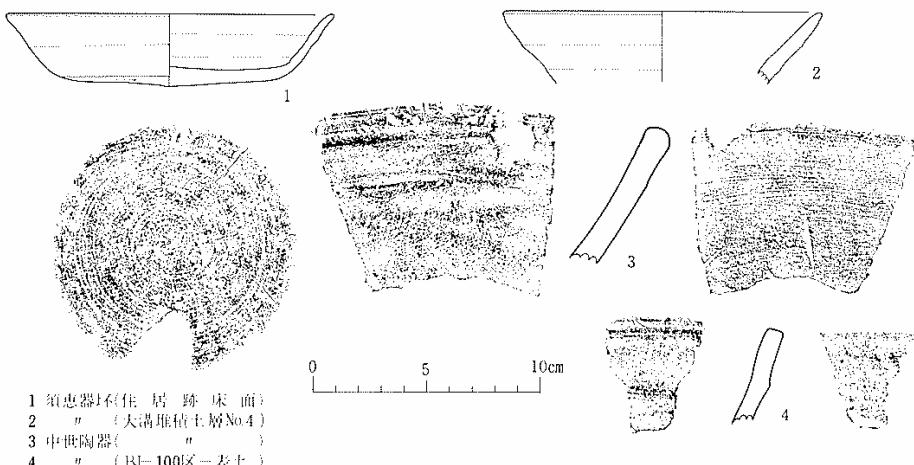
遺構名	地 区	重 模	平 面 形	規 模 (cm)	深さ(cm)	壁立ち上がり	底面の形態	堆積土
第1土壤	B S - 44・45区	な し	不整の楕円形	1.9 × 0.9	48	緩 や か	平坦 + 丸底状	1層
第2土壤	B H - 111区	な し	不整の楕円形	2.0 × 1.6	50	緩 や か	丸 底 状	5層
第3土壤	B I - 113区	な し	不整の楕円形	1.0 × 0.6	40	やや急角度	やや平坦	1層
第4土壤	B Q・B R - 95・96区	な し	長 方 形	3.0 × 0.5	44	急 角 度	平 坦	1層
第5土壤	B L・B M - 131区	大溝と重複新旧関係不明	楕 圆 形	2.0 × 1.5	40	急 角 度	平 坦	1層

c. 大 溝(第8図)

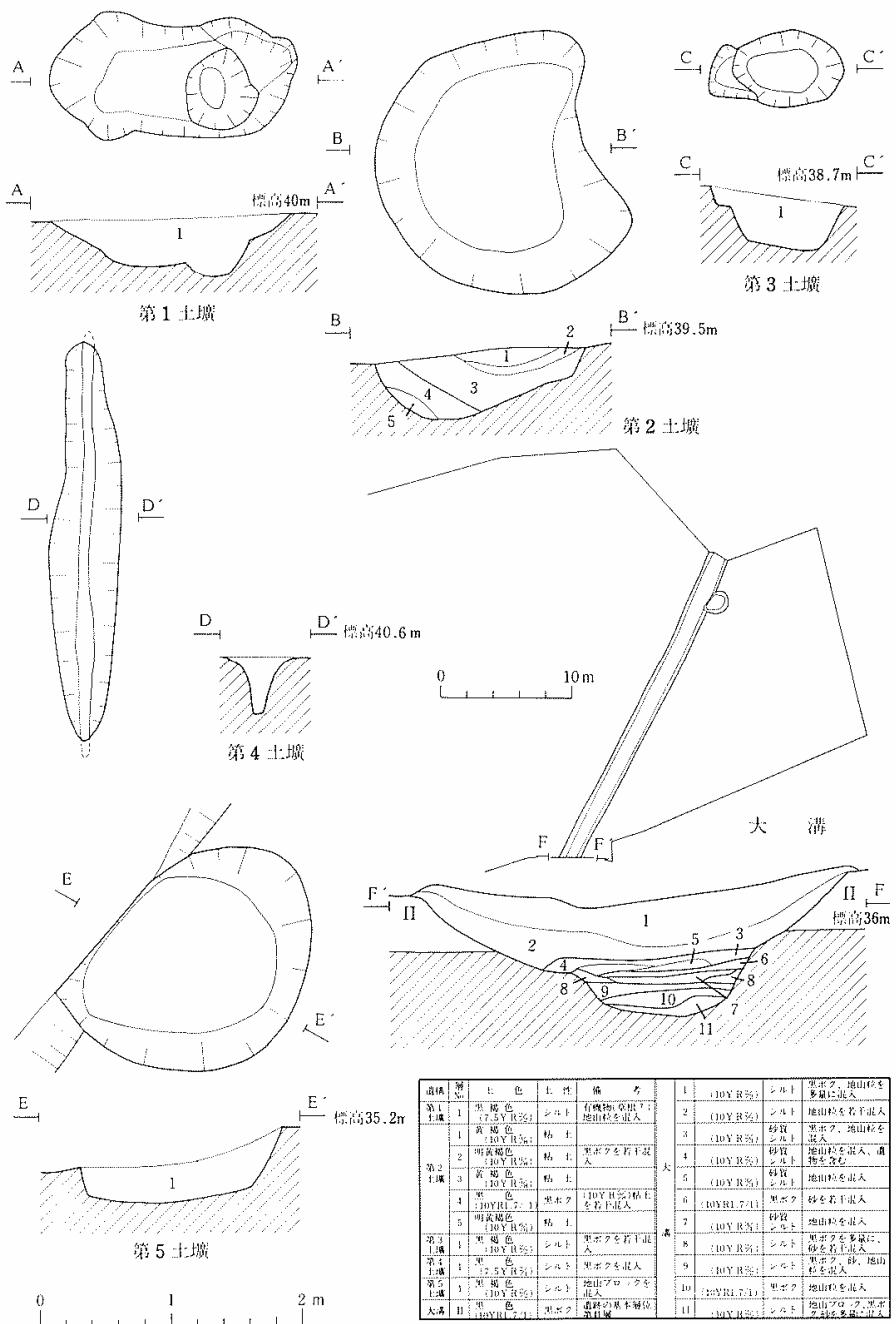
B G～B N-126～131区の第II層上面で確認された。第5土壤と重複しているが、新旧関係は不明である。溝はほぼ南北に走っており、その規模は、上幅約1.6m、底幅約1m遺構確認面からの深さ約1mである。堆積土は基本的に8層に分かれ。層No. 4から縄文土器、土師器、須恵器、中世陶器が出土している。縄文土器、土師器については、小破片で磨滅が著しく、図示できなかったため第2表に一括している。

須恵器坏：第7図2は口緑部から体部にかけての破片であり、内外面ともロクロ調整痕が認められる。

中世陶器は、口緑部破片が1点(第7図3)出土しており、器種は擂鉢と思われる。外面の口緑部近くと内面は横ナデが加えられている。色調は灰色で、胎土は砂粒をわずかに含み、硬く焼きしまっている。



第7図 出土遺物



第8図 土壌・大溝

d . 遺構以外の出土遺物

遺構以外には、B J -96、100区の表土から、須恵器・中世陶器の破片が計3点出土している。須恵器は甕の体部が2点出土しており、外面一内面の器面調整は、平行タタキ目ーナデ、不明ーナデである。

中世陶器は口縁部破片が1点(第7図4)出土しており、器種は擂鉢と思われる。口縁部は平坦であり、内外面とも横ナデが加えられている。色調はにぶい赤褐色で、硬く焼きしまっている。

3. 考 察

(1) 遺物について

出土遺物には、縄文土器、土師器、須恵器、中世陶器がある。

[縄文土器]

縄文土器は大溝の堆積土から2点出土している。2点とも体部破片であるが、小破片で磨滅が著しいため、時期を限定することはできない。

[土師器]

土師器は大溝の堆積土と竪穴住居跡の堆積土から出土している。甕の頸部、体部破片であるが、縄文土器と同様に小破片で摩滅が著しいため、時期は不明である。

[須 恵 器]

須恵器は竪穴住居跡床面、大溝の堆積土、グリッド内の堆積土から4点出土している。器種は壺と甕である。

壺：2点ある。大溝から出土した1点は口縁部破片であり、竪穴住居跡出土のものはほぼ完形に近い。後者は体部から口縁部にかけてやや外反気味の器形であり、底部の切り離し技法はヘラ切りと思われるが再調整(回転ヘラケズリ)のため明らかでない。この土器は、岡田・桑原氏(岡田・桑原：1974)によると、1-a類に分類されると思われ8世紀初頭から前半にかけて製作されてたと製作されたと考えられる。このような須恵器壺は県内では五輪C遺跡(小野寺：1979)や藤屋敷遺跡(加藤・佐藤：1980)などに類例がある。

甕：2点ともグリッド内出土の体部破片である。このうち1点は外面に平行タタキ目、内面にナデが施されている。

[中世陶器]

中世陶器は大溝の堆積土とグリッド内の堆積から、それぞれ1点ずつ出土している。2点とも擂鉢の口縁部破片である。

(2) 遺構について

[竪穴住居跡]

床面から出土した須恵器坏(体部下端から底部全面にかけ回転ヘラケズリ調整が施されている)からみて、奈良時代の住居跡と考えられる。

[土 壤]

5基の土壙が検出されている。形態的には不整の楕円形(1~3・5土壙)と長方形(4土壙)に分けられるが、出土遺物はなく年代を決定することはできない。なお、2土壙については、黒ボクと地山ブロックを含む層が逆転していることからみて、風倒木痕の可能性がある。このような土壙は豊里町沼崎山遺跡他でも検出されている。

なお、4土壙のように平面形が長方形で特異な形態の壙については、向野A遺跡、宇南遺跡、神奈川県横浜霧ヶ丘遺跡(霧ヶ丘遺跡調査団:1973)や岩手県都南村湯沢遺跡(岩手県埋蔵文化センター:1978)などでも発見されている。向野A遺跡では出土遺物もなく、時期も不明であるが、宇南遺跡では遺構底面近くから縄文時代晚期の注口土器が出土しており、その時期に属すると考えられている。霧ヶ丘遺跡では、このような遺構は落し穴と考えており、伴出した土器や炉穴との重複関係等から縄文時代早期後半との時期のものとされている。湯沢遺跡の土壙は平面形が本遺跡4土壙に類似しているが、深さは1mを越すものがほとんどという相違点もある。湯沢遺跡では住居跡などの遺構との重複関係から、縄文時代中期末~後期初頭に属すると考えられるものが発見されている。

4.まとめ

今回の調査の成果をまとめると次のようになる。

1. 松ノ木沢田遺跡は、奥羽山脈から派生する築館丘陵の末端部、高清水町の南にある標高35~45mの丘陵の暖斜面に立地している。
2. 発見された遺物には、縄文土器、土師器、須恵器、中世陶器がある。竪穴住居跡出土の須恵器坏以外はすべて破片資料であり、その数はわずか20点ほどである。
3. 遺構については、竪穴住居跡1軒、土壙5期、大溝1条が発見されている。竪穴住居跡は奈良時代に所属すると考えられるが、その他の遺構については時期不明である。

第2表 土器破片集計表

種別	器種	部位	器 外 面	内 面	調 理	燃 面	住 居 跡 理 2	大 溝 理 4	B J - 96区--1層	B J - 100区--1層	小 計
土 師 器	甕	体 部	不 明	ナ デ			1				1
			不 明	ミ ガ キ			5				5
		部 部	不 明	刻 毛 目	1						1
			不 明	不 明	1	5					6
須 恵 器	甕	体 部	平行 タ キ 目	ナ デ			1				1
			不 明	ナ デ					1		1
縄 文 土 器	钵 形 土 器	体 部	文様表現技法・地文 刺突文				1				1
			不 明	縄 文	不 明	明		1			1
小 計				2	13		1		1		17

IV. 向野A遺跡

1. 調査の方法と経過(第9図)

調査は高清水バイパスにかかる約13,000m²を対象に、松ノ木沢田遺跡の調査の全容がほぼ明らかになった昭和54年10月30日に開始し、約9,500m²を発掘した。

調査区は、高清水バイパス予定路線敷の中心杭No. 45(原点A)とNo. 46(原点B)を基準として、グリットを組んだ。原点AとBを結ぶ直線を南北の基準線(N-9° - E)とし、それに直交する東西の基準線を設け、3m方眼のグリットを設定した。南北方向については、原点Bの南側を100区、北側を101区としアラビア数で、東西方向については、原点Bの東側をJ区、西側をK区としアルファベットで表わし、この両者を組み合わせてグリッド名を付した。

発掘調査は、松ノ木沢田遺跡の調査に連続して、表土を除去し、遺構の検出に努めた。その結果、発見された遺構は、溝20数条、土壙7基、井戸跡1基、焼土遺構1基、墓壙1基である。

検出された遺構については、溝の平面図は100分の1で、溝の断面図とその他の遺構の平面・断面図は20分の1で作成し、レベルも記入した。なお、調査区の基本層位については20分の1で作成した。

調査終了は11月30日であった。

2. 調査の成果

(1) 基本層位(第10図)

2枚の層が確認されており、前述した松ノ木沢田遺跡と基本的には同一の層位である。第I

層：表土であり、3枚の層に細別できる。この層から土師器、須恵器が出土している。第II

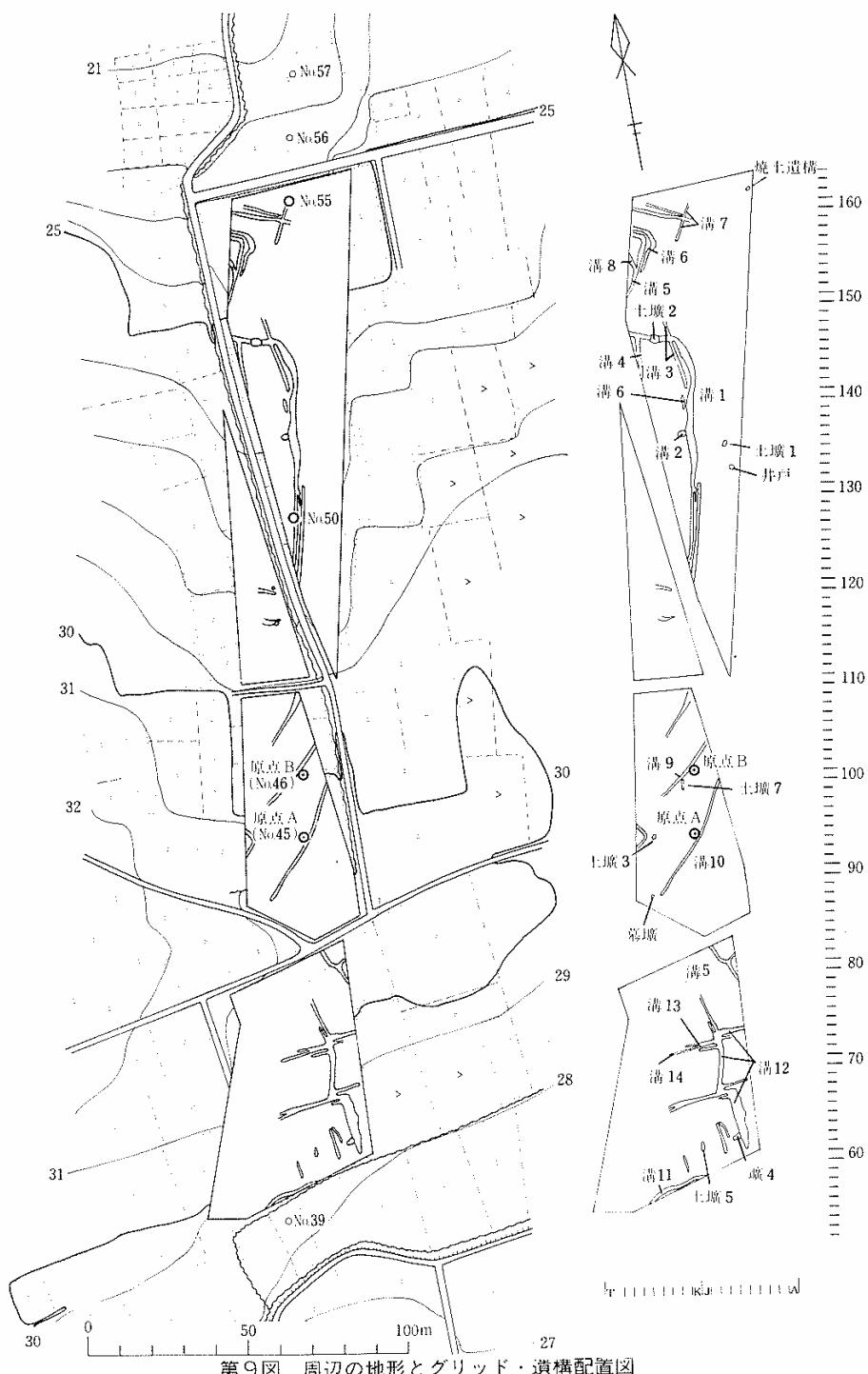
層：黒ボクである。

(2) 発見された遺構と遺物

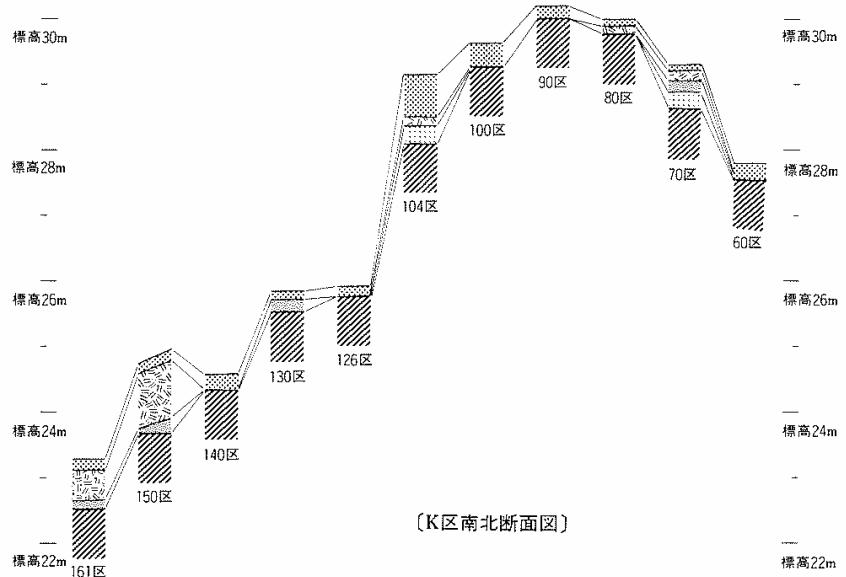
a. 溝(第11図・第3表)

溝は20数条が地山面で確認された。^(註)これらの溝は、底面幅10~150cm、地山からの深さ8~90cmの範囲に入っており、遺物の出土している溝は11条ある。溝については、遺物の出土している11条を含めて15条に限りナンバーを付けており、底面幅、深さなどは第3表にまとめた通りである。なお、重複している遺構についての新旧関係は、溝1と溝2、土壙2について明らかなだけで、他はすべて不明である。

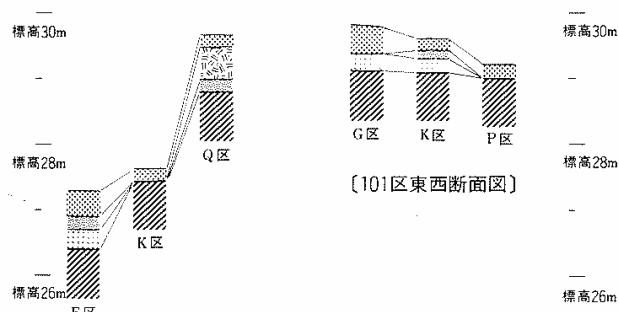
(註) 溝1だけは、旧表土から掘り込まれていることが確認されている。



第9図 周辺の地形とグリッド・道構配置図



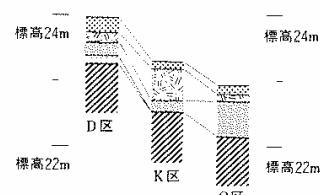
〔K区南北断面図〕



〔101区東西断面図〕

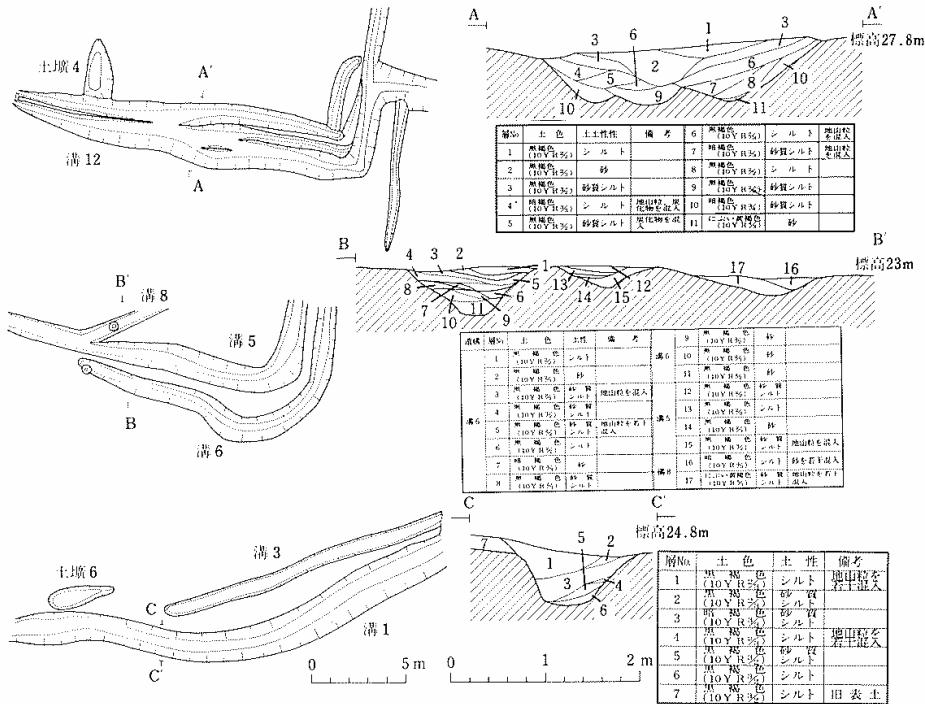
〔61区東西断面図〕

層位	層No	土色	土性	備考	
第I層	1	黒褐色 (10YR 5/2)	シルト	表土	
	2	黒褐色 (10YR 5/2)	シルト	地山ブロックを多量に含む。盛土。	
	3	黒褐色 (10YR 5/2)	シルト	若干グライ化がみとめられる旧表土	
第II層	4	黒褐色 (10YR 5/2)	シルト	黒ボクを若干混入している。	
		にぶい黄褐色 (10YR 4/2)	粘土	地山	



〔161区東西断面図〕

第10図 基本層位



第11図 溝

第3表 溝一覧表

遺構名	地区	重複・新旧関係	流れの方向	底面幅(cm)	深さ(cm)	壁立ち上がり	底面の形態	堆積土	出土遺物
第1溝	J ~ P ~ 123 ~ 126区	溝2より新しいと新田の関係不明	南 → 北	40~150	40~50	やや急角度	平坦	5層	土師器、須恵器、中世陶器、磁器
第2溝	K ~ L ~ 136区	溝1より古い溝 不明		約70	80~90	急角度	やや丸底状	1層	土師器、中世陶器
第3溝	K ~ M ~ 141 ~ 148区	溝1との新旧関係不明	南 → 北	約60	20	やや急角度	平坦	1層	土師器、須恵器
第4溝	O ~ P ~ 142 ~ 146区	溝1との新旧関係不明	南 → 北	20~70	20	緩やか	平坦	1層	なし
第5溝	O ~ P ~ 151 ~ 157	溝1との新旧関係不明	南西→北東	40~70	13~35	やや緩やか	平坦	4層	土師器、中世陶器、瓦
第6溝	N ~ P ~ 153 ~ 157	なし	南西→北東	30~50	30~40	やや緩やか	平坦	1層	須恵器
第7溝	K ~ L ~ 158 ~ 160区	無番号溝との新旧関係不明	南西→北東	20~40	9	やや急角度	平坦	1層	中世陶器
第8溝	P ~ 153 ~ 154区	溝1との新旧関係不明	不 明	40~50	10~20	やや急角度	平坦	2層	土師器
第9溝	I ~ N ~ 98 ~ 103区	なし	南西→北東	20~50	10~30	緩やか	平坦	1層	なし
第10溝	H ~ N ~ 87 ~ 100区	なし	南西→北東	約20	8	緩やか	平坦	1層	なし
第11溝	I ~ 9 ~ 55 ~ 58区	なし	西 → 東	20~30	30	やや緩やか	平坦	1層	土師器
第12溝	I ~ F ~ 61 ~ 73区	溝13、14、15、16番号溝との新旧関係不明	東→西→南	30~100	30~60	やや緩やか	平坦	1層	土師器、中世陶器
第13溝	~ L ~ 72区	溝12、溝14との新旧関係不明	東→西	10~20	37~53	やや緩やか	平坦	1層	なし
第14溝	I ~ M ~ 71 ~ 72区	溝12、溝13との新旧関係不明	東 → 西	約20	約20	緩やか	平坦	1層	須恵器、中世陶器
第15溝	G ~ 1 ~ 79 ~ 81区	なし	北西→南東	20~30	20~30	緩やか	平坦	1層	土師器

出土遺物(第12図)

遺物はすべて堆積土中から出土しており、小破片が多く、図示できるものは少ない。ここでは図示遺物をとり上げ、その他の遺物は第5表にまとめた。

(溝1)

1は堆積土内から出土した土師器壺の口縁部から体部下端にかけて残存する破片である。器形は体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がる。器面調整は、外面の口縁部に横ナデ、体部下端に横方向のケズリ、内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。また、外面には若干、粘土紐積上痕が認められる。

2と3は土師器壺の体部～底部の破片である。2の外面はケズリ、内面はヘラナデ、3の外面はケズリ、内面は刷毛目が施されている。2点とも底面には木葉痕が認められる。

4は須恵器甕の体部破片であり、外面は平行タタキ目、内面はナデが施されている。なお、内面に粘土紐積上痕が認められる。

6と7は中世陶器の擂鉢の破片である。体部～底部の破片である。6の外面は粘土紐積土痕による凹凸があり、ナデ調整が認められ、内面は横ナデ調整されている。7は内外面とも横ナデ調整されている。2点とも色調は灰色で、硬く焼きしまっている。

9は古瀬戸の体部破片であり、器種は瓶子と考えられる。緑色の釉がかけられており、細かな貫入が認められる。文様は花文と思われる。

10は磁器の体部破片であり、器種は不明である。染付がみられ網目の文様が描かれている。

13と14は堆積土内から出土した砥石である。2点とも平面形は長方形に近いものであり、5面で構成される。また磨面が4面認められ、擦痕が観察される。石材は13が石英安山岩質凝灰岩、14が凝灰質シルト岩である。

(溝5)

11は丸瓦の破片である。外面にケズリ、内面に布目圧痕が認められる。

(溝12)

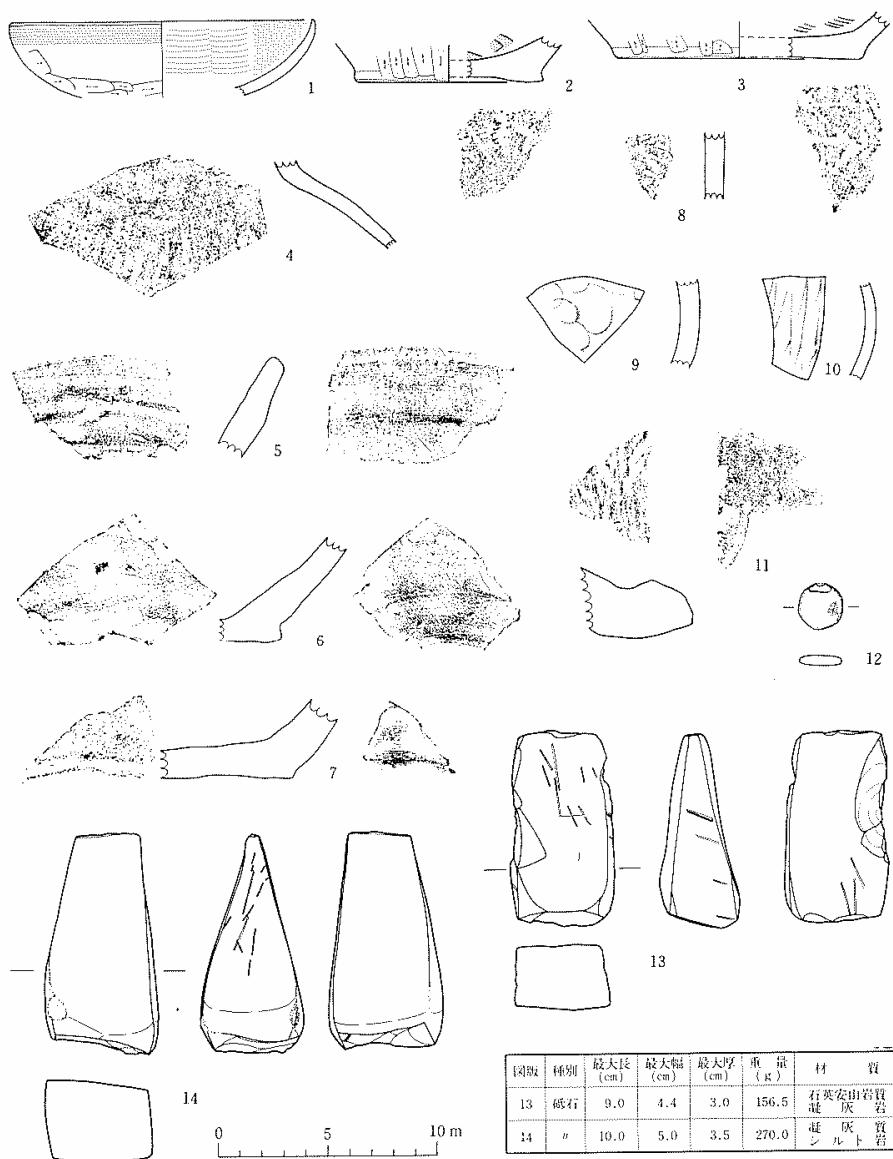
5は中世陶器の口縁部破片であり、擂鉢と思われる。口縁部は平坦であり、内外面とも横ナデ調整されている。色調はにぶい赤褐色で硬く焼きしまっている。

(溝13)

12は堆積土内から出土した円盤状石製品である。平面形は径約2cmの円形で、厚さは約4mmある。全面に人為的と考えられる研磨が施されているが、一部分が欠損している。石材は頁岩である。

(溝14)

8は中世陶器の破片であり、器種は甕または壺と思われ、平行な押印が認められる。



- 1 土師器片 (溝1堆積土)
 2・3 " 製 (")
 4 頸唇器蓋 (")
 5 中世陶器擂鉢 (溝12堆積土)
 6・7 " " (溝1堆積土)
 8 " 製か蓋 (溝14堆積土)
- 9 古油戸 脱子 (溝堆積土)
 10 磁 器 (")
 11 丸 汁 (溝5堆積土)
 12 円盤状石製品 (溝13堆積土)
 13・14 砥 石 (溝1堆積土)

第12図 溝の出土遺物

b. 土壙(第14図・第4表)

土壙は7基あり、すべてが地山面で確認された。遺物の出土している土壙は2基ある。平面形規模などは第4表にまとめたとおりである。

出土土器(第13図)

遺物はすべて堆積土中から出土しており、小破片が5点ある。そのうち図示できるものは2点で、他に第5表にまとめた。

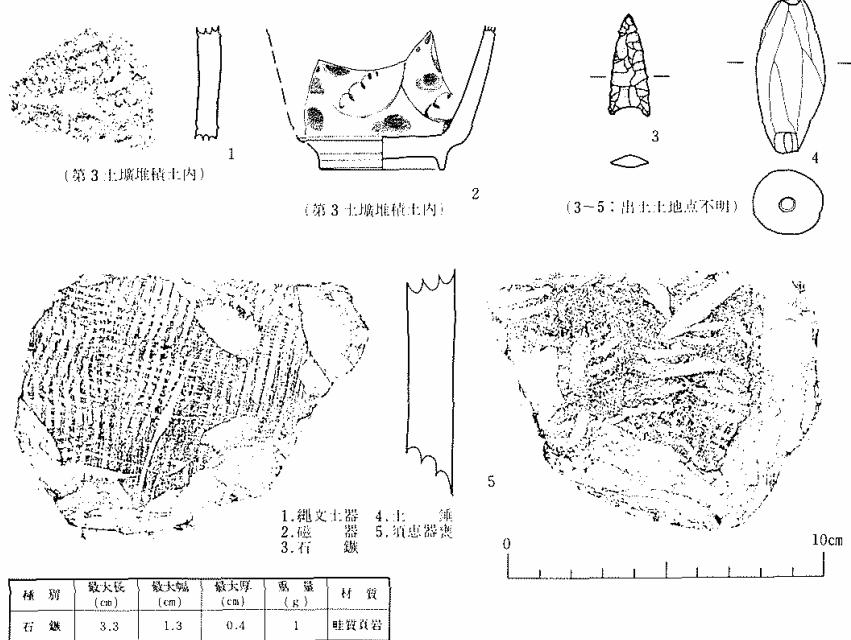
(土壙3)

1は縄文土器の体部破片である。胎土には纖維が混入されている。地文は縄文(LR)であり、内面はミガキが施されている。

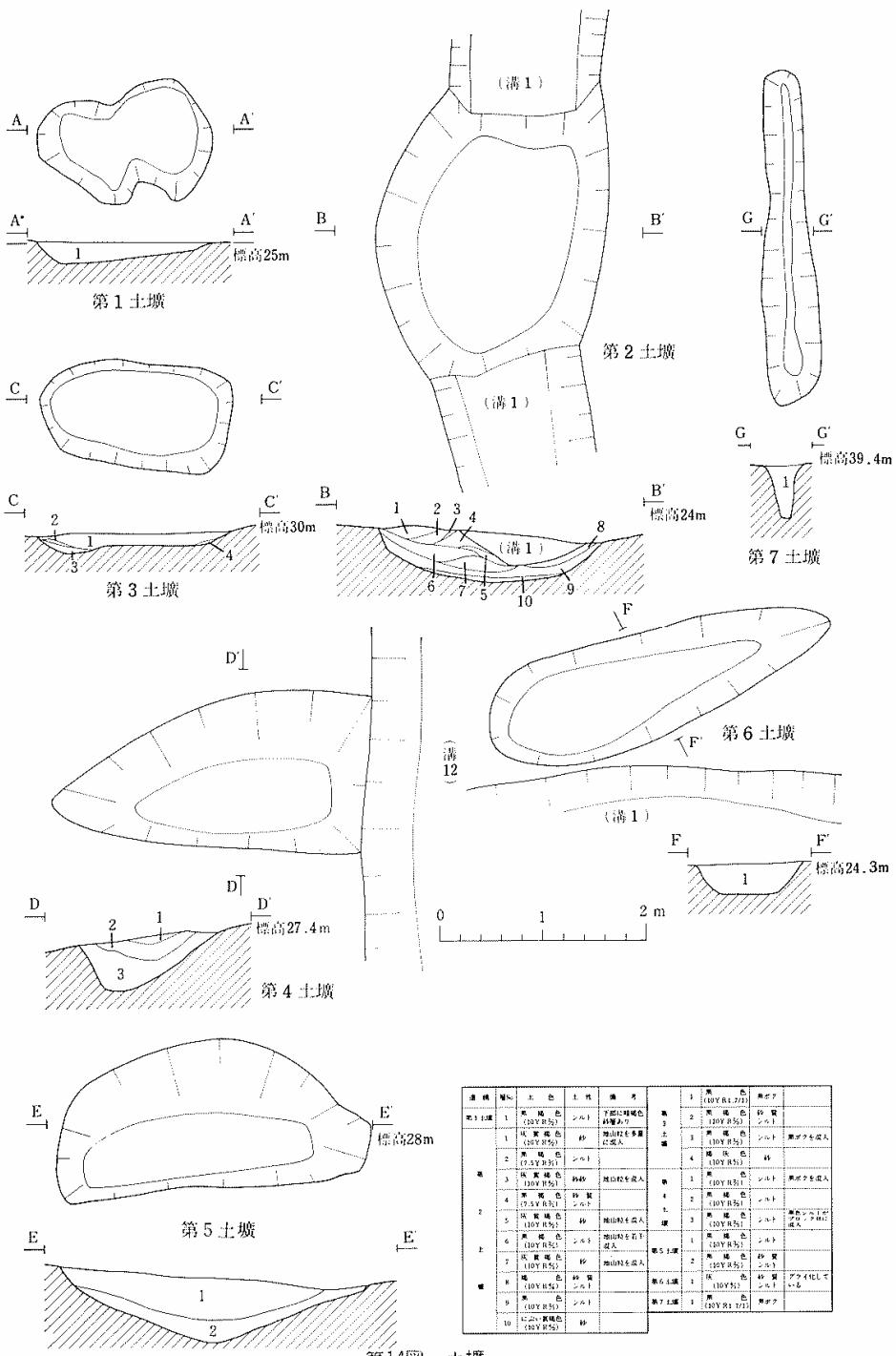
2は磁器の体部から底部にかけて残存している猪口である。染付がみられ、植物と思われる文様が描かれている。

第4表 土 壙 一 覧 表

遺構名	地 区	重複・新旧関係	平 面 形	規 模(m)	$\frac{m}{cm^3}$	壁の立ち上がり	底面の形態	堆 石 工	出 土 遺 物
第1土壙	G-135区	なし	不整のダルマ形	1.7×1.2	50	緩やか	平坦	1層	なし
第2土壙	N-146区	満1より古い	格円形	(2.4)×2.2	50	やや緩やか	丸底状	10層	中世陶器
第3土壙	O-93・94区	なし	不整の格円形	1.9×1.2	10-20	緩やか	平坦	4層	縄文土器、玉器、中世陶器
第4土壙	F・G-62区	満12との新旧関係は不明	格円形	3.0×1.6	50	南側は急角度で 他は緩やか	尖底状	3層	なし
第5土壙	J-61区	なし	不整の格円形	2.8×1.4	60	緩やか	丸底状	2層	なし
第6土壙	K-139・140区	なし	格円形	3.5×1.1	30	やや急角度	平坦	1層	なし
第7土壙	L-98・99区	なし	長方形	3.3×0.5	55	急角度	平坦	1層	なし



第13図 土壙・遺構以外の出土遺物



第14図 土壌

c . 井戸跡(第15図)

井戸跡が1基、F-132区の地山面で確認されており、素掘りの井戸である。平面形は楕円形($1.5 \times 1.3m$)で、深さは約1.8mある。底面は楕円形で $0.9 \times 0.6m$ あり坦であるが、南端に円形で径約30cm、深さ約20cmのピットが掘り込まれている。壁はやや急角度で立ち上がり、上端近くで開いている。堆積土は基本的に5層に分かれれる。なお、第5層は人為的な埋土であり、その上層は自然堆積である。出土遺物はない。

d . 焼土遺跡(第15図)

焼土遺構が1基、D-161・162区の地山面で確認された。平面形は楕円形で、規模は $1.45 \times 0.55m$ 、深さは10~13cmである。壁の立ち上がりはやや急角度で、底面は平坦である。壁面と底面が焼けており、5~10mmの厚さまで火熱が及んでいる。堆積土は3層に分かれ、焼土粒や木炭が混入している。出土遺物はない。

e . 墓壙(第15図)

墓壙は1基、0-87区の地山面で確認された。掘り方の平面形は円形で、径約90cm、残存する深さは約40cmである。掘り方の真中に、径約55cmの円筒形の腐った棺桶があり、桶には籠の痕跡が認められた。また、墓壙の底面近くには棺桶の底蓋と考えられる木片が検出された。骨片や副葬品は検出できなかった。

f . 遺構以外の出土遺物(第13図)

遺構以外には、第I層から、土師器・須恵器・中世陶器の破片が計22点、土錘が1点、石鎌が1点出土している。図示したもの以外は、すべて第5表にまとめている。

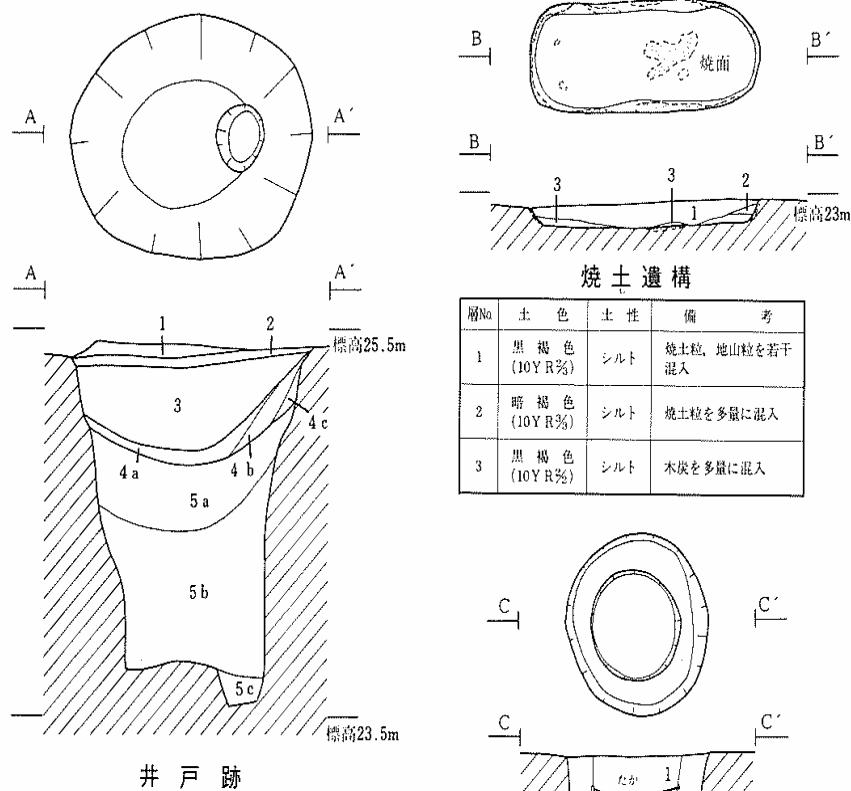
土師器はすべて破片資料であるが、器種には壺と甕がある。ほとんど磨滅した小破片ですが、壺の口縁部破片の中に、内外面がミガキで、内面に黒色処理の施されたものがある。甕についても、壺と同様に磨滅した小破片が多いが、体部破片の中に、外面がケズリで内面がミガキのものがある。

須恵器の器種には壺・甕・壺がある。5は甕の体部破片であり、外面に行行タタキ目、内面に青海波文が施されている。

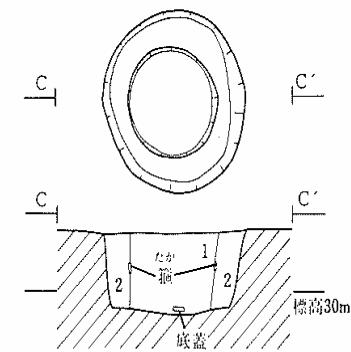
中世陶器は体部破片であり、器種は擂鉢と考えられる。

4は土錘である。紡錘形をしており、径約3.9mmの貫通孔がある。土錘の最大長は4.9cm、最大の厚さは2.2cmで、重さ約19gである。孔の一方には欠損が認められる。全面にオサエがみられる。

3は無茎の石鎌であり、両面には入念な調整剥離が加えられている。石材は珪質頁岩である。



層 No.	土色	土性	備考
1	灰白		
2	黒褐色 (10YR 5/2)	シルト	石英粒、炭化物を混入
3	黒褐色 (10YR 5/2)	シルト	砂を若干混入
4	黒褐色 (10YR 5/2)	シルト	地山粒を若干混入
	暗褐色 (10YR 4/2)	シルト	地山粒を若干混入
	暗褐色 (10YR 4/2)	シルト	地山粒を若干混入
5	黒褐色 (10YR 5/2)	シルト	地山粒を若干混入
	暗褐色 (10YR 4/2)	シルト	地山ブロックを多量に混入
	黄灰褐色 (2.5YR 5/2)	シルト質粘土	地山ブロックを多量に混入



層No	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR 5/2)	シルト	
2	黒褐色 (10YR 5/2)	シルト	地山ブロックを多量に混入

0 1 2 m

第15図 井戸跡・焼土遺構・墓壙

3. 考 察

(1) 遺物について

出土遺物には、縄文土器・土師器・須恵器・中世陶器・磁器・石製品がある。

[縄文土器]

1点だけであり、土壙3の堆積土から出土している。地文は縄文(L R)であり、内面はミガキが施されている。胎土に纖維が混入していることから、縄文時代早期末から前期初頭のものと考えられる。

[土師器]

土師器は、溝・土壙の堆積土や表土から出土している。器種には壺と甕がある。溝1から出土した壺(第12図1)は器形や器面調整などの特徴から、奈良時代(国分寺下層式期)のものかもしれない。甕は小破片であり、器形や器面調整もわからぬために所属時期は不明である。

[須恵器]

須恵器は、溝の堆積土や表土から13点破片が出土している。器種には壺・甕・壺があるが、小破片のために所属時期は不明である。

[中世陶器]

溝・土壙の堆積土や第Ⅰ層などから19点破片が出土しており、19点中8点が溝1から発見された。器種には擂鉢6点、甕か壺が13点ある。溝14出土の破片は甕または壺の肩部付近のもので平行な押印が認められ、類例は観音沢遺跡などにある。中世陶器は破片で、器形も明らかでないため不明であるが、周辺の窯跡、熊刈等の窯跡と関係があるかもしれない。

[古瀬戸]

溝1の堆積土から2点出土しており、緑色の釉がかけられている。このうち1点は器種が瓶子と考えられるもので、細かな貫入が認められ、文様は花文と思われる。

[磁 器]

溝1と土壙3の堆積土から1点づつ計2点が出土している。土壙3出土の器種は猪口であり、染付がみられ文様が描かれている。溝1出土のものは器種が不明であるが、染付がみられ、網目の文様が描かれている。江戸後期以降のものと考えられる。

[瓦]

溝5の堆積土から1点だけ出土している。丸瓦の破片で、外面にケズリ、内面に布目圧痕が認められる。所属時期は不明である。

(2) 遺構について

[溝]

溝は20数条検出され、このうち11条の堆積土内から、土師器、須恵器・中世陶器など出土

している。しかし、これらはすべて破片であり、遺構に共伴するものではない。よって溝の時期は不明である。

[土 壤]

土壙は7基検出されている。土壙2は溝1に切られており、溝1より古い。土壙2の堆積土からは中世陶器、土壙3の堆積土からは土師器甕が出土しているが、年代を決定する資料とはならず時期は不明である。その他の土壙については、出土遺物がなく、時期は不明である。

なお、7土壙のもう1つ平面形が長方形で特異な形態の土壙については、松ノ木沢田遺跡でも発見されており、類例などについてはⅢ松ノ木沢田遺跡—3—(2) を参照されたい。

[井戸跡]

1基検出されているが、出土遺物はなく所属時期は不明である。なお、このような素掘りの井戸跡は、観音沢遺跡・五輪C遺跡・沼崎山遺跡などに類例はあるが、いずれも時期は不明である。

[焼土遺構]

1基検出されているが、出土遺物はなく、遺構の時期、性格ともに不明である。

[墓 墳]

1基検出されている。骨片や副葬品が発見されなかったことから、明確な時期は決定できない。

4 . ま と め

今回の調査の成果をまとめると次のようになる。

1. 向野A遺跡は、奥羽山脈から派生する築館丘陵の末端部、高清水町の南にある標高23～31mの小丘陵の緩斜面に立地している。松ノ木沢田遺跡とは谷をはさんだ北側にあり、約300m離れている。
2. 発見された遺物には、縄文土器、土師器、須恵器、中世陶器、磁器、土錘、石鏃、砥石、円盤状石製品などがある。
3. 遺構については、溝20数条、土壙7基、井戸跡1基、焼土遺構1基、墓壙1基が発見されているが、所属時期は明らかでない。

引　用・参考文献

- 伊藤信雄(1960)：「古代史」『宮城縣史』第1巻
- 岩手県埋蔵文化センター(1978)：『都南村湯沢遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第2集
- 岡田茂弘・桑原滋郎(1974)：「多賀城周辺における古代壺形土器の変遷」『研究紀要』I 宮城県多賀城跡調査研究所
- 小野寺祥一郎(1979)：「五輪C遺跡」宮城県文化財調査報告書第61集
- 加藤道男・佐藤好一(1980)：「藤屋敷遺跡」『東北自動車遺跡調査報告書』II 宮城県文化財調査報告書第63集
- 加藤道男(1980)：「東館遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』III 宮城県文化財調査報告書第65集
- 加藤道男・阿部博志(1980)：「觀音沢遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』IV 宮城県文化財調査報告書第72集
- 霧ヶ丘遺跡調査団(1973)：「霧ヶ丘」
- 佐藤信行(1979)：「宮城県高清水町萩田遺跡出土の初期弥生土器」『初』創刊号 弥生時代研究会
- 三本木町教育委員会(1978)：「多高田窯跡調査報告書」三本木町文化財調査報告書第4集
- 高橋守克(1980)：「下折木遺跡・新庄館跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』III 宮城県文化財調査報告書第65集
- 東北歴史資料館(1979)：「熊狩A窯跡発掘調査報告」東北歴史資料館資料集1
- 早坂春一・阿部恵(1980)：「西手取・手取遺跡」『東北自動車道跡調査報告書』II 宮城県文化財調査報告第63集
- 早坂春一(1980)：「中ノ茎B・C・D遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』III 宮城県文化財調査報告書第65集
- 宮城県教育委員会(1979)：「宮城県遺跡地名表」宮城県文化財調査報告書46集(修正版)
- 〃(1979)：「宮城県遺跡地図」宮城県文化財調査報告第47集(修正版)

第5表 向野 A 遺跡土器破片集計表

※図示遺物は除く

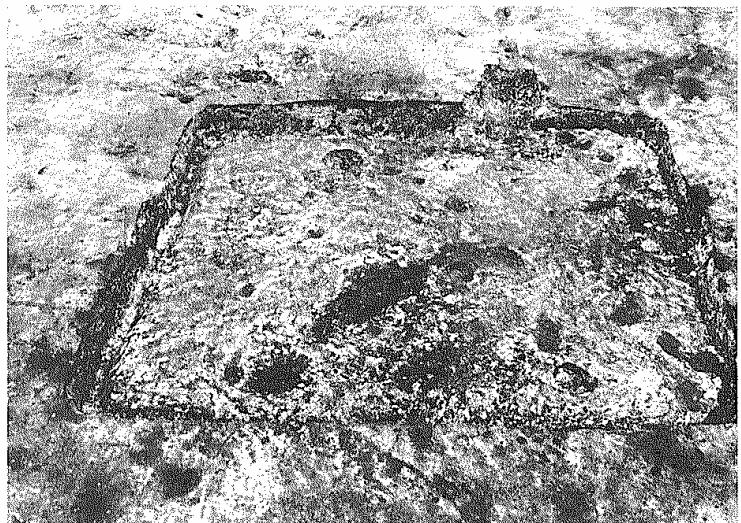
種別	各種	器面調整	溝												土壤	旧表土	不明	小計	
			外一面	内一面	溝	溝	溝	溝	溝	溝	溝	溝	溝						
土	环	ミガキ-ミガキ(黒)														1	1		
		不明-ミガキ(黒)	1															1	
		不明-不明	1															1	
		ロクロ-ミガキ(黒)	1															1	
		ミガキ-ミガキ(黒)		1														1	
		ケズリ-ミガキ(黒)																1	
		ケズリ-ミガキ	1															1	
		不明-ミガキ(黒)	4															4	
		不明-不明	1	1					1								1	4	
		ケズリ-ミガキ(黒)	3															3	
師	甕	不明-ミガキ(黒)											1					1	
		ナ デ-ナ デ										1						1	
		不明-ミガキ	1															1	
		不明-不明	1															1	
		ケズリ-ミガキ										1					1	2	
		ケズリ-ヘラナデ	1															1	
		ケズリ-ナ デ	1															1	
		ミガキ-ミガキ	2															2	
		ミガキ-不明	1	1														2	
		不明-ミガキ	5		1			8	1								1	16	
器	瓶	不明-ナ デ	1															1	
		不明-ナ デ・ミガキ						8										8	
		不明-不明	16	2	1	1		13	1	2								8	
		ケズリ-ナ デ	1									1						2	
		ケズリ-ミガキ	2											1				3	
		不明-ミガキ	1					1									1	3	
		不明-不明	3						1									1	
		ケズリ-ナ デ																1	
		ケズリ-ナ デ																1	
		ケズリ-ナ デ																1	
須恵器	壺	口縁部	ロ ク ロ-ロ ク ロ		1													1	
		体部	ロ ク ロ-不 明													1		1	
		体部	平行タタキ目-ナデ			2												2	
		体部	平行タタキ目-不明								1							1	
		体部	ロ ク ロ-ロ ク ロ	1														1	
		体部	ケズリ-ナ デ						1									1	
		体部	ケズリ-ナ デ							1								1	
		体部	ナ デ-ナ デ												1		1		
		体部	不明-ナ デ												1		1		
		蓋	台部	ロ ク ロ-ロ ク ロ												1		1	
中世陶器	播針	体部		1	1											1		3	
		体部		4		1	1		1				1		1	1		10	
		底部		1														1	
		古漬戸	体部		1													1	
小計				51	10	3	3	2	1	29	4	8	2	1	1	2	1	19	138

図 版

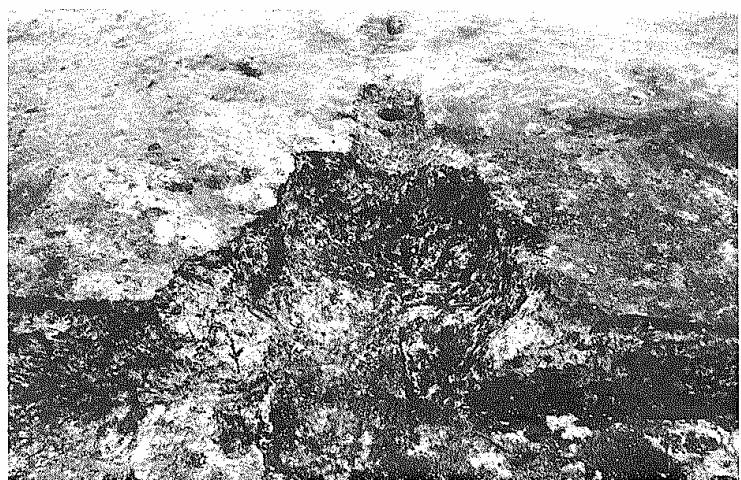
発掘前の松ノ木
沢田遺跡全景
(西側から)



堅穴住居跡
(南西側から)



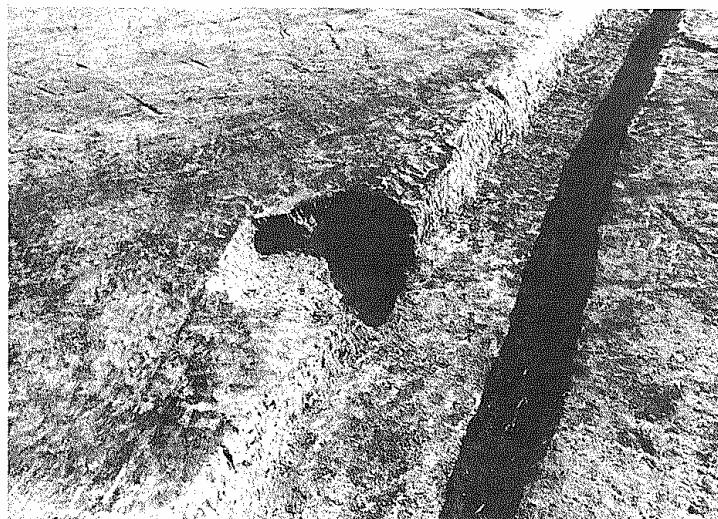
堅穴住居跡
カマド



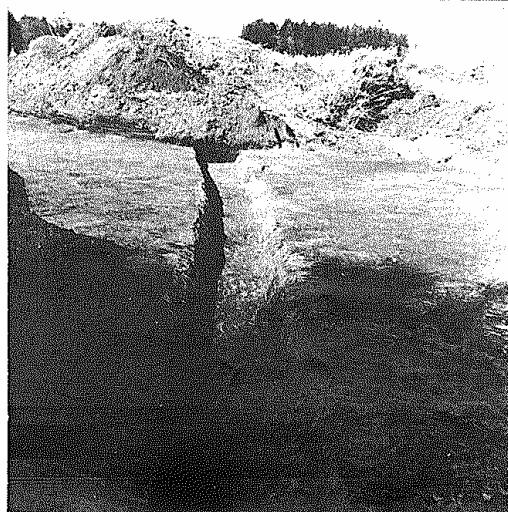
図版 1
松ノ木沢田遺跡



第4 土壙
(南東側から)



第5 土壙と大溝
(北側から)



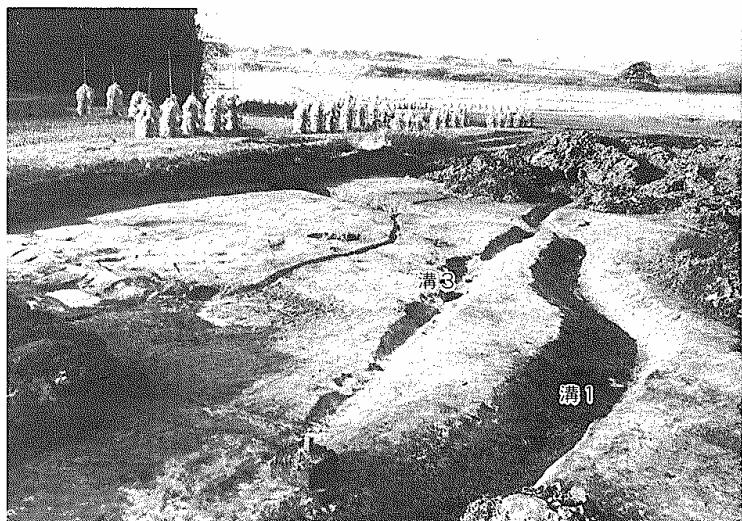
大溝
(南側から)

図版2
松ノ木沢田遺跡

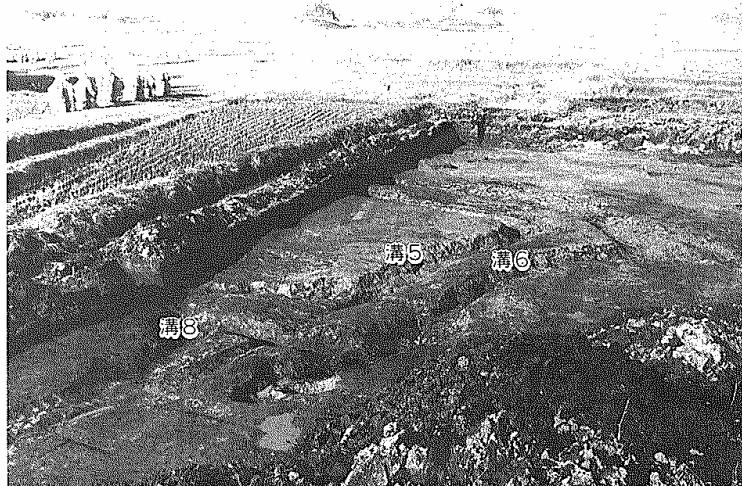
手前（松ノ木沢田遺跡）
から向野 A 遺跡を望む
(南側から)



溝 1 と溝 3
(南側から)



溝 5・溝 6・溝 8
(南側から)



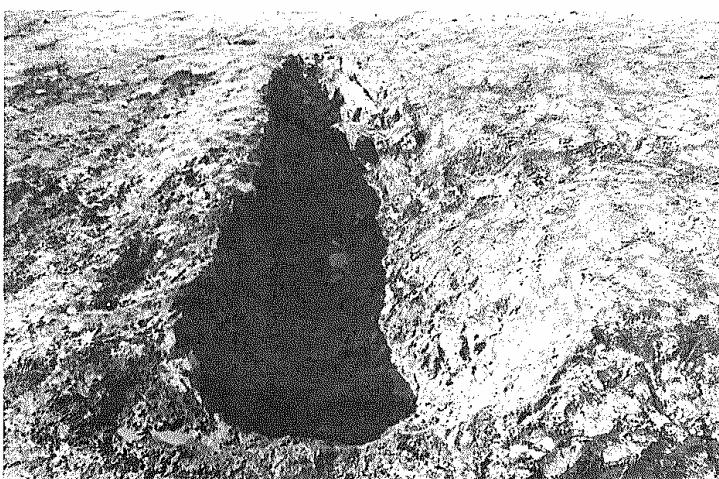
図版 3
向野 A 遺跡



溝 12
(北西側から)



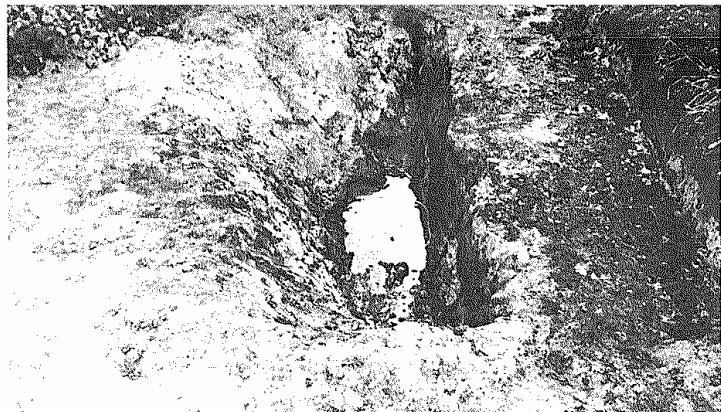
第 3 土 壤
(南西側から)



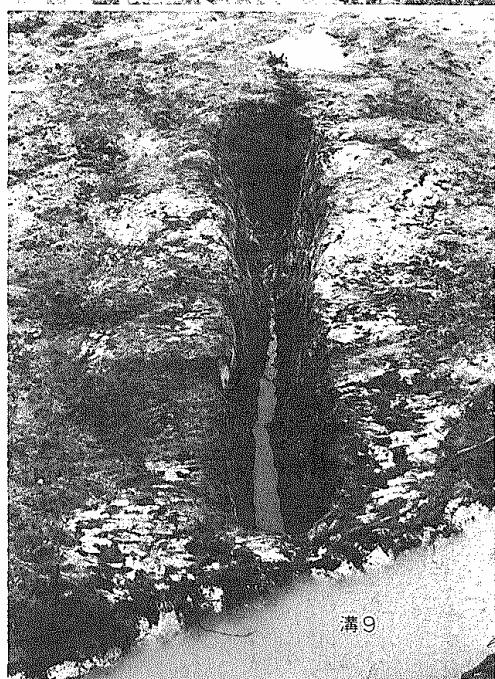
第 4 土 壤
(東側から)

図 版 4
向野 A 遺跡

第 5 土 壤
(北側から)



第 7 土 壤
(北側から)



井 戸 跡

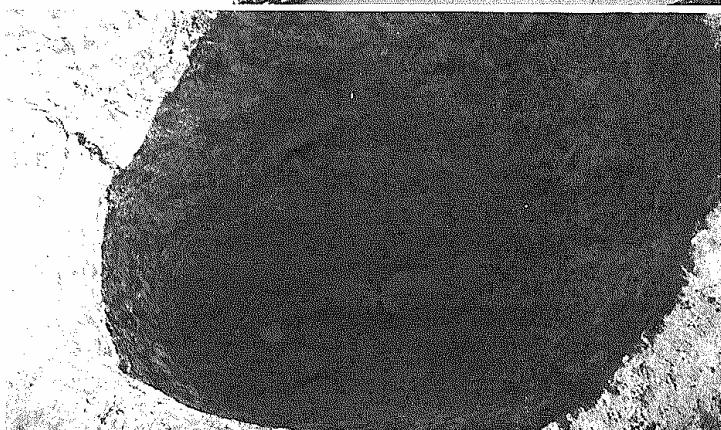
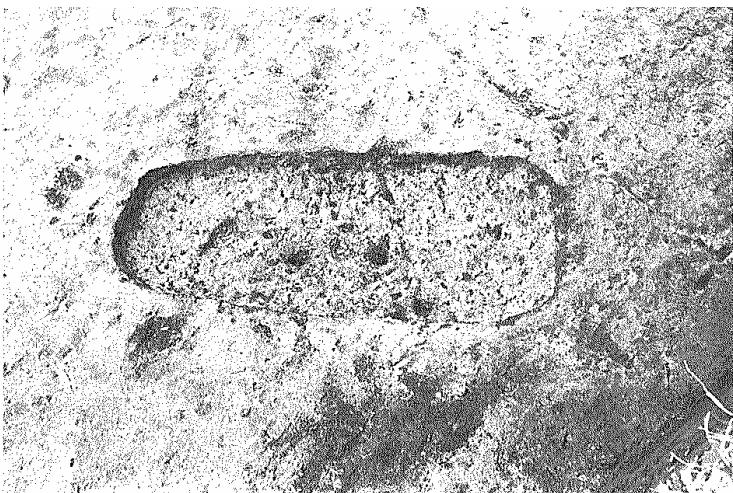
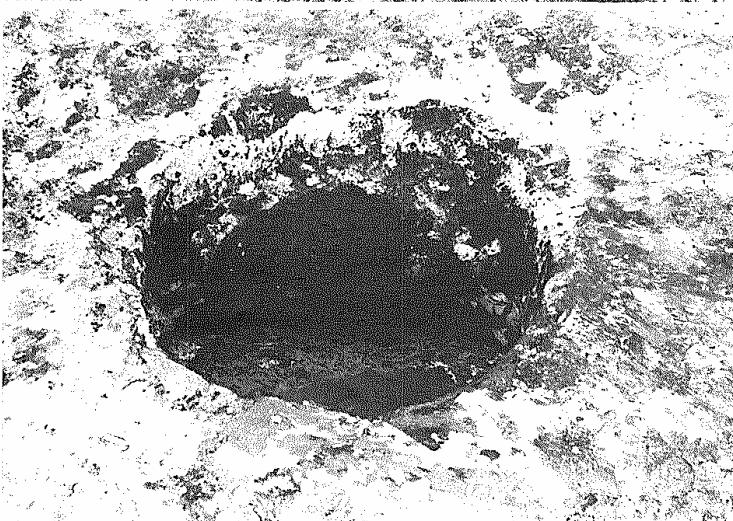


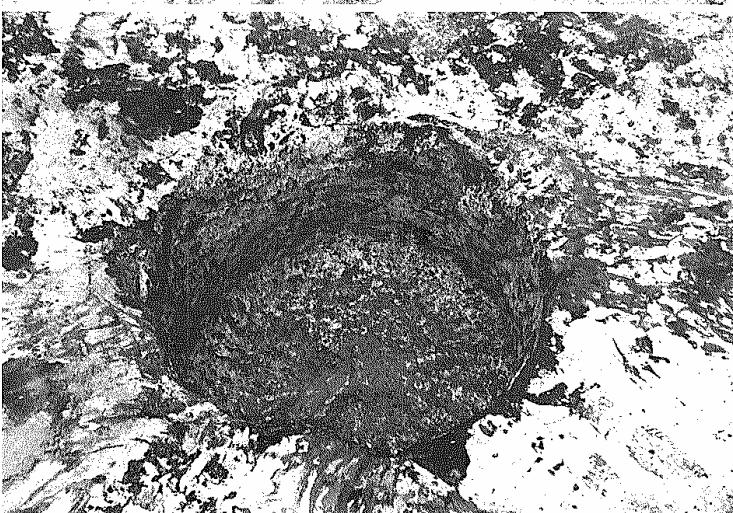
図 版 5
向野 A 遺跡



焼土遺構

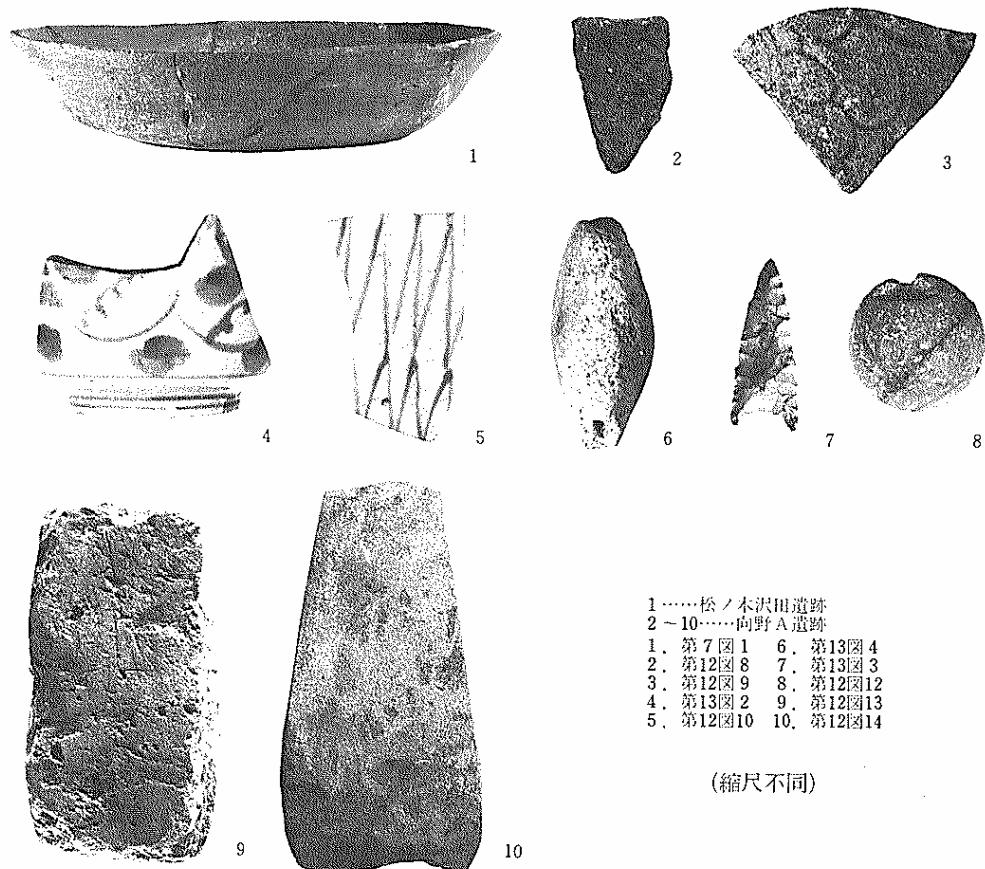


墓 墳



墓 墳 掘り方

図版 6
向野 A 遺跡



図版 7 出土遺物(松ノ木沢田遺跡・向野A遺跡)

5. 赤岩館経塚

調査要項

遺跡記号：KA(宮城県遺跡地名表登載番号：59093)

遺跡所在地：宮城県気仙沼市字松川147の3番地

調査面積：約 100m²(発掘面積5m²)

調査期間：昭和55年8月18日～8月19日

調査員：宮城県教育庁文化保護課

技術主幹兼調査第一係長 佐々木茂楨

技 師 丹羽 茂

協力機関：宮城県気仙沼市教育委員会

目 次

. 調査に至る経過	121
. 遺跡の位置と環境	122
. 調査の経過	122
. 遺 構	125
. 遺 物	126
1. 一字経石	127
2. 多字経石	127
. 考 察	149
1. 経塚築造の年代	149
2. 写経石の經典の典拠	149
3. 経塚築造の宗教的背景	154
4. 経塚築造の地理的背景	160
5. 経塚築造の社会的背景	162

挿図・表・図版 目次

第1図 周辺の遺跡	123	図版第1 赤岩館経塚	167
第2図 周辺の地形図	124	第2 赤岩館経塚、観音經赤岩沢磨崖仏	168
第3図 経塚埋納土壌実測図	125	第3 赤岩館跡	169
		第4 寶鏡寺樓門補陀六角堂	170
第1表 経石出土数内訳表	126	第5~24 経塚出土経石	171
第2表 墨書き石内訳表	126		
第3表 経石材質表	127		
第4表 墨書き文字判読・法量一覧表	129		
第5表 墨書き文字画数分類一覧表	144		
第6表 墨書き文字頻度一覧表	151		
第7表 使用經典を特定できる経石文字と関連經典表	151		
第8表 本吉郡北方月館村代数有之御百姓内訳表	157		
第9表 本吉郡北方月館村肝入年表	158		
第10表 災害年表	162		

I. 調査に至る経過

赤岩館経塚は、宮城県気仙沼市字松川147の3番地内にある。この位置は松川地区の中央部にある赤岩館跡の中腹南斜面の1地点で、国道45号の気仙沼バイパス建設事業に関連して遺跡が発見され、調査が行われた。

気仙沼バイパスは気仙沼市字岩月宝ヶ沢15の3から同市字東八幡141の5に至る10.2kmの路線で国道45号の市内での交通渋滞解消のため、建設省東北地方建設局仙台工事事務所が建設を計画したものである。バイパスは市街地を西から北へ大きく迂回しながら丘陵部を通って東へ至るもので、路線内には石甲遺跡、田柄遺跡、赤岩館跡、赤岩館経塚等が係り合いを有している。

宮城県教育委員会および気仙沼市教育委員会では、路線計画の段階から遺跡の取扱いについて東北地建との間で協議と調整を重ね、工事による遺跡の破壊を極力さけることにつとめた。その結果、決定された路線を遺跡との係り合いでみると、田柄貝塚については中心部の貝層部分を避けて変更され、赤岩館跡もトンネル工法に設計が変えられた。当初、石甲遺跡および赤岩館経塚は予測がつかなかった。これまで、昭和54年度に田柄貝塚の発掘調査が実施され、赤岩館跡も主要遺構がことごとく保存されたので、トンネル入口および出口周辺部の地形測量や立会調査が終了している。なお石甲遺跡は、近い将来に路線敷内の調査が計画されている。

昭和55年度になるとバイパス建設事業は、そのピッチをあげ赤岩館トンネル工事にも着工された。8月には、全長150mにおよぶトンネルを掘削するため、関連工事と坑道入口地点および周辺部の掘削が開始された。

赤岩館経塚は、8月9日の午後、坑道入口地点の南手前の崖面を重機を使用して掘削中に偶然に発見されたものである。この時、ユンボの爪先は横穴状に斜面に掘り込まれた埋納土壙の天井部から床面部分までを一瞬にひっかけ破壊した。これによって、埋納経石のうち手前の数千点は、あたかもナダレ現象の様を呈して音をたてながら流れ落ちたという。

事は直ちに関係者から気仙沼市教育委員会に連絡された。8月15日、市教委は現地調査を行ない墨書きされた写経石の16点をとりあえず確認し、埋納土壙の残存部も確かめて工事の中止を要請する一方、宮城県教育委員会に状況を報告してきた。

そのため、宮城県教育文化財保護課は、工事中による新遺跡の発見を東北地建仙台工事事務所に通知して取扱いを協議し、8月18～19日の両日に現地の発掘調査を緊急に実施した。

II. 遺跡の位置と環境（第1・2図）

赤岩館経塚は、気仙沼市の中心部からは北西向へ約2km、字松川147の3番地に所在している。国鉄大船渡線および国道284号が南前方約250km前後のところを走っている。国鉄気仙沼駅から約1km北西になる。

市の北西部は、海岸地帯特有の海蝕による急峻な丘陵地が多くをしめ、大川・八瀬川・松川などが山峡を開析しながら南東へ流れて気仙沼湾に注いでいる。これらの諸川の左岸部は侵食により急な崖の部分が多いが、右岸部は堆積作用による沖積地である。市街地の西部から北部にかけては安波山の丘陵地、南西には北東から南東へかけての松岩丘陵地があり、この南北丘陵が最も狭められたところが気仙沼駅周辺で、ここから南東に低地が末広がりに海岸へ低く移行している。赤岩館経塚は、北西部丘陵が沖積地に向かって落ちこむ一角がある。

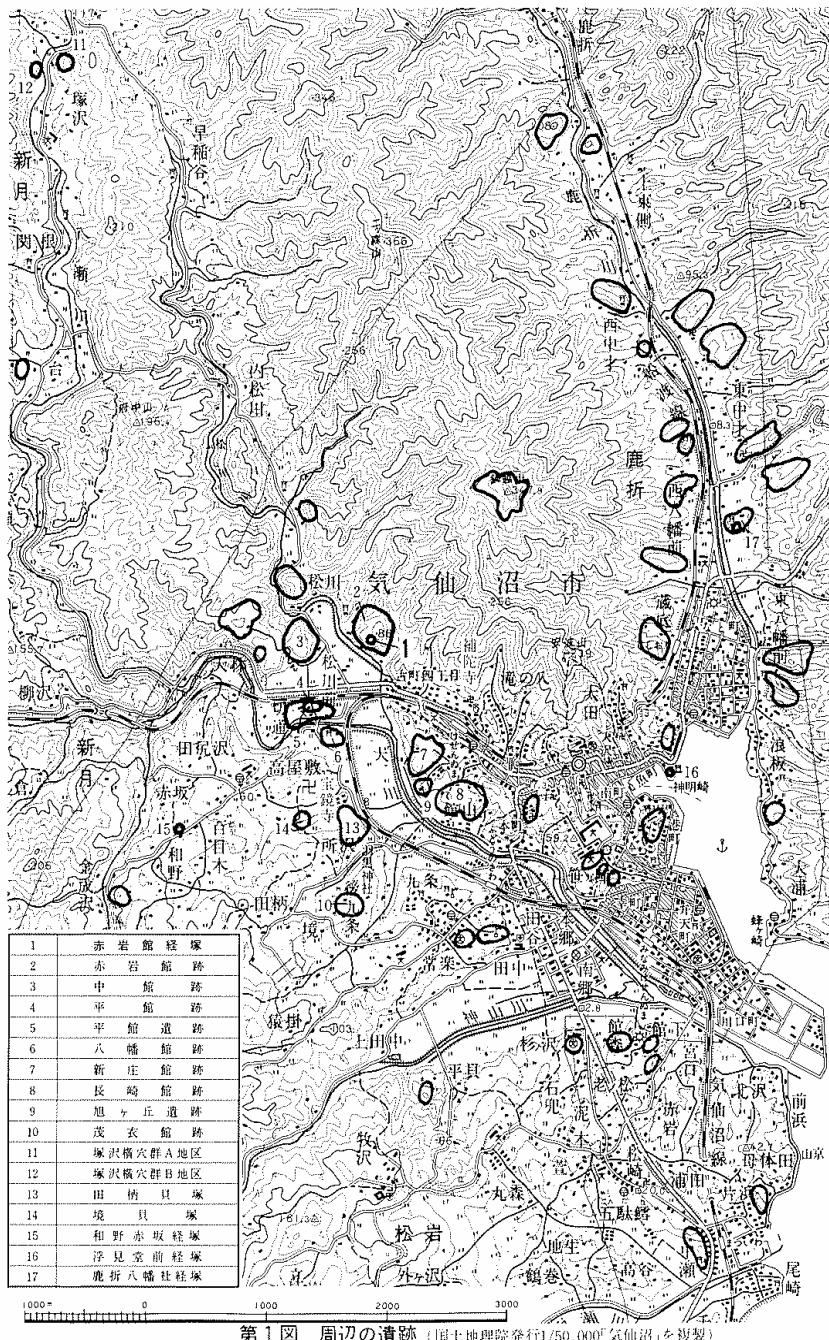
丘陵から派生した低台地前面は、ごく最近（中世の頃）まで海水が入りこんでいたと伝えられ、周辺には田中沖、長崎などの地名が今も残っている。したがって、このような環境は、縄文時代頃にあっては、田柄貝塚の形成にみるように魚貝類の採取に良好な条件をなしていたし、後代、特に中世においては軍事上、交通上の要地で会ったと推定される。赤岩館跡・中館跡・平館跡・長崎館跡など周辺に築かれた多くの中世城館跡がそれを示している。

III. 調査の経過

調査は、経塚そのものの発掘調査と周辺部の地形測量を実施した。経塚主体部は、崖面を横穴状に掘りこんで埋納土壙が築造されている。重機によって落とされた経石を拾いあげたのち、埋納土壙の内部の調査に取りかかった。土壙の内部には崩壊した天井部分や表土等が流れこんでいたが、それらを除去したところ、まず上層（第1層）経石の積まれている層が検出された。経石層はもう1枚下層（第3層）にも検出できたが、上下両層の間には、最初にこの埋納土壙を掘った際の土壙天井部の1部が崩れて層状に堆積している層（第2層）がみられる。

経石をすべて取りあげた後、土壙の全容を検出し、計測を行った。平面図および立体図を作成するにあたり、埋納土壙床面に仮原点Aを設けた。経石は、土壙内から落下して経塚を発見の端諸となつたものとを区別し、発掘調査後に整理作業を進めた。

なお、赤岩館トンネルの工事に関連して、バイパスの路線敷地にかかる経塚はこれ1基のみである。路線外の周辺にはさらに経塚が當まれたかどうかは、今後の調査をまたなければならない。





第2図 周辺の地形図

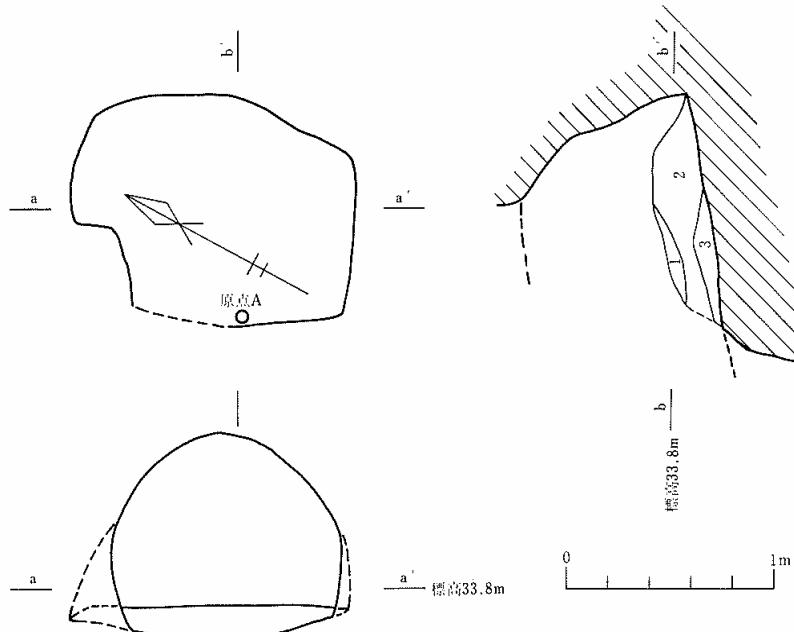
IV. 遺構 (第3図、図版第1・2)

経塚は、赤岩館跡の南斜面の一角に崖面を横穴状に掘りこんで埋納土壙をつくったもので、塚状のマウンドを形成したものではない。

土壙床面の標高33m50cmほどで、崖線下を通る市道との比高差は約23mを測る。土壙が築かれた段階の原形は、長年月の経過に加えて、発見時の重機による天井部から床面部にかけての手前の部分の破壊があつて、完全な状態で残っているとはみなしがたい。

プランは、横幅が1m37cm、奥行が現状で1m10cm程度で、横長の隅丸方径形状を呈している。天井部は奥壁の手前50cmほどのところで壊されている。土壙の立面形は丸天井のドーム形に近かつたものと推定され、残存部の最大高は床面から測って89cmである。床面は褐色粘土質シルトでほぼ平坦であるが、中央部は若干低い。

埋納土壙の横穴状の入口部が閉塞されたかどうかの点、遺構の現状からは、不明である。



第3図
経塚埋納土壙実測図

層位	土色	主性	備考
1			上層経石層
2	暗褐色	砂質シルト	天井崩落土層
3			下層経石層

V. 遺物(経石) (第4表、図版第5~24)

遺物は、すべて経石だけである。土壙の内部に埋納された経石の層厚は約25cmであった。積まれた経石は、下層および上層に分けられる。両層の間には、土壙天井部の暗褐色砂質シルトが入っている。これは、下層の経石が埋納された後のある時期に天井部の一部が崩落してその上に堆積したものと判断される。上層の経石は、さらにその上に積まれている。したがって、上下の経石の間には、埋納の時期に時間的なズレが認められる。

経石の形状や大きさは一定していないが、扁平なものが圧倒的に多い。長径3cm、短形2.5cm厚さ0.5cm、重さ110g前後の小石が比較的使われている。経石総数8,740点、総重量は19.646kgに達する。

このうち、墨書文字の判明する経石が全部で1,404点ある。文字は、川原石の両面に同一文字を楷書しているのがほとんどであるが、中には両面で文字が異なるものや、各面に數文字を書いた経石などがある。墨痕が鮮明で、文字の判読が容易なものは下層の経石に多い。しかし、全体としてみると、墨書文字が今まで残っている経石は全体の約 $\frac{1}{6}$ で、消えてしまっているものの方が非常に多い。このことは、埋納土壙の入口部が外気に接して長年月を経過したためであろう。

経石の文字は、全て墨書されたものだけで、朱書や彫字はみられない。なお、経石の岩質をみると、頁岩や砂岩、砂質凝灰岩などで(第3表)、当地方をふくむいわゆる北上山地の南部地帯を構成しているものである。礫が水で押し流されて川原に堆積したものを、経文を書写するために、大量に拾い集められたものと思われる。付近を流れる大川・松川・八瀬川等の川原石に一般的にみられる。

埋納碑は発見されていない。

第1表 経石出土数内訳表 (単位は点数)

	下層経石	上層経石	上下層 混同経石	計
墨書経石	212	369	823	1,404
墨書痕跡不明経石	1,313	2,012	4,011	7,336
計	1,525	2,381	4,834	8,740

□内の1,404点の経石については、文字の判読と計測をした(第4表参照)

第2表墨書経石内訳表 (単位は点数)

	下層経石	上層経石	上下層 混同経石	計
判読 経石	一字石	186	306	627
	多字石	1	1	3
判読 不経石	一字石	24	61	192
	多字石	1	1	1
計	212	369	823	1,404

□内の1,119点の経石については、文字を画数別に分類した(第5表参照)

第3表 経石の材質表(数字は経石に付した整理番号)

	No.	石 材		No.	石 材		No.	石 材
下 層 経 石	21	砂 岩	上 層 経 石	121	頁 岩	上 下 層 混 同 経 石	641	石英安山岩
	22	" "		122	" "		642	細粒砂岩
	23	凝灰質砂岩		123	" "		643	" "
	24	頁 岩		124	" "		644	粘板岩
	25	砂 岩		125	" "		645	細粒砂岩
	26	凝灰質頁岩		126	砂質頁岩		646	" "
	27	玲 岩		127	砂 岩		647	微門綠岩
	28	頁 岩		128	砂質頁岩		648	頁 岩
	29	細粒砂岩		129	細粒砂岩		649	" "
	30	" "		130	頁 岩		650	" "
	31	頁 岩		131	砂質頁岩		651	細粒砂岩
	32	" "		132	凝灰質頁岩		652	頁 岩
	33	凝灰質頁岩		133	砂 岩		653	玲 岩
	34	細粒砂岩		134	砂質凝灰岩		654	凝灰質頁岩
	35	花崗斑岩		135	頁 岩		655	砂質凝灰岩
	36	頁 岩		136	細粒砂岩		656	砂 岩
	37	砂質頁岩		137	" "		657	石英安山岩
	38	砂 岩		138	凝灰質頁岩		658	頁 岩
	39	頁 岩		139	細粒砂岩		659	砂質頁岩
	40	玲 岩		140	凝灰質頁岩		660	砂 岩

1. 一字経石(図版第5~23)

出土した墨書経石8,740点のうち、今日なお墨書文字を確実に読取れる経石が1,124点あり、その中の1,119点つまり99.6%はこの一字経石である(第2表)。

この種の経石をさらに詳しくみると、川原石の両面に、同じ文字を1字づつ書写したもののが9割をこえる。中には、一面にだけ同じ文字を2字並べて書き、片面には書いていないものが若干ある。^①しかし、このような経石は、文字の書いていない面がデコボコしていて細丸長い。そのため書写しやすい面に、2字をまとめて書いたものと解釈できる。

したがって、赤岩館経塚の経石は、一字づつを一石の両面に書くことを方針とし、これを貫ぬいたと理解したい。これらの文字は、仏教の經典を書写したものである。

2. 多字経石(図版第24)

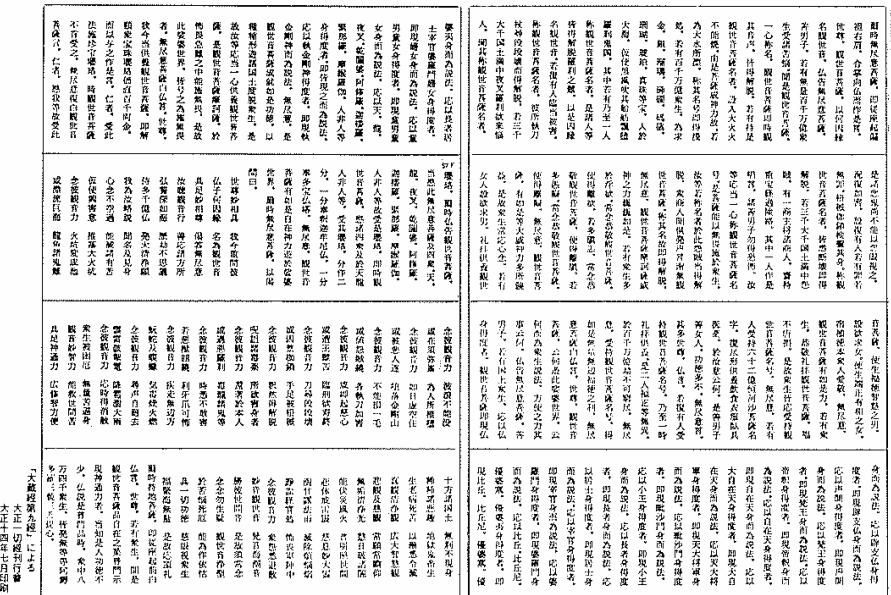
この経石は、経塚築造の時期・目的・願主・書写經典の典拠という重要な内容を知ることのできるものであるが、きわめて少ない。^②

この中で、次の4点が注目される。(図版第12・24)

① 表 裳 朝 乐	② 表 朝 乐	③ 表 僧侶 不詳
寛保三年癸亥 敬三頤願 白亥	如來 南無阿彌陀佛	子孫長久 南無阿彌陀佛

- ※①下層経石No.108(図版24)
 ②上下層混同経石No.53(図版24)
 ③上下層混同経石No.753(図版24)
 ④上層経石No.72(図版12)

徳の①は下層経石の埋納時期が、江戸時代の中期、寛保三年癸亥（1743）であることを確認に示す重要なものである。これらの経石によって子孫長久が祈願されている。



註 ①同じ文字を片面に2字書いてある経石としては、

- 例えば「無」・「無」（下層経石No. 154）
 「間」・「間」（下層経石No. 190）
 「受」・「受」（下層経石No. 333）
 「切」・「切」（上下層混同経石No. 565）

があり、その他では「起」・「口不詳」（下層経石No. 88）がある。

②両面で文字が異なる経石も多字経石とみると、

数はきわめて少ないが、

- 例えば「此」・「舍カ」（下層経石No. 185）

- 「宅カ」・「説」（下層経石No. 305）

- 「齊」・「変カ」（上下層混同経石No. 440）

がある。

第4表 墨書文字判読・法量一覧表

凡 例

1. この表は、出土層位ごとにとりあげた経石総計8,740点のうち、今日なお墨書きされた文字を認めることのできるもの1,404点を対照としている。(第2表参照)
2. 判読は各経石の両面について行ない、さらに計測した。
3. はっきり判読できない文字は、不詳または(例 佛々)とカのルビを付した。
4. 確実に判読できた文字は、番号欄に○印を付したが、これについては、さらに画数ごとに分類した(第5表参照)。

下層 経 石 (その1)

番号	表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	重さg	番号	表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	重さg
(1)	等	不詳	2.6	2.2	0.4	4	(41)	闇	不詳	2.8	2.8	0.3	3
(2)	界	界	4.6	3.5	0.5	10	(42)	度	度	5.0	3.5	1.3	35
(3)	夷	夷	2.8	1.9	0.3	3	(43)	分	分	3.9	2.8	0.7	6
(4)	妙	妙	5.0	3.4	1.1	25	(44)	法	法	3.8	3.0	1.1	11
(5)	善	善	3.5	2.6	0.7	10	(45)	却	却	4.6	3.2	0.9	12
(6)	於	於	3.4	2.7	0.4	4	(46)	丘カ	丘カ	4.0	2.7	0.5	5
(7)	難	難	4.0	3.3	0.7	14	(47)	薩	不詳	6.5	3.6	0.7	26
(8)	毫	不詳	4.0	2.4	0.7	9	(48)	國	國	4.3	2.5	0.6	6
(9)	當	當	3.5	2.7	0.9	9	(49)	佛	佛	3.7	2.7	0.7	5
(10)	於	於	4.7	3.2	1.0	12	(50)	者	不詳	3.2	2.3	0.8	5
(11)	妻	不詳	4.2	3.1	0.8	14	(51)	利	利	4.5	3.0	1.0	11
(12)	慧	不詳	5.6	4.6	0.7	24	(52)	薩	薩	4.1	2.4	0.8	7
(13)	菩	菩	3.2	2.8	0.8	11	(53)	一	一	2.4	2.4	0.9	3
(14)	艱	不詳	4.0	3.8	0.8	21	(54)	無	無	4.2	2.6	0.7	10
(15)	疑	不詳	3.3	3.0	0.8	10	(55)	世	世	4.5	2.7	0.7	10
(16)	道	不詳	5.7	3.0	0.9	22	56	不詳	不詳	4.3	3.5	0.2	4
(17)	戲	戲	4.8	3.5	0.8	26	(57)	佛	佛	3.8	2.7	0.6	9
(18)	薩	薩	3.4	2.5	0.8	5	(58)	佛	不詳	5.8	3.3	0.8	21
(19)	美	美	4.9	2.3	0.8	11	(59)	菩	菩	4.0	3.0	1.0	11
(20)	百	不詳	3.8	3.8	1.5	24	(60)	固	固	3.6	2.1	0.7	8
(21)	不詳	不詳	3.5	3.0	0.3	8	(61)	道	道	3.9	2.5	1.2	20
(22)	眼	眼	2.8	2.3	1.0	5	(62)	生	生	3.0	2.7	1.2	11
(23)	謂	謂	5.2	3.3	0.7	20	(63)	是	是	3.5	2.3	0.6	4
(24)	諸	諸	3.6	3.8	0.7	11	(64)	偏	不詳	3.2	2.7	0.8	4
(25)	教	教	3.7	2.4	0.9	8	(65)	人	人	3.5	2.7	0.8	6
(26)	無	無	3.8	3.3	0.7	10	(66)	應	應	4.7	3.2	1.3	15
(27)	衆	衆	4.4	3.4	1.4	16	(67)	支	支	4.0	3.8	0.8	16
(28)	彼	彼	3.3	2.0	0.5	4	(68)	恐	恐	5.5	2.8	0.8	20
(29)	能	能	4.6	3.5	1.4	32	(69)	佛	佛	4.4	3.0	0.7	10
30	不詳	不詳	4.3	2.8	0.4	10	(70)	妄	妄	3.5	2.0	0.7	4
31	懶カ	懶カ	2.8	2.5	0.7	5	71	不詳	不詳	3.9	2.4	1.0	11
(32)	觀	觀	3.3	2.6	0.5	5	(72)	當	當	4.5	3.5	1.2	21
(33)	見	見	3.7	2.7	0.5	8	(73)	利	利	3.4	2.8	1.0	14
(34)	甚	甚	3.1	3.0	0.6	11	(74)	或	或	4.8	2.5	1.1	21
(35)	薩	薩	3.4	2.7	0.7	10	(75)	得	不詳	4.3	3.2	1.0	14
(36)	何	何	2.3	2.2	0.6	5	(76)	菩	菩	5.2	3.6	0.7	24
37	說	說	4.1	2.7	0.5	6	(77)	八	八	3.0	3.0	0.6	8
(38)	及	乃	3.7	2.9	0.7	10	(78)	習	習	3.0	2.3	0.8	4
(39)	菩	不詳	3.3	2.3	0.6	6	(79)	有	有	3.8	2.5	0.6	5
(40)	委	不詳	5.1	3.7	0.8	28	(80)	菩	菩カ	3.0	2.5	0.4	4

下層経石（その2）

番号	表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	重さg	番号	表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	重さg
81	得カ	不詳	4.3	3.2	0.8	17	(81)	佛	佛	2.7	2.0	0.5	4
(82)	如	如	4.6	3.4	1.0	22	(82)	三	三	3.0	2.8	0.4	5
(83)	供	不詳	3.4	3.1	0.7	13	(83)	可	可	3.2	2.6	0.8	10
(84)	不	不	3.3	3.3	0.4	5	(84)	者	者	2.9	1.9	0.6	3
(85)	利	刹	3.9	3.2	0.9	13	(85)	大	大	4.7	2.3	0.7	15
(86)	害	害	3.1	2.7	0.7	11	(86)	是カ	是カ	4.7	2.8	0.8	15
(87)	得	得	4.8	3.7	0.0	21	(87)	放	不詳	4.0	2.8	0.8	8
88	讐カ	不詳	3.3	2.7	0.8	12	(88)	省カ	不詳	2.9	1.9	0.8	4
(89)	観	観	3.5	2.3	0.7	8	(89)	意	意	4.0	3.0	0.3	7
90	者カ	者カ	4.0	2.5	0.5	7	(90)	佛	佛	4.5	2.9	0.5	11
(91)	但	但	3.2	2.4	0.7	8	(91)	惣	惣	3.7	2.6	0.6	7
(92)	復	復	2.7	2.4	0.5	4	(92)	佛	佛	4.3	2.5	0.7	14
(93)	是	不詳	4.4	3.0	0.8	6	(93)	是	是	4.8	3.3	1.4	26
(94)	持	持	4.3	2.3	0.7	10	(94)	此	此	2.9	2.7	0.4	4
95	喜カ	喜カ	4.8	3.0	0.9	14	(95)	聖	不詳	4.2	2.5	0.8	11
(96)	衆	衆	6.1	2.9	0.8	21	(96)	聲	聲	2.7	2.8	0.6	4
(97)	信	信	4.0	3.0	1.0	12	(97)	清	清	2.6	2.1	0.3	3
(98)	此	不詳	4.4	3.3	0.3	4	(98)	者	者	3.9	2.3	0.7	10
(99)	基	基	4.2	3.0	1.2	13	(99)	薩	薩	4.8	3.5	0.9	25
(100)	波	波	3.7	2.3	0.9	11	(100)	慧	不詳	3.2	2.1	0.3	3
(101)	佛	佛	2.8	2.7	0.7	7	(101)	意	意	3.4	3.0	1.0	20
(102)	諸	諸	3.9	2.4	0.7	6	(102)	即カ	即カ	3.3	2.2	0.5	5
(103)	生	生	2.7	2.4	0.8	4	(103)	罵	罵	2.5	2.3	0.5	3
(104)	衆	衆	3.5	2.7	0.5	5	(104)	無無	ナシ	4.8	2.2	0.8	11
(105)	林	林	5.9	5.0	1.0	42	(105)	唯	唯	4.7	3.7	1.5	30
(106)	阿	不詳	3.5	2.4	0.4	4	(106)	意	意	3.4	2.0	0.6	4
(107)	等	不詳	4.1	3.3	1.2	17	(107)	無	無	3.0	2.7	0.5	4
108	子孫悠久之頬白 竟保三多之微白	乘	5.3	4.6	0.8	30	(108)	減	減	4.8	2.5	0.8	13
109	不詳	不詳	4.0	3.6	0.7	14	(109)	世	世	2.8	2.0	1.0	5
(110)	意	意	4.8	3.0	1.0	22	(110)	息	不詳	5.3	3.4	0.8	22
(111)	少	少	2.9	2.8	0.6	6	(111)	現	現	4.5	3.0	1.0	21
(112)	佛	佛	3.3	2.5	0.7	10	(112)	而	而	4.3	2.5	0.9	14
(113)	衆	衆	4.0	2.3	0.3	4	(113)	者	者	3.6	2.5	0.8	10
114	便カ	不詳	5.3	4.4	0.7	31	(114)	是	不詳	4.2	2.9	1.0	10
(115)	惟	惟	4.6	3.4	0.8	17	(115)	佛	佛	3.3	2.2	0.7	7
(116)	當	當	4.7	2.7	0.7	11	(116)	塞	塞	4.3	2.4	0.5	9
(117)	無	無	2.7	2.3	0.8	7	(117)	利	利	3.7	2.5	0.7	11
(118)	形	形	2.8	2.2	0.5	4	(118)	盡	盡	5.1	3.5	0.9	20
(119)	以	以	3.0	1.9	0.4	4	(119)	得	得	4.3	2.5	0.8	9
(120)	若	若	4.0	2.7	0.9	21	(120)	乗	不詳	4.7	3.7	0.6	11
(121)	放	放	3.3	3.0	1.0	12	(121)	子	不詳	3.3	3.2	0.5	4
(122)	音	音	4.4	2.8	0.5	12	(122)	掌	掌	4.2	2.7	1.0	11
123	等カ	不詳	3.2	2.5	0.7	10	(123)	是	是	4.0	3.2	0.5	12
(124)	飄	飄	4.0	2.5	0.5	11	(124)	不詳	不詳	4.1	2.5	0.4	8
(125)	穩	穩	4.6	3.5	0.6	13	(125)	宅	宅	3.7	3.8	0.8	12
(126)	何	不詳	3.3	3.3	0.7	11	(126)	官	官	4.8	2.5	0.9	13
(127)	有	有	4.3	4.0	0.9	21	(127)	成	成	4.1	2.2	0.6	8
128	慈カ	不詳	4.6	3.8	0.7	20	(128)	減	減	5.0	2.7	0.8	20
(129)	得	得	4.6	3.0	0.9	20	(129)	重	重	4.1	3.3	0.7	14
(130)	薩	薩	4.2	3.2	0.7	14	(130)	佛	佛	4.3	2.8	0.8	8

下層 経石 (その3)

番号 表 裏 幅cm 横cm 厚さcm 重さg

(181) 得 不詳 4.0 3.2 0.7 18

(182) 面 面 4.5 2.9 0.8 14

(183) 一 一 3.8 3.1 0.7 5

(184) 之 之 4.1 2.2 0.6 5

185 此 舍カ 2.8 2.7 0.8 4

186 不詳 不詳 4.2 2.6 0.8 11

(187) 明 明 3.7 3.2 0.5 10

(188) 身 身 2.9 2.0 0.5 2

(189) 智 不詳 4.3 3.7 0.7 21

(190) 間間 ナシ 4.7 2.4 1.9 30

(191) 因 因 3.0 2.5 0.7 10

(192) 至 至 4.4 3.6 1.0 28

(193) 世 世 3.9 3.0 0.6 11

(194) 世 不詳 3.8 2.7 0.7 4

(195) 若 不詳 4.4 3.5 0.5 22

(196) 瑞 端 4.0 2.9 0.5 12

(197) 處 處 3.4 2.5 0.3 3

(198) 者 者 3.3 2.1 0.5 3

(199) 身 身 3.9 2.6 0.7 11

200 不詳 不詳 4.0 3.8 1.0 24

(201) 量 量 4.6 2.7 0.8 11

202 不詳 不詳 3.7 2.8 0.6 8

(203) 損カ 損カ 3.4 3.2 0.8 14

(204) 劫 劫 4.3 3.5 0.8 21

(205) 薩 薩 3.9 1.9 0.6 4

(206) 事 事 4.2 3.0 0.8 14

(207) 人 人 4.3 3.3 0.9 14

(208) 衣 衣 3.2 2.4 0.4 6

(209) 中 中 3.0 2.1 0.6 6

210 不詳 不詳 3.1 2.5 1.0 12

(211) 濁 濁 3.0 2.4 0.6 5

212 不詳 不詳 4.7 2.8 0.9 18

上層 経石 (その1)

番号 表 裏 幅cm 横cm 厚さcm 重さg

(1) 種 種 4.4 3.3 1.1 25

(2) 大 大 4.1 3.5 0.8 21

(3) 舍 舎 4.5 3.3 1.2 21

(4) 阿 阿 4.2 2.6 1.0 12

(5) 利 利 5.0 3.7 1.3 29

(6) 佛 佛 4.3 4.3 1.4 31

(7) 師 師 4.0 3.2 0.8 14

(8) 於 於 5.2 2.9 0.9 14

(9) 未 未 4.7 3.0 1.0 18

(10) 若 若 4.4 4.0 1.5 41

(11) 生 生 4.8 3.9 0.8 14

12 不詳 不詳 3.2 2.6 0.5 5

(13) 觀カ 不詳 3.7 3.1 0.8 11

(14) 諸 諸 4.0 2.9 1.2 21

(15) 弔カ 弔カ 3.9 2.9 1.0 11

(16) 之 之 4.0 3.1 1.3 10

(17) 地 不詳 3.6 2.9 0.7 5

(18) 與 與 2.8 2.9 0.5 5

(19) 法 法 3.7 1.8 0.7 9

(20) 薩 薩 3.5 2.3 0.6 21

(21) 不詳 不詳 3.4 3.0 0.6 11

(22) 復 復 4.5 3.2 1.2 10

(23) 是 是 3.8 2.3 1.1 10

(24) 談 談 3.0 2.6 0.8 15

(25) 音 音 4.0 2.5 0.6 11

(26) 賢 賢 4.5 2.7 1.0 21

(27) 音 音 3.2 3.0 0.9 8

(28) 醒 醒 4.3 3.8 1.0 21

(29) 或 不詳 3.4 2.5 0.4 14

(30) 賢 賢 5.7 4.1 0.7 11

(31) 意 意 4.3 2.6 0.8 5

(32) 中 不詳 3.6 3.0 0.6 10

(33) 其 不詳 3.3 2.5 0.7 31

(34) 禮 不詳 2.9 2.5 0.8 11

(35) 汝カ 不詳 4.1 3.0 1.2 14

(36) 若 不詳 3.4 2.8 0.8 5

(37) 終 終 3.9 2.5 1.1 11

(38) 聰カ 聰カ 3.6 2.4 0.9 5

(39) 不詳 不詳 3.2 2.7 0.8 11

(40) 供 不詳 4.2 3.3 0.8 12

(41) 談 談 3.4 2.4 0.9 8

(42) 其 其 4.4 4.1 0.7 15

(43) 淩 淩 3.9 4.0 0.9 15

(44) 非 不詳 3.1 2.3 0.4 3

(45) 可 不詳 4.0 3.4 0.4 10

(46) 世 世 4.0 2.9 0.5 10

(47) 丘 不詳 3.6 2.4 0.7 9

(48) 惠 惠 2.6 2.6 0.4 2

(49) 之 之 5.4 2.8 0.8 12

(50) 念 念 3.9 2.5 0.9 10

上層経石(その2)

番号	表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	重さg	番号	表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	重さg
(51)	是	是	4.4	2.8	1.3	20	101	十又は千カ	不詳	3.2	2.5	1.2	8
(52)	希	希	4.8	3.4	0.9	21	102	得カ	不詳	3.5	3.3	0.6	11
(53)	士	士	3.8	3.4	1.0	21	103	佛	佛	5.0	3.3	1.1	31
(54)	量	量	5.2	3.4	0.8	22	104	佛	佛	3.0	2.0	0.6	3
(55)	度	度	4.1	2.8	1.3	21	105	羅	羅	5.2	3.2	0.8	21
(56)	間	間	3.9	2.7	1.0	12	106	大	不詳	3.9	3.4	1.5	30
(57)	偈	偈	3.8	4.0	1.0	21	107	男	男	5.0	2.9	0.6	15
(58)	觀	觀	3.8	3.9	0.7	22	108	但	不詳	4.9	3.5	0.7	11
(59)	涅	涅	4.0	2.3	0.5	10	109	衆	衆	2.7	2.5	1.6	7
60	廣カ	廣カ	5.0	3.8	0.7	20	110	不詳	不詳	3.8	3.2	1.2	15
(61)	生	生	5.0	2.5	1.1	21	111	不詳	不詳	4.5	3.4	0.8	22
(62)	慧	慧	3.8	3.5	0.8	12	112	種カ	種カ	5.4	3.8	0.8	29
(63)	能	不詳	3.9	4.0	1.0	21	113	為	為	4.2	3.6	0.7	14
(64)	常	常	3.8	2.9	1.3	22	114	不詳	不詳	4.1	3.7	0.4	12
65	不詳	不詳	3.5	3.4	0.9	19	115	不詳	不詳	3.6	3.0	0.6	15
(66)	知	知	3.8	3.4	0.6	12	116	德カ	不詳	3.8	2.9	0.8	12
(67)	分	不詳	4.4	3.2	0.9	21	117	優	不詳	4.5	3.0	0.9	15
(68)	此	此	3.0	2.0	0.7	12	118	何カ	不詳	3.3	3.3	0.9	10
(69)	由	由	3.8	2.4	0.9	11	119	不詳	不詳	3.0	2.6	0.3	4
(70)	惡	惡	4.7	3.3	0.6	18	120	裕カ	不詳	5.4	4.2	0.8	36
(71)	忿	忿	4.0	2.5	0.6	12	121	不詳	不詳	5.1	3.0	0.7	16
72	僧侶カ	不詳	5.1	3.0	0.5	12	122	乗カ	乗カ	4.8	3.3	0.7	18
(73)	於	於	4.1	3.1	0.9	18	123	不詳	不詳	3.7	3.4	0.7	16
(74)	不	不	3.0	2.5	1.0	11	124	上	上	4.4	4.3	0.7	21
(75)	子	子	4.3	4.1	0.8	21	125	切	不詳	3.4	3.0	0.8	10
76	不詳	不詳	3.8	3.5	0.7	16	126	不詳	不詳	3.6	3.0	0.8	16
(77)	勿	勿	4.4	3.2	0.6	12	127	佛カ	佛カ	3.4	3.3	0.6	12
(78)	脫	脱	4.4	3.5	0.5	14	128	弗カ	弗カ	5.3	3.3	1.0	22
(79)	衆	衆	3.7	2.0	0.8	11	129	心カ	心カ	4.5	3.2	0.8	21
(80)	夜	夜	3.4	2.0	0.7	8	130	不詳	不詳	3.4	3.4	0.7	14
(81)	舍	舍	3.5	2.7	0.7	12	131	不詳	不詳	3.7	2.2	0.8	10
(82)	敬	敬	3.8	3.4	0.7	18	132	菩カ	菩カ	4.3	3.2	0.3	8
(83)	百	百	4.7	3.6	0.7	24	133	不詳	不詳	4.0	2.8	0.8	11
(84)	丘	不詳	5.0	2.5	0.7	14	134	不詳	不詳	4.9	2.8	0.7	16
(85)	盡	盡	3.5	2.6	0.8	12	135	不詳	不詳	4.4	3.2	0.6	17
86	作カ	不詳	3.9	2.5	0.4	5	136	與	與	3.3	2.8	0.6	10
(87)	王	王	3.9	2.9	0.9	14	137	衆	衆	5.4	3.5	0.6	21
88	起口	起口	4.0	2.7	1.2	14	138	願カ	不詳	5.5	4.2	0.9	31
89	不詳	不詳	4.3	2.7	0.6	8	139	像	像	4.5	2.5	1.0	14
(90)	百	百	4.6	3.1	0.7	19	140	當	當	4.7	2.3	0.4	9
(91)	旦	不詳	3.5	3.0	0.5	8	141	盡	盡	3.0	2.6	0.7	8
(92)	苦	苦	3.5	2.3	0.3	5	142	中	中	3.0	2.5	0.7	9
(93)	丘	丘	3.9	2.2	0.0	10	143	三	三	4.5	2.5	1.2	21
94	不詳	不詳	4.7	3.4	0.8	22	144	等	等	3.2	2.7	0.7	15
(95)	世	世	5.1	2.9	0.9	21	145	塔	塔	4.6	2.7	0.5	10
(96)	得	得	3.8	3.3	0.9	16	146	誓カ	誓カ	4.6	2.4	0.6	14
97	不詳	不詳	4.1	3.5	0.0	22	147	能	能	4.2	3.6	0.8	12
(98)	故	不詳	4.4	2.5	1.7	20	148	遂カ	遂カ	3.8	3.6	1.3	21
(99)	十	十	4.1	2.1	0.7	10	149	人	人	5.4	4.0	0.8	22
(100)	一	一	3.3	2.6	0.8	9	150	若	若	3.2	3.0	0.7	8

上層 経石 (その3)

番号	表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	重さg	番号	表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	重さg
151	不詳	不詳	4.2	4.1	1.0	30	201	佛	佛	4.7	2.6	0.6	6
152	樂	樂	3.8	3.6	1.5	29	202	不詳	不詳	3.9	2.4	0.6	10
153	佛	佛	3.8	2.5	0.4	4	203	一	一	3.9	2.5	0.9	11
154	欲々	不詳	3.3	2.7	0.6	4	204	如	如	3.9	3.4	0.9	20
155	圓	圓	3.9	2.4	0.8	7	205	敬	敬	4.2	3.2	1.2	19
156	徹々	徹々	3.8	3.3	0.5	11	206	來	不詳	3.3	3.0	0.3	10
157	念	念	4.9	3.3	0.8	14	207	受	不詳	4.2	3.7	0.6	21
158	衆	衆	3.9	3.1	0.6	9	208	無	無	4.0	3.0	0.5	10
159	知	不詳	3.5	3.3	0.8	14	209	脫	脫	3.6	2.1	0.3	6
160	咒	ナシ	4.6	3.7	1.0	22	210	身	身	4.1	3.2	0.6	12
161	衆	衆	5.7	3.9	0.7	22	211	無カ	不詳	3.9	3.1	0.7	12
162	等	等	2.9	2.6	0.8	5	212	工	不詳	3.9	3.1	0.8	15
163	受	受	4.2	2.9	0.7	14	213	常	不詳	5.0	2.6	1.0	11
164	所	不詳	4.9	3.1	0.7	17	214	懃	不詳	4.8	3.2	1.3	24
165	三	三	4.6	2.3	0.5	7	215	欲	欲	3.2	2.9	0.5	9
166	法	法	4.3	2.9	0.4	10	216	天	天	4.2	3.3	0.6	11
167	奇	不詳	2.8	2.1	1.0	8	217	上	不詳	2.9	2.6	0.7	4
168	入	不詳	3.5	3.3	0.9	12	218	勒	勒	5.2	2.2	0.6	11
169	所	所	4.2	3.2	0.8	21	219	思	不詳	4.5	2.5	0.8	11
170	度	度	3.0	2.6	0.6	4	220	應	應	5.3	2.0	1.0	28
171	七	七	2.7	2.7	0.7	8	221	是	是	3.4	3.0	0.8	5
172	開	開	4.2	3.1	1.1	20	222	典	典	3.3	2.0	0.7	11
173	劫	劫	4.1	3.2	0.6	10	223	我	我	3.5	3.3	0.5	8
174	聞	聞	3.8	3.1	0.8	12	224	成	成	3.2	3.4	1.2	14
175	乘	榮	3.0	3.3	0.7	10	225	不	不	3.2	2.8	0.7	6
176	河	河	3.3	2.2	0.5	5	226	上	不詳	4.0	2.9	0.6	10
177	四	四	4.0	2.2	0.9	11	227	諸	諸	4.4	2.7	0.7	10
178	本	本	6.9	3.9	1.0	26	228	現	不詳	4.7	2.2	0.5	9
179	復	復	3.7	3.0	1.2	20	229	不詳	不詳	3.8	3.0	0.5	7
180	子	子	3.9	3.0	0.8	12	230	無	無	3.4	3.4	1.3	12
181	卒々	卒々	3.3	2.3	0.7	5	231	諸	諸	3.3	2.8	0.8	10
182	息	不詳	3.8	3.4	1.1	22	232	必	必	3.5	2.6	0.4	7
183	罪	罪	4.1	2.5	0.7	7	233	夷	夷	5.2	2.7	0.4	11
184	菩	菩	2.0	1.6	0.2	2	234	喻	喻	4.6	2.7	0.5	6
185	故	不詳	5.5	3.6	1.0	30	235	因	因	3.1	2.3	0.6	6
186	弗	弗	3.9	3.9	0.8	20	236	處	處	3.8	3.3	0.5	10
187	不	不	3.9	2.2	0.7	8	237	便	便	3.6	3.0	1.1	11
188	相	相	3.8	3.3	0.7	12	238	聲	聲	4.5	3.0	0.8	14
189	癪	癪	3.3	2.5	0.9	9	239	丘	丘	4.0	3.0	0.9	12
190	證	證々	3.6	3.2	0.6	10	240	著々	不詳	3.4	2.4	0.5	5
191	聞	聞	4.4	2.6	0.8	12	241	諸	諸	3.5	1.8	0.7	5
192	掌	掌	4.1	2.9	0.6	12	242	恒	恒	3.7	1.9	0.8	4
193	所	所	3.3	3.0	0.8	10	243	持	持々	4.8	2.7	0.8	14
194	乘	乗	4.4	3.5	0.5	11	244	衆	衆	3.4	3.3	0.7	10
195	是	是	2.5	2.5	0.5	6	245	色	不詳	3.5	3.2	0.7	10
196	若	若	4.0	2.3	0.8	14	246	佛	佛	4.5	2.4	0.9	11
197	子	子	4.2	2.3	0.4	8	247	如	如	4.5	2.1	0.5	9
198	受	受	4.0	3.1	0.7	11	248	三	三	3.0	2.6	0.5	5
199	是	不詳	4.2	2.9	0.8	12	249	音	不詳	5.0	2.8	0.7	16
200	即	即	4.2	2.3	0.5	5	250	皇	不詳	4.7	3.5	0.8	21

上層 経石 (その4)

番号	表	裏	綫cm	横cm	厚さcm	重さg	番号	表	裏	綫cm	横cm	厚さcm	重さg
(251)	辭	辭	4.8	3.6	0.8	21	301	弱カ	不詳	4.5	3.4	0.7	10
(252)	疾	疾	3.4	2.9	0.8	11	302	至	至	2.8	2.7	0.6	8
(253)	此	此	4.3	2.9	0.5	9	303	有	不詳	4.4	3.0	0.9	20
(254)	身	身	4.0	2.9	0.6	10	304	難	不詳	4.1	3.6	0.9	21
(255)	持	持	2.9	1.7	0.3	4	305	宅カ	說	4.5	2.6	0.6	11
(256)	龍	龍	4.0	3.3	0.7	12	306	天	天	4.2	2.9	0.9	20
(257)	無	無	4.1	2.6	0.9	11	307	何	何	4.4	3.5	0.9	17
(258)	苦	苦	4.3	3.4	1.1	21	308	苦	苦	3.8	3.7	0.8	19
259	不詳	不詳	5.0	3.3	1.2	22	309	尼	尼	3.4	2.1	0.5	4
(260)	入	入	4.2	3.0	0.5	11	310	不詳	不詳	3.6	2.1	0.7	6
(261)	王	王	3.5	2.3	1.0	12	311	子	子	4.9	3.4	0.7	15
(262)	意	意	3.3	2.7	0.5	5	312	進	進	3.2	3.4	0.7	11
(263)	可	可	4.6	3.8	0.8	22	313	偈	偈	3.5	3.0	1.4	21
(264)	無	無	4.1	2.8	0.6	12	314	陀	不詳	3.8	2.7	1.0	20
(265)	乗	乗	4.6	2.2	0.8	11	315	我	我	3.4	3.4	0.5	10
(266)	弗	弗	4.6	3.0	1.4	12	316	憂	憂	2.6	2.2	0.5	4
(267)	見	見	2.8	2.0	0.5	4	317	觀	觀	3.6	2.5	0.7	8
(268)	心	不詳	4.2	3.5	0.5	11	318	而	而	3.6	2.3	0.8	4
(269)	世	世	4.0	3.7	0.7	11	319	薩	薩	4.8	3.2	1.1	21
(270)	我	我	2.8	2.3	0.7	8	320	方	方	3.2	2.2	0.7	4
(271)	至	至	3.0	2.4	0.3	4	321	常	常	2.8	2.4	0.5	4
(272)	可	可	4.1	2.8	0.8	12	322	至	不詳	4.4	3.9	0.8	22
(273)	佛	佛	2.8	1.9	0.3	3	323	名	名	5.5	3.2	0.6	21
274	不詳	不詳	5.4	3.4	1.0	28	324	羅	羅	3.4	2.7	0.8	11
(275)	舍	舍	2.9	2.4	0.8	10	325	界	界	3.8	2.5	0.4	8
276	沾カ	不詳	3.5	2.2	0.5	10	326	立	不詳	2.8	2.3	0.7	6
(277)	婆	婆	3.8	1.8	0.5	8	327	是	是	3.6	3.3	0.4	10
(278)	今	今	3.5	2.8	0.8	12	328	染	染	4.0	3.2	1.3	16
(279)	徳	不詳	3.9	2.5	0.9	11	329	千	千	3.3	2.4	1.0	11
(280)	白	白	3.7	2.8	0.7	10	330	將	將	5.0	3.1	1.0	21
281	不詳	不詳	4.5	2.3	0.7	5	331	法	法	3.2	2.6	0.5	4
(282)	不	不	4.8	2.9	0.8	21	332	菩	菩	3.7	3.5	0.6	11
(283)	而	不詳	4.2	3.0	0.8	12	333	受	受	ナシ	3.9	2.1	0.5
(284)	乗	不詳	4.2	2.6	0.8	20	334	貧	貧	2.7	2.2	0.4	4
(285)	因	因	4.7	3.2	0.8	17	335	見	見	3.6	2.4	0.9	11
(286)	乾	乾	4.0	3.0	0.9	20	336	望	望	6.2	2.5	0.7	15
(287)	十	十	4.6	2.1	0.6	10	337	智	智	2.7	3.1	0.4	4
(288)	佛	佛	4.8	3.0	1.0	11	338	梵	梵	4.1	2.3	0.4	7
(289)	像	像	4.4	3.5	0.6	14	339	怨	怨	4.6	2.8	0.8	12
(290)	等	等	4.2	2.8	0.6	12	340	歎	歎	4.1	2.5	0.8	10
(291)	當	當	3.2	2.5	0.4	4	341	皆	不詳	4.7	3.5	0.8	21
(292)	無	無	4.2	2.8	0.5	4	342	佛	佛	4.4	3.4	0.7	20
(293)	觀	不詳	3.6	2.5	0.5	6	343	是	是	4.7	2.2	0.5	8
(294)	中	中	4.2	2.3	0.4	4	344	無	不詳	4.0	2.4	0.9	10
(295)	是	是	3.0	2.7	0.8	7	345	諸	諸	3.6	2.6	0.5	8
(296)	彼	彼	4.1	3.5	0.7	14	346	優	優	3.6	2.5	0.5	4
297	一	不詳	4.2	3.3	0.5	10	347	薩カ	薩カ	3.5	2.9	0.7	12
298	架カ	架カ	3.8	3.0	0.9	16	348	薩	薩	3.4	2.4	0.7	10
(299)	甚	甚	4.4	3.3	1.0	27	349	戲	戲	3.4	2.8	1.3	14
(300)	觀	不詳	2.6	2.4	0.6	4	350	龍	龍	3.0	2.5	0.7	7

上層 経石 (その5)

上下層混同経石 (その1)

番号	表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	重さg	番号	表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	重さg
(31)	衆	衆	3.1	2.3	0.5	4	(1)	諸	諸	5.0	3.0	0.5	15
(32)	密	不詳	3.5	2.4	0.6	4	(2)	前	前	4.5	3.0	1.0	24
(33)	摩	摩	3.3	2.9	0.7	6	(3)	天	不詳	7.0	3.7	1.3	47
(34)	界	不詳	3.4	3.2	0.4	10	(4)	界	界	6.0	3.3	0.5	11
(35)	生	生	4.1	3.1	0.8	16	(5)	求	不詳	6.0	3.5	1.0	32
(36)	波	不詳	2.8	2.3	0.3	4	(6)	乗	乗	5.0	2.5	1.0	20
(37)	賊	賊	3.5	3.4	0.8	15	(7)	受	受	4.8	3.5	1.0	22
(38)	回	回	4.3	3.1	1.0	15	(8)	大	大	4.2	2.5	0.8	12
(39)	見	見	3.3	2.6	0.5	10	(9)	拂	不詳	5.0	3.0	0.8	14
(40)	之	之	4.8	3.8	0.8	21	(10)	不詳	不詳	5.2	2.5	1.0	20
(41)	數	數	4.1	3.6	0.6	15	(11)	黨	黨	3.0	3.5	1.0	10
(42)	演	演	3.4	2.2	0.9	11	(12)	弘	弘	3.5	2.5	0.5	8
(43)	意	意	3.0	2.9	0.6	8	(13)	聚	聚	3.8	3.3	0.8	12
(44)	難	難	4.2	4.9	1.2	38	(14)	起	不詳	4.0	3.0	1.5	16
(45)	得	得	4.7	4.9	0.5	20	(15)	復	復	3.0	3.0	0.7	6
(46)	苦	苦	2.9	2.4	0.8	10	(16)	不詳	不詳	3.7	2.7	0.7	6
(47)	天	天	4.6	2.9	0.7	12	(17)	不詳	不詳	3.5	2.5	0.7	4
(48)	超	超	4.2	3.0	1.1	21	(18)	不詳	不詳	3.7	2.5	0.7	6
(49)	觀	觀	2.8	2.1	0.6	5	(19)	死	不詳	7.3	3.7	0.8	32
							(20)	左	左	4.2	3.2	1.1	19
							(21)	不詳	不詳	3.8	2.5	0.6	6
							(22)	佛	不詳	4.5	2.5	0.7	12
							(23)	求	求	3.8	3.6	0.6	9
							(24)	念カ	念カ	4.5	2.8	0.7	9
							(25)	佛	佛	4.3	3.0	0.7	11
							(26)	不詳	不詳	3.5	3.0	1.5	24
							(27)	回カ	不詳	5.5	2.5	1.0	25
							(28)	乗	乗	4.7	3.5	1.2	24
							(29)	繞	繞	5.0	3.2	0.7	12
							(30)	見	不詳	5.5	4.3	1.0	39
							(31)	謂総	不詳	4.7	3.3	1.2	27
							(32)	種	種	4.0	3.2	1.0	14
							(33)	及	及	4.3	3.0	0.8	14
							(34)	莊カ	莊カ	3.8	2.7	0.9	13
							(35)	不	不	3.5	3.0	0.5	9
							(36)	征カ	不詳	4.5	3.5	1.0	17
							(37)	不詳	不詳	4.8	4.0	1.3	36
							(38)	於	不詳	4.2	3.8	1.0	16
							(39)	発カ	不詳	4.2	3.3	1.3	20
							(40)	蓮	不詳	3.5	3.4	1.0	10
							(41)	不詳	不詳	3.8	3.2	1.0	12
							(42)	中	中	4.5	3.0	1.5	20
							(43)	庚カ	不詳	5.0	4.0	0.8	22
							(44)	佛	佛	4.0	3.0	1.5	21
							(45)	佛	佛	4.2	3.3	1.0	13
							(46)	不詳	不詳	5.5	4.0	1.2	30
							(47)	虎	不詳	4.2	3.5	0.7	20
							(48)	持	持	5.7	3.2	0.9	11
							(49)	隨	隨	4.8	3.7	1.0	23
							(50)	余	余	5.4	4.0	1.0	26

上下層混同経石（その2）

番号	表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	重さg	番号	裏表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	重さg
(51)	無	無	3.8	3.2	1.0	12	(61)	我	我	3.0	3.0	0.7	9
(52)	淨	淨	4.0	3.7	0.8	13	(62)	等	等	4.4	3.8	1.0	20
53	南無阿弥陀 佛・如意	南無阿弥陀 佛・如意	5.5	4.2	0.8	22	(63)	諸	諸	3.8	3.0	0.7	4
(54)	如	如	4.5	2.8	1.5	22	(64)	般	不詳	4.0	3.2	1.1	11
(55)	密	不詳	5.0	3.0	1.2	24	(65)	法	不詳	5.5	4.3	0.9	26
56	不詳	不詳	4.2	3.0	0.3	5	(66)	到	到	5.4	3.9	1.0	22
57	不詳	不詳	4.5	3.3	0.8	10	(67)	念	念	3.1	2.6	0.9	4
(58)	慧	慧	3.8	3.7	0.5	9	(68)	千	千	4.5	2.8	1.1	21
(59)	無	無	4.7	5.1	1.5	53	(69)	不詳	不詳	4.4	3.8	0.9	13
(60)	是	是	4.3	3.8	1.5	32	(70)	偏	偏	4.4	3.8	1.0	21
(61)	峯	峯	4.8	3.5	0.8	10	(71)	中	中	4.3	4.0	0.7	12
(62)	縁	縁	4.5	3.6	1.7	24	(72)	諸	諸	3.1	2.5	0.8	6
63	徳々	不詳	5.2	3.8	0.8	22	(73)	實々	不詳	4.0	3.3	1.0	17
64	不詳	不詳	5.0	4.2	1.3	30	(74)	說	不詳	4.3	4.0	0.8	20
(65)	觀	觀	4.1	3.3	0.7	12	(75)	欲	欲	4.9	3.2	1.0	16
(66)	事	事	4.5	2.8	1.4	20	(76)	樂	樂	4.3	3.0	0.8	11
67	不詳	不詳	4.8	3.6	0.8	22	(77)	過	過	4.1	2.8	0.6	9
(68)	聞	聞	4.7	4.5	1.3	30	(78)	欲々	不詳	4.4	2.9	0.7	10
69	環々	不詳	3.4	3.8	0.4	8	(79)	願	不詳	4.0	2.8	0.7	5
(70)	得	得	5.2	4.0	0.6	22	(80)	車	車	4.6	2.6	1.0	18
71	不詳	不詳	4.1	3.6	1.0	21	(81)	於	於	4.3	3.4	0.7	12
(72)	佛	不詳	5.5	4.0	1.2	22	(82)	不詳	不詳	5.0	3.6	1.2	22
(73)	王	王	2.8	3.0	1.0	4	(83)	是	不詳	3.0	2.9	0.9	4
(74)	下	不詳	4.1	2.8	0.8	9	(84)	不詳	不詳	4.0	3.0	1.4	20
(75)	佛	佛	4.0	3.4	1.1	12	(85)	人	不詳	4.4	2.6	0.7	10
76	今々	不詳	3.7	2.5	0.8	5	(86)	支	支	4.4	3.8	1.1	11
(77)	生	生	4.9	2.8	0.8	12	(87)	天	不詳	4.7	3.0	0.7	10
(78)	亦	不詳	5.2	3.0	1.0	26	(88)	不詳	不詳	3.7	3.3	1.2	12
(79)	隨	不詳	4.7	2.9	1.0	16	(89)	佛	不詳	3.5	2.4	0.9	8
(80)	數	數	4.7	2.8	1.2	16	(90)	不詳	不詳	3.4	2.9	1.5	12
(81)	未	未	4.0	2.8	1.5	17	(91)	不詳	不詳	3.5	2.7	0.8	8
(82)	之	之	4.0	3.1	0.7	9	(92)	便	不詳	4.0	2.7	1.1	11
(83)	在	在	4.4	3.5	1.0	20	(93)	已	不詳	3.8	3.3	0.9	11
84	斯々	不詳	3.7	3.5	1.0	12	(94)	無	無	6.0	3.5	0.7	21
85	不詳	不詳	5.5	3.5	1.5	32	(95)	如	如	4.5	2.6	1.1	11
(86)	若	不詳	3.7	3.3	1.5	19	(96)	得	得	5.3	3.2	1.0	21
(87)	佛	不詳	3.6	2.5	1.2	12	(97)	現々	不詳	4.2	3.0	0.7	9
(88)	過	過	5.6	2.5	1.7	12	(98)	皆	皆	4.8	3.5	1.8	40
(89)	馬	馬	3.9	2.7	1.3	16	(99)	不詳	不詳	2.5	2.0	0.7	2
(90)	汝	汝	3.6	3.0	0.8	5	(100)	不詳	不詳	3.9	2.7	0.9	9
(91)	火	火	5.0	3.8	1.0	21	(101)	而	不詳	4.2	3.0	1.1	21
(92)	尔	不詳	4.9	3.1	1.2	28	(102)	禮	禮	4.5	4.2	1.2	31
(93)	功	功	4.5	2.6	0.7	10	(103)	為	不詳	5.5	4.0	0.7	17
(94)	世	世	4.1	3.0	0.6	6	(104)	法	法	3.3	3.1	1.0	10
(95)	滿	不詳	4.7	3.9	0.8	21	(105)	雨々	不詳	3.5	3.1	0.7	10
(96)	盈	盈	4.4	3.7	1.1	21	(106)	大	大	4.0	3.7	1.0	21
(97)	現	現	5.3	3.0	1.5	24	(107)	珠	不詳	4.5	2.7	1.0	12
98	不詳	不詳	4.5	3.8	0.8	13	(108)	念	念	5.6	3.3	1.2	20
(99)	願	願	4.1	3.0	1.0	14	(109)	萬々	不詳	3.8	3.1	0.4	3
100	不詳	不詳	4.2	3.1	1.0	12	(110)	不	不詳	6.7	4.5	1.5	65

上下層混同経石（その3）

番号	表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	重さg	番号	表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	重さg
(151)	前	不詳	4.7	3.9	1.3	22	(201)	羅	羅	5.3	3.3	1.5	21
152	不詳	不詳	4.1	2.7	1.2	11	(202)	薩	不詳	5.2	3.0	0.7	10
(153)	梵	梵	4.0	2.5	0.4	3	(203)	亦	亦	7.7	3.3	1.4	31
(154)	應	不詳	3.7	3.6	0.5	9	(204)	四	四	3.5	2.5	0.4	3
(155)	得	不詳	5.0	3.0	1.0	17	(205)	諸	諸	4.1	2.3	0.6	9
156	不詳	不詳	6.0	3.5	0.9	21	(206)	慧	慧	3.8	3.0	1.0	9
(157)	聖	聖	3.3	2.2	0.8	3	(207)	一	一	5.4	3.5	0.9	21
(158)	子	不詳	2.7	2.7	0.7	2	(208)	唵	唵	4.1	3.7	0.7	11
159	不詳	不詳	5.3	4.0	0.9	21	(209)	不	不	4.1	3.7	1.3	21
(160)	有	不詳	3.7	4.0	1.0	22	210	不詳	不詳	4.5	2.8	0.9	12
(161)	但	但	3.0	2.1	0.6	3	(211)	願	不詳	3.4	2.4	0.8	8
(162)	從	從	4.2	2.3	0.9	4	(212)	華	華	3.8	2.8	0.8	8
163	不詳	不詳	4.5	4.0	0.8	11	213	不詳	不詳	4.1	3.3	0.7	11
164	不詳	不詳	3.2	3.0	0.6	3	(214)	薩	薩	4.5	3.1	1.2	20
(165)	諸	不詳	4.0	3.5	0.8	17	215	不詳	不詳	3.8	2.0	0.4	2
166	不詳	不詳	5.2	4.0	0.0	21	216	庵カ	不詳	4.8	3.0	1.5	21
(167)	無	不詳	3.2	3.0	1.0	8	217	利カ	不詳	4.7	4.5	1.0	24
(168)	穴	不詳	4.6	3.3	1.6	21	(218)	根	根	3.4	3.1	0.4	10
(169)	現	現	3.0	3.6	1.1	12	(219)	生	生	3.9	2.8	0.7	10
(170)	受	受	3.8	3.1	1.2	10	(220)	身	身	4.7	4.1	1.2	31
(171)	薩	薩	3.0	3.8	0.9	15	(221)	衆	衆	4.4	3.0	1.0	14
(172)	三	三	5.9	4.1	1.0	22	(222)	立	立	5.3	4.5	1.0	37
(173)	行	行	4.0	3.3	1.1	22	(223)	神	不詳	3.5	3.7	0.7	11
(174)	身	不詳	4.7	2.7	0.8	11	(224)	彼	不詳	4.0	3.5	1.2	14
(175)	弗	弗	3.0	2.3	0.7	4	(225)	心	心	5.5	3.8	1.2	22
(176)	及	不詳	4.0	3.2	0.6	11	(226)	者	者	4.1	3.0	1.0	12
(177)	人	人	2.8	2.4	0.6	4	(227)	得	得	4.8	3.0	1.0	16
(178)	便	便	4.5	3.5	1.3	20	(228)	無	不詳	5.6	3.8	0.7	11
(179)	百	不詳	4.4	3.1	1.0	12	(229)	住	住	3.5	2.5	0.7	10
(180)	釋	釋	3.5	3.2	0.5	4	(230)	眞	不詳	6.3	3.8	0.6	31
(181)	先カ	不詳	4.1	3.0	1.5	21	(231)	是	不詳	5.6	2.6	1.0	19
(182)	亦	亦	4.7	3.2	0.7	11	(232)	如	如	4.8	3.5	0.8	11
(183)	我	不詳	5.0	3.7	1.2	21	(233)	佛	佛	3.5	2.3	0.3	3
(184)	佛	佛	4.5	3.0	0.7	11	(234)	法	不詳	5.3	3.3	0.8	21
(185)	作	作	4.0	2.5	1.2	7	(235)	般	不詳	5.8	3.6	1.0	42
(186)	亦	亦	4.3	3.2	1.3	21	(236)	塞	不詳	3.5	2.8	1.0	12
(187)	門	不詳	3.0	2.9	0.5	3	(237)	大	大	4.5	4.3	0.7	16
(188)	生	不詳	3.6	3.0	0.8	4	(238)	無	無	4.8	3.4	1.0	22
(189)	眷	眷	4.8	3.5	1.0	20	(239)	佛	不詳	4.6	4.6	0.8	26
(190)	欲	欲	4.4	3.1	0.8	16	(240)	倫	倫	4.3	3.2	0.7	12
(191)	萬	萬	4.0	3.8	0.7	10	(241)	濁	濁	3.8	3.9	0.8	21
(192)	弗	弗	5.5	4.7	1.0	29	(242)	但	但	5.0	3.0	0.8	20
(193)	因	因	3.3	2.5	0.5	2	(243)	一	一	3.5	2.8	1.3	12
(194)	切	不詳	3.4	3.2	1.0	13	(244)	亦	亦	4.0	4.2	0.6	17
(195)	頗	不詳	4.5	4.0	1.1	21	(245)	六	六	4.2	3.0	0.7	11
(196)	不詳	不詳	4.2	3.0	1.0	12	246	弗カ	弗カ	4.0	3.8	1.3	30
(197)	起	起	3.5	2.5	0.8	8	(247)	觀	不詳	3.3	2.7	0.8	10
(198)	如	如	4.1	2.6	0.7	10	(248)	貌	不詳	5.0	2.5	0.5	10
(199)	不詳	不詳	4.0	2.6	0.9	10	(249)	丘	丘	4.8	3.0	0.8	15
(200)	弗	弗	3.4	2.7	0.7	5	(250)	念	念	3.2	2.8	0.9	15

上下層混同経石（その4）

番号	表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	重さg	番号	表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	重さg
(251)	分	不詳	4.0	3.5	0.7	16	(301)	諸	諸	5.0	3.2	0.8	20
(252)	衣	衣	4.2	3.8	1.0	11	(302)	幹	幹	3.4	3.0	0.8	13
253	無カ	不詳	3.8	2.7	0.7	10	303	告カ	告カ	4.0	3.5	1.0	20
(254)	生	生	4.4	3.0	0.8	13	(304)	有	不詳	4.5	3.2	0.7	21
(255)	利	不詳	4.0	2.8	0.9	11	(305)	身	身	5.1	3.1	1.1	21
256	兵カ	兵カ	3.1	3.0	0.7	5	(306)	羅	羅	4.0	3.1	0.7	12
257	為カ	不詳	3.7	3.5	0.8	12	(307)	法	不詳	5.1	2.5	0.8	11
(258)	為	不詳	4.2	3.7	1.3	25	(308)	空	空	2.5	2.4	0.5	2
(259)	無	不詳	3.0	2.1	0.6	3	(309)	何	何	4.1	2.7	0.6	12
260	不詳	不詳	4.4	3.0	0.7	15	310	保カ	不詳	3.3	2.7	0.9	12
(261)	意	意	4.4	2.3	1.5	21	(311)	武	不詳	4.0	2.8	1.6	14
262	不詳	不詳	5.4	3.2	0.9	30	(312)	常	常	3.5	2.1	0.9	20
263	不詳	不詳	3.7	3.2	0.3	10	(313)	等	等	4.5	3.7	1.1	21
(264)	現	現	3.0	3.3	0.8	11	(314)	如	不詳	3.9	2.9	0.6	4
265	無カ	無カ	4.6	2.7	1.0	20	315	何カ	不詳	4.2	3.0	0.4	6
(266)	大	大	3.5	2.7	0.8	11	(316)	漏	不詳	3.8	2.5	0.4	5
(267)	薩	不詳	3.6	3.3	1.0	20	(317)	佛	不詳	4.9	3.8	0.7	12
268	不詳	不詳	4.5	4.0	1.5	31	(318)	齊	齊	5.0	2.7	0.7	12
(269)	若	不詳	4.8	3.8	1.4	36	(319)	無	無	5.5	3.1	0.6	14
(270)	恒	恒	3.5	3.0	0.8	11	(320)	者	者	4.7	3.3	0.7	20
271	不詳	不詳	3.0	3.1	0.8	12	(321)	弗カ	不詳	4.0	3.2	0.9	14
272	歎カ	不詳	3.0	2.1	0.3	2	(322)	大	不詳	3.7	3.3	0.5	12
(273)	徳	不詳	4.2	3.9	0.8	19	(323)	提	不詳	3.5	3.2	1.0	12
(274)	分	分	3.2	2.7	0.4	4	(324)	長	不詳	4.6	3.2	0.8	12
(275)	子	子	4.8	2.5	0.8	11	(325)	座	不詳	4.0	3.7	1.2	20
276	屠カ	不詳	3.8	3.4	0.9	20	(326)	二	二	2.9	2.2	0.5	5
277	離カ	不詳	4.6	3.2	0.4	15	(327)	作	作	3.8	3.2	1.0	14
(278)	如	如	4.4	3.0	1.2	16	(328)	得	得	2.8	2.0	0.6	2
(279)	異	不詳	5.7	4.2	1.2	41	(329)	化	化	4.4	2.9	0.9	12
(280)	唵	唵	5.0	4.9	1.2	14	(330)	大	大	3.8	3.3	0.9	13
(281)	意	意	3.5	3.0	1.0	14	(331)	人	人	3.8	2.6	0.8	10
(282)	爲	爲	5.5	2.7	0.6	10	332	尊カ	尊カ	3.6	2.1	0.7	4
283	嚢カ	嚢カ	6.3	3.0	0.7	20	(333)	念	念	4.5	2.8	0.9	16
(284)	後	不詳	5.1	2.3	1.2	16	(334)	阿	不詳	4.5	3.3	1.1	13
(285)	佛	佛	5.6	3.5	1.3	21	(335)	於	於	4.7	2.6	0.8	12
286	不詳	不詳	2.9	2.7	1.1	11	(336)	有	不詳	5.8	3.9	1.5	31
287	不詳	不詳	4.2	3.2	1.5	20	(337)	界	不詳	6.0	3.8	1.4	43
(288)	後	後	3.0	2.3	0.8	5	(338)	我	我	4.0	3.6	0.5	12
(289)	干	干	4.2	3.3	1.0	10	(339)	佛	佛	4.4	3.9	1.3	30
290	善カ	不詳	5.3	4.5	1.0	26	(340)	同	同	3.3	2.7	0.9	10
291	不詳	不詳	3.9	2.8	1.0	12	(341)	宮	宮	4.3	3.4	1.3	22
292	伍カ	不詳	5.5	4.3	1.2	58	(342)	左	左	4.3	2.4	0.8	11
(293)	淨	淨	3.8	4.2	1.0	20	343	不詳	不詳	3.3	2.9	0.8	10
(294)	能	能	3.8	3.7	1.1	11	344	有カ	不詳	4.6	3.2	0.7	12
(295)	教	不詳	5.4	5.2	0.9	38	(345)	爲	爲	3.5	2.8	1.2	12
(296)	諸	諸	4.1	3.6	0.8	14	(346)	佛	佛	3.7	2.5	1.2	13
297	濁カ	不詳	4.7	3.3	0.8	21	347	泰カ	不詳	4.1	2.7	0.5	11
(298)	得	得	3.5	4.0	1.0	22	(348)	仰	仰	5.3	2.8	0.7	13
(299)	有	不詳	3.2	2.5	1.0	6	(349)	風	風	4.2	3.0	0.8	12
(300)	故	故	4.0	3.2	0.8	12	350	不詳	不詳	4.7	4.2	1.3	21

上下層混同経石（その5）

番号	表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	重さg	番号	表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	島さg
(351)	有	有	5.5	2.9	0.8	14	401	得カ	不詳	3.5	2.1	1.0	7
352	座カ	不詳	3.7	2.7	1.0	11	402	等カ	不詳	3.7	2.5	0.6	6
(353)	者	者	4.0	2.7	1.2	12	(403)	不	不詳	5.0	4.5	1.6	32
(354)	現	現	5.7	3.0	1.0	21	(404)	願	願	6.0	3.3	0.5	17
355	不詳	不詳	3.5	3.0	0.9	12	(405)	人	人	3.8	3.1	0.7	11
(356)	是	不詳	4.5	3.7	0.6	12	(406)	破	破	4.8	4.1	0.9	31
(357)	然	然	4.9	3.4	0.7	18	(407)	一	不詳	3.5	3.0	0.7	12
(358)	是	是	3.6	2.1	0.7	6	408	求カ	求カ	4.0	3.2	0.8	17
(359)	可	可	3.5	3.0	0.9	12	(409)	男	不詳	4.0	2.9	1.1	20
(360)	佛	不詳	4.0	2.5	1.0	13	(410)	我	我	4.0	3.0	0.5	11
(361)	是	是	3.4	3.1	1.3	12	(411)	成	成	3.2	2.9	0.8	12
(362)	四	四	4.8	3.1	1.0	21	(412)	因	因	3.5	2.9	1.7	21
(363)	去	不詳	3.9	3.7	0.7	11	(413)	羅	不詳	4.7	3.3	0.7	14
364	不詳	不詳	4.4	3.4	0.8	20	(414)	是	是	3.6	2.8	0.9	11
(365)	正	正	3.1	2.1	0.6	4	415	不詳	不詳	3.9	2.5	1.2	12
(366)	化	不詳	4.0	2.7	0.7	11	(416)	百	百	3.3	3.0	1.1	21
(367)	佛	佛	3.8	2.1	0.8	11	(417)	德	德	3.8	2.7	0.8	14
(368)	一	一	3.7	3.1	0.7	10	(418)	不詳	不詳	5.2	2.9	1.1	24
369	肩カ	不詳	3.7	2.6	0.7	10	(419)	意	意	3.3	2.7	1.0	7
(370)	以	以	3.6	3.4	0.7	10	(420)	身	身	3.5	2.3	0.6	8
371	謂カ	謂カ	5.5	4.0	1.4	39	(421)	國カ	不詳	2.6	2.6	0.5	4
372	飲カ	不詳	3.5	2.9	1.0	10	(422)	世	世	4.4	2.3	0.8	11
373	不詳	不詳	4.3	3.1	1.4	20	(423)	持カ	不詳	4.1	2.2	0.8	10
(374)	人	不詳	3.1	2.7	0.9	9	(424)	業	業	3.4	2.7	0.3	8
(375)	桺	桺	5.4	3.0	1.0	21	(425)	清	清	3.1	2.8	0.7	11
376	不詳	不詳	3.9	2.8	0.7	11	(426)	持	持	5.0	2.7	1.0	14
(377)	知	知	4.7	3.0	1.0	19	(427)	死	死	5.2	2.6	0.7	11
(378)	三	不詳	3.7	2.7	0.8	11	(428)	阿	阿	1.7	1.7	0.3	3
(379)	二	二	3.0	2.3	0.8	9	(429)	世	世	4.3	3.4	0.8	19
(380)	劣	不詳	5.0	3.2	0.8	15	(430)	面	面	4.0	2.7	1.5	21
381	不詳	化カ	4.0	2.5	0.7	8	(431)	面	面	3.9	2.5	1.3	14
(382)	宅	宅	4.9	3.5	1.4	21	(432)	世	世	4.8	3.0	0.8	12
(383)	輪	輪	2.9	2.8	0.8	7	(433)	勇	調カ	4.5	3.4	1.2	21
(384)	養	養	5.0	3.5	0.7	14	(434)	是	是	4.2	3.5	1.2	17
(385)	火	火	4.7	3.4	0.7	16	(435)	本	本	4.2	3.0	1.5	20
(386)	就	就	3.2	3.3	1.2	21	(436)	諦	不詳	3.8	3.3	0.5	10
(387)	無	無	3.7	2.6	0.8	11	(437)	不詳	不詳	4.8	3.3	0.9	20
388	耶カ	不詳	3.2	2.6	0.7	4	(438)	等	等	4.0	3.1	0.8	12
(389)	善	不詳	4.8	3.3	0.6	11	(439)	不詳	不詳	4.5	3.5	1.3	26
(390)	方	不詳	3.5	2.7	0.9	11	(440)	齊	麥カ	3.7	2.4	0.5	4
391	代カ	不詳	4.0	3.3	1.5	12	(441)	慧	慧	4.7	3.5	0.7	12
(392)	子	不詳	4.7	3.6	1.0	21	(442)	求	求	3.6	2.9	0.9	11
393	不詳	亦カ	3.4	2.4	1.0	7	(443)	礎カ	不詳	3.9	3.1	0.8	12
(394)	衆	衆	4.1	3.0	1.0	11	(444)	濁カ	不詳	4.4	3.5	0.7	19
(395)	諸	不詳	4.0	3.1	1.1	11	(445)	人	人	3.2	2.6	1.0	9
(396)	是	是	2.9	2.1	0.5	4	(446)	有	有	3.2	2.7	0.7	11
(397)	汝	不詳	3.8	2.8	1.3	15	(447)	不詳	不詳	4.7	3.0	0.9	12
(398)	乗	乗	3.3	3.0	0.5	7	(448)	不詳	不詳	4.8	3.8	1.0	21
399	不詳	不詳	3.9	2.3	1.0	10	(449)	病カ	病カ	4.0	3.0	0.9	12
400	大又は六カ	大又は六カ	4.0	3.2	0.8	11	(450)	是	不詳	3.9	3.4	0.0	12

上下層混同層 (その6)

番号	表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	重さg	番号	表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	重さg
(451)	爲	爲	4.4	3.0	1.2	13	(301)	疑	不詳	5.2	3.1	0.8	14
(452)	是	是	4.0	2.4	0.5	5	(302)	舍	不詳	3.9	2.7	1.0	10
453	不詳	不詳	4.7	3.4	1.2	22	503	不詳	不詳	5.3	3.6	0.7	16
(454)	法	法	5.0	2.6	0.6	9	504	山々	不詳	3.3	2.2	0.5	4
(455)	時	不詳	4.1	3.4	1.0	12	(505)	人	人	3.4	2.5	0.6	4
(456)	五	五	3.4	2.3	0.5	6	(506)	如	如	4.0	2.5	0.7	12
457	袖々	不詳	4.6	1.8	0.4	5	507	復々	復々	3.3	3.1	1.1	11
(458)	解	不詳	4.0	3.1	1.2	20	(508)	何	何	4.6	3.3	0.9	20
(459)	華	不詳	5.5	3.4	1.0	21	(519)	體	不詳	4.6	3.5	1.1	21
460	不詳	摘々	4.3	2.8	1.0	16	(510)	受	受	4.0	3.1	0.5	11
461	徑々	不詳	4.0	3.6	0.9	20	(511)	齊	不詳	4.2	3.3	0.7	16
462	不詳	不詳	4.5	3.2	0.7	12	512	於	不詳	3.5	3.5	0.9	12
(463)	衆	不詳	4.6	2.5	0.8	10	(513)	不	不	4.3	3.2	1.5	21
464	濱々	不詳	3.9	3.0	0.7	14	(514)	所	所	3.3	2.4	0.6	6
(465)	槃	不詳	4.0	2.8	0.7	12	(515)	作	不作	4.7	3.5	0.7	12
(466)	疑	疑	2.9	2.7	0.8	9	(516)	士	士	5.0	4.4	0.7	21
(467)	爲	不詳	3.2	3.0	1.2	14	(517)	掌	掌	4.7	2.5	0.8	12
(468)	比	不詳	5.0	2.7	1.0	20	(518)	無	無	4.1	2.5	0.7	10
(469)	證	不詳	5.0	3.0	1.0	20	519	値々	値々	3.8	3.2	0.8	11
(470)	獄	獄	4.4	3.4	1.6	21	520	不詳	不詳	3.5	2.9	0.9	12
(471)	般	不詳	5.3	3.6	0.8	22	(521)	天	天	5.4	3.0	0.8	20
(472)	復	復	3.3	2.6	0.6	9	(522)	咸	咸	5.6	3.5	0.5	20
(473)	佛	不詳	4.4	3.7	0.7	21	(523)	莊	莊	5.0	3.4	0.7	21
474	種々	種々	3.7	2.7	0.8	8	(524)	衣	衣	3.2	2.7	0.9	11
(475)	示	示	3.5	3.0	0.6	6	(525)	般	般	3.4	2.4	0.7	5
(476)	主	主	3.0	2.8	1.0	10	(526)	提	提	4.0	2.6	1.0	11
477	不詳	不詳	3.7	3.7	1.1	21	527	不詳	於々	3.7	3.8	0.8	16
(478)	悟	不詳	4.2	3.6	1.0	12	(528)	衆	衆	4.3	3.6	0.7	20
(479)	以	以	3.4	2.5	0.7	6	(529)	編々	不詳	4.1	3.9	0.1	21
(480)	現	不詳	5.4	2.3	0.8	18	(530)	何	何	5.5	3.7	0.7	22
(481)	者	不詳	4.5	3.6	1.0	21	531	諺々	諺々	3.9	2.9	1.2	18
(482)	強	不詳	4.0	2.9	0.8	11	(532)	道	道	4.7	4.0	1.0	24
(483)	華	華	5.0	2.3	0.7	11	(533)	道	道	5.4	3.4	0.8	21
(484)	衆	衆	3.3	3.4	0.6	11	(534)	寢	不詳	4.7	2.9	0.6	11
(485)	喜	喜	3.5	3.0	1.3	11	535	不詳	不詳	5.1	3.9	0.7	20
(486)	苦	苦	4.0	2.2	0.5	6	536	受々	不詳	4.0	3.0	0.9	10
(487)	心	心	3.4	3.3	1.3	16	(537)	異	異	4.6	2.8	0.7	14
(488)	喜	喜	3.8	2.7	0.7	6	538	產々	產々	5.1	3.0	0.7	20
(489)	難	難	3.7	3.0	0.8	11	(539)	各	各	3.0	3.0	0.5	4
(490)	世	世	3.5	2.7	0.7	9	(540)	怨	怨	4.0	2.9	0.8	10
(491)	日	不詳	3.2	2.7	0.6	4	(541)	邪	不詳	3.3	3.1	1.0	11
492	不詳	不詳	4.8	2.8	1.3	31	542	若々	不詳	4.9	3.3	0.8	14
(493)	脱	脱	4.1	3.7	0.8	12	(543)	諸	諸	3.8	2.7	1.3	21
(494)	一	一	4.0	2.5	0.8	10	(544)	所	所	3.3	3.4	0.8	15
(495)	云	云	5.0	3.9	1.5	30	545	甚々	不詳	4.7	3.1	0.7	15
(496)	佛	佛	4.7	2.5	0.7	6	546	不詳	不詳	2.8	2.9	0.6	5
(497)	菩	菩	4.6	2.5	0.7	11	(547)	者	者	4.4	2.7	0.9	16
498	被々	不詳	4.2	3.2	0.8	20	(548)	若々	不詳	5.3	3.2	0.7	12
499	等々	不詳	4.8	3.0	1.0	16	(549)	無	無	4.6	2.6	0.5	6
(500)	非	不詳	5.	3.5	0.8	21	(550)	佛	佛	5.3	2.8	0.8	11

上下層混同層（その7）

番号	表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	重さg	番号	表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	重さg
(551)	普	普	4.0	2.7	0.7	10	(601)	弗	弗	4.6	3.3	0.4	10
(552)	光	光	3.3	3.1	0.7	4	(602)	實	實	3.4	2.8	0.3	4
(553)	力	力	3.6	3.0	0.7	10	(603)	如	如	2.3	1.7	0.3	2
(554)	十	十	4.5	2.8	1.0	10	(604)	生	生	3.2	2.5	1.0	10
(555)	至	至	3.9	3.3	0.6	8	(605)	無	無	4.0	2.8	0.8	11
(556)	爲	爲	3.3	3.1	1.0	14	(606)	不	不	3.9	2.3	0.7	8
(557)	自	自	5.0	4.4	0.7	12	(607)	比	比	4.1	3.3	1.0	14
(558)	令	令	4.4	2.9	0.7	14	(608)	數	數	6.0	4.5	1.3	37
(559)	無	無	4.8	5.0	0.7	21	(609)	他	他	4.0	2.3	1.2	11
(560)	無	無	3.5	2.5	0.7	10	(610)	羅	羅	4.1	3.0	1.0	14
(561)	+	+	3.6	2.9	0.5	8	(611)	自	自	4.1	3.4	0.6	19
(562)	礙	不詳	4.0	3.0	0.6	11	(612)	是	是	3.7	3.2	1.2	15
(563)	榮	榮	3.7	2.5	1.3	11	(613)	有	有	4.1	2.3	1.0	11
(564)	父	父	4.8	3.0	0.9	15	(614)	佛	佛	3.7	3.3	0.7	12
(565)	切切	ナシ	3.3	2.1	0.8	8	(615)	無	無	4.3	2.5	0.6	11
(566)	事	事	5.4	3.7	0.7	21	(616)	世	世	3.9	3.5	0.8	12
(567)	是	是	3.7	2.4	0.7	10	(617)	法	法	4.0	3.2	1.1	21
(568)	量	量	3.6	2.5	1.0	10	(618)	便	不詳	3.6	2.4	0.7	8
(569)	三	三	4.7	3.6	0.7	11	(619)	耳	耳	3.8	2.6	0.7	8
(570)	佛	佛	5.5	2.6	0.8	18	(620)	得	得	4.4	3.0	1.6	22
(571)	念	念	4.3	3.0	1.0	14	(621)	復	復	3.5	2.6	0.5	5
(572)	之	之	2.4	2.3	0.4	2	(622)	故	故	3.0	2.6	1.1	10
(573)	將	將	5.1	3.4	1.1	21	(623)	十	不詳	6.4	3.8	0.7	22
(574)	善	善	4.9	1.9	0.6	9	(624)	從	從	3.7	3.0	1.3	14
(575)	示	示	3.6	1.8	0.7	4	(625)	等	等	4.5	3.5	0.7	12
(576)	妙	妙	4.3	3.5	1.1	17	(626)	服	服	4.0	3.4	0.8	14
(577)	從	從	4.3	3.2	0.9	20	(627)	如	如	5.0	2.9	0.9	14
(578)	非	非	4.7	3.5	0.7	14	(628)	煩	煩	4.3	3.8	1.4	25
579	丸々	不詳	4.5	3.2	0.9	14	(629)	敬	敬	4.4	3.1	0.5	12
(580)	敷	敷	2.4	3.5	1.0	21	(630)	主	主	3.9	3.0	1.0	11
(581)	身	身	3.8	3.0	0.8	12	(631)	聞	聞	3.1	3.0	0.7	5
(582)	慢	慢	4.5	3.3	1.0	12	(632)	有	有	3.5	3.5	0.7	10
(583)	小	小	4.0	3.4	1.1	12	(633)	舍	舍	3.7	2.8	1.2	12
(584)	叉	不詳	3.5	2.8	0.8	11	(634)	遊	遊	4.2	3.3	0.5	11
(585)	四	四	3.3	2.6	0.7	8	(635)	斯	斯	6.0	3.9	1.0	30
(586)	入	入	4.4	3.9	1.2	30	(636)	最	最	4.0	4.0	0.9	16
(587)	事	事	5.2	2.7	0.7	14	(637)	佛	佛	3.3	2.7	0.5	4
(588)	於	於	4.6	3.2	0.8	12	(638)	佛	不詳	3.3	2.3	0.7	4
(589)	淨	淨	4.8	3.1	0.4	11	(639)	我	我	5.3	4.5	0.8	30
(590)	引	不詳	4.5	3.2	0.7	11	(640)	以	以	4.3	3.3	1.2	22
591	覺々	不詳	4.5	3.1	0.4	10	(641)	間	不詳	3.8	4.0	0.9	22
(592)	失	失	4.1	2.6	0.7	11	(642)	東	東	4.0	2.8	0.9	14
(593)	切	不詳	4.2	3.0	0.9	11	(643)	與	與	4.2	3.0	0.7	15
(594)	皆	皆	3.3	3.2	1.1	11	(644)	辭	辭	4.8	3.7	0.9	32
(595)	以	以	4.3	2.9	1.1	20	(645)	道	道	5.3	4.2	0.6	21
(596)	爲	爲	4.6	3.7	1.4	21	(646)	世	世	6.1	3.3	1.0	22
(597)	推	推	5.1	3.6	0.8	21	(647)	綵	綵	5.8	4.3	1.4	52
(598)	何	何	3.3	2.1	0.9	6	(648)	修	不詳	4.4	2.5	0.7	10
(599)	相	相	3.9	3.0	0.8	10	(649)	道	道	4.0	3.2	1.0	16
(600)	意	意	4.3	2.8	0.8	11	(650)	乘	乗	5.5	2.9	1.3	21

上下層混同経石（その8）

番号	表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	重さg	番号	表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	重さg
(651)	諸	諸	3.4	3.5	0.6	9	(701)	行	行	4.2	2.9	0.8	11
(652)	福	福	3.4	3.2	1.4	25	(702)	宅	宅	3.0	2.5	0.7	5
(653)	佛	佛	4.6	2.6	0.8	11	(703)	誦	誦	3.3	2.7	0.8	11
(654)	觀	觀	5.6	4.1	1.1	22	(704)	養	養	5.5	3.3	1.1	25
(655)	大	大	3.6	3.1	0.8	11	(705)	受	不詳	3.7	2.9	0.5	5
656	皇	不詳	6.4	4.0	1.3	51	(706)	曾	曾	5.5	2.9	1.5	22
(657)	是	是	3.6	3.2	1.2	14	(707)	喜	喜	3.4	2.6	0.8	8
(658)	一	不詳	3.1	2.7	0.7	7	(708)	如	如	5.5	3.4	0.6	21
(659)	余	不詳	4.5	2.5	0.8	12	(709)	無	不詳	2.6	2.6	0.8	5
(660)	我	我	3.6	2.7	0.7	11	(710)	梶	梶	4.3	3.0	0.6	10
(661)	佛	佛	4.0	3.4	0.7	78	(711)	推	不詳	2.3	1.7	0.4	3
(662)	尊	尊	4.3	2.9	0.6	11	(712)	集	不詳	3.2	2.1	0.5	4
(663)	無	無	4.2	4.3	0.7	18	(713)	爲	爲	3.3	2.3	0.4	4
(664)	說	說	4.0	2.9	0.0	12	(714)	今	今	3.6	3.0	1.3	22
(665)	男	男	4.4	3.5	0.6	11	(715)	生	不詳	4.0	3.5	0.7	11
(666)	佛	佛	3.6	2.3	0.9	7	(716)	訖	訖	3.7	3.2	0.8	11
667	福カ	不詳	4.2	3.5	0.5	11	(717)	是	是	4.5	3.8	1.0	30
668	象カ	象カ	4.4	2.6	0.9	11	(718)	我	我	4.2	3.8	0.7	20
(669)	或	或	4.1	2.9	1.8	12	(719)	比	比	5.1	2.7	0.7	15
(670)	尊	尊	4.9	3.2	0.7	20	720	悲カ	不詳	3.6	2.5	0.5	9
(671)	念	念	4.7	2.9	0.8	14	(721)	尊	尊	5.7	2.6	0.6	20
(672)	干	干	3.4	2.5	1.1	10	(722)	使	使	4.4	3.1	0.4	10
(673)	爲	爲	3.8	3.3	1.0	12	(723)	大	不詳	2.7	2.7	1.1	11
(674)	車	車	4.4	3.6	1.0	14	724	不詳	不詳	3.6	2.3	0.6	5
(675)	生	生	2.9	2.2	0.6	3	(725)	供	供	4.4	2.0	0.8	9
(676)	現	現	4.4	3.2	0.6	11	(726)	眞	眞	3.3	2.9	0.7	8
(677)	我	我	4.0	4.1	0.7	22	(727)	調	調	2.8	2.2	0.8	8
(678)	殿	殿	3.9	2.5	0.8	10	(728)	意	不詳	5.0	3.3	1.4	26
(679)	說	說	4.2	3.4	1.4	20	(729)	而	而	3.4	2.6	1.1	12
(680)	山	山	3.6	2.7	0.6	10	730	瞿カ	不詳	4.1	3.9	0.8	21
(681)	諸	諸	3.7	3.6	0.8	12	(731)	般	不詳	3.4	2.8	0.7	5
(682)	無	不詳	4.5	3.6	0.5	9	(732)	尊	尊	3.4	2.8	1.2	10
(683)	提	提	3.7	2.5	0.5	9	(733)	十	不詳	4.2	4.2	1.1	32
(684)	華	華	4.2	2.8	0.7	11	(734)	合	合	3.8	2.8	0.9	12
(685)	十	十	3.3	2.7	0.4	2	735	念カ	念カ	3.2	2.8	0.7	10
(686)	是	是	3.9	2.9	1.0	11	736	千又は十カ	不詳	4.0	3.0	1.3	21
(687)	何	何	4.2	3.7	0.4	5	737	不詳	不詳	4.0	2.5	0.7	10
(688)	華	華	4.2	3.1	0.5	10	738	不詳	不詳	3.8	3.5	1.2	20
(689)	王	王	3.7	3.5	1.0	35	(739)	尊	尊	3.7	2.4	0.6	9
(690)	法	不詳	4.2	2.7	0.8	8	(740)	大	不詳	3.4	2.8	0.7	10
(691)	地	不詳	2.7	2.1	0.6	2	741	不詳	不詳	4.4	3.8	0.7	20
(692)	三	不詳	3.0	2.1	0.7	3	(742)	走	走	3.3	2.6	0.6	9
(693)	有	有	4.7	4.9	1.6	22	743	不詳	不詳	3.7	3.1	1.0	14
694	輒	輒	4.7	4.5	1.0	25	(744)	聞	不詳	4.4	4.3	0.5	5
(695)	驚カ	驚カ	5.2	2.3	1.0	21	(745)	經	不詳	3.6	3.1	0.4	7
(696)	眞	眞	4.0	2.9	0.8	8	(746)	法	法	4.2	4.0	0.8	22
(697)	及	及	3.2	2.7	0.5	5	747	事カ	事カ	5.4	3.8	0.6	22
(698)	虛	不詳	3.7	2.3	0.9	5	748	信カ	不詳	3.8	2.9	1.0	12
(699)	求	求	4.1	2.0	0.7	8	(749)	身	身	4.2	4.3	0.8	20
(700)	一	一	2.8	2.1	0.9	10	(750)	有	不詳	3.5	3.7	0.8	10

上下層混同経石（その9）

番号	表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	重さg	番号	表	裏	縦cm	横cm	厚さcm	重さg	
751	山	不詳	5.2	3.3	1.0	17	801	皆	皆	3.1	2.5	0.4	4	
752	龍	龍	4.5	2.5	0.7	11	802	白	不詳	4.2	3.9	0.7	14	
753	南無阿彌陀佛	子孫長久	4.8	4.1	0.6	20	803	令カ	令カ	4.0	3.4	0.8	18	
754	諦	不詳	3.7	3.1	1.2	12	804	不詳	不詳	6.2	4.1	0.7	22	
755	為	為	3.4	2.3	0.6	4	805	不詳	不詳	4.8	3.1	0.9	22	
756	衆	衆	4.6	3.4	0.7	21	806	不詳	不詳	5.5	3.0	0.9	20	
757	華カ	不詳	4.0	2.0	0.5	4	807	不詳	不詳	3.3	2.9	0.7	10	
758	無	不詳	4.3	3.5	0.8	20	808	不詳	不詳	4.7	3.3	0.8	21	
759	亦	不詳	4.3	3.0	0.9	14	809	不詳	不詳	3.8	3.1	0.8	11	
760	至カ	不詳	5.5	3.4	0.5	21	810	生如主	不詳	不詳	4.3	3.3	1.2	25
761	届カ	不詳	5.0	5.0	1.1	32	811	有カ	有カ	4.3	3.5	0.8	20	
762	所	所	4.3	2.8	0.5	10	812	事	不詳	4.5	3.2	0.8	21	
763	不詳	不詳	4.8	3.4	0.8	21	813	得カ	不詳	3.9	2.5	1.2	14	
764	佛カ	佛カ	3.4	2.6	0.6	10	814	欲	欲	3.5	3.6	1.3	31	
765	名	名	3.5	3.3	1.0	20	815	優	優	5.0	3.0	0.7	14	
766	不詳	不詳	5.5	3.2	0.9	31	816	不詳	不詳	5.0	3.6	0.8	24	
767	利	利	5.0	3.8	0.8	22	817	不詳	不詳	4.4	3.3	0.9	16	
768	佛	不詳	4.0	2.9	0.8	10	818	世	世	3.5	3.2	0.8	14	
769	有	不詳	3.7	2.8	0.3	5	819	与カ	不詳	4.1	3.2	1.5	21	
770	波	不詳	3.7	3.7	0.5	11	820	癌カ	不詳	4.4	3.6	0.9	22	
771	不詳	不詳	4.8	3.6	1.1	21	821	一	一	2.6	2.7	0.3	4	
772	懸	不詳	4.5	3.8	0.8	20	822	不詳	不詳	3.1	3.0	1.1	15	
773	衆	衆	4.2	3.1	0.8	14	823	者	不詳	2.9	2.6	1.1	8	
774	繫	不詳	5.1	3.6	0.6	21								
775	時	時	4.1	2.8	0.6	11								
776	一	一	3.4	2.9	1.3	14								
777	心	不詳	3.5	3.5	0.8	21								
778	手	手	3.8	3.0	0.9	12								
779	供カ	不詳	3.6	3.1	0.8	14								
780	謹カ	謹カ	4.2	3.0	0.8	15								
781	尊	尊	4.4	2.7	1.3	21								
782	爲	不詳	4.1	2.4	0.7	9								
783	凡	不詳	4.4	3.8	1.0	24								
784	世	世	2.8	2.7	0.9	8								
785	從	從	3.8	3.5	0.9	14								
786	刀カ	刀カ	2.9	2.6	0.7	6								
787	衆	衆	3.7	3.2	0.9	11								
788	衆カ	衆カ	2.6	1.8	0.4	2								
789	辯	不詳	6.4	3.0	1.2	26								
790	法	法	4.2	3.5	1.3	26								
791	散	不詳	3.7	2.9	0.5	10								
792	得カ	不詳	4.5	4.5	0.8	18								
793	共カ	不詳	3.7	2.9	0.6	11								
794	不詳	不詳	4.6	2.9	0.8	20								
795	不詳	不詳	6.0	4.3	1.0	41								
796	不詳	不詳	3.6	3.6	0.8	20								
797	不詳	不詳	4.2	2.6	1.4	21								
798	不詳	不詳	3.5	3.2	0.8	11								
799	不詳	不詳	3.3	2.4	0.8	11								
800	疑カ	不詳	5.3	4.3	0.8	26								

第5表 墨書き文字画数別分類一覧表

凡 例

1. この表は、経石に墨書きされた文字を解読したもののうち、確実に判読された文字（第4表の番号欄に○印を付したもの）だけを整理し、一覧表にしたものである。
2. 整理方法は画数（アラビア数字で画数欄に記した）で分類し、さらに出土数の経石ごとに分け、経石に付した整理番号を並べた。
3. 図版の経石写真の整理番号と照合する場合、経石に付した記号は今回のように統一した。
A3は下層経石、A2は上層経石、A1は上下層混同経石とした。
例) A3-1は下層経石No.1 A2-1は上層経石No.1 A1-1は上下層混同経石No.1
4. 経石の両面の読み取りが一致した文字、およびいずれか一面の文字が確実に判読できるものだけを分類の対象とした。この場合一石で一字と数えた。はつきり判読できない不詳や□カとしたもの、両面の読みの一致しない文字はふくめない。
5. 多字経石はふくめない。ただし、一面に同じ文字を2字書いたものは、表裏両面に書くべきところを、書き易い面に書いたものと判断されるので、4と同様に扱い一石で一字と数えた。例) 上層経石No333の「受」・「受」など
6. 見出し字の字体は、新字体、旧字体にこだわらず、経石に書かれた字体を見出し字とした。
例) 爾は尐丨 (5画) 、 読け譜巻 (13画)
7. 複数の字体、または字体のはつきりしないものは、旧字体を見出し字とした。
例) 難は難、觀・顥は顥
8. 従は乏 (4画) 、艸はサ (3画) に統一した。
9. 表に掲載した文字の総のべ字数は1,119字、ことなり字数は373字である。
10. 画数欄●印を付した248字のことなり文字は、「觀音経」で用いられている。

画数別分類（その1）

画数	見出 じゆ	下層絆石	上層絆石	上下層混同絆石	見出字 じゆじ	画数	見出 じゆ	下層絆石	上層絆石	上下層混同絆石	見出字 じゆじ
1 ●	一	53. 183	100	207, 243, 388, 407, 494, 658 700, 715, 821	12	5 ●	生	62. 183	11. 61. 355	77, 188, 219, 254, 604 675, 715	12
2 ●	人	65. 207	149	125, 171, 331, 374, 465 445, 585	10	●	以	119		370, 479, 595, 610	5
●	乃	38			1	●	可	133	45, 263, 272	359	5
●	八	77			1	●	未		9	81	2
●	十		99. 287	554, 561, 623, 685, 733	7	●	由		69		1
●	八		163. 289	585	3	●	旦		91		1
七			171		1	●	必		232		1
●	二			325, 379	2	●	因		235		1
●	力			553	1	●	尼		369		1
3 ●	大	135	2. 106	8, 146, 232, 266, 322, 330, 655, 723, 740	12	●	丘		47, 84, 93, 239	249	5
●	子	171	75, 189, 197, 311	158, 275, 392	8		弗		186, 266	162, 200, 681	5
●	三	132	143, 165, 218	172, 378, 589, 692	8	●	四		177	204, 362, 585	4
●	土		53, 212		2	●	本		478	435	2
上			121, 217, 226		3	●	白		289	892	2
●	千	329	108		2	●	立		336	222	2
凡			783		1	●	介			550, 92, 659	3
●	及		33. 176, 497		3	●	主			639, 476	2
●	山		680, 751		2	●	示			475, 575	2
于			672		1	●	左			20, 342	2
●	小		583		1	●	失			592	1
●	士		516		1	●	他			609	1
于			289		1	●	令			558	1
巳			133		1	●	去			363	1
下			74		1	●	正			365	1
●	叉		584		1	●	穴			168	1
4 ●	支	67		126	2	●	功			93	1
●	之	184	16, 49, 369	82, 572	6	●	弘			12	1
●	少	111			1	6	妾	70			1
●	不	84	74, 187, 225, 392	35, 159, 209, 403, 513, 606	11		宅	175		382, 702	3
●	中	209	32, 142, 294	42, 111	6	●	衣	208		252, 524	3
●	分	43	67	251, 274	4	●	此	98, 144	68, 253		4
●	勿		77		1	●	夷	3	233		2
●	天		216, 306, 367	3, 127, 521	6	●	有	79, 127	303	160, 299, 336, 304, 351, 446, 613, 632, 658, 756, 768	14
●	王		87, 261	73, 689	4	●	而	162, 182	283, 318	2, 141, 430, 431, 729	9
●	切	125	194, 355, 593		4	●	百	20	83, 90	173, 416	5
●	心	288	225, 487, 777		4	●	如	82	204, 247	54, 135, 198, 232, 278 314, 506, 663, 627, 708	13
●	今	278	714		2	●	至	192	271, 302, 322	555	5
●	万	329	390		2	●	因	191	285	193, 412	4
●	火		91, 385		2	●	成	177	224	411	3
化			329, 366		2	●	回		358		1
●	比		68, 697, 719		3	●	色		245		1
●	六		245		1	●	地		17	691	2
●	五		456		1	●	亦			78, 182, 186, 203, 244, 759	6
●	日		491		1	●	汝			90, 397	2
●	云		495		1	●	死			19, 427	2
父			564		1	●	行			173, 701	2
●	手		778		1	●	自			557, 611	2
引			590		1	●	在			83	1
5 ●	世	55, 159, 183, 194	46, 95, 269	94, 422, 429, 432, 490, 610 606, 734	16		同			310	1

画数別分類（その2）

画数	音形	下層絆石	上層絆石	上下層混同絆石	音形音	画数	音形	下層絆石	上層絆石	上下層混同絆石	音形音
6	劣			389	1	8	典	222			1
● 各				539	1		帖	276			1
● 光				552	1		陀	314			1
耳				619	1	● 呪	169				1
● 仰				318	1		舍	3, 81, 355	502, 633		5
● 合				734	1	● 非	44	500, 578			3
● 名		323		765	2	● 念	50, 71, 157	107, 148, 259, 333, 571, 671			9
7 ● 形	113				1	知	66, 159	377			3
● 妙	4			576	2	● 苦	92, 258, 308, 356	688			5
却	45, 204	373			3	● 受	163, 198, 207, 333	7, 176, 510, 705			8
● 佛	49, 57, 58, 69	6, 103, 161,	22, 23, 44, 45, 72, 184	49	● 所	164, 169, 183	514, 541, 762				6
		101, 112, 131, 140	153, 201, 246,	233, 239, 285, 317, 338	● 波	356	770				2
				346, 366, 367, 473, 496	● 齊		389, 511				2
		412, 165, 189	273, 288, 342	556, 590, 614, 637, 638	● 齊						
● 利	51, 73, 161	5	255, 267	6	東		642				1
但	91	168	161, 242	4	邪		511				1
● 身	188, 199	210, 234	174, 220, 365, 420, 581, 749	10	● 長		324				1
● 見	33	267, 335, 359	30	5	● 門		187				1
● 何	36, 128	307	309, 568, 580, 598, 687	8	到		106				1
希	52			1	拂		9				1
● 即	209			1	虎		47				1
● 男	107	169, 665	3	● 服			626				1
● 我		223, 270, 315	161, 182, 338, 410	11	● 使		722				1
● 求		659, 660, 671, 718	5, 23, 482, 699	4	9 美	19					1
● 作			185, 327, 515	3	信	97					1
車			120, 654	2	● 重	179					1
● 住			229	1	● 音	122	25, 27, 248				4
● 走			742	1	● 度	42	55, 170				3
● 言			754	1	● 基	34	269				2
固	60			2	● 是	63, 93, 143,	23, 51, 195,	60, 123, 231, 356, 358		29	
放	121, 137			1		151, 173	327, 343	321, 567, 612, 651, 686			
妻	11			1	乘	170	181, 265, 281	6, 28, 38, 650		8	
委	40			1	● 持	94	243, 255	48, 455			5
● 空	136		358	2	● 界	2	325, 354	4, 337			5
● 明	187			1	● 忠	48, 219					2
林	165			1	染	328					1
● 刻	85			1	● 賢		26, 30, 341	138, 594, 891			6
● 者	50, 134, 148, 163, 188		226, 320, 353, 481, 547, 823	11	● 故	98, 185	300, 622				4
● 事	266		66, 566, 587	4	● 相	188	599				2
● 若	120, 185	10, 36, 150, 195	86, 289, 548	9	● 便	237	122, 178, 618				4
● 於	6, 10	8, 73	38, 121, 335, 588	8	● 恒	242	279				2
● 阿	166,	4	334, 428	4	● 惑	339	540				2
● 法	44	19, 86, 331	105, 144, 224, 327, 454	13	● 為		143, 258, 755				3
● 或	74	29	688	3	後		284, 285				2
● 供	83	40	725	3	● 前		451				1
● 彼	28	296	221	3	● 神		221				1
● 其		33, 42		2	● 風		349				1
● 夜		80		1	● 咸		522				1
● 奇		167		1	莊		96				1
● 河		176		1			523				1
● 來		206		1	10 ● 恐	68					1

画数別分類(その3)

画数	部	下層絆石	上層絆石	上下層混同絆石	見出し 字の計	画数	部	下層絆石	上層絆石	上下層混同絆石	見出し 字の計
10●	苦	86			1	11●	梵		38	153	2
●	波	100			1	●	從			162, 577, 624, 785	4
●	息	69	102.		2	●	淨			52, 293, 589	3
●	能	29	63, 147	29	4	●	異			219, 537	2
	師		7		1	●	推			597, 711	2
	望		59		1		眷			183	1
●	疾	22			1		唵			208, 280	2
	般			101, 235, 471, 525, 731	5		強			482	1
●	華			32, 458, 483, 584, 688	5		寂			531	1
●	起		14, 197		2	●	修			688	1
●	時			65, 775	2		梟			710	1
	馬		89		1	12	闇	41			1
●	珠		17		1		曾			706	1
	恨		218		1	●	間	39	56		2
	倫		240		1	●	惡	31	70		2
●	座		325		1	●	智	189	397		2
	宮				1	●	無	26, 54, 117,	208, 230, 257,	51, 59, 134, 160, 285, 298	30
●	破			406	1		154, 157	264, 292, 344	549, 569, 586, 626, 635		
	悟			478	1	●	衆	27, 96, 104, 113	79, 108, 131, 158, 161, 214, 351	221, 394, 463, 484, 528	19
●	峯				61	●	復	92	22, 179	15, 472, 621	6
11●	貞			230, 696, 726	1	●	量	201	54	568	3
	訖				716	●	等	1, 107	14, 162, 290	102, 313, 438, 625	9
●	毫	8			1	●	掌	172	192	517	3
●	眼	22			1	●	塔	145			1
●	國	48			1		闇		172		1
	翟	78			1		唵		231		1
	基	99			1		進		312		1
	惟	115			1		超		368		1
●	著	59			1	●	爲		113	282, 345, 451, 467, 556	10
●	偏	64		110	2					596, 633, 711, 782	
●	清	17		425	2	●	敬	82, 265	829		3
	教	25		295	2	●	尊			662, 690, 721, 732, 739, 781	6
●	得	75, 87, 129, 130, 131, 132	96, 365	70, 136, 155, 227, 298	14	●	提			223, 520, 683	3
●	苦	5, 12, 39, 76, 80	184, 332	389, 497	9		喜			485, 488, 707	3
●	常	72	64, 213, 321	312	5	●	満			95	1
●	現	161	228	97, 169, 264, 351, 486, 676	8	●	萬			191	1
●	處	197	236		2		軒			342	1
●	唯	155			1	●	然			35	1
●	終	37			1	●	就			386	1
●	菱	43			1	●	普			511	1
●	花	57, 313			2	●	善			571	1
	劔	218			1		炎			628	1
●	婆	277			1		斯			635	1
●	範	286			1		最			636	1
	貧	334			1		集			712	1
	望	336			1	●	訶			727	1
●	脫	78, 209	497		3		虛			698	1
●	欲	215	115, 190, 814		4	13●	滅	158, 158			2
	密	362	55		2	●	惑	141			1
●	將	330	573		2		瑞	196			1

画数別分類(その4)

画数	見出し	下層経石	上層経石	上下層混同経石	見出し合	画数	見出し	下層経石	上層経石	上下層混同経石	見出し合
13●	塞	166		236	2	16	轍		694		1
	道	16. 61		532. 533. 845. 649	6	●	轡		375		1
●	當	9. 116	146. 291		4		蹄		436		1
●	意	110. 129. 151. 156	31. 262. 363	261. 281. 419. 600. 728	12		慢		582		1
●	廟		155		1	17	艱	14			1
●	罪		183		1		戲	17	349		2
●	賊		357		1	●	聲	16	238		2
●	詫		24. 41. 190	32. 114. 469. 664. 679	8	●	應	66	220	151	3
	栗		152. 175	116. 563	4		醜		28		1
●	過			88. 117	2		懃		214		1
●	聖			157	1	●	優		117. 346	815	3
●	業			424	1		頻			195	1
●	解			458	1	●	覈			248	1
●	遊			634	1		雖			489	1
●	福			652	1	18●	禮		34	142	2
●	般			678	1	●	薩	16. 35. 47. 52. 159. 149. 205	20. 319. 348	171. 292. 241. 267	14
●	經			745	1	●	統			29	1
14●	疑	15		466	2	19	穩	125			1
●	盡	168	85. 141		3	●	難	7	364		2
●	種	1	31		2	●	羅		165. 321	201. 306. 413. 610	6
●	與	18. 136	643		3		辭		251	644. 789	3
	像	139. 289			2	●	願			99. 119. 211. 461	4
●	聞	191	68. 631. 741		4		礙			501. 562	2
●	德	279	273. 417		3	20●	愾	124			1
	演	362			1	●	釋			180	1
●	聚		13		1		薰			11	1
●	漏		316		1	21	癩		189		1
	槃		465. 771		2	22●	變	145			1
●	獄		470		1	23●	體			509	1
	實		602		1	24●	觀	32. 89	55. 293. 399. 317. 369	65. 247. 654	10
	綵		647		1						
	誦		703		1	計	373字	186字	306字	627字	1,119字
	慇		772		1						
15●	蓮		40		1						
	麗	153			1						
●	慧	12. 150	62	58. 206. 441	6						
●	摩		353		1						
●	縁		62		1						
	豪		316		1						
	歎		340		1						
	數		361	80. 608	3						
●	養			384. 764	2						
●	敷			580	1						
	輪			383	1						
16	謂	23			1						
	澗	211		241	2						
●	諸	24. 102	14. 227. 231. 241. 315	301. 336. 343. 631. 651	18						
●	龍		256. 350	752	3						
	問		174	641	2						
	隨			49. 79	2						

VI. 考 察

赤岩館経塚は、川原石に仏教の經典を書写し、その経石を埋納した遺跡である。本節では、この経塚が造営された時期、書写經典の典拠、さらに築造の諸背景などを考察してみたい。

1. 経塚築造の年代

埋納土壙の内部から発見され年号墨書の経石(図版第24)によって明らかである。すなわち経石は上下の両層からなり、これが埋納の時期を異にするものであることが層位して確認されているが、年号書写の経石は下層の中にふくまれていた。それが、前節で示した寛保三年亥とある埋納石である。これによって、第一次の埋納年代が江戸時代中期、18世紀の40年代(1743年)であることがわかる。上層の経石からは年号が書写されたものは確認されていないので、第二次の埋納年代は不明である。

2. 写経石の經典の典拠

赤岩館経塚に埋納された経石が、いかなる經典を書き写したものであろうか。これを特定することはむずかしい、句単位で書写されたものが見られず、一つの石に一字一字書かれた経石なので、確定が困難である。

第5表は、経石に墨書された文字の中、確実に判読できた一字石の文字を画数別に分類したものである。総のべ字数1,119字、ことなり字数は373字である。

これによって、頻度数の高い文字をみると(第6表)、全体では、「佛、無、是、衆、諸、世、薩、得、如、法、一、大、生、意、不、我、者、人、身、觀、為」(10点以上)の順である。各層別は、下層経石では、「佛、薩、無、菩、是、得、者」(4点以上)、上層経石では、「佛、是、衆、無、諸、觀、子、丘、若、不、受」(4点以上)、混同経石では、「佛、無、是、有、諸、如、法、一、大、世、衆、為、我、得、人、生、尊、念、身、現、者、示、不、般、華、說、意、十、而、何」(5点以上)などである。

ところで、『法華經一字索引』^①によって、経石に書かれた373のことなり字の全点にあたったところ、わずかに「唵」の一^②字を除いて、372字がことごとく法華三部經中に使用されていることが確認できる。このことは、妙法蓮華經を書写した可能性のきわめて高いことを示すものである。

それでは、法華三部經といわれている無量義經、妙法蓮華經、仏說觀普賢菩薩行法經のうちの、どの經典を書き写したものであろうか。その手がかりは、きわめて使用範囲の限られた文字を選び出して、經典を推定することである。『法華經一字索引』をもとに、372字を検討したところ、その中のいくつかの文字は一經典もしくは二經典、あるいは三經典だけにしか使用されない文字であることがわかった。書写經典をしづらやすいので、三經典以上のところで文字

をあげると、次のようになる。Ⓐ「左、旦、穴、虎、峯、梟、訖、基、炎、艱、飄、黨。」、Ⓑ「因倫、超、瑞、綵、癩」、Ⓒ「弘、委、怙、咒、淺、賊」などであるが、Ⓐグループの12文字は妙法蓮華經中の一經典に限って使われるものであるし、Ⓑグループの6文字は、同じように二經典、Ⓒグループの6文字は三經典だけにしか使用されていない^③（第7表）。

しかも、これらの文字をそれが使用されている經典と関連づけて整理してみると、法華三部經のいずれとも関係するが、全經典を満さない。これは一經典から三經典だけに制限したためであるかも知れないが、特殊な文字の関係經典には片寄りが認められる。すなわち、第7表のように、經石のべ字数が42字、関係する經典は18であるが、そのうち、妙法蓮華經譬喻品第三に関係する文字が10字あって最も多い。しかもその半分の「穴、梟、基、炎、黨」の5文字はこの譬喻品第三以外の經典には使用されることがない。次に多いのは妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五の8文字であり、「飄・峯」の字はこの經典だけに使用される。第3位が妙法蓮華經信解品第四で5字あり、「左・旦」がこの經典のみに使われている。以下無量義經十功德品第三の3字、妙法蓮華經化城喻品第七と妙法蓮華經勸持品第十三の2字、他が一字となっている。なお、「艱」は妙法蓮華經五百弟子受記品第八、「訖」は妙法蓮華經勸持品第十三、「虎」は妙法蓮華經法師功德品第十九だけにしか用いられていない文字である。

従って、ある經典だけにしか使用されていない特徴的な文字の存在から、それらの文字が関係する經典が典拠になった可能性を推測できる。それは、関係の文字数が多いものほど高いといえよう。

そのように、使用經典を特定できる文字を上～下層の經石別にみていくと、譬喻品第三に関係する文字は上層が3字、下層が1字であり、觀世音菩薩普門品第二十五では上層が5字、下層は1字、信解品第四では上層2字、下層が1字と、いずれも上層經石の方が多い。

次に、各經典の総字数やことなり字数、それに妙法蓮華經の中で最もポピュラーに各宗派で読まれてきた觀世音菩薩普門品第二十五（いわゆる觀音經）を例として、赤岩館經塚の經石文字を比較検討してみると、次のようなことがわかる。觀音經に繰り返し出てくる句に、「觀世音菩薩」、「無盡意」、「應似佛身」、「得度者」、「而為說法」、「念彼觀音力」などがある。この句の文字を經石の頻出文字と比較すると、一致する文字が多い。また、觀音經の総字数は2,096字、ことなり字数が464字であるが、その中の248字のことなり字が經石中にある（第5表の画数欄に●印を付してある）。つまり、觀音經の53.4%の文字が經石中で確認できる。經石の総ことなり字数は373字であるから、この中の248字が觀音經に使われているということは、実に66.5%に達する。この割合は、埋納經石8,740点の全部に文字が書かれていたとみて、判読文字が1,119字で全体の13%であることをあわせて考えた場合、かなりの数値であるといえる。上、下層經石別に、經石の総ことなり字数中にしめる觀音經使用のことなり字数の割合を調べてみ

第6表 墨書文字頻度別一覧表（3点以上）

点数	全 体	下層経石	上層経石	上下層混同経石
49	佛			
30	無			
29	是			佛
19	衆			無
18	諸			
16	世			是
14	薩、得			
13	如、法			
12	一、大、生、意			
11	不、我、者	佛		有
10	人、身、觀、為			諸、如
9	昔、若、念、而、等		佛	法、一、大、世
8	現、乘、於、受、何、三、子、證		是	衆、為、我
7		薩	衆	得、人、生
6	天、之、中、亦、利、所、皆、復、尊、道、慧、羅		無	尊、念、身、現、者、亦、不
5	至、百、弗、丘、見、可、以、菩、舍、持、界、般、華、常	無、昔、是、得、者	諸、觀	般、華、說、意、十、而、何
4	分、王、切、心、四、此、因、求、事、俱、阿、 音、故、便、能、從、欲、當、樂、聞、願	世、衆、意	予、丘、若、不、受、苦	三、以、求、於、受、乘、從、等、 道、薩、羅、願
3	入、上、及、比、外、乞、衣、成、却、男、作、 或、俱、彼、非、知、度、為、貌、眞、淨、量、掌、敬、提、音、 盡、與、德、數、龍、應、優、齡	利	三、之、上、中、天、世、生、可、 至、見、我、所、音、念、舍、法、乘、俱、常、 等、意、證、薩	予、及、天、切、心、比、弗、四、外、作、事、 若、所、指、便、為、欲、淨、眞、 復、提、宣、聞、慈、觀

第7表 使用經典特定の経石文字と関連經典表

法華三部經	一経に使われる文字										二経に使われる文字										計
	5画	8画	10画	11画	12画	17画	20画	5画	10画	12画	13画	14画	21画	5画	8画	11画	13画				
無量義經																					
德行品 第1																					
說法品 第2																					
十功德品 第3															△上				◎混 ◎下		3
妙法蓮華經																					
序品 第1																					
方便品 第2															△下						
十功德品 第3			○混	○詰	○下	○混			○混	△混		△混	△上			◎七	◎上				10
譬喻品 第4	○混	○上							△上		△上					◎混	◎下				5
信解品 第5																					
藥草喻品 第6																					
授記品 第7																					
化城喻品 第8																					
五百弟子愛記品 第9																					
授掌無學人記品 第10																					
法師品 第11																					
見宝塔品 第12																◎下					
提婆達多品 第13																	◎上		1		1
劫持品 第14																		◎上		2	
安樂行品 第15																					
隨地涌出品 第16																		◎上		1	
如意寶量品 第17																					
分別功德品 第18																					
隨喜功德品 第19			○混																		1
法師功德品 第20																					
常不輕菩薩品 第21																					
如來神力品 第22																					
鳴累品 第23																					
藥王菩薩品 第24															△下				◎上		1
妙音菩薩品 第25					○混			○下		△上						◎混	◎上	◎七	◎上	8	1
陀羅尼品 第26																	◎上				1
妙莊嚴王本事品 第27																					
普賢菩薩勸發品 第28																△上				1	
伝説觀音賢善殊行法經																			◎上		1
計	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2	3	3	3	42

*① 本表の作成にあたっては、東洋哲学研究所編『法華經一字索引』(昭和32年)を使用し、赤岩館経塚出土の墨書文字373字の「ことなり字」すべて照合した。

② 本表中、下は下層経石、上は上層経石。混は混同経石中の文字。

ると、上層が75.2%、下層が76.7%とかなり高い数値を示す。^④これらのことから、上層、下層とともに觀音經を典拠としている可能性が高いと考えられる。

また、実際の妙法蓮華經をみた場合、譬喻品第三と信解品第四の二品で卷の第二を構成しているので、とくに上層の経石は卷の第二を中心に書写したものとも考えられる。だが第二巻は、妙法蓮華經八巻中で最長の巻で、その総字数も約9,000字なので、経石の出土点数からみて全体を書写したことは考えられない。稀出文字との関連などからみて、譬喻品第三の長者火宅の喩えや信解品第四の長者窮子の喩えなど各品の有名な部分を写経したものかも知れない。

では、法華三部經以外の經典との関連はどうであろうか、その点で特に注意をひくのが、もちろん「庵」の文字である。妙法蓮華經69,384字中はもちろん、他の二部經中に使われていない「庵」の文字は、「大悲心陀羅尼經」をはじめとして、曹洞禪宗系の呪文に多く用いられている(図版第23図)。

なを、写経にあたっては、同一文字を川原石の両面に書いたので、その写された部分の經典は同時に二部作りあげられたことになった。さらに墨書文字の筆跡を比較検討したところ、ほぼ4～5人前後の人々が写経に参加したものとみなされるである。

註 ①東洋哲学研究所『法華經一字索引』(昭和52年) 兜木正亨編『法華經三部章句索引』(昭和52年)

②「庵」(アン)の文字は上下層混同経石中に2点ある(No. 208、No. 280)。

③「左」 混同経石No. 20、No. 342)	「艱」 (下層経石No. 14)
侍立○右 (妙法蓮華經 信解品第四)	資生○難 }
「旦」 (上層経石No. 91)	資生甚○難 }
一〇終沒 (信解品第四)	甚大○難 (五百弟子受記品第八)
「穴」 (混同経石No. 168)	「飄」 (下層経石No. 124)
藏竈孔○ }	○墮糞利鬼國(觀世音菩薩普門品第二十五)
争走出○ } (譬喻品第三)	「黨」 (下層経石No. 11)
「虎」 (混同経石No. 47)	愛無偏○ (譬喻品第三)
師子象○狼 (法師功德品第十九)	「因」 (上層経石No. 235)
「峯」 (混同経石No. 61)	無罪而被○執 (信解品第四)
或在須弥○ (觀世音菩薩普門品第二十五)	或○禁伽鎖 (觀世音菩薩普門品第二十五)
「梟」 (混同経石No. 710)	「倫」 (混同経石No. 240)
鷗鷺鴉○ }	最勝無○匹 (譬喻品第三)
鴉○鷗鷺 } (譬喻品第三)	世雄無等○ (化城喻品第七)
「訖」 (混同経石No. 716)	「超」 (上層経石No. 368)
言論未○時 (勸持品第十三)	漸見○登住法雲地 (無量義經十功德品第三)
「基」 (下層経石No. 99)	○出成正覺 (化城喻品第七)
「訖」 ○陞頽 (譬喻品第三)	「瑞」 (下層経石No. 196)
「炎」 (混同経石No. 628)	而有此○
為生老病死憂悲苦惱之所燒○(譬喻品第三)	我於過去諸佛曾見比○ }

故現斯○		無所依○	(譬喻品第三)
今見比○		無復恃○	(如來壽量品第十六)
本光○如比		能為作依○	(觀世音菩薩普門品第二十五)
今相如本○		「咒」(上層經石No.160)	
先現比○	(妙音菩薩第二十四)	○詛諸毒藥	(觀世音菩薩普門品第二十五)
「綵」(混同經石No.647)		即說○日	
○畫作佛像	(方便品第二)	是陀羅尼神○	
衆○雜飾	(譬喻品第三)	而說○日	
「癩」(上層經石No.189)		是陀羅尼神○	(陀羅尼品第二十六)
○黑疥○		即說○日	
身體疥○	(譬喻品第三)	以是神○擁護法師	
疥○癩宜		陀羅尼神○	
此人現世得白○病	(普賢菩薩勸發品第二十八)	○若不順戒○	(普賢菩薩勸發品第二十八)
「弘」(混同經石No.12)		「淺」(上層經石No.43)	
能發無數阿僧祇○誓大願		○識聞之	
○大慈大悲	(無量義經十功德品第三)	凡夫○識	(譬喻品第三)
所得○多	(信解品第四)	即得○處	(觀世音菩薩普門品二十五)
○誓深如海	(觀世音菩薩普門品第二十五)	功德○薄	(勸持品第十三)
「委」(下層經石No.40)		「賊」(上層經石No.357)	
○是王子領理事國	(無量義經十功得品第三)	汝今已能破諸魔○	(藥王菩薩本事品第二十三)
無所○付		若三千大千國土滿中怨○	
我若得子○付財物	(信解品第四)	起百八種煩惱○害	(觀世音菩薩普門品二十五)
○政太子	(提婆達多品第十三)	或值怨○繞	
「怙」(上層經石No.276)		百八種煩惱○害	
		六○遊戲中	(仏說觀普賢菩薩行法經)

④ 上層經石の総ことなり字数173字、この中130字が觀音經に使用されているから75.2%、下層經石は120字中の92字で76.7%となる。

3. 経塚築造の宗教的背景(願主と菩提寺)

経典を川原石に書写し、その経石を地下に埋納するという仏教上の行為として、願主と寺院、僧侶との見つながりを見おとすことかたけない。

経石は、前節でみたように、法華經の經典とくに觀音經を中心として、さらに譬喻品や信解品などの一部を書写した可能性が高く、その他では曹洞禪宗の經典の書写も考えられた。法華經は天台宗や日蓮宗で所依とした經典ではあるが、曹洞宗でも觀音經や如來壽量品第十六といった法華經の經典はよく読まれている。「唵」の文字(図版第23)は曹洞宗が所似とした經典の咒文中に多くみられる。

これらのことによれば、赤岩館経塚の経石は、天台宗・日蓮宗・曹洞宗などの寺院のいずれかを菩提寺とする願主によって、書写、埋納された可能性が考えられる。その中で、気仙沼での日蓮宗寺院の開山は、経塚の築造時期よりも新しいので除くと、天台宗とくに曹洞宗の寺院が関係しているのではないか、ということになってくる。この点を念頭に入れて、経塚築造期の当地方の寺院について考えてみたい。

赤岩館経塚が最初に造営された年代は、江戸時代中期の寛保3年(1743)で、経塚の位置は本吉郡北方月館村赤岩館である。安永9年(1780)4月の『本吉郡北方月館村風土記書出』によると、この月館村は寛永19年(1642)の仙台藩惣検地以前は、気仙沼本郷のうちであった。気仙沼本郷は、初期には気仙沼七邑(気仙沼・赤岩・新城・月立・鹿折・唐桑・小原木)で構成していたが、この時気仙沼七邑各村が独立した。気仙沼が気仙沼本郷に、新城が新城村に、月立が月館村となった。気仙沼本郷は寛文年間以降に仙台藩の蔵入地となつたが、新城村および月館村はともに本吉郡松岩所在の一家鮎貝氏の知行地である。

『風土記御用書出^①』によると、月館村の小名として、赤巖・赤岩館・中館・中井館・平館・館下・赤岩沢・松川・府中・和瀬谷・塚沢・下八瀬・上八瀬・青鹿・宇南山・諏訪ノ上・上田鼻などがみえる。

また、『風土記御用書出』によると、月館村府中に曹洞宗瑞鳳山善慶庵という寺院があり、これが当郡新城村金仙山宝鏡寺の末寺であったが、いつの頃が退転して書出当時は御村鹿山になつているとみえる。さらに村内八瀬の皎月庵および上八瀬の普生院がともに曹洞宗で、当寺は気仙沼本郷曹洞宗白華山補陀寺の扱い、となつていることも記されている。

これらによると、月館村内に曹洞宗寺院があり、隣接村に本山や上級寺院があつてこれの支配を受け、または受けたことが知られる。新城村の宝鏡寺、気仙沼本郷の補陀寺とともに今日に法灯を伝えるこの地方の名刹である。

安永9年(1780)の『本吉郡北方新城村曹洞宗護国金仙山圓光寶鏡寺書出^②』によると、この寺は江刺郡黒石村の正法寺第三世虎溪良乳和尚が康応元年(1389)2月に開山した。以来書出

の年まで392年、当代20世運峰和尚は、この寺の本山と末寺を次のように書上げている。

一、本山并末寺之事

本山ハ江刺郡黒石村大梅拈華山圓通正法寺ニ御座候。當寺末寺左ニ

御書上仕候事

當郡北方岩月村	別野山滿福寺
同氣仙沼本郷	白華山補陀寺
同	指月山少林寺
同	遠浦山清龍庵
磐井郡東山下折壁村	普慶山建高寺
當寺塔頭	風元庵
以上六箇寺	
當村	惠白山亮高庵
當郡月館村	瑞鳳山善慶庵
同氣仙沼本郷	峯雲山傳法寺
同	法輪山常樂寺
以上四ヶ寺當寺末寺之由記録ニ御座候處當時退轉仕寺跡斗御座候事	

この書出によって、安永の頃の曹洞宗宝鏡寺の大きな勢力とそのおよぶ範囲といったものを推量することができる。書出より前にさかのぼること40年、赤岩館経塚が造られた寛保の頃もその大勢は動かないと考える。月館村についていえば、宝鏡寺は善慶庵のみならず八瀬の皎月庵および菅生院の2寺に対しても、寺務を取扱う補陀寺を末寺としたことで影響力を行使したのである。従って、経塚の築造は曹洞宗宝寺直々の影響下か、あるいはその末寺補陀寺を通しての影響下に行われたものと考えられる。

もっとも、ここで注意をしておきたいのは、上記の『寶鏡寺書出』にみえる寺々の中には、数々のもと天台寺院がふくまれている点である。気仙沼本郷には、名刹海岸山觀音寺のような天台宗の寺院があつて今日に法灯を伝えているが、宝鏡寺末寺中にみえる岩月にみえる満福寺・本郷の補陀寺・少林寺・傳法寺の諸寺も、もとは天台宗であった。^③それらが曹洞宗に改められていくのは15世紀後半以降のことがらであり、葛西氏勢力の伸張と本吉地方の館主熊谷氏の葛西への隸属、曹洞宗正法寺一宝鏡寺の教線拡大化と関係している。^④もと天台でもいま曹洞宗であるから、それだけを問題にしてよさそうであるが、天台宗の間接的な影響もあることをおさえておきたい。

次に、赤岩館を築造した願主について、みておきたい。

埋納された経石には、この肝心な点を明かす文を見い出すことできない。従って、一般論としての推定の域を出るものではないが、可能性として有力視できると考えるのは、月館村の『風土記御用書出』にある「代数有之御百姓」のたぐいである。

同書出によると、安永9年（1780）現在の人頭は247人、家数255軒（うち水呑5、借家3）で、男女人数が1240人であった。そして、この人頭247人の中でも寛永19年（1642）の検地で御百姓に取り立てられた31人は、その後に人頭に加えられた人々と区別され、「代数有之御百姓」として改めて書出されている。いずれも4代相続以上の人々であり、これらの人々について、所在屋敷名、先祖の由来、先祖から当代までの代数毎の相続人名、その人の実績等がわかる。そのうちで、最も相続代数の多いのが、20代相続平屋敷熊谷彌惣衛門、次が14代館下屋敷（小山）左十郎、次が10代相続青鹿屋敷（菊地）仁兵衛で、10代相続以上はこの3人だけである（第8表）。これらの人々の家からは、第9表のように、肝入を勤めた者が続出している。

経塚の所在地赤岩館との関係で、書出の由緒や事績、屋敷の所在場所を参考にしほってみると、経塚築造の当事者として最も可能性が高いのは、熊谷彌惣衛門家、あるいは（小山）左十郎家の、経塚が造られた寛保3年段階の人頭である。

まず平屋敷熊谷家は赤岩館主歴代の後裔であり^⑤、その19代熊谷彌惣右衛門は元文3年（1738）2月から宝暦4年（1754）4月までの17年間月館村の肝入を勤めている（第9表）。年号名でいえば、寛保・延亨・寛延が元文と宝暦の間にに入る。寛保3年赤岩館経塚が造られた段階で、平屋敷熊谷家が経塚の場所に対する土地の所有権あるいは占有権などを持っていることが確認できるものならば中世館主以来の伝統的権威を担う家だけに、この熊谷彌惣衛門は最も願主の可能性があるといえよう。次の20代は熊谷彌惣衛門が継いだ。彼は明和7年（1770）正月御金山下代役となり、安永9年まで11年間勤めている。事績の多い人である。

一方、松川館屋敷の小山家も当地方の名望家で、磐井郡東山浜横沢梅木館主小山繁持の弟繁光を祖とする。この家からも何代も肝入を出しているが、12代小山五右衛門が名高い。彼は宝暦4年（1754）4月から、明和4年（1767）2月までの14年肝入を勤めるとともに、同月御鉄方役となつた。宝暦5年（1755）の大飢饉に際しては、困窮者に米・大麦・金銭を与えて窮状を救い、明和5年（1768）および明和9年（1772）には、洪水で決壊した土陸海道（どおろくかいどう）を平屋敷20代熊谷彌惣衛門らと共に自費で普請している。土陸海道は、気仙沼町より磐井郡東山折壁町に通ずる路線で、土陸川すなわち大川沿いの道である。松川前から八瀬川口までの間は崖と土陸川に挟まれた難所であった。現在の国道284号線の建設は新しい。また御爛屋吹方の入金不足の折りは、才覚をもって金策して献上している。後世松川五右衛門の別称のある彼は、『風土記書出』良民の条に熊谷彌惣衛門らと再三みえる。五右衛門は安永6年（1777）5月22日に71才で

死去しているから、生年は宝永4年(1707)となる。赤岩館経塚が築かれた寛保3年には37才、この時期の小山家の頭である。経塚の場所に対する権限が、実質的にむしろ小山家の方にあったとすれば、五右衛門もまた有力な人物である。なお、気仙沼本郷補陀寺に奉祀する釈迦像は、寛保年間(1741~44)に、この五衛門が第八世住職智膏和尚の堂宇諸仏整備の一環として寄進したものでこの時期の彼の宗教活動として注目しておく。

これらの事実によって、この時期の熊谷家や小山家などの巨大な財力と村内にしめる高い地位が想像できる。菩提寺は共に曹洞宗で、熊谷家は新城村宝鏡寺、小山家は補陀寺である。

本山と末寺の関係にある宝鏡寺と補陀寺には、共に宝暦年暦間(1751~64)に相ついで建てられたすぐれた建造物が今日に伝わっている。宝鏡寺楼門(気仙沼市指定文化財)および補陀寺六角堂(宮城県指定重要文化財)がそれである(図版第4)。県内有数の堂宇を造営し、維持していくには、寺に財力や権力を提供する外護者がいなければならない。そういうものとして登場するのは、補陀寺の釈迦像を小山五右衛門が寄進し、六角堂造営の惣世話人が熊谷彌右衛門であったように、^⑥やはりこの「代数有之御百姓」層をぬきにはできない。もちろん、彼等だけではなく、この時期の港町としての気仙沼の発展を担う商人層にも注目する必要があろうが、この場合は、地域上のこともあるて、一応おいておくことにしたい。

第8表 本吉郡北方月館村「代数有之御百姓」三拾壹人 (安永9年4月現在)

	相続代数	屋敷名	役職	姓 名		相続代数	屋敷名	役職	姓 名
1	20代	平	御金山下代	熊谷彌惣衛門	17	6代	加藤		八歳(加藤)
2	14代	館下		左十郎(小山)	18	"	打越		源右衛門(尾形)
3	10代	青鹿		仁兵衛(菊地)	19	"	芦ノ口		長之丞(菅原)
4	9代	清水川		源助(熊谷)	20	"	塙澤		萬之助(熊谷)
5	8代	南	組頭	吉左衛門(尾形)	21	"	細貝		正兵衛(熊谷)
6	7代	大ヶ口		又兵衛(佐藤)	22	"	小ヶ口		與兵衛(千葉)
7	"	丑子淵		喜右衛門(佐藤)	23	5代	本肝入		佐藤安右衛門
8	"	梨木		萬之丞(吉田)	24	"	沖	組頭	勘兵衛(吉田)
9	"	十馬		傳左衛門(吉田)	25	"	丑子淵	組頭	傳四郎(熊谷)
10	6代	堀之内	組頭	市太郎(菅原)	26	"	松川	組頭	茂右衛門(熊谷)
11	"	小門木	組頭	四右衛門(吉田)	27	"	川原		伊太郎(熊谷)
12	"	本		左七(佐藤)	28	"	新		權十郎(千葉)
13	"	洞		彌五右衛門(小山)	29	4代	日照		源左衛門(小野寺)
14	"	峯		惣之丞(熊谷)	30	"	杉下		七十郎(菅原)
15	"	狹室		太左衛門(熊谷)	31	"	黒澤		清七(吉田)
16	"	三本木		利三郎(熊谷)					

第9表 本吉郡北方月館村肝入年表(元和2年～安永9年)

年号	西暦	肝入	年号	西暦	
元和2	1616	青鹿屋敷 5代 菊地平兵衛(58年間)	慶長	1596～1614	
延宝1	1673	館下屋敷 9代 小山五兵衛(21年間)	1～19	元禄	1615～1632
元禄6	1693	平屋敷 17代 熊谷彌太郎(12年間)	1～10	宝永	1633～1651
宝永2 〃5	1705 1708	平屋敷 18代 熊谷九右衛門(9年間)	1～20	寛永	1652～1670
享保1 〃6	1716 1721	館下屋敷 10代 小山喜右衛門(6年間)	正徳	1671～1689	
〃11	1726	青鹿屋敷 7代 菊地彌兵衛(2年間)	1～4	享保	1690～1708
〃12	1727	平屋敷 19代 熊谷彌右衛門(17年間)	1～5	元文	1709～1727
元文3	1738	館下屋敷 12代 小山五右衛門(14年間)	承応	1728～1746	
宝暦4	1754	本屋敷 5代 佐藤安右衛門(6年間)	1～3	寛保	1747～1765
明和4 〃7	1767 1770		明暦	1766～1784	
安永2 〃4 〃9	1773 1775 1780		1～3	寛延	1785～1803
			1～12	万治	1804～1822
			1～8	延宝	1823～1841
			天和	1842～1860	
			1～3	寛永	1861～1879
			真享	1880～1898	
			1～4		
					小山五右衛門御鉄方役となる(2月)
					熊谷彌右衛門御金山下代となる(安永9年まで 11年間)

*第8、9表とともに、安永9年4月、本吉郡北方月館村肝入 佐藤安右衛門書出の「代数有之御百姓」(『宮城県史26』所収)により作成した。

註 ①『宮城県史26』所収

②『宮城県史26』所収

③補陀寺はもと補陀洛寺といい、観音を奉祀していた。この観音は名取郡熊野堂の伝説にある名取老女の造ったものという。安永の月館村風土記御用書出によると、松川に熊野社、塚沢に熊野社、上八瀬の青鹿に熊野新宮、熊野本宮が遙祀されている。

荒廃していたのを、16世紀前半の天文7年(1538)、宝鏡寺6世周庵文燠和尚が中興開山したという。六角堂(県指定重文)は、宝暦12年(1762)の建立。

伝法寺もまた古くより不動尊を本尊とする天台宗の寺院であった。満福寺が曹洞宗に改められたのは、寛正3年(1462)宝鏡寺5世の華岳道春和尚の代、少林寺は寛永の頃宝鏡寺9世一峰順柏和尚の代である(佐々久「宮城県仏教史」—『県史12』所収昭和36年)。

④「寶鏡寺書出によると、現在の地に移ってくるのは宝鏡寺6世の周庵文燠和尚の代であった。最初の寺は気仙郡矢作村の阿弥陀峯に営まれた(いまに宝鏡山と称している)。それが周庵和尚の代寛正6年(1465)2月火災で伽藍が焼失したため、大永4年(1524)6月本吉郡北方新城村の玉眠沢に移り、さらに天文2年(1533)に同じ新城村の現在地に移ったものであった。

一方、宝鏡寺の本山が、江刺郡黒石村にあるこの寺は、正法寺である。大梅拈華山圓通正法寺と称し、無底良韶を開祖とする。無底は能登の生れで総持寺峨山紹碩に師事して暦応4年(1341)衣法を伝えられ、江刺郡黒石に来て庵を結んだ。地方の豪族で葛西の臣長部重義、黒石正端らが帰依して正

法寺を創建し、無底を開祖として開堂した。貞和4年(1348)のことであった。

正法寺の法灯は2世月泉良印—3世虎渓良溪(閻道叟道愛)と受け継がれ、創建の年(1348)から安永5年(1776)までの430年間に開設された末寺は58ヶ寺に達し、末寺はまた末寺を拝めていった。

ところで、この正法寺2世月泉良印和尚は、本吉郡気仙沼の館主熊谷氏の一族で(『月泉良印禅師行状記』)、本吉郡南部を拠点としていたものとみられている。無底和尚と同じく峨山の高弟で康安元年(1361)無底の遷化とともに正法寺をついだ。このことは、本吉～気仙沼地方への曹洞宗正法寺勢力の進出に大きな影響を与えることになったであろう。正法寺の末寺の範囲をみると、江刺、胆沢、岩井、気仙、本吉、桃生、牡鹿、登米郡などで全く葛西氏の領土と軌を一にしている。末寺の多くが葛西一族および葛西氏麾下の地方館主によって支持されたためと解される。

熊谷氏の14世紀の歴史をみてみると建武3年(1336)葛西高清と千葉行胤とが本吉郡馬籠に戦った際に、熊谷氏は千葉方、すなわち足利方として働いた。千葉行胤は大敗し、熊谷直時及び豪族が共に戦死した。直時の子直明は赤岩城を守り、葛西の軍としばしば戦ったがその子直政のために、貞治2年(1363)ついに葛西家に屈し臣となつた。

⑤安永9年4月、本吉郡北方月館村肝入佐藤安右衛門書出の「代数有之御百姓」の最初の項に、次のようにある。

二十代相続 平屋鋪

熊谷彌惣衛門

御金山下代

右彌惣衛門儀先祖熊谷彈正已前名前并 代数共に相知不申候間彈正代より 右御書上仕候。

弾正代貞治二年八月葛西家御家臣ニ罷成赤巖館ニ住居仕美濃代迄拾貳代奉仕候處

天正十八年葛西左京太夫様晴信御没落以後美濃儀ハ當郡気仙沼本郷裏宿ニ住居仕

拾四代目宮内5下民ニ相下候由申傳候事

先 祖 熊谷彈正直政

二 代 弾正子 備中直行

三 代 備中子 備中直致

四 代 備中子 石見信直

六 代 石見子 左衛門直茂

六 代 左衛門子 次郎左衛門直定

七 代 次郎左衛門子 彌次良直政

八 代 彌次良子 彌三良直平

九 代 彌三良子 勘四郎直頼

十 代 勘四郎子 日向直定

十一代 日向子 彦九郎直景

十二代 彦九郎子 美濃直義

右美濃 5人仕當郡気仙沼本郷裏宿ニ住居仕候事

十三代 美濃子 出雲直久

十四代 出雲子 宮内

右宮内儀寛永二年八月當村江取移同十九年御竿答仕御百姓ニ相立申候事

(以下略)

「熊谷氏系図」によると、熊谷氏の祖は直季にはじまり、武藏国大里郷熊谷に住んでから熊谷姓を名のつた。源平一ノ谷の合戦で名をはせた熊谷直実は4代目である。子の直家は源頼朝による文治5年(1189)の奥州合戦で軍功をあげ、本吉郡気仙沼の地を賜つたが、下向はしなかつた。

直家の3男直宗が承久3年(1221)の乱に出陣し、軍功を賞されて桃生、本吉に二千刈を賜つた。

熊谷氏は、貞応2(1223)年に下向し赤岩館に拠つたといふ。その後、2代直鎮、3代直光、4代直時、5代直明と継いで6代直政(書出のいう先祖)にいたる。東國武士の移住は、村落の次元にまで内国化が達成される画期的な変化を生み出すことになる。

⑥補陀寺9世遼天和尚の自在庵記録による。

4. 経塚築造の地理的背景

ところで、願主が経塚を築く場合、その者の地位と権力によっては、経塚もまた造営者個人のわくをこえて、公的な影響を多くの人に与える可能性がある。願主が例えれば御金山下代や御鉄方¹役といった藩の権力機構の一端を担うような立場の者であるときには、その傾向が強いであろう。そこで、次には広い視野での経塚位置の選定が本経塚の場合にもあったではないか、という観点で地理的な背景を概観したい。

経塚が営まれたのは、赤岩館跡の中腹、前面に沖積池を望む眺望の良好な場所である。赤岩館をとりまく館主熊谷氏の歴史は、そのまま当地方の中世史でもあった。『風土記御用書出』のあった安永の頃には、他の支城と同様に、畠地になってしまったが、ありし日の姿をしのぶに足る遺構がよく保存されている（図版第3）。

歴史を秘めたこの館は、その地理的な位置でも月館村の中心であった。

追分から右に折れて松川、早稻谷、塚沢、上八瀬と通じている道は、古くから気仙沼と磐井郡東山地方、さらに江刺～胆沢方面を結ぶ重要な道路であった。^①また、いまでは国道284号の建設で通らなくなつたが、松川前から八瀬川口までの大川沿いの道がいわゆる土陸海道で気仙沼から磐井郡折壁方面にぬける。赤岩館そのものがこの要路を扼した位置をしめている。これらの道に沿って社寺が並ぶ。館跡の頂上には鎮守が奉祀されているが、小径がこの経塚の側から登る。また、この館には靈泉の今朝沼跡があり、さらに館下の赤岩沢には見事な磨崖仏が最近まで線刻されていた（図版第2）。

この磨崖仏について、安永の『風土記御用書出』月館村の旧跡の条に

赤岩澤

一 大岩

右ハ御金山下代平屋敷熊谷彌惣衛門地付の内ニ有リ。立岩ニ阿彌陀如来座像・地蔵菩薩立像貳体共に御長八尺宛、嘉暦三年丁卯七月中旬、大檀那左兵衛尉藤原行信敬白ト切付テ御座候處、左兵衛尉ト申ス御方何人ト申儀、相知リ申サズ候事

とある^③。

熊谷彌惣衛門は、前節でのべたように、平屋敷熊谷家の20代人頭である。これによれば、赤岩沢の彼の地付内に大岩と呼ばれる旧跡があり、そこに御長八尺の阿彌陀如来座像、同じく八尺の地蔵菩薩立像の2本が刻まれていた^④。それは、嘉暦3年（1328）に藤原行信が彫らせたものである、ということが書きしるされている。

この記事は、阿彌陀信仰とともに地蔵信仰がこの地方に定着していることをうかがわせるもので重要な意味をもっている。嘉暦3年というと、赤岩館主の熊谷氏が葛西氏に隸属する以前であるが、すでにその頃から在地の武士層の厚い信仰の対象に地蔵菩薩がなっていることを示

している。

経塚の築造の背景に地蔵信仰が関係していることについては、すでに先前のすぐれた指摘があるが^⑤、赤岩館経塚もこの地方の地蔵信仰が一つの背景になって築造されたことが考えられる。

近世における経塚の地理的位置の特色として、寺院、神社の境内、交通の要路、坂の登り口、眺望のきく場所などが多く選定されているのであるが、この経塚もまた聖靈の地を選び、多くの人々の間に広まっている信仰を意識していたのであろう。

註 ①気仙沼市塚沢に、市指定の塚沢横穴古墳群がある。昭和50年7月に発見され、市教委によって緊急に調査が行われた。丘陵斜面に築かれた横穴から土師器、刀装具、刀子、鉄鎌、人骨等が出土している。造営年代は8世紀から9世紀の後半。わが国の太平洋沿岸地帯最北限の横穴で地理的位置や構造上からも横穴古墳の研究にとって注目される（気仙沼教育委員会『塚沢横穴群』・昭和51年）。

この古墳群の形成も、古道と関連があることが指摘されている。

また、江戸末期の「月立村絵図面」をみても、現在の国道284号よりも、上八瀬細尾から大原に入り、平泉方面に通ずる八瀬街道が太い線で書いてある。松川前から八瀬川口までは、上陸海道（どろくかいどう）の難所であった。

②・③「本吉郡北方月館村風土記御用書出」（『宮城県氏26』所収）

④この磨崖佛は、昭和37年の暮、切り崩されて姿を消した。惜しむべき文化遺産であった。
なお、嘉暦2年が丁卯で、3年は戊辰である。

⑤石田茂作博士は、経塚と地蔵信仰との関係について、経塚出土の地蔵像を取り上げ、次のように述べている（「経塚」『考古学講座』昭和2年）。

「地蔵は末法無仏世界の能化主として実際上の信仰の篤かつたもので、（中略）藤原・鎌倉・足利時代を通じての所謂経塚時代の一般信仰と全く平行するもので（中略）とくに法華信仰と根強い連鎖があったものと見られはすまいか。」

なお、気仙沼～本吉地方の地蔵尊信仰を調べたものに、宮城県鼎ガ浦高等学校社会班編『気仙沼・本吉地方の地蔵尊信仰について』（昭和52年）がある。

5. 経塚造営の社会的背景

経塚築造の風は、平安中期に入つて天台宗との関係で創まったもので、末法思想に基づき、後世の弥勒再生を期して經典の保存保護をはからうとしたもの、と考えられているが、その根底には現世利益的な面も同時にふくまれていた。この傾向は、時代を経るにつれて強くなつた^①。

経塚を営む目的が、このように現世利益、極楽往生、死者追善供養など功德業視されてきていることから、ここでは、赤岩館経塚が築かれるにいたった社会的に背景を見てみたい。

赤岩館系塚が、最初に営まれたのは、埋納石に墨書きされた年号から、江戸時代中期の寛保3年（1743）であり、その後のある時期にもう一度営まれた。寛保3年は仙台藩政でいえば、5代伊達吉村の治世の最終年であった。吉村の治世は、元禄16年（1703）8月から寛保3年7月までの満40年間の久しきに及ぶ。とくに、徳川吉宗の享保の改革に呼応して業績をあげ、仙台藩政史上の中興の英主とうたわれたが、その反面、連年の災害による財政の窮乏と社会不安が横たわっていた（第10表）。

赤岩館経塚が造られた時期は、こういう時代であった。寛保3年を溯る約20年間位をみても、連年の大風雨、洪水による凶作、火災やそれに海岸地方特有の海難事故や津波の襲来といった災害がこの地方でも続いている。それは寛保年間以降は更に深刻化し、宝暦、明和、安永、天明といった大飢饉を招いていく^②。天変地異や政治、社会経済の変質からくる社会不安と混乱、こういったものの中で子孫長久を祈願しての逆修碑的、あるいは追善供養碑的な意味を考えてみたいのである^③。大飢饉の続く宝暦年間での宝鏡寺楼門や補陀寺六角堂の造営といった寺院の堂塔伽藍の整備もこの観点から見る必要が一面にはあるだろう。

第10表 江戸時代前期後半～中期前半の災害年表

年 号	西 历	災 害 記 事
延 宝 2 年	1674 年	本吉郡海岸地方に迅雷、雹降り、負傷者あり（4／15）
4	1676	陸奥、常盤地方に津波、人畜溺死、家屋流失。
5	1677	三陸沿岸に津波。
元 様 13 年	1700	本吉地方に迅雷、雹降る。田地、林木損害（5／11）
14	1701	領内飢饉
16	1703	領内大雨、洪水
宝 永 2 年	1705	領内大雨、洪水、田畠損害、溺死20余人。
4	1707	領内旱魃、田畠損害 156,000石 大風のため本吉郡小泉、歌津、荒砥、長清水、十三浜の漁船19隻損失、 漁夫 283人漂流（2／6）
正 德 5 年	1715	領内大風雨、田畠損害 112,030余石。死者 3 人、家屋 458軒倒壊。
享 保 1 年	1716	領内大雨、洪水（8/3～8/4）、田畠損害 2,400貫丈、家屋 5軒、麻 3,950把
2	1717	領内地震
3	1718	領内大雨（5～6月） 領内に強震（4／3）

年号	西暦	災害記事
享保 4 年	1719 年	領内大雨、洪水、田畠損害 181,640余石、川欠34ヵ所、死者 6人、家屋14軒、川土手 1,453ヵ所、堤 355ヵ所、水門86ヵ所破壊
5	1720	領内旱魃、田畠損害 135,800石
6	1721	領内大雨、洪水、田畠損害 145,965余石、家屋 256軒、土手 6,219ヵ所、堤 508ヵ所破壊、山崩 133ヵ所、死者 4人、馬溺死 6頭。
7	1722	領内大雨、洪水。 東山千厩町に火災、285戸焼失（3／8）
8	1723	領内大雨、洪水、田畠損害 185,900余石、家屋 4,481軒被害
9	1724	領内大雨、洪水、田畠損害 171,700余石、家屋 547軒、土手 2,258ヵ所被害 東山大原に火災、閏4月 166戸、9月に 129戸焼失
10	1725	領内大雨、洪水。
12	1727	本吉郡気仙沼町に火災、123戸焼失（11／8）
13	1728	領内大雨、洪水、田畠損害 233,200余石、死者15人、馬24頭溺死。 凶作のため領内に節儉の令を布く（11／6）
14	1729	領内旱魃、飢餓
15	1730	本吉、桃生、牡鹿、宮城の諸郡に津波襲来（5／25）田畠損害を受く。 胆沢、磐井、江刺、桃生、牡鹿、玉造諸郡洪水（6～9月）
16	1731	領内旱魃、田畠損害 132,000余石
18	1733	領内旱魃
19	1734	領内大雨、洪水、田畠損害 118,900余石 本吉、牡鹿両郡の漁船10艘烈風のため66人覆没（7／6） この年、疫病流行して死者多し。
20	1735	本吉郡気仙沼町に火災、218戸焼失（10／15）
元文 1 年	1736	領内地震10数回（3／20） この年、虫害のため稻不作。
3	1738	領内旱魃 東山大原町に火災 233戸焼失。
寛保 2 年	1742	本吉郡歌津村の漁夫 9人漂流行方不明（1／19） 領内大雨
3	1743	須川岳（栗駒山）噴火（12／20）

註①石田茂作「経塚」（『考古学講座』、昭和2年）

藤沼邦彦「宮城県の経塚について」（『東北歴史資料館研究紀要第一巻』昭和50年）

②寛保3年以降をみると、例えば

延享4年(1747) 領内大風雨、洪水で田畠損害 168,300石、本吉郡の海岸で溺死、12人(10)

宝曆5年(1755) 霧雨、田畠損害 540,000石

明和7年(1770) 旱魃、田畠損害 310,000石

8年(1771) 旱魃、田畠損害 320,000石

安永1年(1772) 洪水、田畠損害 310,000石

天明3年(1783) 冷害、田畠損害 565,000石、死者 25万人

「宮城県災害史」（『宮城県史22』所収、昭和37年）

③市内新月和野赤坂・神明崎浮見堂前・鹿折八幡神社境内などにも経塚が存しているが、それらの造営時期や内容は不明である。

気仙沼ライオンズクラブ『目で見る気仙沼の歴史』昭和47年

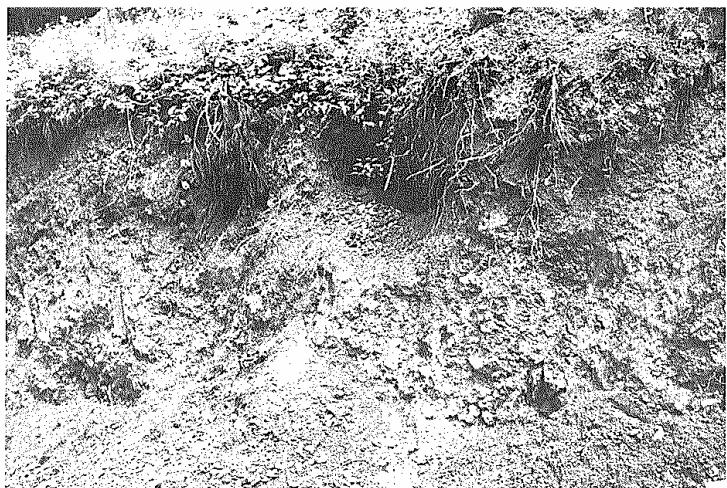
宮城県教育委員会『宮城県遺跡地名表』昭和56年

図 版

図版 1
赤岩館経塚

発見時の状況

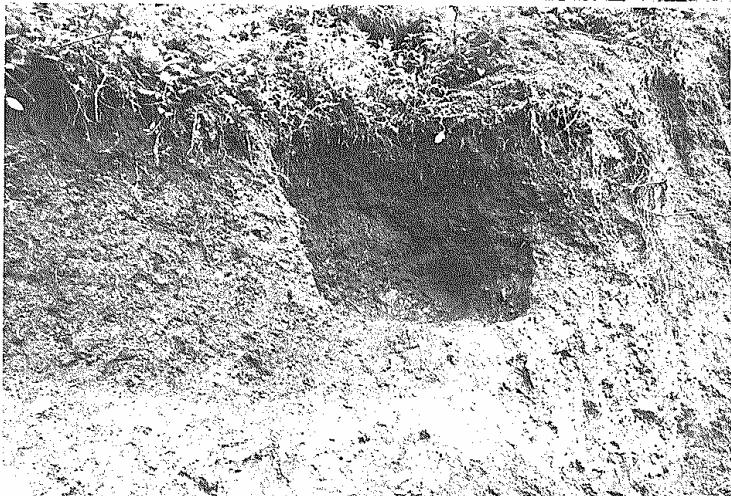
重機による入口部の
破壊で経石が散乱し
ている

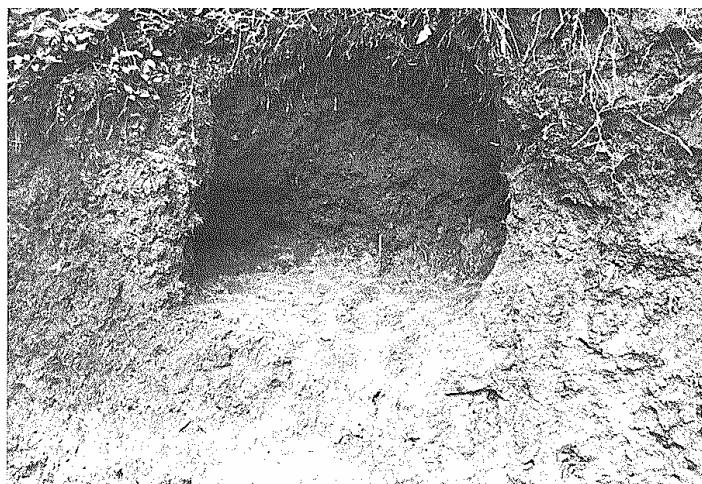


埋納経石の堆積層



埋納土壤
左下方より撮影





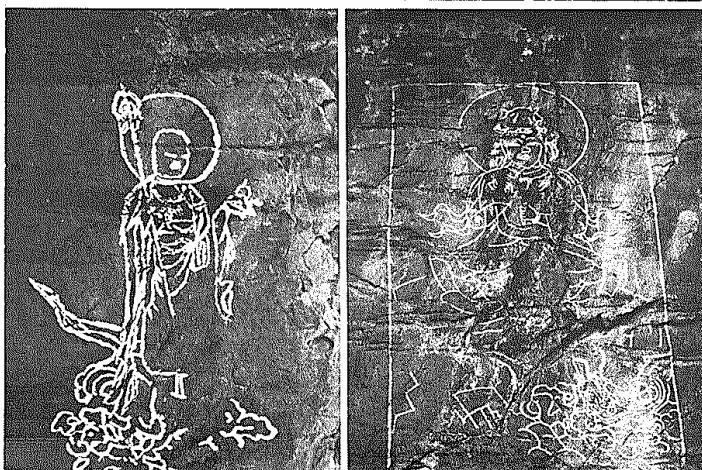
図版2
赤岩館経塚

埋納土壤
正面より撮影



妙法蓮華經觀世音菩薩普
門品第二十五(觀音經)

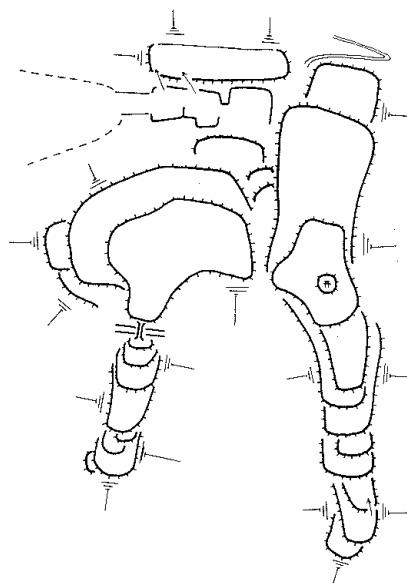
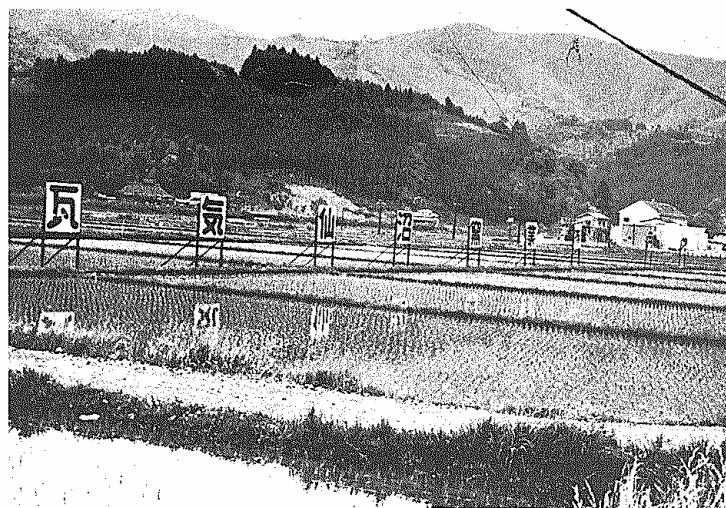
紺紙金字 法華經卷八
身延山久遠寺藏



赤岩沢大岩の磨崖佛
昭和37年削掘され
てしまった

図版3
赤岩館跡

正面が館跡、
右端の建物の
後方が磨崖佛
のあった所



赤岩館跡遺構略図

千厩方向から陸路気仙沼湾に通ずる街道に面し、湾の喉元の位置にあたる。

比高80mほどの丘陵上に立地している。頂部に広い平場を有し、南にのびる二つの屋根上には小さな段状の平場が連続しており、遺構としては平場を中心として構成された館跡といえる。東西約700m×南北約500m。

館は南面するが、館に至る主要道路は西側の小さな谷からのびた狭い沢と考えられ、沢の奥部には段によって画された方形の枠形状の区画が認められる。

図版 4



気仙沼市指定文化財

宝鏡寺樓門

昭和48年2月8日 指定
気仙沼市字川原崎30番地の1

宝鏡寺の記録に宝曆年間（1751～1764）十八世貴峰聖胤和尚の頃の建造と伝える。

門は8脚二層で、桁行9.27m、梁間5.7m、平面は3間1戸の形式である。屋根は入母屋造瓦葺、軒は軒支檼をそなえた二軒梯垂木で、三手先斗檼によって支えられ、上層には床を張り、廻祿、勾欄をつけた重厚な手法で地方的な素朴さがある。規模においては県下有数の大楼門である。



宮城県指定重要文化財

捕陀寺六角堂

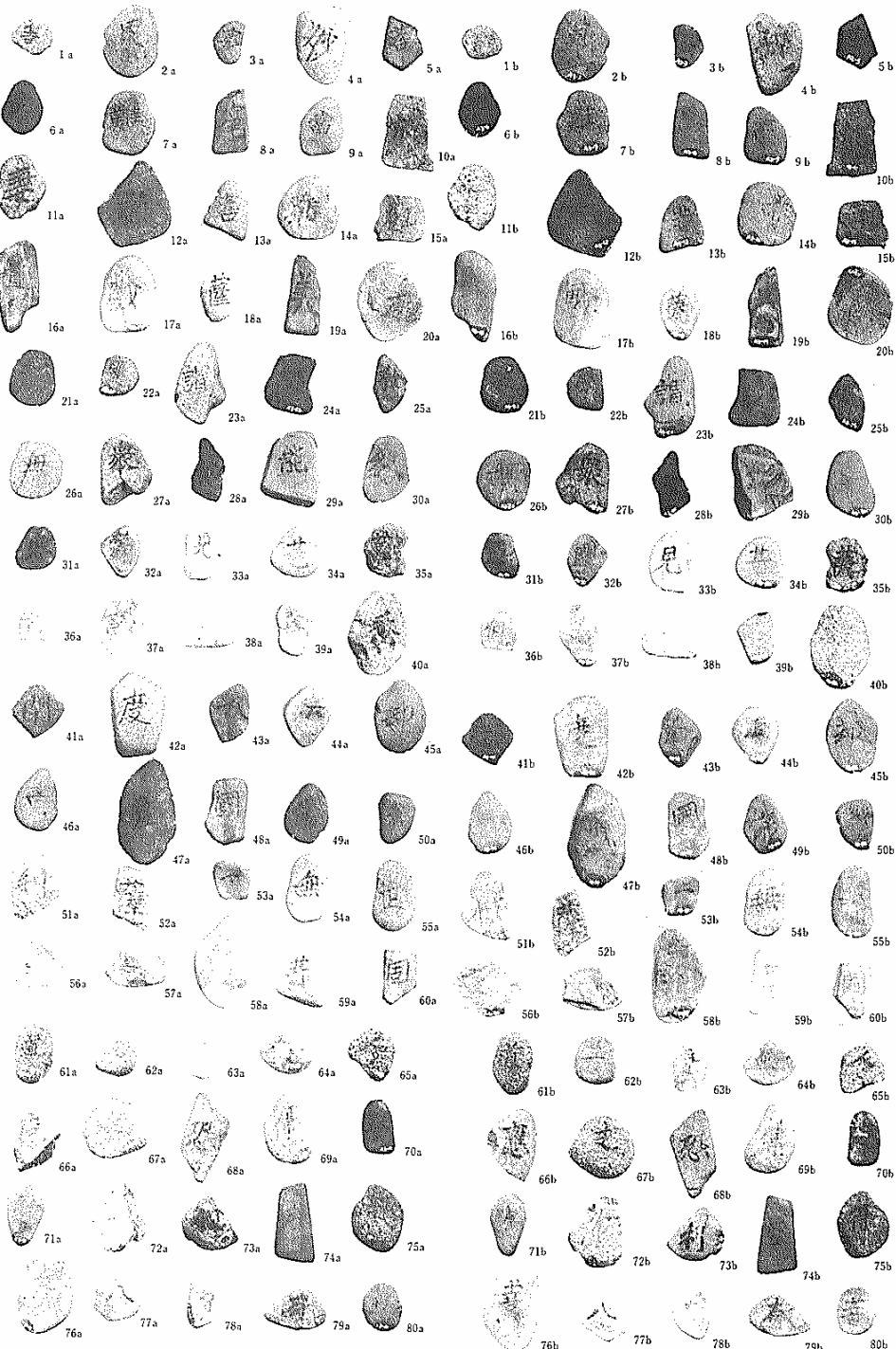
昭和44年8月29日 指定
気仙沼市古町二丁目2番51号

堂は平面六角形で、八角堂を通例とする和様円堂としては極めて珍しい。用材は主として杉で、1辺(角)の長さは2.69m、直径4.65m、高さは地盤から屋根頂上の宝珠上端まで8.26mである。外側には勾欄付廻祿があり、取付には床束を用い柱から押肘木をもって支えている。室内は六角面取り。壁は板で頭貫、長押付き、正面と左右に引違棊の唐戸がある。軒は二軒で蛇腹出組。屋根は六角錐形で瓦葺（もとはこけら葺）である。外部は朱塗り、板壁と扉に白胡塗りの一部がある。

堂の建立は宝曆12年（1762）で、九世遼天和尚の代、慈性院は月輪村熊谷源右衛門、大工棟梁は三日町瀬左衛門。享和2年（1802）と昭和22年（1947）に修理が施された。

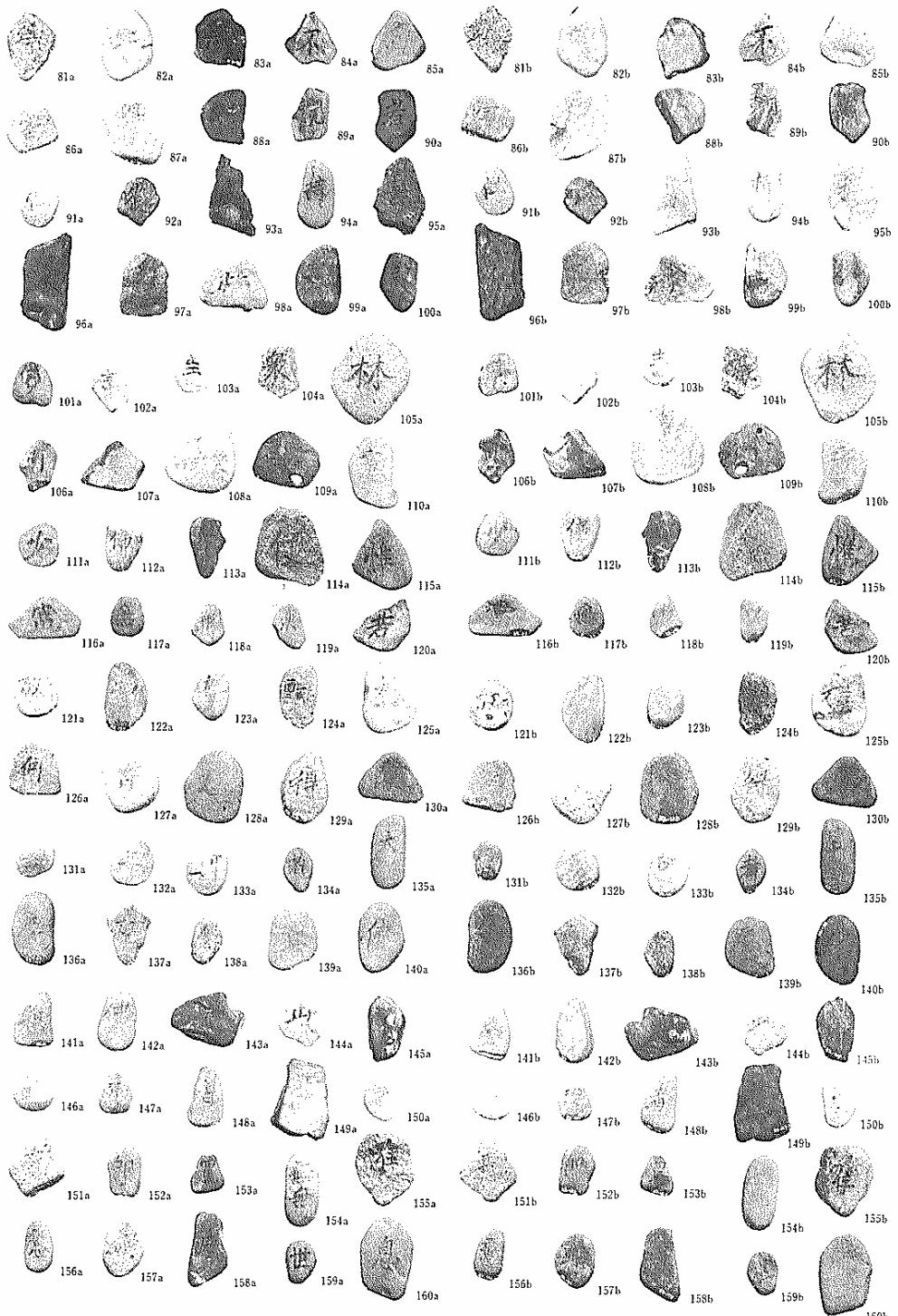
(表)

(裏)



図版5 下層経石 (No.1 ~ No.80)

(表)

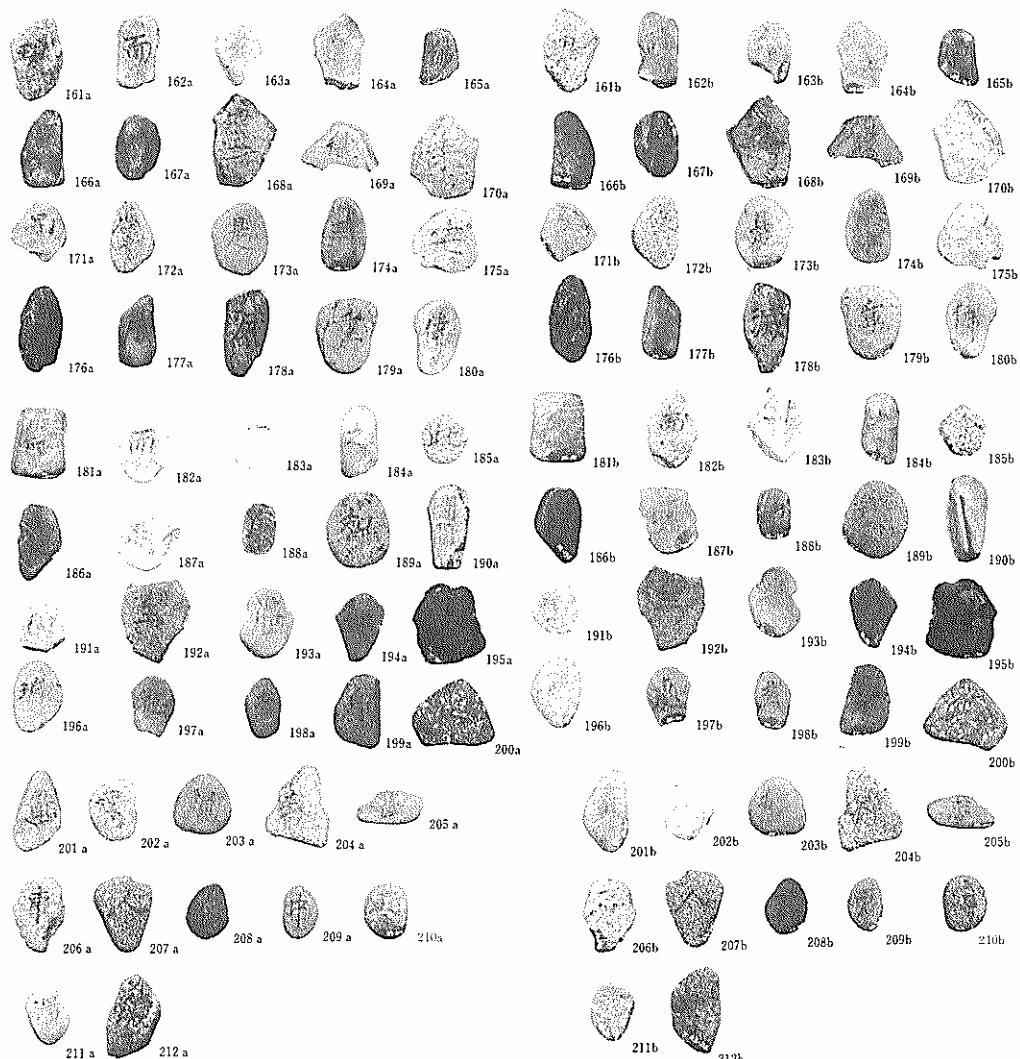


(裏)

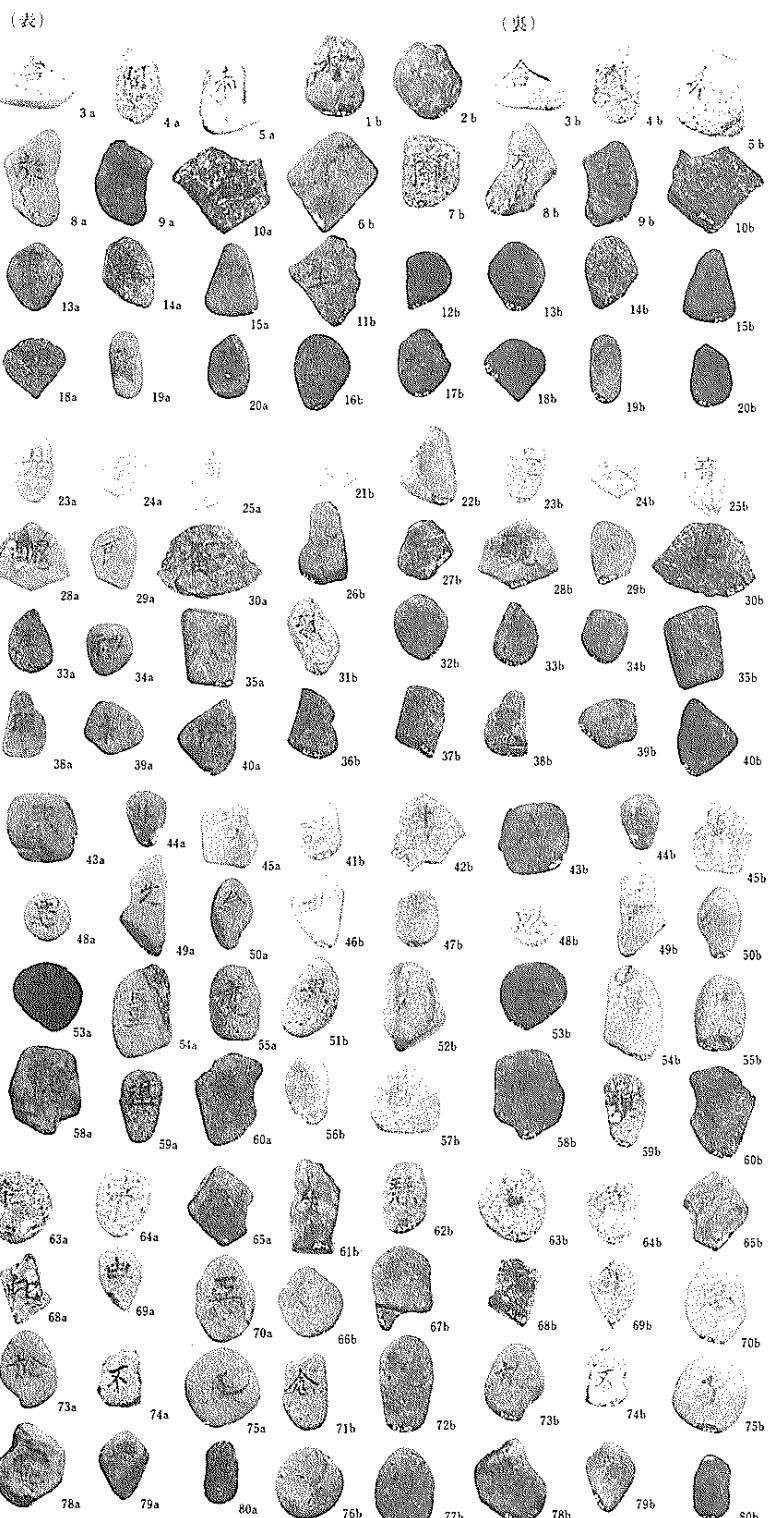
図版 6 下層 経石 (No.81~No.160)

(表)

(裏)

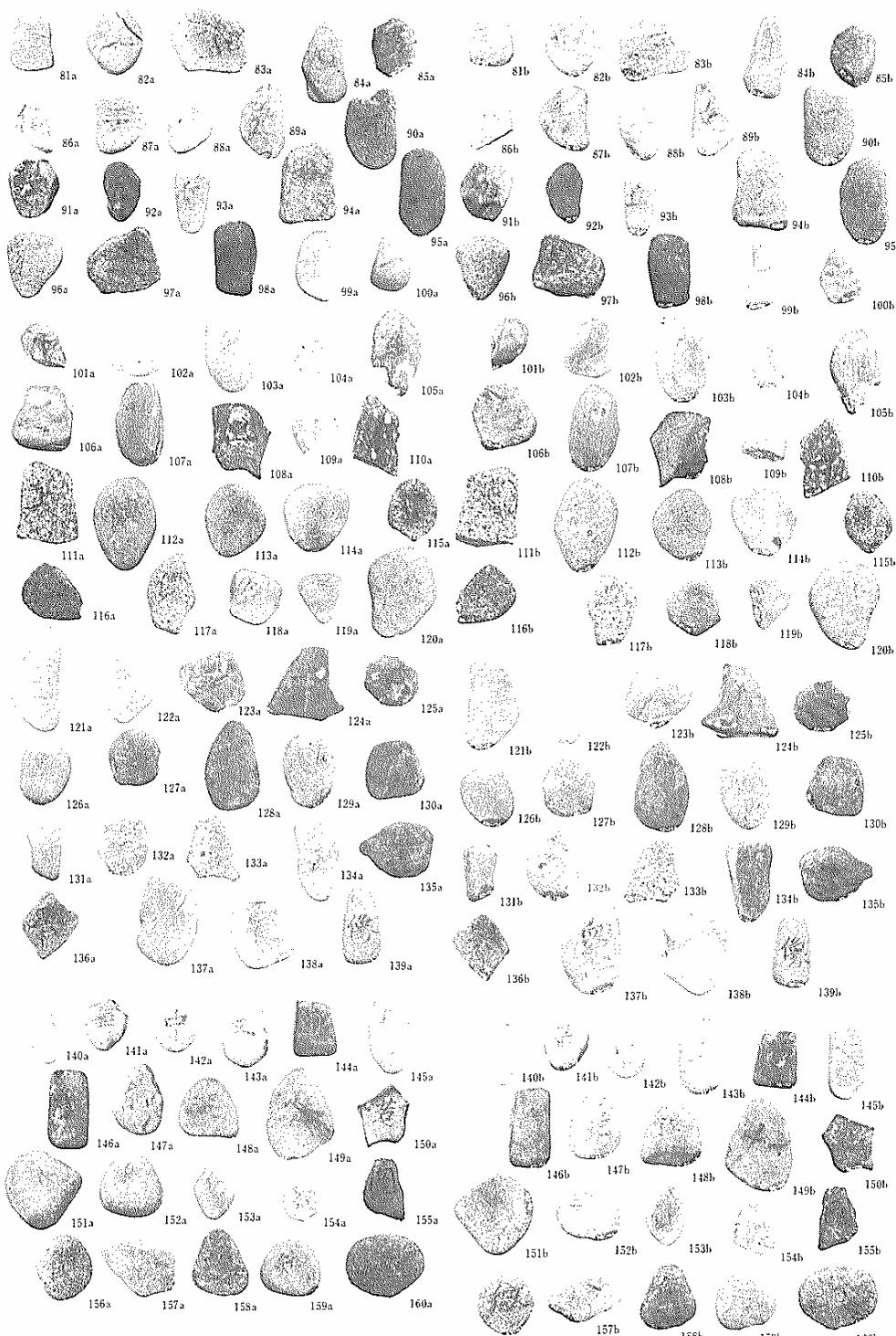


図版 7 下層経石 (No.161~No.212)



図版 8 上層経石 (No.1 ~ No.80)

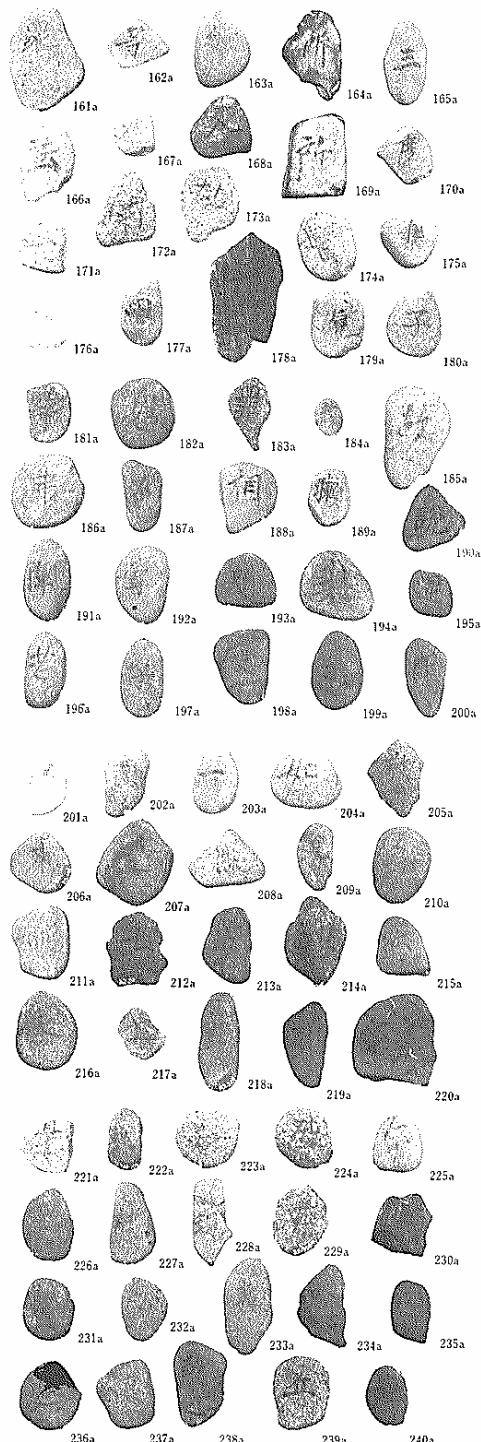
(表)



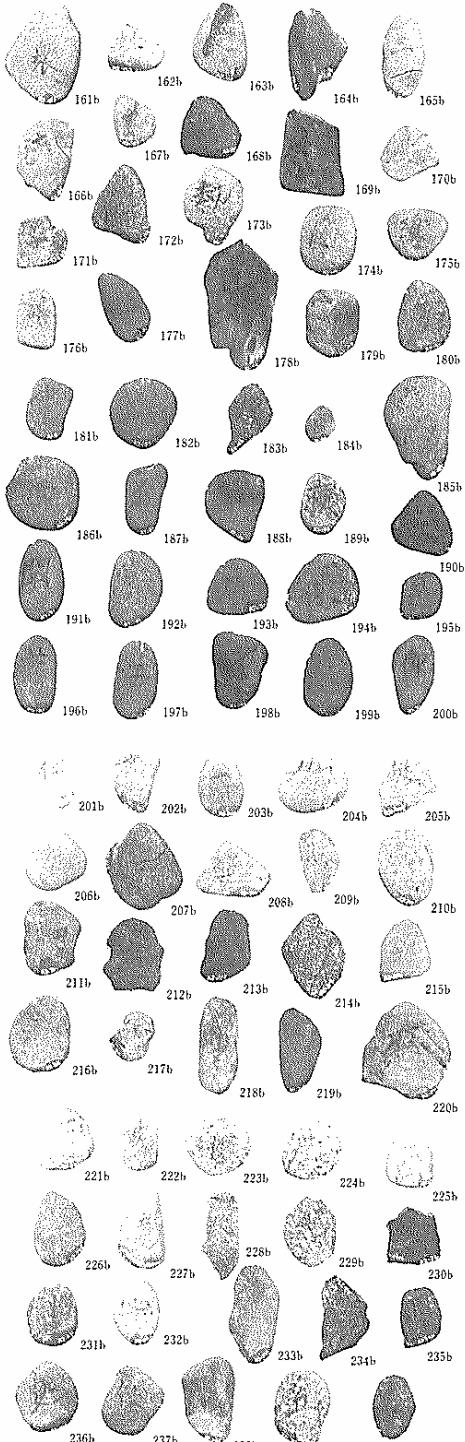
(裏)

図版 9 上層経石 (No.81~No.160)

(表)

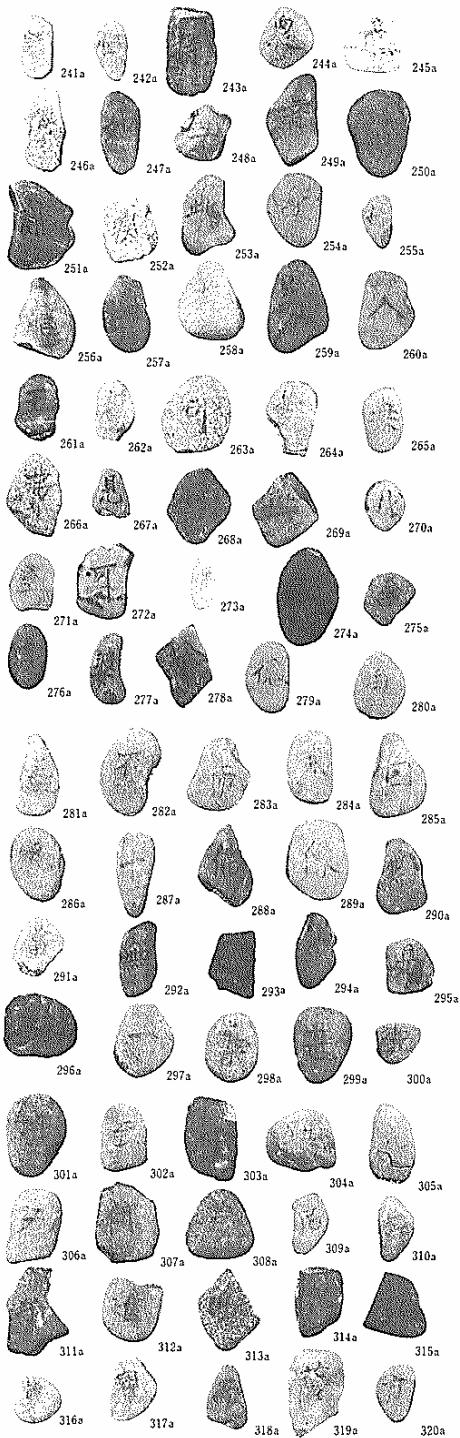


(裏)

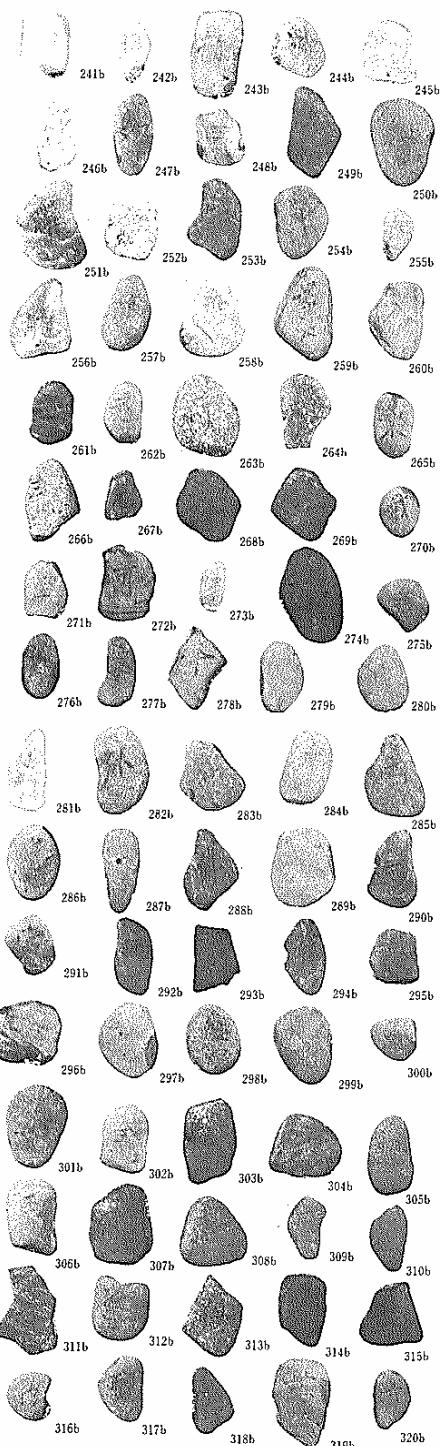


図版 10 上層経石 (No.161~No.240)

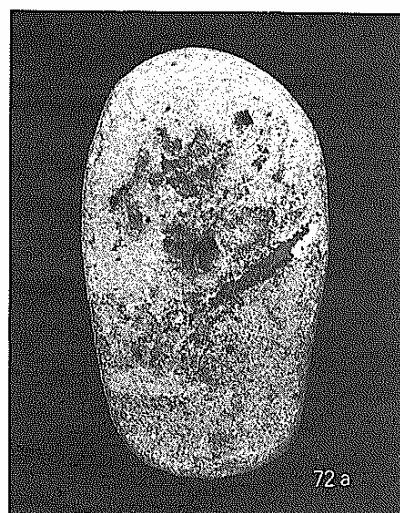
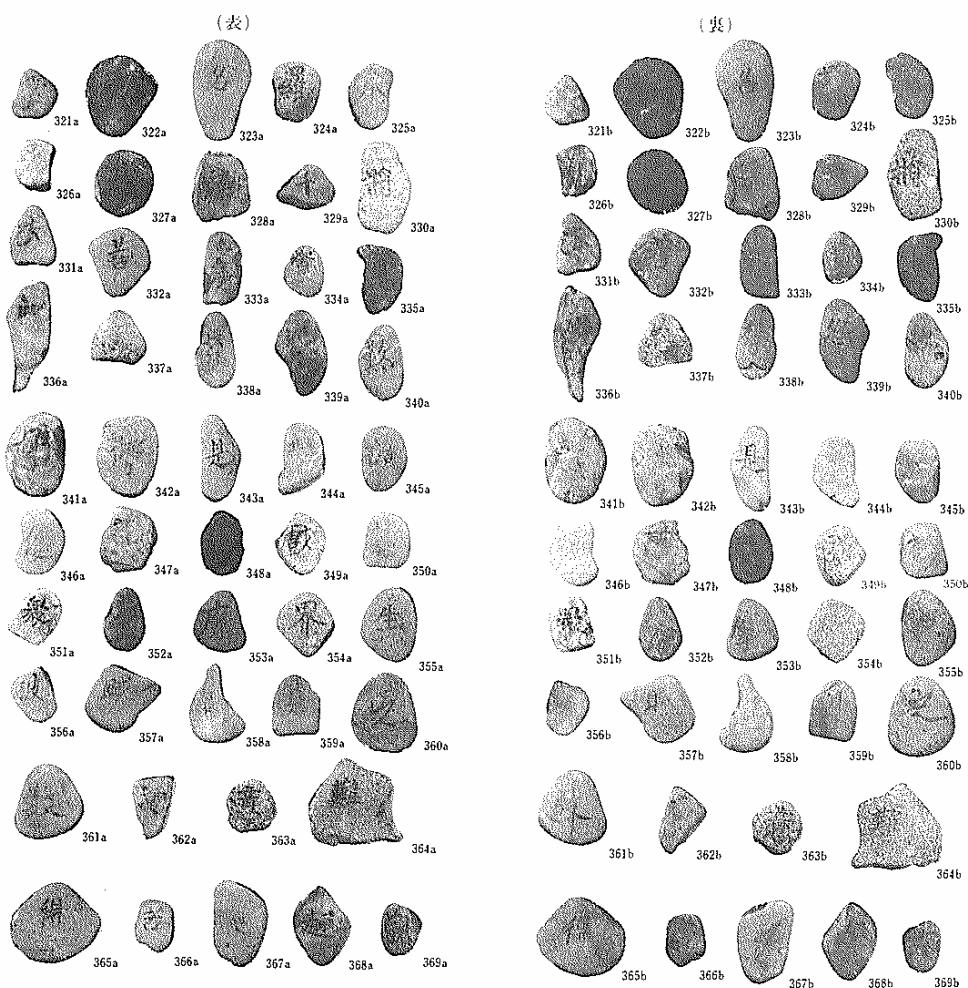
(表)



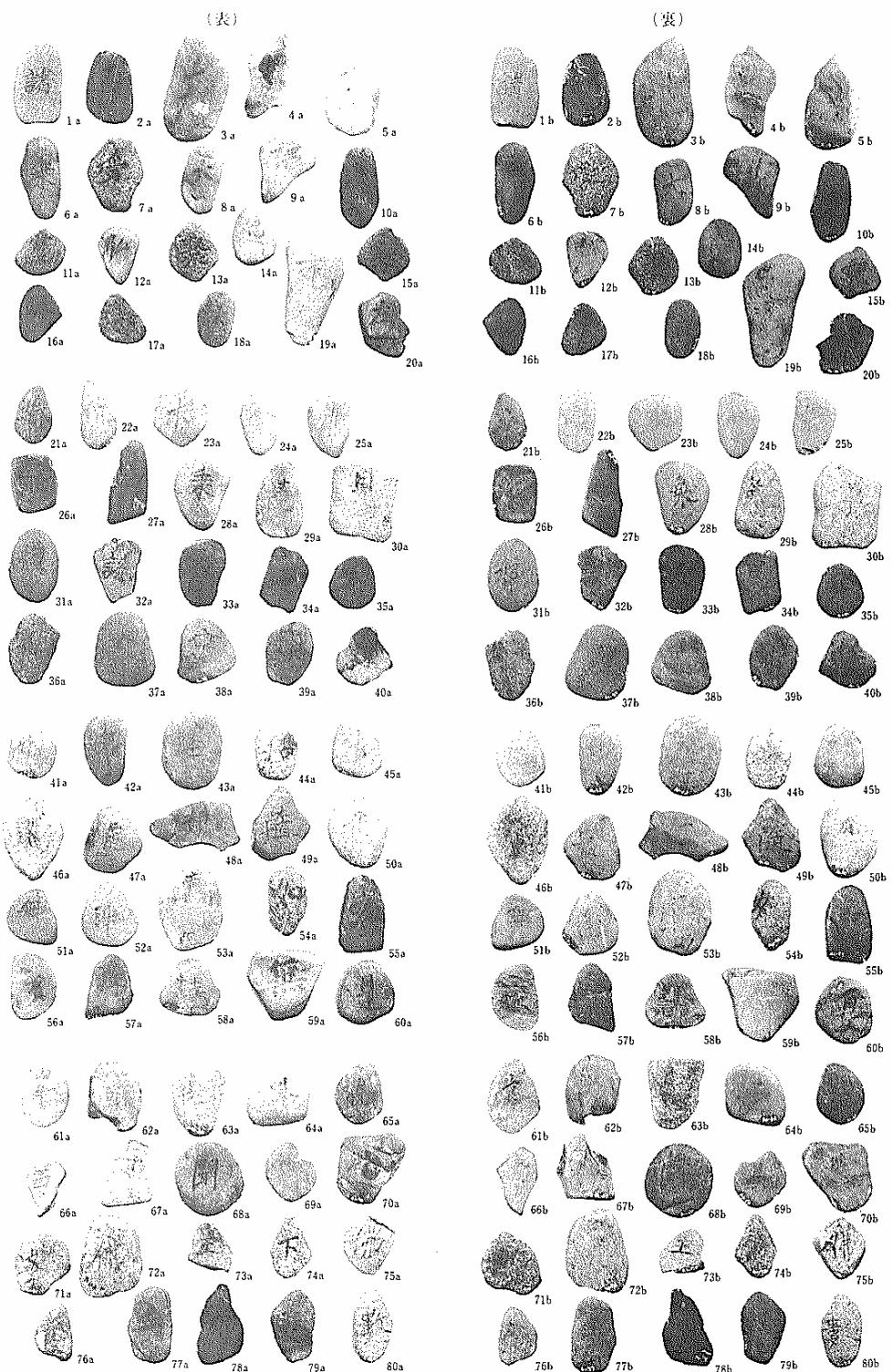
(裏)



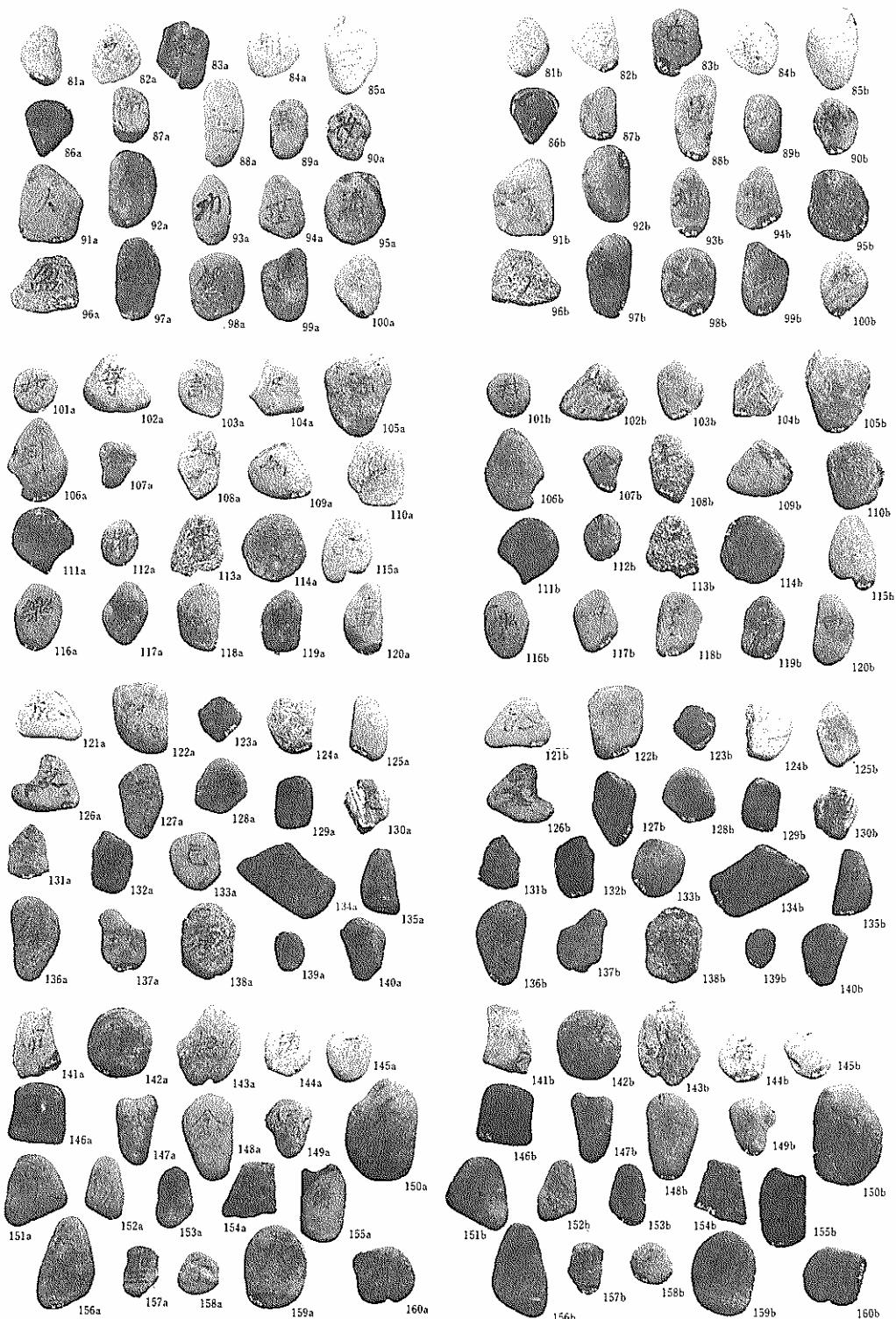
図版 11 上層経石 (No241~No320)



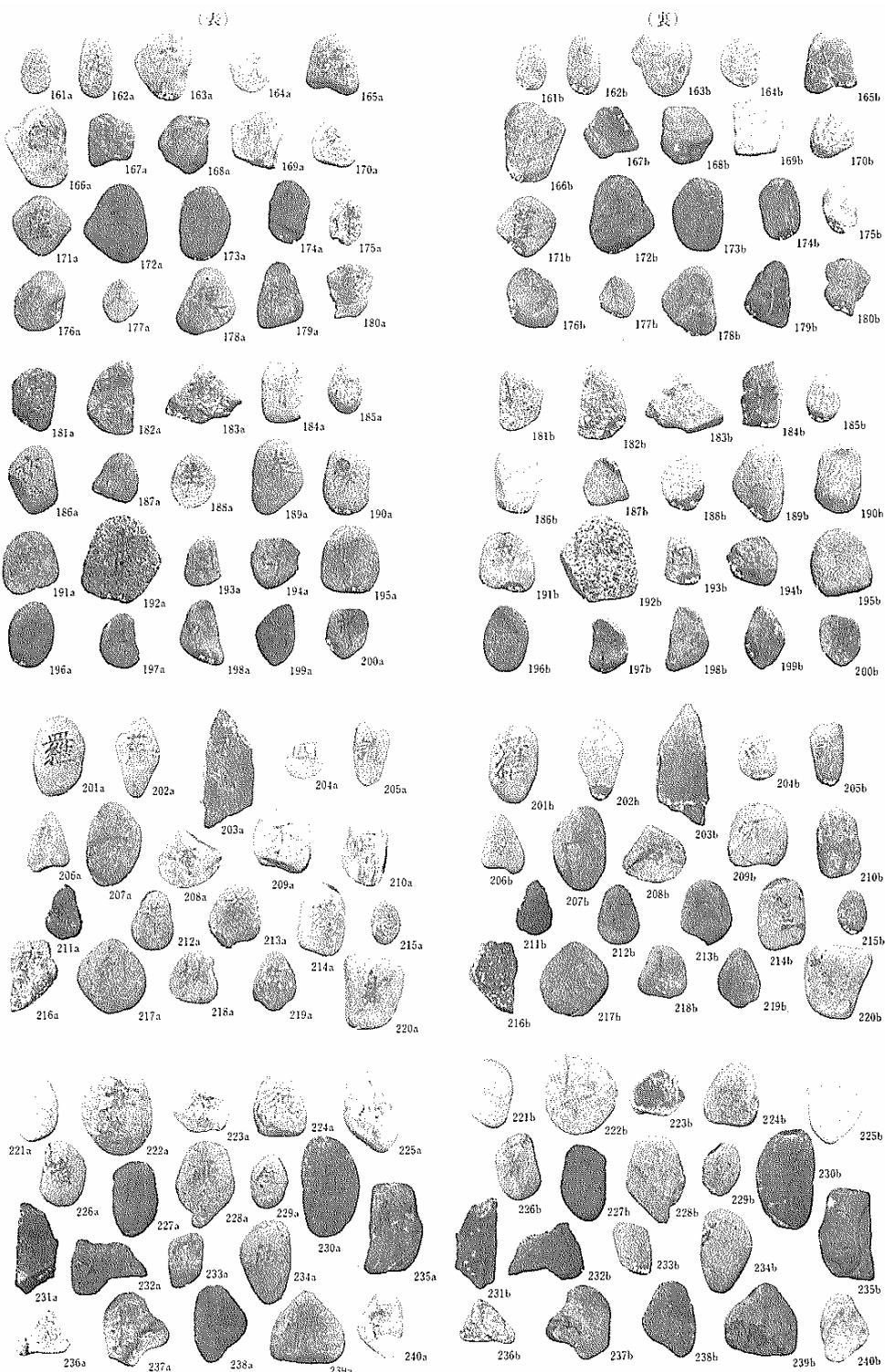
図版 12 上層経石 (No.321~No.361, No.72)



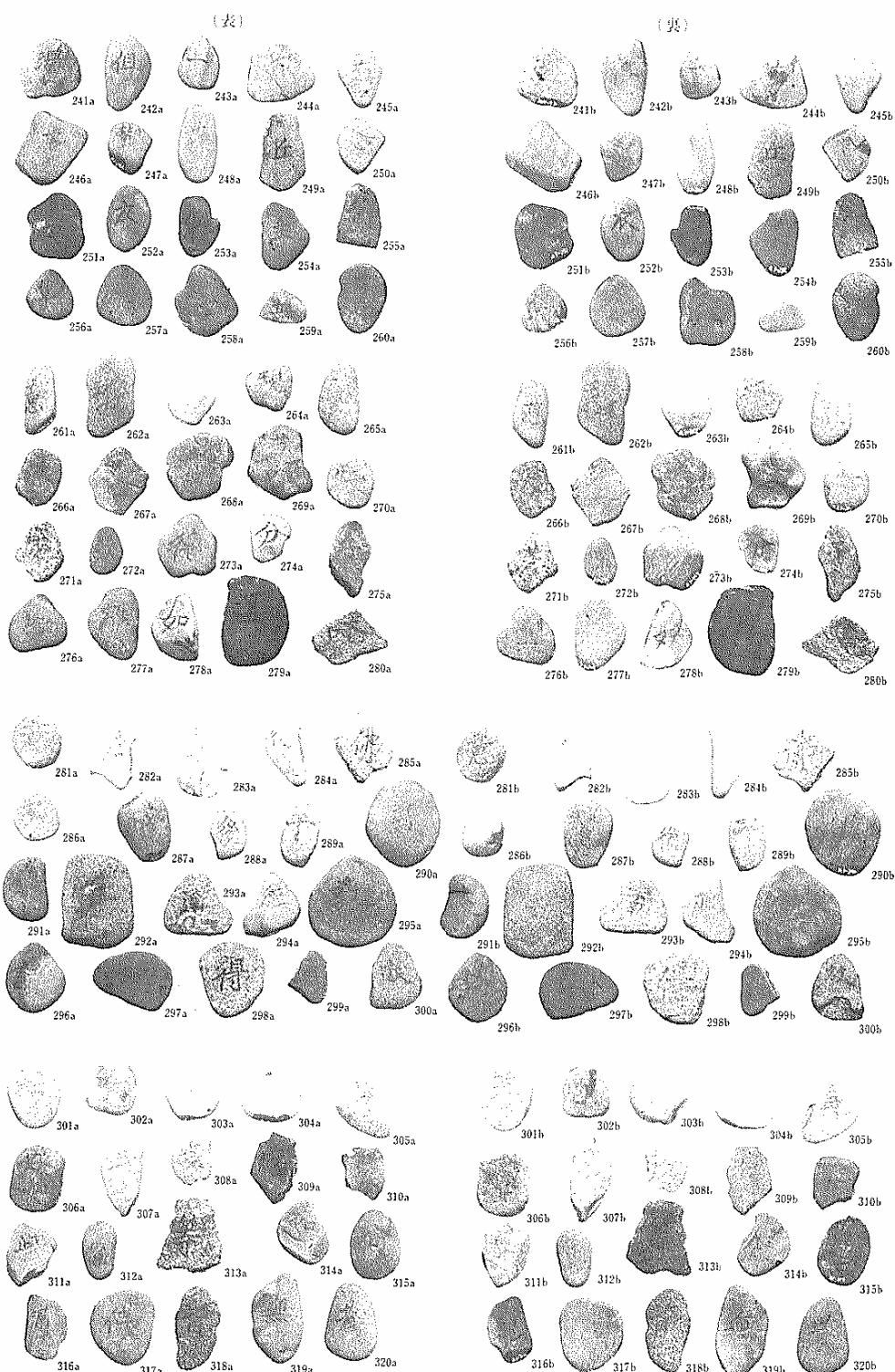
図版 13 上下層混同経石 (No.1 ~ No.80)



図版 14 上下層混同絆石 (No.81~No.160)

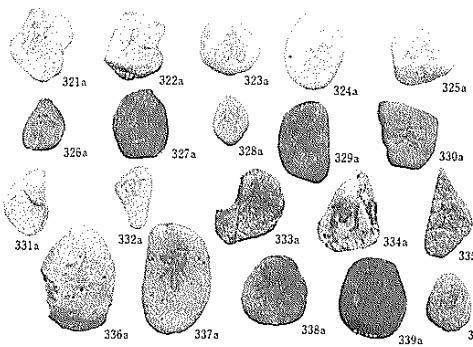


図版 15 上下層混同絆石 (No.161~No.240)

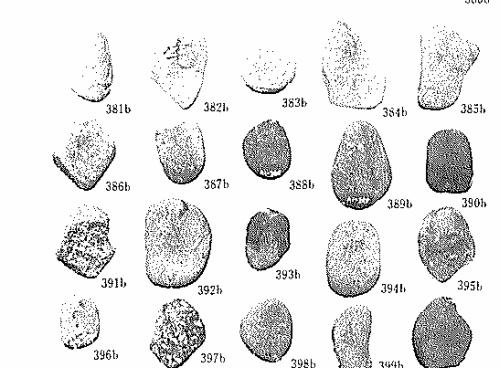
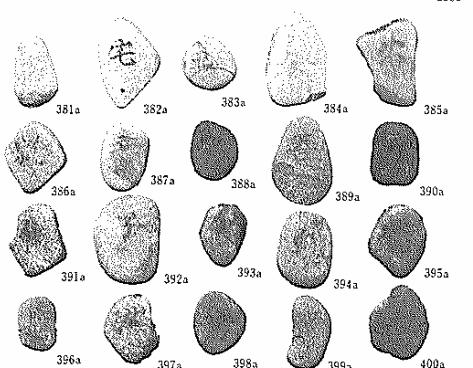
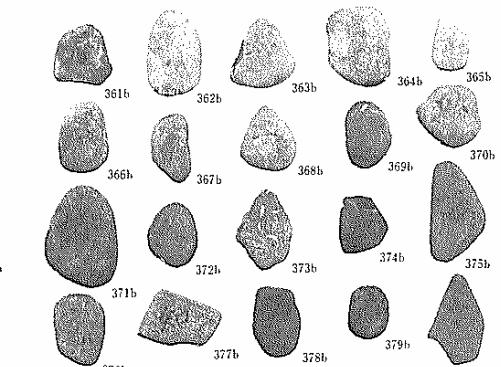
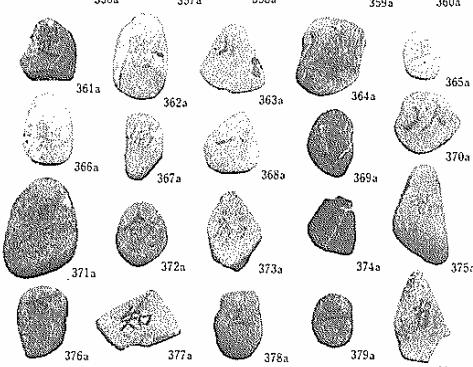
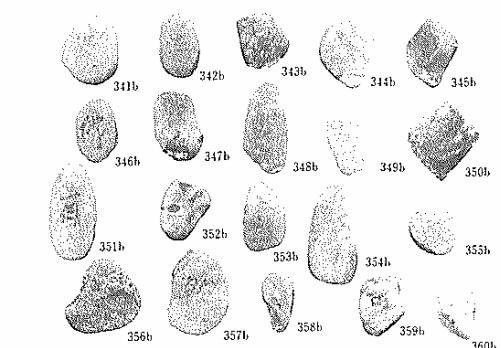
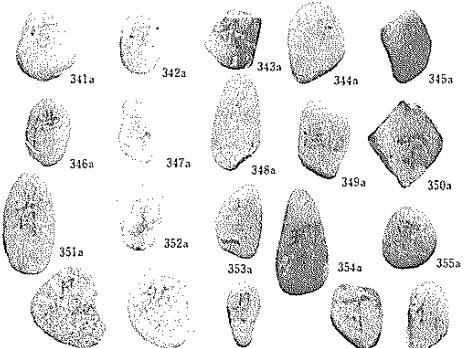
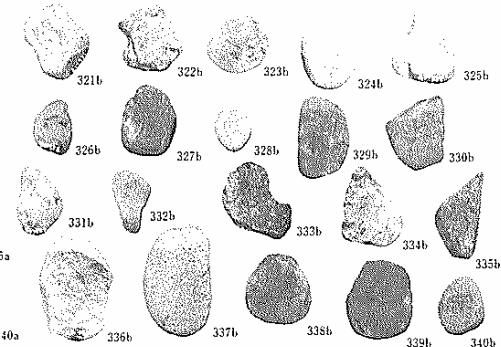


図版 16 上下層混同経石 (No.241~No.320)

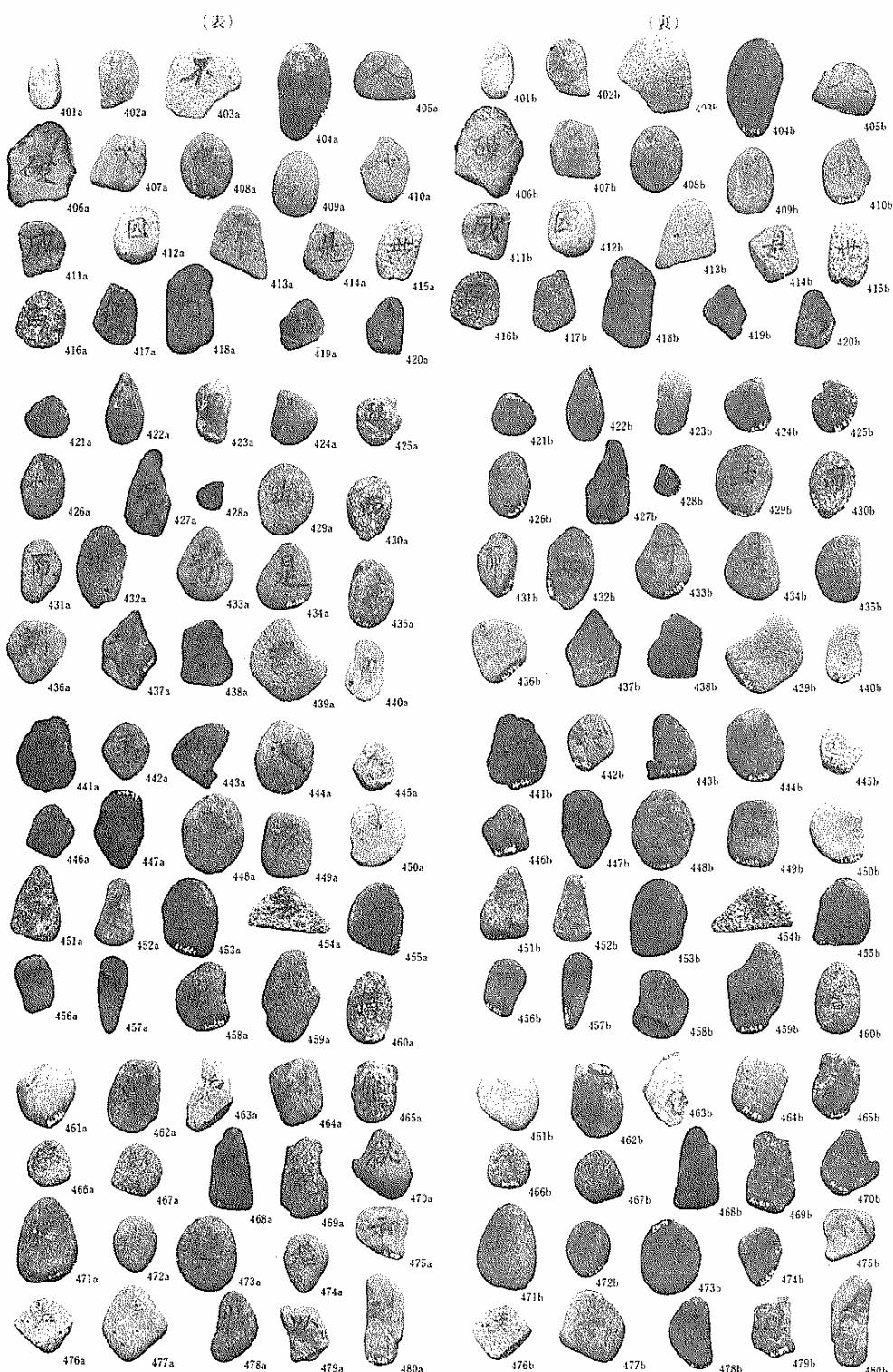
(表)



(裏)

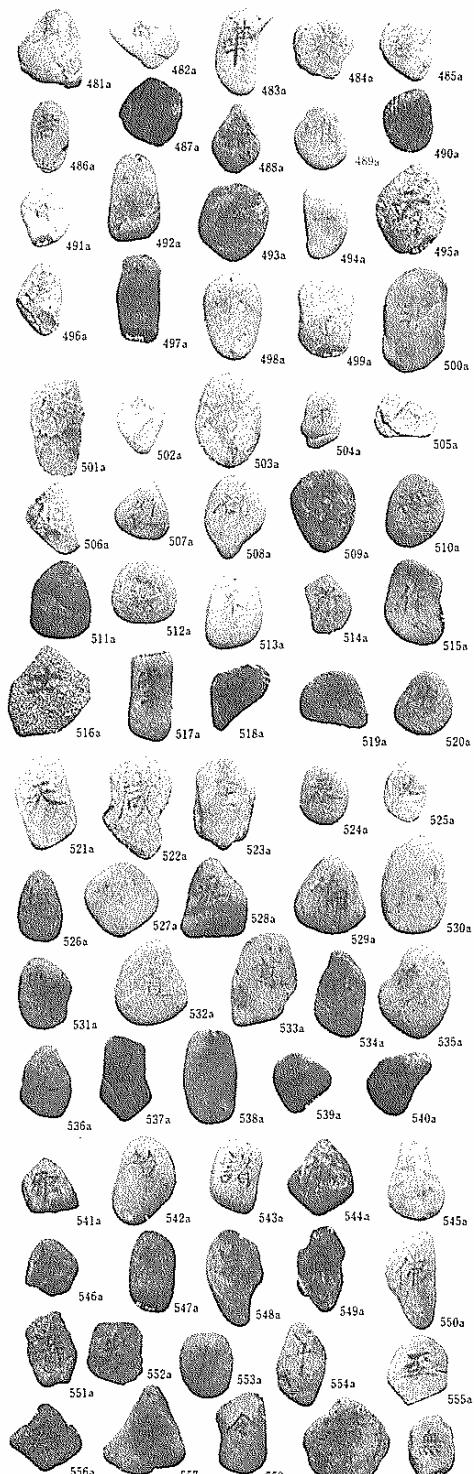


図版 17 上下層混同経石 (No.321~No.400)

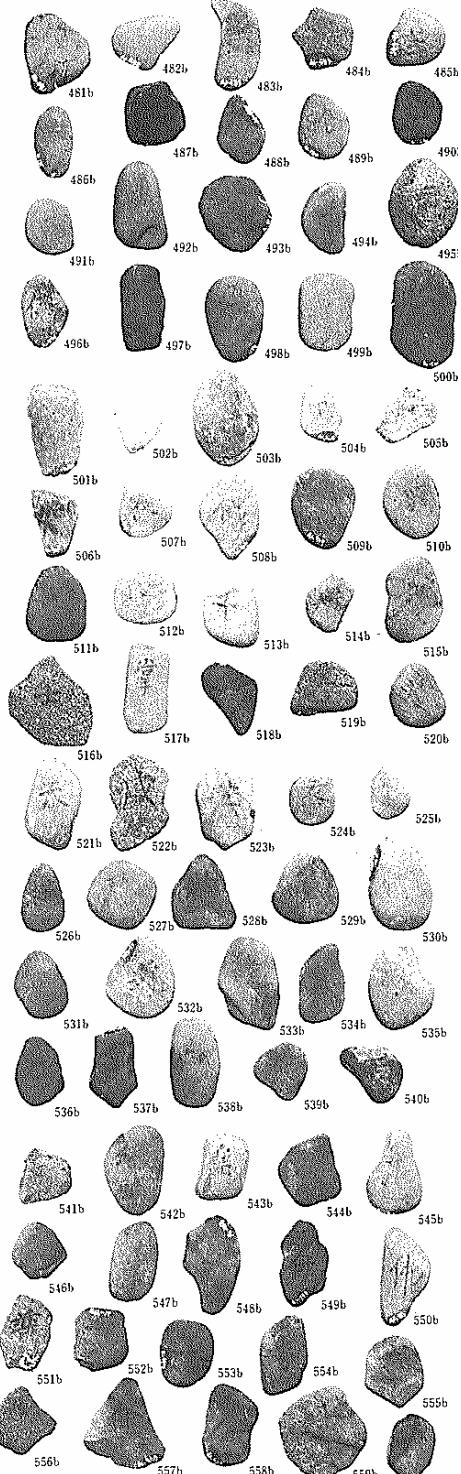


図版 18 上下層混同経石 (No401~No480)

(表)

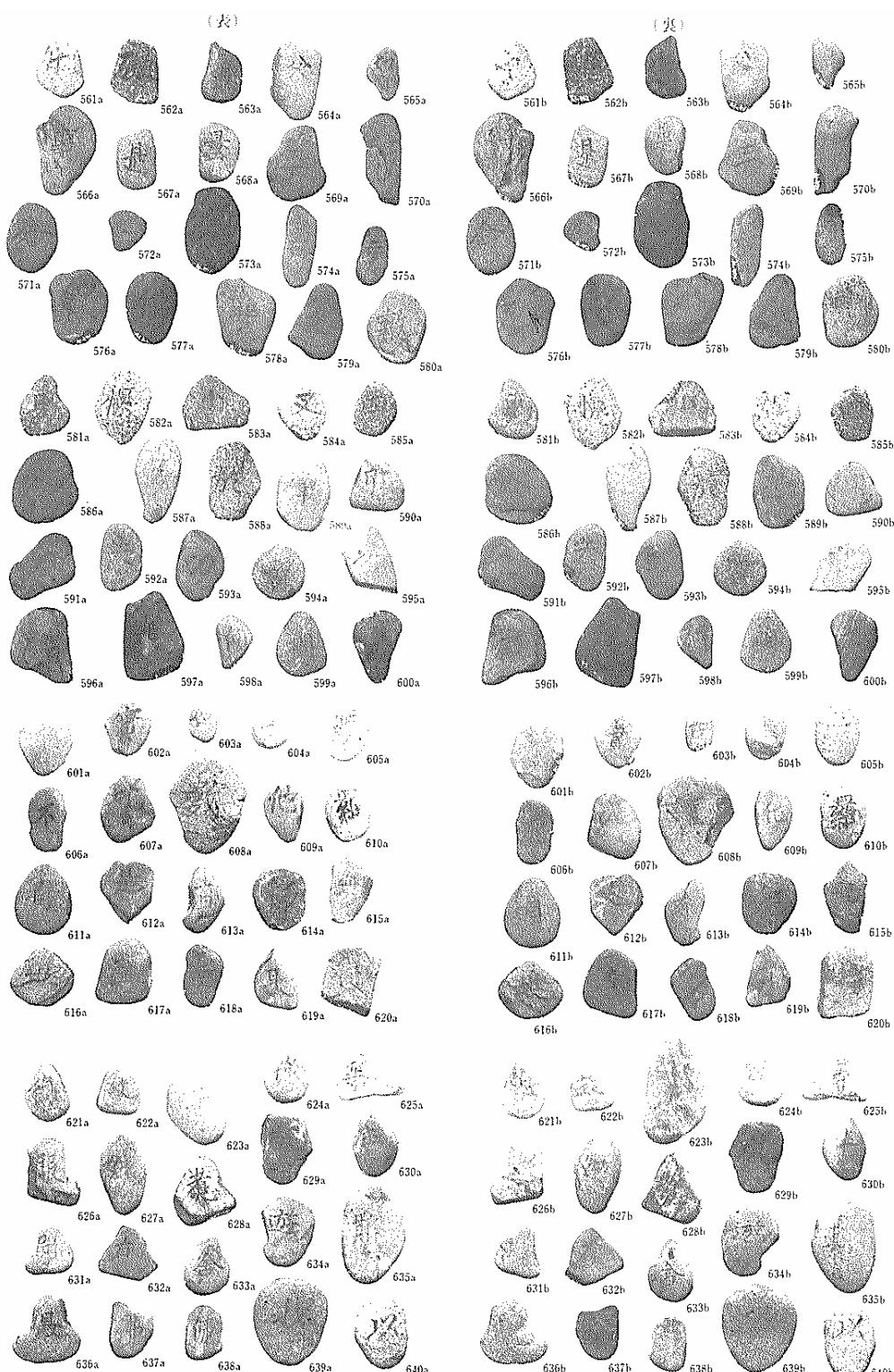


(裏)

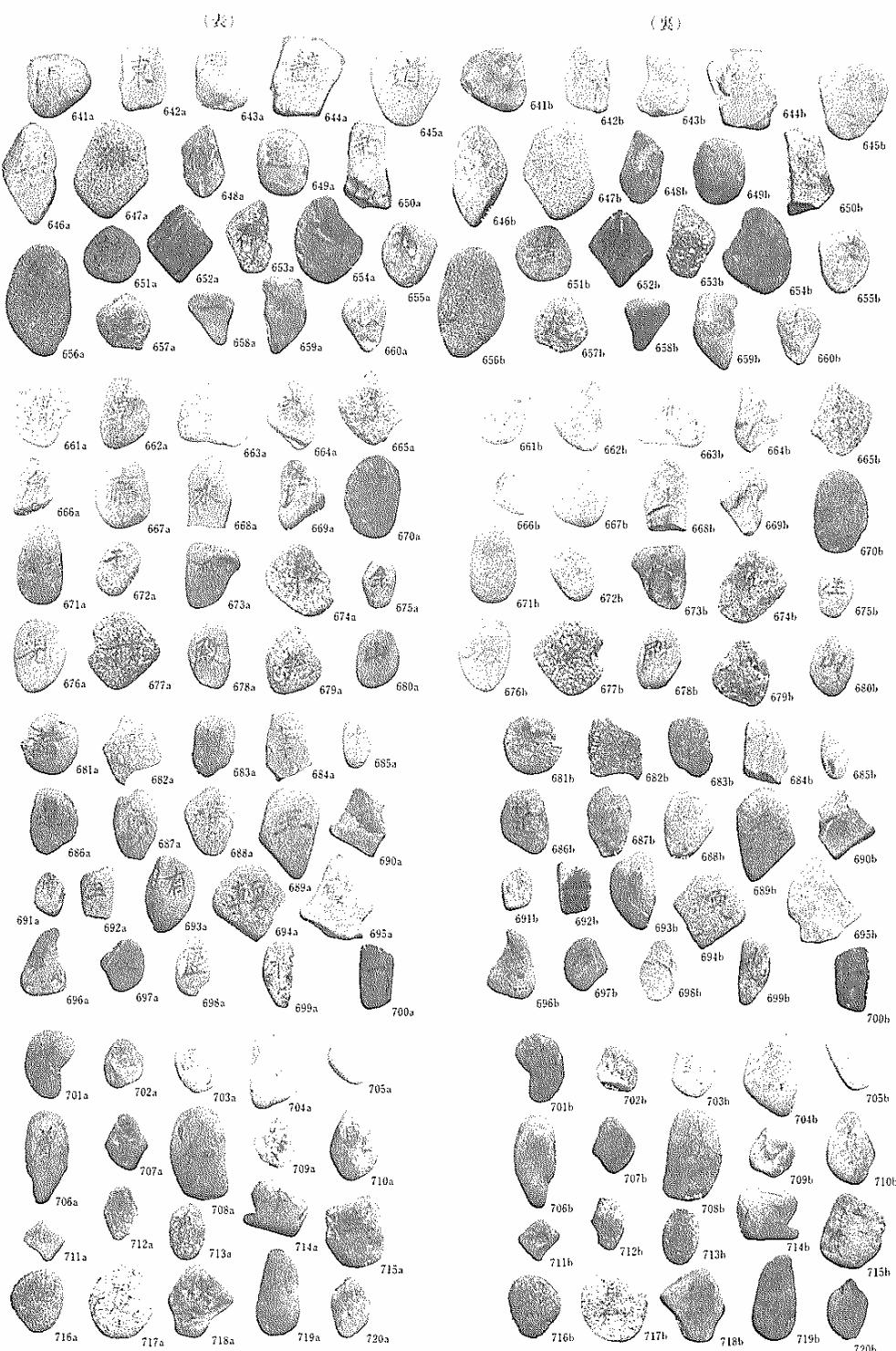


図版 19 上下層混同絆石

No481～No560)

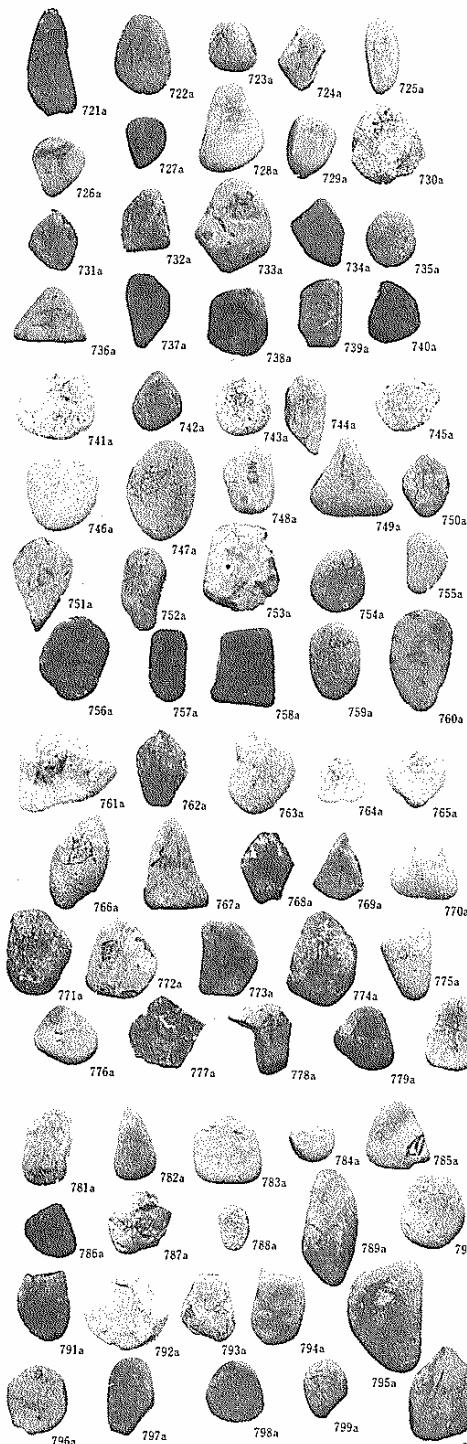


図版 20 上下層混同絆石 (No.561~No.640)

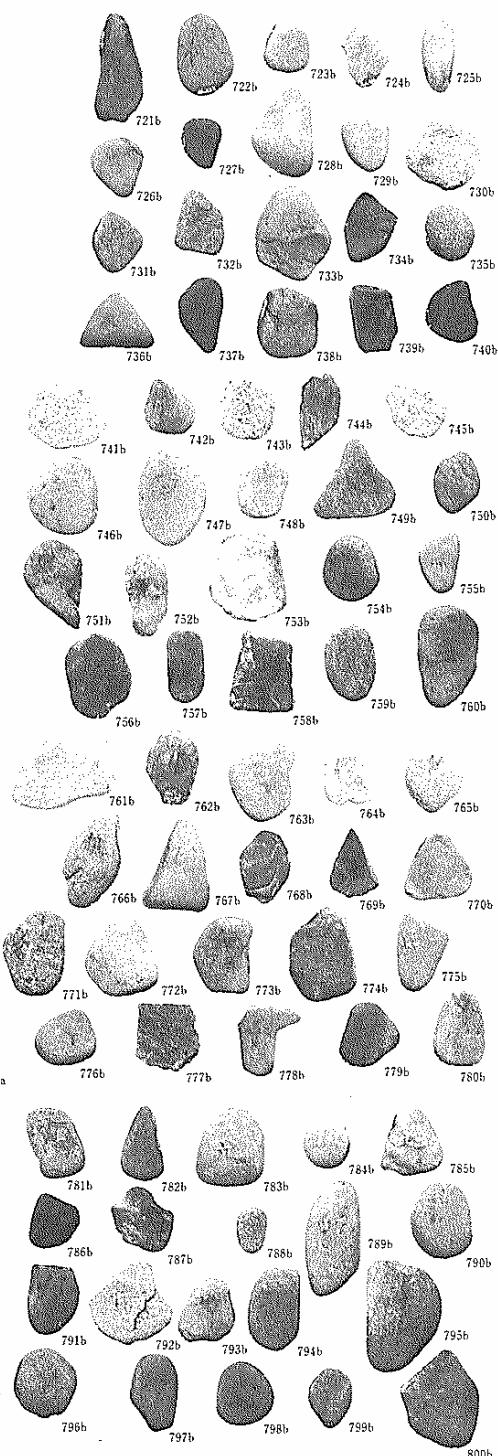


図版 21 上下層混同絆石 (No641~No720)

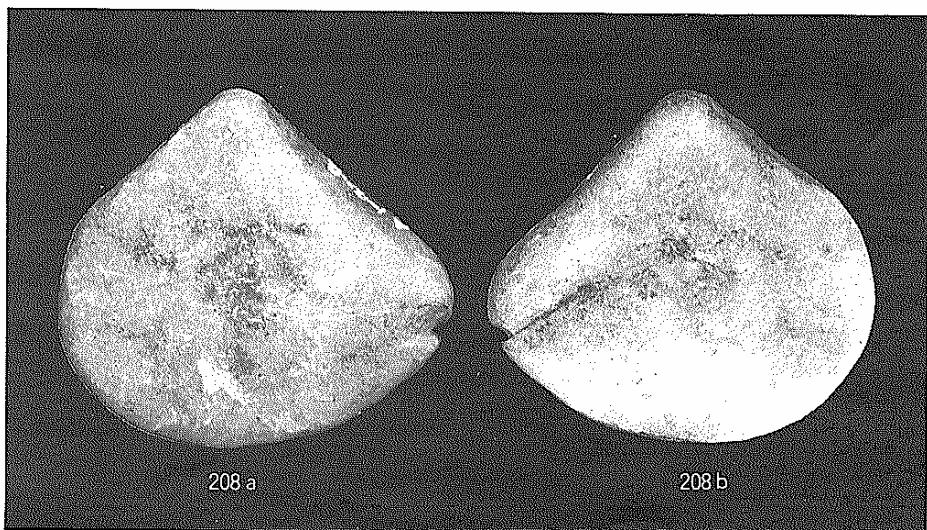
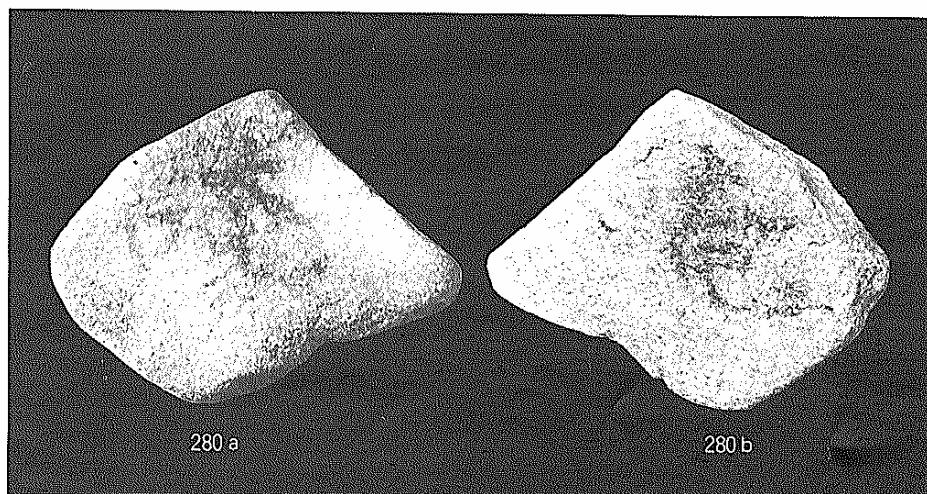
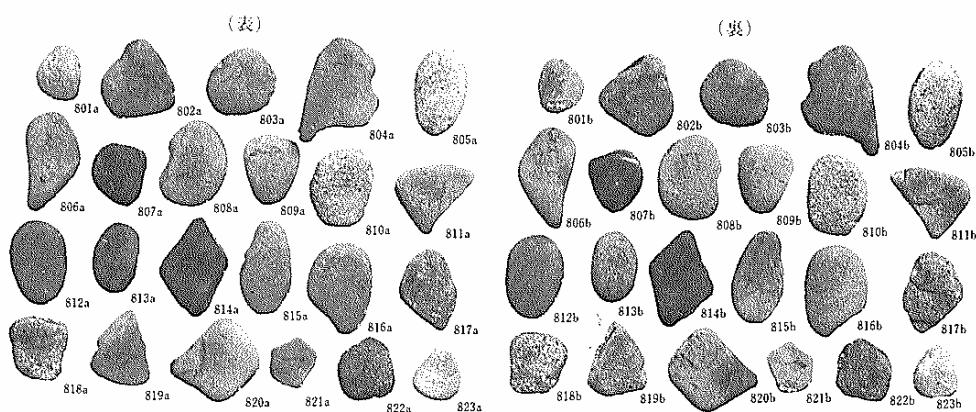
(表)



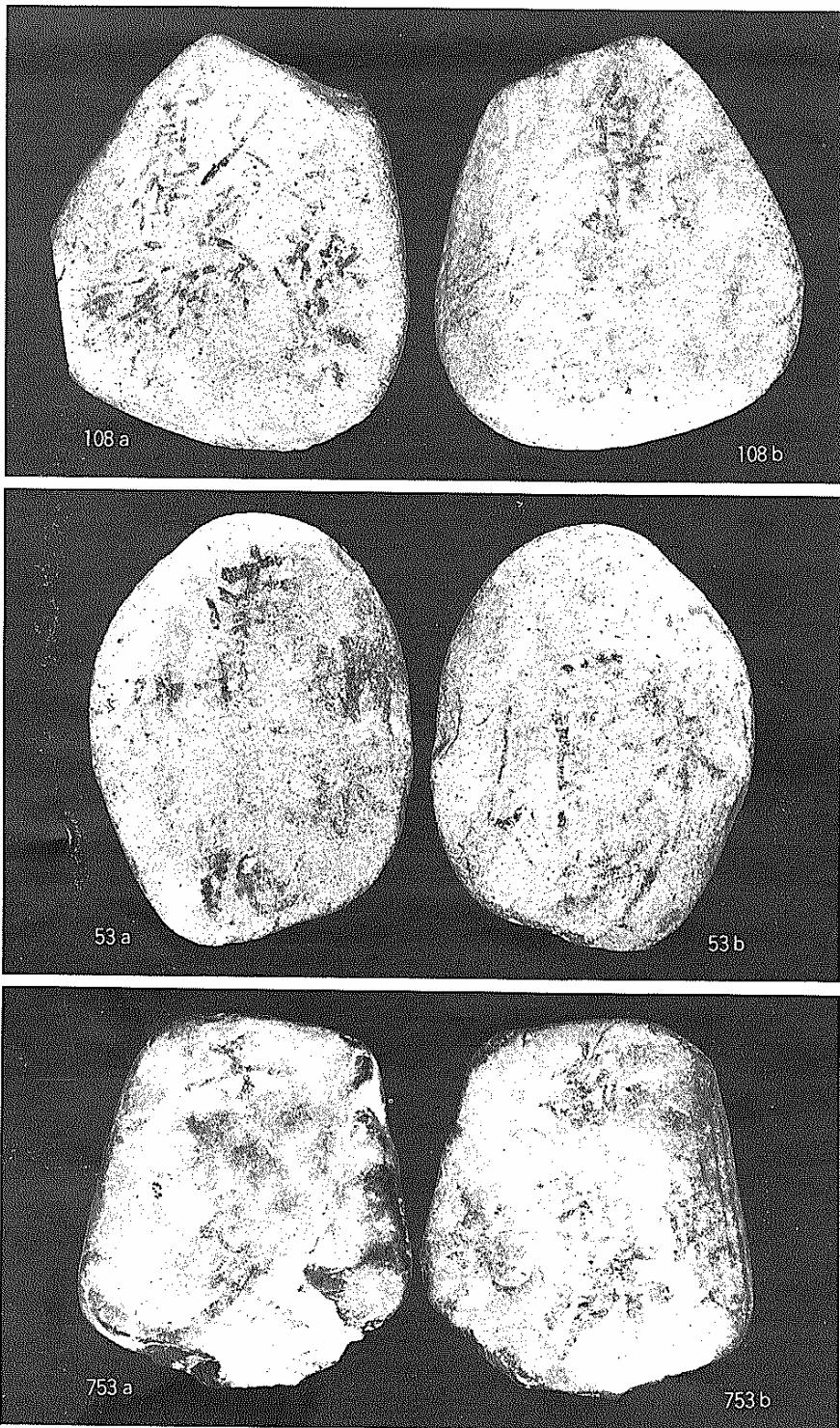
(表)



図版 22 上下層混同経石 (No.721~No.800)



図版 23 上下層混同絆石 (No. 801~No.823, No.280, No.208)



図版 24 多字経石 (No.108…下層経石、No.53、753…上下層混同経石)